長法寺南原古墳の研究

大阪大学文学部
考古学研究報告

第2冊

大阪大学文学部考古学研究報告第２冊

長法寺南原古墳の研究

1992年3月

大阪大学南原古墳調査団

1 号鏡(三角縁天・王・日・月・唐草文帯二神二獣鏡)

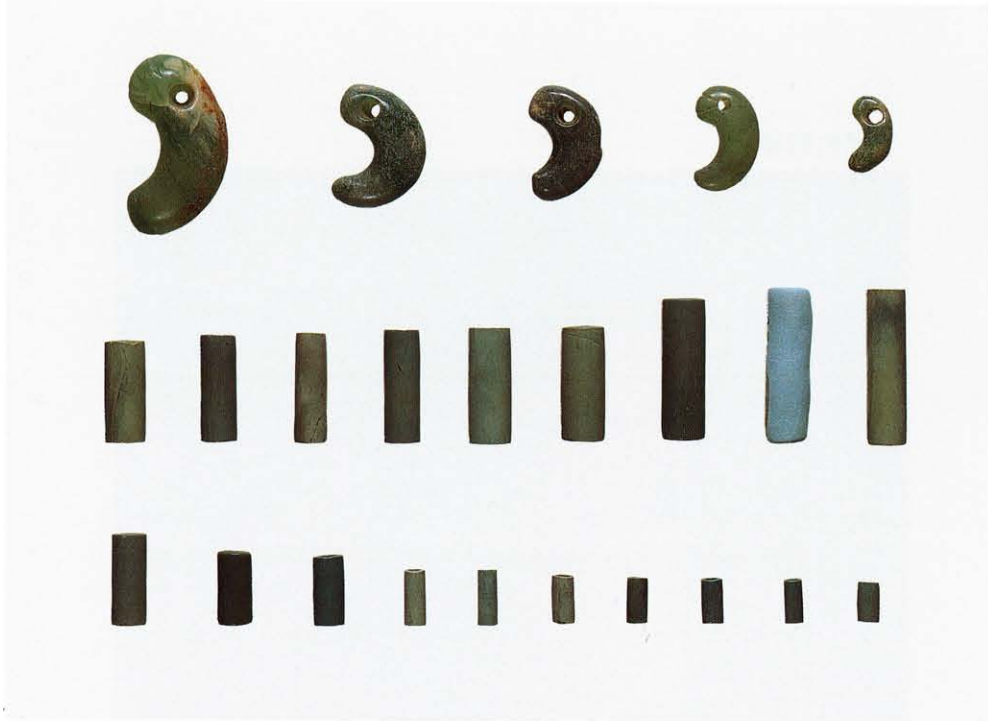
3 号鏡(三角縁君・宜・高・官・獣文帯三神三獣鏡)

6 号鏡鏡面に
付着した毛髪

銅　鏃

石　臼 1

石　臼 2



玉　類

埴輪胎土の違い

円筒埴輪

序　　文

竹の根おこしの重労働と蚊の大群の攻撃――うっそうとした竹藪の中にある南原古墳の発掘についてまず第一に思い出すことである。

この古墳は半世紀前に調査され、日本の古墳研究におけるその重要性は誰しもが認めている。

しかし、そのわりには、この古墳は長く放置されすぎていた。筍栽培の土取りのために墳丘の改変は年々進み、往年の面影はもはやなくなった。

石室排水溝の一角が露出したのをきっかけとして、私たち大阪大学の調査団が調査のメスを入れたのが11年前。翌年からは長岡京市教育委員会が主催する発掘を4次にわたって実施した。その結果、前方後方墳であることがわかったし、前方部において第二の石室を発見するなど、多くの成果があった。多数の学生諸君が参加し、ここで考古学を学んだ。その後、考古学の専門の道に進んだ人もおれば、民間会社や学校教育の道に進んだ人もいる。いずれにとっても、毎年の発掘合宿は夏の林間学校ともいえる研究室の「道場」であった。

その成果を、いまこのような形で刊行できることは何よりもうれしい。

このような経過をふまえ、発掘報告書の別刷を大阪大学文学部考古学研究報告として扱うことを許された長岡京市教育委員会に深く感謝申し上げたい。

1992年3月

大阪大学南原古墳調査団

都 出 比 呂 志

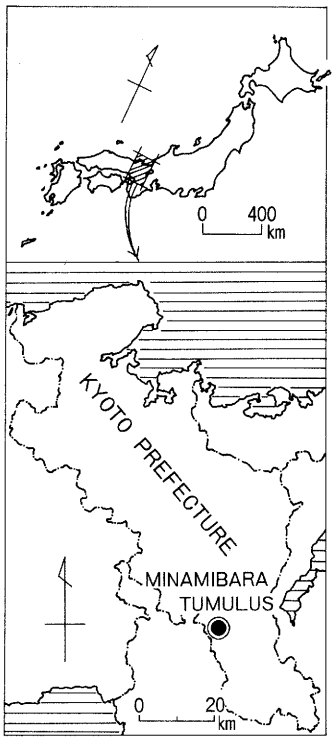
例　　言

1　本書は京都府長岡京市長法寺所在の長法寺南原古墳の調査報告書であり、『長岡京市文化財調査報告書』第30冊（長岡京市教育委員会、1992年発行）の別刷である。

2　当古墳は1934年に京都府教育委員会による調査が行われて以来、計６次の調査を経ている。その調査年、調査主体、調査担当者は次のとおりである。

第１次	1934年	京都府教育委員会	梅原　末治
第２次	1981年	大阪大学国史研究室	都出比呂志
第３次	1982年	長岡京市教育委員会	都出比呂志
第４次	1983年	〃	〃
第５次	1984年	〃	〃
第６次	1989年	〃	都出比呂志・福永伸哉

3　本書作成にあたっては、これらの発掘調査成果の検討に加えて、東京国立博物館所蔵の第１次調査出土遺物の再調査を実施し、この古墳研究の現時点での総括をめざした。東博所蔵遺物については長岡京市史編さん室が作成した資料も使用した。



長法寺南原古墳の位置

4　本書におけるレベル高はすべて海抜を表わし、方位は磁北を示す。

5　発掘調査および総括報告書作成作業の参加者は第１章に示した。また、製図の分担は挿図目次に記している。

6　本書の執筆は大阪大学文学部教授都出比呂志、同助手福永伸哉、学術振興会特別研究員北條芳隆、岡山大学助手松木武彦、大阪大学大学院生杉井健、大庭重信、清家章、同研究生佐々木憲一、長岡京市埋蔵文化財センター木村泰彦が分担した。それぞれの執筆分担は目次に記す。

7　写真の撮影は主として都出、福永が担当したが、東博所蔵遺物の写真は長岡京市史編さん室より提供を受けた。また、第１次調査の写真については『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第17冊より転載した。写真の焼付けにあたっては大阪大学文学部技官大橋哲郎氏の援助を得た。

8　1981年の第２次調査以来われわれは大阪大学南原古墳調査団を結成し、第３次調査からは

長岡京市教育委員会の依託を受けて調査にあたった。この間、市教委の方々、とりわけ中尾秀正氏はわれわれの作業の円滑化のため数々の援助を与えられた。記して感謝する。

9　本書の編集は発掘調査、整理作業参加者の協力のもとに都出、福永が担当した。

長法寺南原古墳の研究

目　　次

巻頭図版

序　　文

例　　言

第1章　調査経過 …… 1

1　周辺の古墳 ……松木　武彦…… 1

2　調査経過 ……都出比呂志…… 4

3　謝　　辞 ……　〃　…… 10

第2章　墳丘の構造 ……福永　伸哉…… 13

1　古墳の現状 ……13

2　発掘区の設定 ……14

3　調査の所見 ……14

(1)　東クビレ部、前方部発掘区 ……14

(2)　東北部発掘区 ……21

(3)　崖面の観察 ……21

4　墳丘の復元案 ……24

(1)　前方部残存墳丘面の地形復元 ……25

(2)　墳丘形態の復元 ……26

第3章　埋葬施設の構造 ……35

1　後方部竪穴式石室 ……都出比呂志…… 35

2　遺物の出土状況 ……北條　芳隆…… 38

(1)　副葬品の配置と出土状況の概要 ……38

(2)　副葬品配置の特徴と埋葬形態 ……41

3　排 水 溝 ……都出比呂志…… 42

4　前方部小竪穴式石室 ……松木　武彦…… 43

第4章　出土遺物 ……51

1　後方部竪穴式石室の出土遺物 ……51

(1)　鏡 ……福永　伸哉…… 51

(2)　玉　　類 ……北條　芳隆…… 56

(3)　武 器 類 ……松木　武彦…… 57

(4) 工 具 類 ……北條　芳隆…… 59
(5) 石臼・石杵 ……　〃　…… 63
2 墳丘出土の埴輪、土器 ……清家　章…… 64
(1) 円筒埴輪 ……64
(2) 形象埴輪 ……72
(3) 土　器 ……72
3 その他の遺物 ……大庭　重信…… 73
第5章 南原東3号墳の調査概要 ……77
1 埴輪棺の出土状況 ……木村　泰彦…… 77
2 埴輪棺の観察 ……清家　章…… 80
3 南原東3号墳の年代 ……　〃　…… 85
第6章 考　察 ……89
1 長法寺南原古墳におけるヒレ付円筒埴輪の製作技法 ……杉井　健…… 89
2 銅鏃の終焉―長法寺南原古墳出土の銅鏃をめぐって― ……松木　武彦……101
3 葬送儀礼における朱と石臼 ……北條　芳隆……117
4 近畿地方の小竪穴式石室
―長法寺南原古墳前方部小石室の意義をめぐって― ……福永　伸哉……129
第7章 調査研究の総括―長法寺南原古墳の意義― ……都出比呂志……161
英文抄訳 ……佐々木憲一……171
図　版

図 版 目 次

巻頭図版

1　1号鏡（三角縁天・王・日・月・唐草文帯二神二獣鏡）
2　3号鏡（三角縁君・宜・高・官・獣文帯三神三獣鏡）
3　6号鏡鏡面に付着した毛髪
　銅　鏃
4　石臼1
　石臼2
5　玉　類
　埴輪胎土の違い
6　円筒埴輪

図　版

1　1　古墳の立地（1934年）
　2　古墳の立地（1991年）
　3　墳丘の現状
2　1　後方部東北隅（南西から）第3次
　2　後方部東北隅の墳丘裾部（東から）第3次
3　1　東クビレ部、後方部南東隅（西から）第4次
4　1　後方部南東隅の墳丘裾部、陸橋部（東から）第4次
　2　後方部南東隅の墳丘裾部、陸橋部（南東から）第4次
5　1　後方部南東隅の墳丘裾部（南から）第4次
　2　東クビレ谷部の柱穴群（南東から）第4次
6　1　前方部東斜面（北から）第5次
　2　前方部東斜面の堆積（北から）第5次
7　1　前方部頂部（北から）第6次
　2　前方部頂部（北から）第6次
8　1　前方部横断Dセクション東端部（南から）第3次
　2　同セクション西端部（南から）第3次
　3　前方部縦断断ち割りセクションの盛土状況（東から）第6次

9　1　後方部石室天井石列（南から）第１次
　　2　後方部石室全景（北東から）第１次
10　1　後方部石室全景（北から）第１次
　　2　石室南半部の副葬品遺存状況　第１次
11　1　石室北東隅の副葬品遺存状況　第１次
　　2　石室北小口壁の構造　第１次
12　1　後方部石室残存部分の状況（西から）第２次
　　2　石室天井部の状況　第２次
13　1　石室の控え積みと排水溝　第２次
　　2　排水溝の取り付き状況　第２次
14　1　排水溝全景（北東から）第３次
　　2　排水溝全景（南西から）第３次
15　1　排水溝の掘方と埋土　第２次
　　2　排水溝内の礫の状況　第３次
16　1　排水溝南端付近（南西から）第３次
　　2　排水溝北端断面　第３次
　　3　排水溝中央部断面　第３次
17　1　前方部小石室全景（西から）第６次
　　2　前方部小石室全景（北から）第６次
18　1　小石室攪乱土除去後の状況（東から）第６次
　　2　小石室西小口部　第６次
19　1　小石室西小口部（北から）第６次
　　2　小石室床面断ち割り状況　第６次
20　1　１号鏡（三角縁天・王・日・月・唐草文帯二神二獣鏡）
　　2　１号鏡の鈕孔
21　1　２号鏡（三角縁天・王・日・月・唐草文帯二神二獣鏡）
　　2　２号鏡の鈕孔
22　1　３号鏡（三角縁君・宜・高・官・獣文帯三神三獣鏡）
　　2　３号鏡の鈕孔
23　1　４号鏡（三角縁天王日月・鋸歯文帯四神四獣鏡）
　　2　４号鏡の鈕孔
24　1　５号鏡（長宜子孫内行花文鏡）
　　2　５号鏡の鈕孔

25　1　6号鏡（青蓋作盤龍鏡）
　　2　6号鏡の鈕孔
26　1　6号鏡鏡面に付着した毛髪
　　2　硬玉製勾玉、碧玉製管玉
27　1　石臼1（表面）
　　2　同（裏面）
28　1　石臼2（表面）
　　2　同（裏面）
29　1　石臼1
　　2　石臼2
　　3　石　杵
30　　鉄　鏃
31　1　鉄　剣
　　2　銅鏃（1　長法寺南原古墳，2　伝長法寺南原古墳，3・4　松岳山古墳）
32　　鉄　斧
33　1　工具類
　　2　刀　子
34　1　円筒埴輪
　　2　円筒埴輪底部
　　3　円筒埴輪底部
35　1　円筒埴輪口縁部
　　2　円筒埴輪透孔
36　　円筒埴輪胴部、底部
37　1　円筒埴輪胴部
　　2　円筒埴輪胴部
38　　円筒埴輪ヒレ部
39　1　朝顔形円筒埴輪
　　2　壺形土器
40　　円筒埴輪のハケメ調整

挿　図　目　次

ページ

長法寺南原古墳の位置（高木芳史製図）

図１　乙訓地域の古墳分布図（清野孝之製図）……2

図２　長法寺南原古墳の位置（川島睦子・杉井健製図）……3

図３　墳丘測量図（大庭重信製図）……5

図４　墳頂部の天井石堆積状況……7

図５　土地所有者　藪内治作氏……7

図６　第４次調査風景（1983年）……7

図７　第６次調査終了（1989年）……7

図８　第１次調査時の記念撮影（1934年、藪内治作氏保管）……12

図９　第１次調査時の墳丘（府報17冊より）……13

図10　調査区配置図（大庭製図）……15

図11　第４次～第６次調査区の位置関係（大庭製図）……16

図12　東クビレ部の土層堆積（東から）（斉藤香織製図）……17

図13　東クビレ部埴輪出土状況（Ｆトレンチ）……18

図14　東クビレ部埴輪出土状況（１区西端）……18

図15　前方部３区盛土断ち割り断面図（白井美友紀製図）……20

図16　東北部発掘区平面図（高橋順子製図）……21

図17　Ｄセクション……23

図18　Ｊ南セクションの土層……23

図19　Ｄ東セクションの土層……23

図20　Ｋセクションの土層……23

図21　前方部残存墳丘面のコンター復元図（大庭製図）……25

図22　長法寺南原古墳墳丘復元図（福永伸哉・大庭製図）……27

図23　長法寺南原古墳墳丘模式図（藤原隆製図）……29

図24　東クビレ部、前方部発掘区平面図、断面図（大庭製図）……31・32

図25　墳丘断面図（鶴田健治・大庭製図）……33・34

図26　後方部竪穴式石室実測図（府報17冊より）……36

図27　石室と排水溝の関係（松木武彦製図）……37

図28　石室内遺物配置図（府報17冊より再トレース）……39

図29　前方部小竪穴式石室上面平面図、埋土断面図（川島製図）……43

図30　小竪穴式石室の石材分析（吉田巖一郎製図）……45
図31　排水溝平面図、断面図（西本昌弘・青谷尚美製図）……47・48
図32　小竪穴式石室平面図、断面図、断ち割り断面図（北條芳隆製図）……49・50
図33　鏡断面図（福永製図）……53
図34　３号鏡の細部(1)……54
図35　３号鏡の細部(2)……54
図36　玉類実測図（北條製図）……57
図37　鉄製刀・槍・剣実測図（松木製図）……58
図38　鉄鏃・銅鏃実測図（松木・北條製図）……59
図39　鉄斧実測図（北條製図）……60
図40　鉄製刀子・鉇・鑿・棒状品実測図（北條製図）……61
図41　石臼・石杵実測図（北條製図）……62
図42　円筒埴輪実測図(1)（清家章・野村充和製図）……66
図43　円筒埴輪実測図(2)（清家・野村製図）……67
図44　円筒埴輪ハケメ拓影（清家製図）……68
図45　埴輪ヒレ部実測図（鈴木一有製図）……69
図46　朝顔形円筒埴輪・形象埴輪実測図（木村淳製図）……70
図47　円筒埴輪の復元案（長谷川さゆり・斉藤製図）……71
図48　土器実測図（高橋製図）……71
図49　瓦・土師器・瓦器実測図（藤原製図）……72
図50　石器剥片実測図（北條製図）……73
図51　瓦・瓦器・石器剥片……73
図52　実測図番号と図版番号の対応関係（長谷川製図）……75・76
図53　埴輪棺出土状況実測図（辻美紀製図）……77
図54　埴輪棺出土状況復元模式図（清家製図）……78
図55　特製埴輪棺実測図（辻製図）……79
図56　転用埴輪棺実測図（清野・辻製図）……81・82
図57　南原東３号墳盾形埴輪復元模式図とその類例（清家製図）……83
図58　埴輪棺出土状況……87
図59　棺に使用した埴輪……88
図60　突帯に対する接合技法……91
図61　突帯に対する接合技法の比率（杉井製図）……92
図62　口縁部に対する接合技法……93

図63　円筒部器面に対する接合技法……93
図64　ヒレの幅（杉井製図）……94
図65　分割接合部……96
図66　古墳時代銅鏃の分類（松木製図）……102
図67　古墳時代銅鏃の規格性（松木製図）……102
図68　最末期の銅鏃の諸例（松木製図）……103
図69　最末期の銅鏃の変遷過程（松木製図）……105
図70　鉄鏃と鉄鏃模倣型銅鏃（松木製図）……107
図71　古墳編年との関係（松木製図）……108
図72　石臼・石杵の代表例（北條製図）……119
図73　小竪穴式石室の内法（福永製図）……132
図74　小竪穴式石室の分布（福永製図）……133
図75　但馬地方周辺の埋葬施設主軸（福永製図）……138
図76　近畿地方の小竪穴式石室集成図（福永製図）……145～160
図77　英文抄訳中で言及される遺跡（佐々木憲一製図）……186
図78　南原古墳と同型鏡を共有する古墳（佐々木製図）……187
図79　桂川流域の古墳（都出比呂志原図、松木製図）……188
図80　桂川流域の首長系譜（都出製図）……189

表　目　次

表１　埴輪実測図の新旧番号対応関係（清家作成）……64
表２　ヒレ部の観察結果（杉井作成）……95
表３　近畿地方の小竪穴式石室集成表（古墳時代前期）（福永作成）……142・143

第1章　調　査　経　過

1　周辺の古墳

京都盆地の西端に位置する乙訓地域は、旧石器時代から現代にいたるまでのさまざまな時代の遺跡が濃密に分布することからも知られるように、先史以来人々の生活や往来が絶えることのない場所であった。長法寺南原古墳は、この乙訓地域の西域を画する西山丘陵の東斜面にあり、標高約145ｍの小高い丘陵の最高部に位置する。古墳のあるこの丘陵は西から東に張り出した舌状を呈するが、尾根の付け根には小谷が形成されるため、視覚的には独立丘陵状となる。特に古墳の東側は急斜面となり、現在はうっそうとした竹林に覆われているが、本来なら山城盆地一帯の眺望が可能な、前期古墳の立地にふさわしい絶好の場所であったであろう。

長法寺南原古墳の眼下には、桂川の支流である小泉川、小畑川などによって形成された肥沃な沖積地が広がり、弥生時代以来の農耕社会の生産基盤となってきた。古墳の東方約３kmの雲宮遺跡に始まる農耕集落は、弥生時代中期に入ると神足遺跡を核とする地域集団に発展していく。乙訓地域南部では、この他にも小畑川中流域の今里遺跡を核とする集団の存在が想定され、北部においても向日市域の森本遺跡、京都市域の中久世遺跡などをそれぞれ核とする近隣諸集団の形成がみられる。[(1)]

こうした集団の割拠は、基本的に古墳時代にも継続したと考えられ、各集団に対応する形で古墳の首長系譜を追うことができる。[(2)] しかし、北部の向日市域の集団が、全国でも最古の古墳の一つに数えられる元稲荷古墳をはじめとして早くから首長系譜を形成していくのに対し、南部の長岡京市域および大山崎町域ではその形成に若干の遅れをみる。以下、この南部地域を中心とした首長系譜の流れを概観する。

この地域で最も古く位置づけられる古墳は長法寺南原古墳である。1934年に梅原末治を担当者とした調査が行なわれ、竪穴式石室から中国製三角縁神獣鏡４面をはじめとする多数の遺物が発見された。そして副葬品の中に仿製三角縁神獣鏡や碧玉製腕飾類など前期古墳における新しい相の遺物群を含まない古墳の１つとして学界で注目されるにいたった。[(3)] ところが1981年以降の５回にわたる調査によって、主に円筒埴輪の特徴から前期中葉をさかのぼらない古墳であることが判明した。さらにそれまで考えられていたような前方後円墳ではなく、全長約62ｍの前方後方墳であり、後方部に陸橋部を有し、葺石を持たないことが確認された。[(4)]

長法寺南原古墳の立地する丘陵頂部の東斜面には、南原東１号墳、東２号墳が存在する。1984年の試掘調査において検出された円筒埴輪などの特徴から、これらは長法寺南原古墳に１世代ほど遅れる古墳と考えられる。[(5)] また、1985年の立会調査において、この東１号墳の南方斜面か

2　周辺の古墳

1 **長法寺南原古墳**
2 松尾山古墳群
3 西芳寺古墳群
4 衣笠山古墳群
5 穀塚古墳
6 清水塚古墳
7 天鼓森古墳
8 大枝山北古墳群
9 大枝山南古墳群
10 沓掛古墳群
11 塚原古墳群
12 天皇ノ杜古墳
13 百々池古墳
14 一本松古墳
15 福西古墳群
16 東山古墳群
17 長野西古墳群
18 長野東古墳群
19 南条古墳群
20 物集女車塚古墳
21 鏡山古墳
22 寺戸大塚古墳
23 恵美須山古墳群
24 妙見山古墳
25 伝高畠陵古墳
26 芝山ノ内古墳
27 五塚原古墳
28 北山古墳
29 元稲荷古墳
30 山畑古墳群
31 山開古墳
32 狐山古墳
33 灰方古墳群
34 芝古墳群
35 井ノ内車塚古墳
36 稲荷塚古墳
37 中山古墳群
38 カラネガ岳古墳群
39 光明寺古墳
40 七ツ塚古墳群
41 今里車塚古墳
42 細塚古墳
43 舞塚古墳
44 今里大塚古墳
45 南原古墳群
46 南原東古墳群
47 稲荷山古墳群
48 野山古墳群
49 大原古墳群
50 走田古墳群
51 塚本古墳
52 恵解山古墳
53 南栗ヶ塚古墳
54 境野古墳群
55 西明寺古墳
56 鳥居前古墳

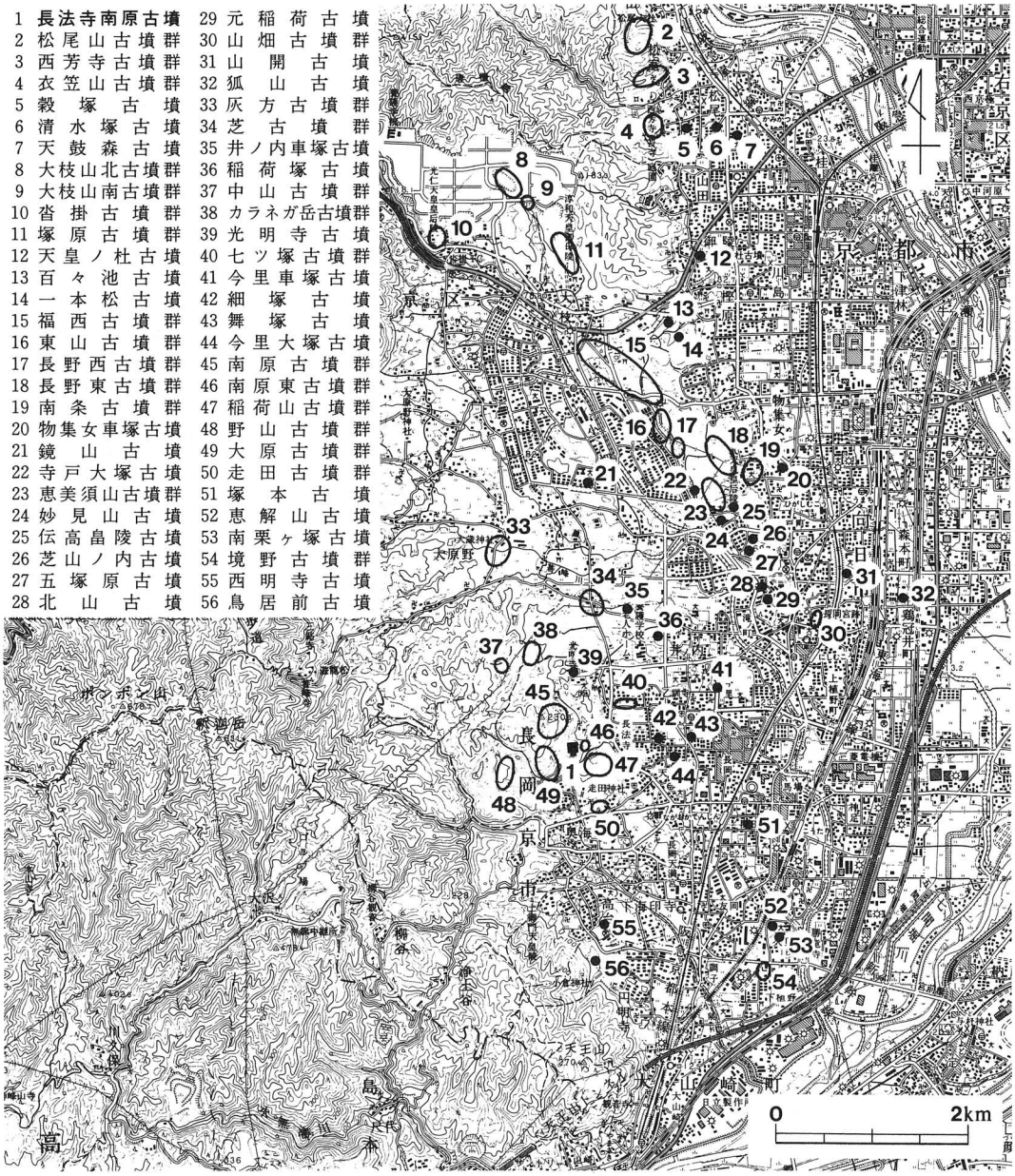


図1　乙訓地域の古墳分布図

ら大型の盾形埴輪などを利用した転用埴輪棺および特製埴輪棺が検出されており、南原東3号墳と命名されている。(6)

長法寺南原古墳に後続する時期の首長墓と考えられるのは、鳥居前古墳、カラネガ岳2号墳、今里車塚古墳である。鳥居前古墳は1988年の調査によって全長51ｍの帆立貝式古墳であることが判明しており、中期初頭に位置づけられる。(7) カラネガ岳2号墳は長法寺南原古墳の北方約1㎞の丘陵上に位置する全長36ｍの帆立貝式古墳で、粘土槨の存在が確認されている。(8) その東方

の平野部にある今里車塚古墳はすでに削平を受けており主体部は確認できないが、周濠を持つ後円部径約48ｍの前方後円墳であることが判明している。1990年の調査では、それまで盾形と考えられていた周濠が後円部南側部分においては、直角に近いコーナーを有する形状をなすことが確認された[9]。この両墳は円筒埴輪の特徴などから、鳥居前古墳より若干新しく位置づけられ、中期前葉に築造されたと考えられる。この時期になると北部の向日市域では前方後円墳の築造が絶えて円墳の系譜へと変わり、急速に台頭してきたこの南部地域の集団との優劣関係が逆転することが注目される[10]。

南部の集団の隆盛は、中期前葉から中葉に位置付けられる恵解山古墳の出現で一つのピークに達する。恵解山古墳は長法寺南原古墳の南方約３㎞の平野部に位置する乙訓地域最大級の前方後円墳で、全長120ｍをはかる。1980年の調査で前方部に副葬品埋納施設が発見され、総数約700点に達する多量の鉄製品が出土して注目を集めた[11]。こうした鉄製品埋納のあり方が中期の大王権力に連なる古墳と共通することは、当時の乙訓地域と中央政権との関係を考える上で重要である。しかし、恵解山古墳に続く中期中葉から後葉の有力首長墓は、まだ明らかになっていない。

一方、中期中葉以降には、平野部を中心に小規模古墳の出現が認められる。恵解山古墳に近接する境野古墳群のほか、今里車塚古墳の南方に位置する宇津久志古墳群、小畑川中流域の芝古墳群などが知られている。宇津久志古墳群は古くに削平を受けており、1988年に方墳２基の存在が確認された。うち１号墳では鉄刀、玉類などを副葬する木棺直葬の主体部が確認されている[12]。こうした小規模古墳の築造は後期になっても継続する。長法寺南原古墳北東の平野部に

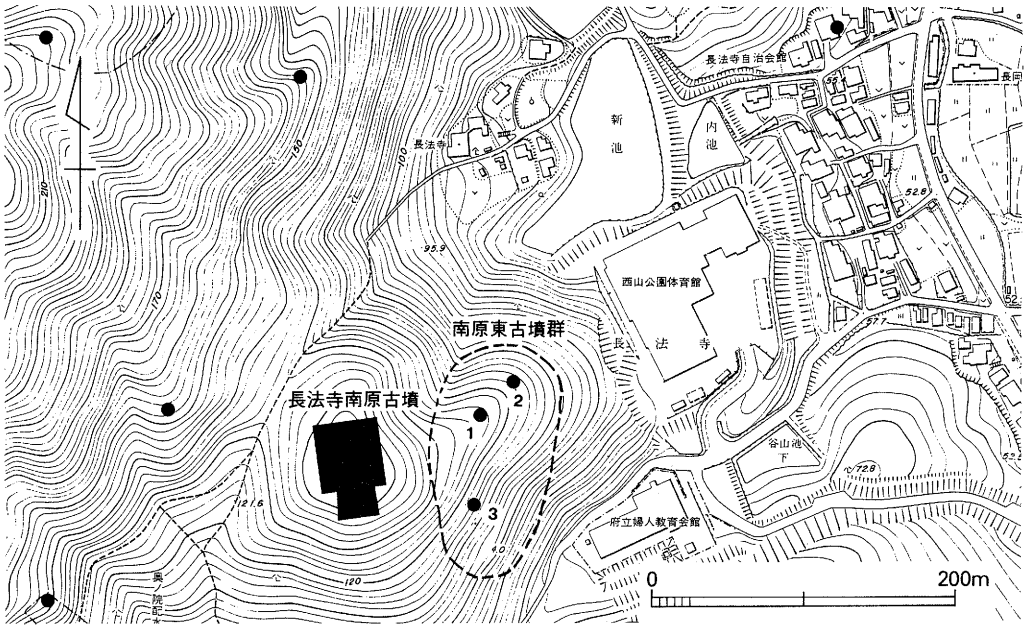


図２　長法寺南原古墳の位置

ある長法寺七ツ塚古墳群は、1988年の調査によって、その一部から鉄製武器・農工具、馬具、玉類、須恵器などを副葬する複数の木棺直葬の主体部が発見された。さらにこのうちの4号墳は全長20m以上の帆立貝式古墳であることが判明し、後期前半の首長系譜を考える上で、重要な資料を提供した。(13)

後期初頭から前半にかけて、同じ平野部に継起的に築かれる塚本、舞塚、細塚の諸古墳は、いずれも全長40m未満の小規模な前方後円墳もしくは帆立貝式古墳である。小畑川中流域にある井ノ内車塚、稲荷塚の両前方後円墳も同時期のものと考えられるが、全長はそれぞれ37m、45mと小型である。以上のように、この時期の乙訓地域南部には卓越した大型古墳の存在が認められないが、後期後半に入ると今里大塚古墳が出現する。この古墳はこれまで径約45mの円墳と考えられてきたが、最近の調査によって全長約80mの規模を持つ前方後円墳の可能性が高くなった。横穴式石室は古くに開口して副葬品などが明らかでないが、玄室の長さ約6m、幅約3m、高さ3m以上という傑出した規模を持ち、その背後には乙訓地域南部、あるいは全域を統括する有力首長の存在が推定される。(14) 今里大塚古墳より新しい時期の大型古墳は乙訓地域では確認されておらず、これを最後に当地域の大型古墳の築造は終わりを告げたものと考えられよう。

長法寺南原古墳に始まる長岡グループの首長系譜は、この今里車塚古墳にいたるまで連綿と200年以上にもわたって継続される。途中、盟主的首長権の移動はあるにせよ長岡グループは乙訓地域内において有力な首長系譜の1つを形成し続けた。これから報告する長法寺南原古墳の位置づけはこの首長系譜の初現にかんする重要な視点を示すものだが、それと共に、これからの周辺地域のより綿密な調査研究が、乙訓地域における首長系譜の変動を解明するうえで不可欠のものであることは言うまでもない。

2　調査経過

長法寺南原古墳は、京都府長岡京市長法寺南原9番地にある。

ここ乙訓の地では竹林が発達するが、この古墳もまた、緑ゆたかな竹藪のまっただなかにある。

この古墳に初めて調査の鍬が入ったのは1934年のことである。京都府教育委員会が調査主体となり、京都帝国大学教授梅原末治を担当者とする調査が実施され、その結果、我が国の古墳研究において極めて重要な古墳がここに存在することが判明した。

しかしながら、この時点の調査は短期間のもので、石室の内部と副葬品の検出に限定されたものであった。このため墳丘の正確な実態や石室構造の詳細は十分明らかにされなかった。その後長い歳月のうちに、筍栽培による古墳の変形は年ごとに進んだ。これをそのまま放置するならば、墳丘構造解明の手がかりの失われてしまうことが憂慮され、墳丘の現状と石室構造を

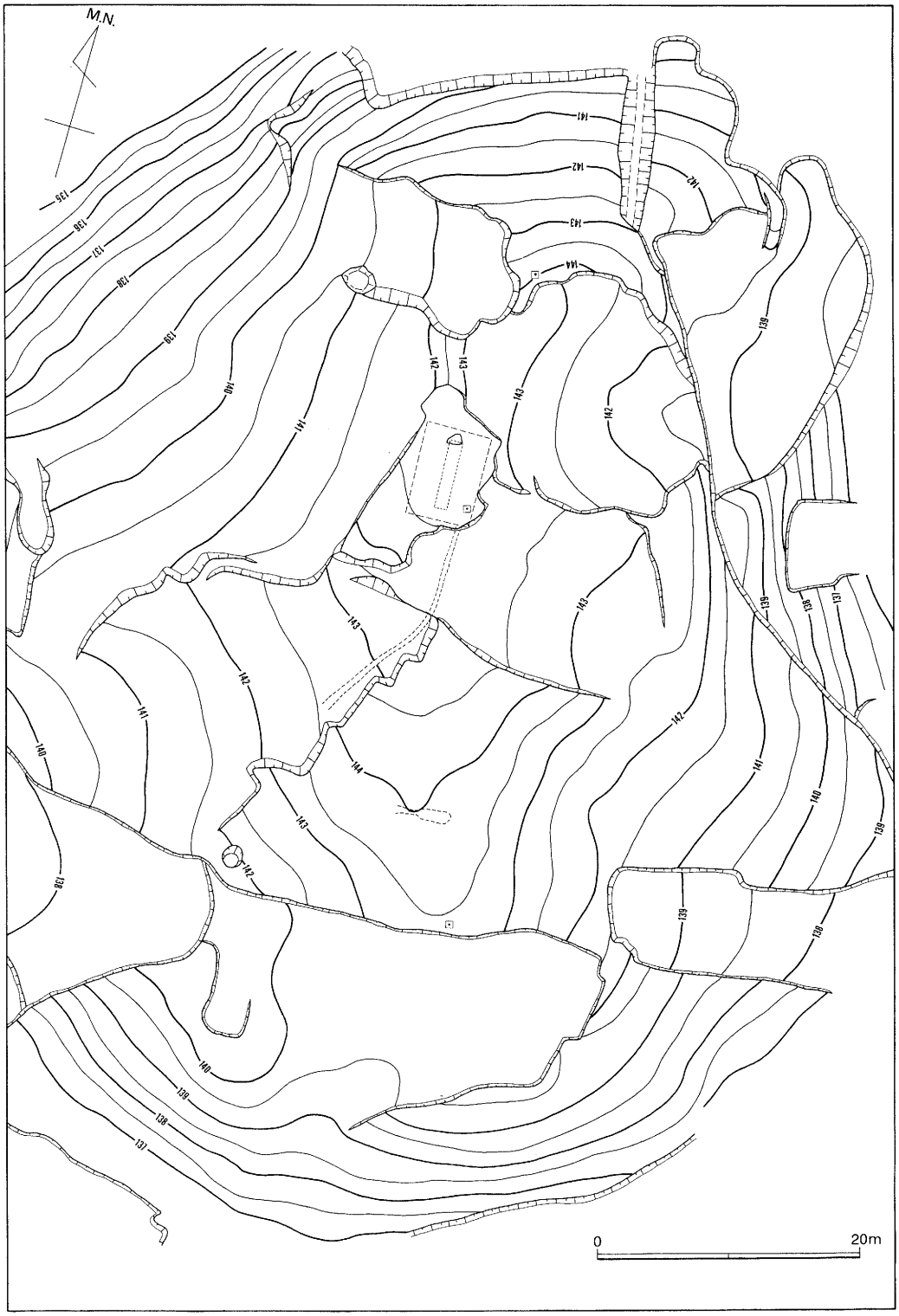


図３　墳丘測量図

解明し、かつ古墳の保存整備を進めるための調査が計画されるにいたった。この調査は長岡京市教育委員会が大阪大学文学部考古学研究室の協力のもとに1982年以来1989年まで4回にわたって実施したものである。

なお、長岡京市教育委員会が調査を実施する前年の1981年には、大阪大学文学部国史研究室が都出比呂志を担当者として、墳丘測量と西側クビレ部排水溝の発掘を実施した。それをも含めて過去の調査を以下のように呼ぶこととしたい。なお、以下に記す調査参加者名は、発掘調査団の合宿生活等にかんする作業協力者をも含めたものである。

第1次調査　1934年　京都府教育委員会主催（担当者　梅原末治）

第2次調査　1981年　大阪大学文学部国史研究室主催（担当者　都出比呂志）

第3次調査　1982年　長岡京市教育委員会主催（担当者　都出比呂志）

第4次調査　1983年　　同上

第5次調査　1984年　　同上

第6次調査　1989年　長岡京市教育委員会主催（担当者　都出比呂志・福永伸哉）

第1次調査　この古墳は1934（昭和9）年1月、竹藪の開墾中に発見され、梅原末治を担当者として、京都府教育委員会による調査が実施された。調査の結果、以下のような所見が示された。(15)

1）墳丘の形態は南面する前方後円墳である。全長約70m、後円部直径40～50m、その高さ4.5m、前方部の幅24m、その高さ1～2mで、前方部が短い型式となる。

2）埴輪と葺石は認められない。

3）後円部中央に、墳丘主軸に平行する竪穴式石室がある。長さ5.3m、幅1.0m、高さは北で1.35m、南で1.2mで、11枚の天井石で覆う構造をとる。

4）石室内から発見された副葬品は、三角縁神獣鏡4・盤龍鏡1・内行花文鏡1からなる鏡6面、硬玉製勾玉6・碧玉製管玉19・ガラス製小玉287などの玉類、刀1・剣7・刀子7・鏃123・斧12・鑿1・鉇片などの鉄器、漆付麻布、石臼と石杵各1などから構成される。

以上の成果により、この古墳が日本の古墳研究において極めて重要であることが学界の認識となった。さらに小林行雄は、この古墳の副葬品の構成に注目した。すなわち中国鏡のみで、仿製鏡や碧玉製腕飾類など前期古墳における新しい相の遺物群を含まないことから、前期古墳のなかでも古相に位置づけるべきと主張した。(16) 以後、最古相の古墳の1つとして重要視されるにいたった。

第2次調査　第1次調査ののちも竹藪の開墾は進み、石室部分はかろうじて保存されたが、墳丘は著しく変形され、旧状を推測することさえ困難なほど破壊を受けた。と同時に開墾に伴って円筒埴輪片が墳丘各所で検出され、過去の調査時における「埴輪なし」の認識を修正すべきことが判明した。

また1981年１月、土地所有者である藪内治作氏が竹藪の開墾中に、石室の排水溝の一部が露出した。藪内氏から連絡を受けた都出比呂志は現場に急行し、現状の写真と略測とによる記録をとり、現状保存を藪内氏に依頼して承諾を得るとともに、長岡京市教育委員会に保存にかんする行政上の措置を要請した。

さらに同年７月20日から８月３日までの期間において、大阪大学文学部国史研究室を主体とし、都出比呂志を担当者とする発掘調査を実施した。参加者は以下のとおりである。

西本昌弘（大阪大学大学院生）、岩松保、伊藤寿夫、禰宜田佳男、福永伸哉、青谷尚美、小野民裕、城石俊弘、清水薫、寺田幸治（同文学部学生）、萩原政幸、山向優、鹿野正人、川崎靖彦、野上瑞穂（大阪大学考古学研究会）。

調査は墳丘測量とともに、石室排水溝の北半部、石室墓壙の露出部の発掘を内容とするものであった。墳丘測量の結果、旧地形が保存されている北部と東部における等高線を判読すると、後円部とされたものは後方部の可能性が高いこと、葺石は１点も認められないことが判明した。

第３次調査　測量調査の成果にもとづき、墳丘の現状の把握と、クビレ部排水溝の全容の解明を目的とする発掘調査を実施した。発掘主体は長岡京市教育委員会、担当者は都出比呂志、調査期間は1982年７月21日から８月13日までである。なお参加者は以下のとおりである。

西本昌弘、丹治正子、永松圭子（大阪大学大学院生）、福永伸哉、禰宜田佳男（同文学部聴講生）、青谷尚美、小野民裕、松木武彦、國木健司、黒石哲夫、武田章、長谷川俊哉、中川すがね（同文学部学生）、福村千晶（同法学部学

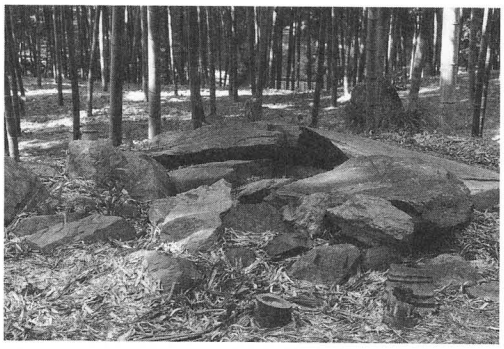


図４　墳頂部の天井石堆積状況

図５　土地所有者　藪内治作氏

図６　第４次調査風景(1983年)

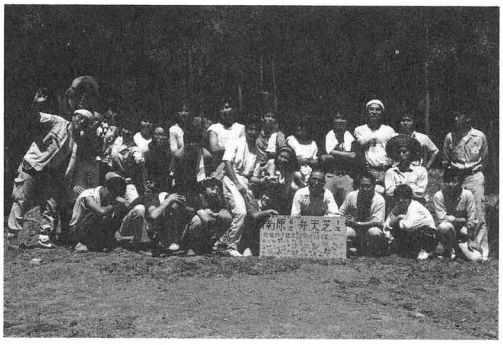


図７　第６次調査終了(1989年)

生)、細野一夫、樫原弘幸、川崎靖彦、鹿野正人、山向優、野村博、藤本真路、中西規之、竹中郁、松本みゆき、大隅伸一、岡本浩、中川匡夫、武田真治（大阪大学考古学研究会)。

なお、岡山大学文学部助手宇垣匡雅、同大学院生秋山浩三、同吉村健の３氏は調査に参加して援助された。

調査の結果、以下の成果を得た。[17]

1）墳丘は全長60ｍの前方後方墳である。後方部一辺の長さ40ｍ、推定高さ５ｍ、前方部長さ20ｍ、前方部幅28ｍ、高さ2.5～3.0ｍと復元しうる。

2）墳丘は後方部３段、前方部２段の段築成である。

3）原位置にある石室の天井石の現状を確認するとともに、第１次調査以後に古墳の隣接地に散逸したものの実測と写真による記録作業を実施した。

4）石室墓壙の東南隅の調査の結果、石室裏込めに緑色岩と砂岩の塊石の使用を確認した。

5）排水溝は、石室墓壙東南隅から西南方向に長さ約18ｍにわたって設置されている。溝の平均幅は0.5ｍ、深いところは現状で1.2ｍあり、小礫を詰める作業単位を確認できる。

6）墳丘各所で埴輪片を検出した。普通円筒埴輪と朝顔形円筒埴輪からなる。ヒレを有し、ヨコ方向のハケによる外面調整を施すもので、前期古墳の新相段階の特徴をもつ。

第４次調査　前年度の調査は墳丘各所に試掘トレンチを設定したものであったが、その知見をもとに、後方部の東北隅と東南隅およびクビレ部東側について広い面積を調査し、墳丘形態を正確に把握することを目的とした。

調査主体を長岡京市教育委員会、担当者を都出比呂志として、1983年７月11日から同年８月15日の約１ヶ月にわたって実施した。参加者は以下のとおりである。

福永伸哉、西本昌弘、青谷尚美（大阪大学大学院生)、黒石哲夫、松木武彦、岡村勝行、小寺祥文、田中理恵子、中島雅人、藤田友紀子（同文学部学生)、堤和博、平岡敬規、森島康雄、山中洋、北尾悟、小柳泰之（同教養部学生)、鹿野正人、野村博、竹中郁、松本みゆき、武田真治(大阪大学考古学研究会)。

なお、調査について白土芳人、岩松保、禰宜田佳男、蜂屋晴美の各氏から援助を受けた。

調査の成果は以下のとおりである。[18]

1）後方部の形態と規模については従来の試掘調査による復元案を実証する結果を得ることができた。

2）墳丘裾に浅い溝をめぐらせていることが判明した。

3）後方部の東南隅の部分で、周溝がとぎれ、ここに下端幅約５ｍの陸橋が確認された。

第５次調査　前方部の墳丘の形状の確認および前方部における埋葬施設の有無の検討を目的とした。また、古墳が立地する丘陵の東の斜面で埴輪が採集され、ここに別の古墳が存在する可能性があるので、それを確認するために地形測量と発掘調査を実施した。

調査主体は長岡京市教育委員会、担当者は都出比呂志、調査期間は1984年7月16日から同年8月10日の26日間で、参加者は以下のとおりである。

福永伸哉、西本昌弘、青谷尚美（大阪大学大学院生）、黒石哲夫、武田章（同文学部聴講生）、浅田博之、岡村勝行、田中理恵子、藤田友紀子、堤和博、平岡敬規、森島康雄、山中洋、北尾悟、小柳泰之、岡本浩、古谷美奈、滝本玲子、中村良一、野村博、松本みゆき（同文学部学生）、大和田淳司（同法学部学生）、鹿野正人、竹中郁、伊藤茂、浦田孝之、北川哲也、中西規之、西森正徳、吉田耕（大阪大学考古学研究会）、森明彦（関西大学大学院生）。

調査の成果は以下のとおりである。(19)

1）前方部は2段築成であり、墳丘裾からの推定高は2.5m以上である。

2）前方部墳頂の南半部に埋葬施設の墓壙の詰石と推定しうる礫を検出した。

3）古墳の立地する丘陵東斜面に少なくとも1基の別の古墳が存在したが、今は破壊されていることが判明した。埴輪の年代観によれば、南原古墳よりも後出のものと考えられる。

第6次調査　第5次調査のあと、5年間にわたって調査を中断した。古墳のある竹藪が我々の発掘調査によって、かなり伐採されたので、筍栽培用の地力回復のための休止期間が必要となったためである。

再開後の第6次調査は、前方部墳頂の構造の解明および前方部における埋葬施設の発掘を目的として実施した。調査主体を長岡京市教育委員会、担当者を都出比呂志および福永伸哉とする調査体制を組んだ。調査期間は1989年7月14日～8月19日の約1ヶ月間で、参加者は以下のとおりである。

松木武彦、北條芳隆、禹在柄、杉井健、吉沢美香（大阪大学大学院生）、大庭重信、白井美友紀、鈴木敬二、清家章、平田洋司、松井久宣、朝見弘志、川島睦子、鈴木節男、野村充和、福田政彦、渡辺明英（同文学部学生）、陳連旭（同研究生）、佐々木憲一（ハーバード大学大学院生）、山田雄久、小路泰弘、米谷昭範、堅田龍夫、高橋順子、辻美紀、柳田陽子、横谷隆代、木村淳、鈴木一有、藤井眞樹、藤原葉子、柳沢栄一（大阪大学考古学研究会）、藤原隆（同教養部学生）、大庭健一（同人間科学部学生）。

調査の成果は以下のとおりである。(20)

1）発掘で確認できた前方部の墳頂の形状は、これまでの調査結果から推定した前方部墳丘の復元案がほぼ正しいことを示した。

2）前方部中央に小さな竪穴式石室を検出した。石室は墳丘主軸に直交して設けられ、推定内法で長さ1.7m、幅0.3～0.4mであり、これに長さ約1.7mの排水溝がとりつけられている。後世の攪乱のため副葬品などは遺存しなかった。

総括報告書作成　以上の発掘調査の成果を総括すべく、1991年から1992年にかけて、遺物と図面類の整理と資料分析および考察、そして総括報告書作成作業を実施した。この作業は編集

責任者である都出比呂志と福永伸哉が担当した。作業参加者は以下のとおりである。

北條芳隆（学術振興会特別研究員）、禹在柄、杉井健、大庭重信、清家章（大阪大学大学院生）、佐々木憲一、蔭山誠一（大阪大学文学部研究生）、清喜裕二（同文学部聴講生）、野村充和、嘉悦紀代美、金田善敬、高木芳史、高橋順子、辻美紀、藤原隆、木村淳、斉藤香織、清野孝之、鶴田健治、長谷川さゆり、鈴木一有、吉田巖一郎、吉田進、藤井眞樹（同文学部学生）、松木武彦（岡山大学助手）。また、作業の過程で柴田友子氏の援助を得た。

3　謝　辞

我々が関係した第2次調査以来第6次調査にいたる8年間の調査において、実に数多くの方々の御世話になった。これらの御援助、御指導のおかげで、この古墳の調査は遂行できたのである。ここに深い感謝の気持ちを捧げたい。

1）古墳の土地所有者である藪内治作氏は、調査を快諾されただけでなく、我々の調査にたいして物心両面でさまざまな便宜を提供下さった。

2）古墳および周辺の土地所有者である藤下清一郎、佐藤宰四郎、小山乙吉、藪内信義の各氏は測量調査などにおける竹林への立ち入りを許可された。

3）子守勝手神社総代会は、調査団の宿泊のために社務所を提供された。

4）古墳に近い天台宗長法寺は調査に際し様々な便宜を提供された。

5）第2次調査の実施にあたり、大阪大学文学部国史研究室の梅溪昇、黒田俊雄、脇田修の各氏からさまざまな援助を得た。

6）京都府立山城郷土資料館の橋本清一氏は石室や排水溝の石材にかんする岩石学的調査を実施し、この古墳の研究を多面的に進める上で貢献された。

7）小林行雄、近藤義郎両氏は、調査期間中、古墳を訪れ数々の有益な指導助言を下さった。

8）長法寺南原古墳出土銅鏃の調査については、京都大学所蔵資料の調査にかんして京都大学文学部小野山節氏および1982年当時、同文学部助手であった岡内三眞氏の御世話になった。

9）後方部竪穴式石室出土遺物の再調査にかんしては、東京国立博物館本村豪章、望月幹夫の両氏のお世話になった。

10）後方部竪穴式石室出土遺物の写真、実測図の多くは長岡京市史編さん室より提供を受けた。[21]

注

(1) 都出比呂志「弥生時代」(上田正昭、熱田公、都出比呂志編『向日市史』上巻　向日市、1983年)、pp.85～88。

(2)　都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係」(『考古学研究』第20巻第４号、1974年)。

(3)　梅原末治「乙訓村長法寺南原古墳の調査」(『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第17冊　京都府、1937年)。

(4)　都出比呂志、橋本清一「長法寺南原古墳第３次調査概要」(中尾秀正編『長岡京市文化財調査報告書』第11冊　長岡京市教育委員会、1983年)。

都出比呂志、福永伸哉「長法寺南原古墳第４次調査概要」(中尾秀正編『長岡京市文化財調査報告書』第13冊　長岡京市教育委員会、1984年)。

都出比呂志「長法寺南原古墳第５次調査概要」(中尾秀正編『長岡京市文化財調査報告書』第15冊　長岡京市教育委員会、1985年)。

福永伸哉、松木武彦、杉井健「長法寺南原古墳第６次調査概要」(中尾秀正編『長岡京市文化財調査報告書』第24冊　長岡京市教育委員会、1990年)。

(5)　注４、1985年文献。

(6)　木村泰彦「遺跡パトロール」(木村泰彦ほか編『長岡京市埋蔵文化財センター年報　昭和60年度』財団法人長岡京市埋蔵文化財センター、1987年)。

(7)　福永伸哉編『鳥居前古墳―総括編―』(大阪大学文学部考古学研究報告第１冊　大阪大学文学部考古学研究室、1990年)。

(8)　岡内三眞ほか「京都府長岡京市カラネガ岳一・二号墳の発掘調査」(『史林』64巻３号　史学研究会、1981年)。

(9)　木村泰彦ほか「長岡京跡右京第352次（7ANITT―13地区）調査概要―今里車塚古墳第７次調査―」(中尾秀正編『長岡京市文化財調査報告書』第27冊　長岡京市教育委員会、1991年)。

(10)　都出比呂志、井上満郎「古墳時代」(注１文献）pp.149～160。

都出比呂志「古墳時代首長系譜の継続と断絶」(『待兼山論叢』史学篇　第22号　大阪大学文学会、1988年)。

(11)　山本輝雄ほか「恵解山古墳第３次発掘調査概要」(山本輝雄編『長岡京市文化財調査報告書』第８冊　長岡京市教育委員会、1981年)。

(12)　白川成明「右京第321次（7ANIUS―２地区）調査略報」(小田桐淳編『長岡京市埋蔵文化財センター年報　昭和63年度』財団法人長岡京市埋蔵文化財センター、1990年)。

(13)　山本輝雄「長法寺七ツ塚古墳群」(『長岡京市文化財調査報告書』第21冊　長岡京市教育委員会、1988年)。

(14)　木村泰彦「長岡京跡右京第322次（NIOK―2地区）調査概要―今里大塚古墳第２次調査―」(中尾秀正編『長岡京市文化財調査報告書』第22冊　長岡京市教育委員会、1989年)。

山本輝雄「今里大塚古墳」(都出比呂志ほか編『長岡京市史』資料編Ⅰ　長岡京市史編さん委員会、1991年)。

(15)　注３文献。

⑯　小林行雄「前期古墳の副葬品にあらわれた文化の二相」(『京都大学文学部五十周年記念論集』京都大学文学部、1956年)。

⑰　注４、1983年文献。

⑱　注４、1984年文献。

⑲　注４、1985年文献。

⑳　注４、1990年文献。

㉑　なお、都出比呂志「長法寺南原古墳」『長岡京市史』資料編Ⅰ（注14、1991年文献）は、第１次～第６次にいたる調査成果の概要を短く総括している。

図８　第１次調査時の記念撮影
(1934年、藪内治作氏保管)

第２章　墳丘の構造

１　古墳の現状

古墳は、京都盆地の西端を画する西山丘陵から東側の平野部に降りてくる尾根筋の最高点に位置する。背後に小谷が入り込んでいるため、平野側からはあたかも独立丘のようにみえるその頂点に古墳は存在し、現在の後方部墳頂レベルは約145ｍをはかる。古墳からの眺望は東、南側に良く開け、京都盆地から山城南部までを視野におさめることができる。これに対して、古墳の北西方向は、比高差20ｍの鞍部をへて標高約250ｍの山塊に続くため、古墳の北、西側に平野部を望むことはできない。

丘陵部一帯は当地方名産の筍栽培のための竹林が広がっており、古墳の墳丘上も手入れの行き届いた竹藪となっている。良質の筍を栽培するためには、土壌を柔らかく保っておく必要がある。そこで、毎年秋から冬にかけて竹藪内に数cmの厚みで満遍なく土入れを行うわけであるが、この作業は丘陵のより高所を削った土砂を周辺に盛土していく。そもそも、1934年に当古墳の石室が発見されたのも土入れ作業のための土取りの最中であった。梅原末治によるこの第１次調査の際の墳丘測量図を見れば、すでに墳丘の西半部が大きく削られた状況を呈していることがわかる（図９）。

その後、50余年を経て墳丘の改変は大きく進んだ。1934年当時、地表から約1.2ｍ近く掘り下げたところで検出された石室天井石のレベルが、現在ではほぼ墳丘最高点となっている。そして、石室のある墳丘中央部を島状に残した形で周囲はさらに１ｍ以上の削平を被っている。ちなみにこの石室残存部の現地表レベルは145.49ｍである。

墳丘の各所には土取りによってできた崖面が多く形成されている。その存在位置を考慮し、さらに地形測量によって得られた等高線の高さと走り具合いを勘案すると、石室残存部から北および南東方向に改変を免れた旧地

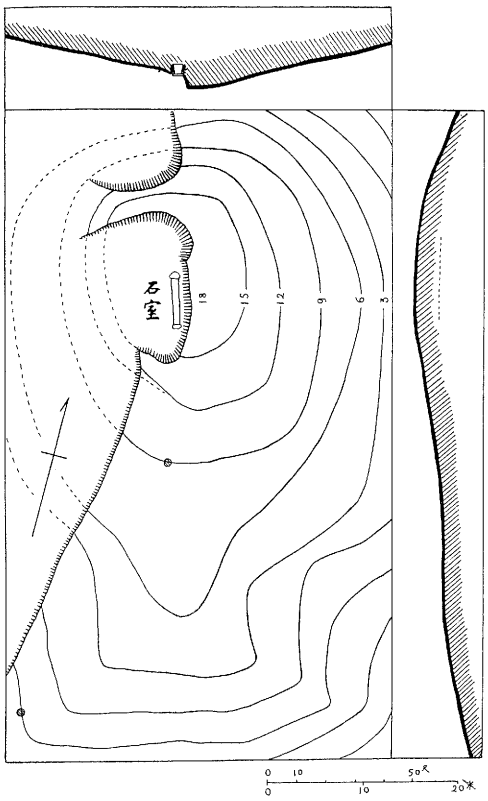


図９　第１次調査時の墳丘(府報17冊より)

形が保存されていることを推測できる。地形図上でいうなら、144m以上のコンターが存在し、そこから断絶なく徐々に下る傾斜を残している範囲がこれにあたる（図3）。そのほかの部分では墳丘面はすでにかなり大きく削平されていると考えられる。石室残存部から南の方向ではそれによって排水溝内部に詰めた礫石が露出し、第2次以降の調査の直接的な契機ともなった。

2　発掘区の設定

上述のように、墳丘は各所で分断された状況にあることから、調査はまず土取りによってできた崖面の土層観察を行い、それによって得られた情報をもとに平面的な発掘区を設定するという方針で実施した。主要な発掘区としては墳丘の東クビレ部から前方部にかけてのL字状に連続した発掘区、後方部東北隅に設定した発掘区、そして、西クビレ部の排水溝部分の3箇所がある。1981年の第2次調査から1989年の第6次調査までの間で調査の対象となった範囲は、崖面観察12箇所、総延長110m、平面的に発掘した面積約350m²である。それらすべての位置関係は図10に示した。また、それぞれの調査箇所のデータについては、すでに刊行された各年次の調査概報において公表してきたとおりである。

さて、平面的な発掘調査が進行するにしたがって、初期に実施した各崖面の観察結果のなかでそれが墳丘構造の情報を示している箇所と十分示していない箇所があることが徐々に明らかになってきた。そこで、以下の記述では、墳丘構造を復元する際に有効な調査区を中心に調査成果を述べ、その他の調査区の所見については必要に応じて触れることとする。

なお、各調査区の測量は後方部墳頂のポイントYOからYSO、YS89を通るライン（YSライン）と、YOにおいてこれと直交するラインを縦横の基準線とし、YOを原点とするような座標軸を設定して行った。またYSOにおいてYSラインと直交するラインをYSOラインと呼ぶ。

3　調査の所見

(1)　東クビレ部、前方部発掘区

第4次～第6次にかけて面的に連続するように設定した発掘区である。位置的には後方部の東南隅から東クビレ部さらに前方部頂部にかけての範囲に相当する。不規則な形態の発掘区なので、記述の便宜を図るために第4次、第5次、第6次の調査部分をそれぞれ1区、2区、3区と呼び分けることもある（図11）。

土層の堆積　発掘区内には一面に筍栽培用の土入れが施されている。現地表から約1mの厚みのこの土砂を取り除いた時点で黒色土層の広がりが認められる。土入れ以前の旧地表を覆っていた表土層である。旧表土以下の堆積状況は、前方部頂部にあたる2区西半および3区と、クビレの斜面部にあたる1区西半および2区東半では大きく異なっている。すなわち、前者では旧表土層のすぐ下によく締まった粘質土が存在している。前方部断ち割り断面でもわかるよ

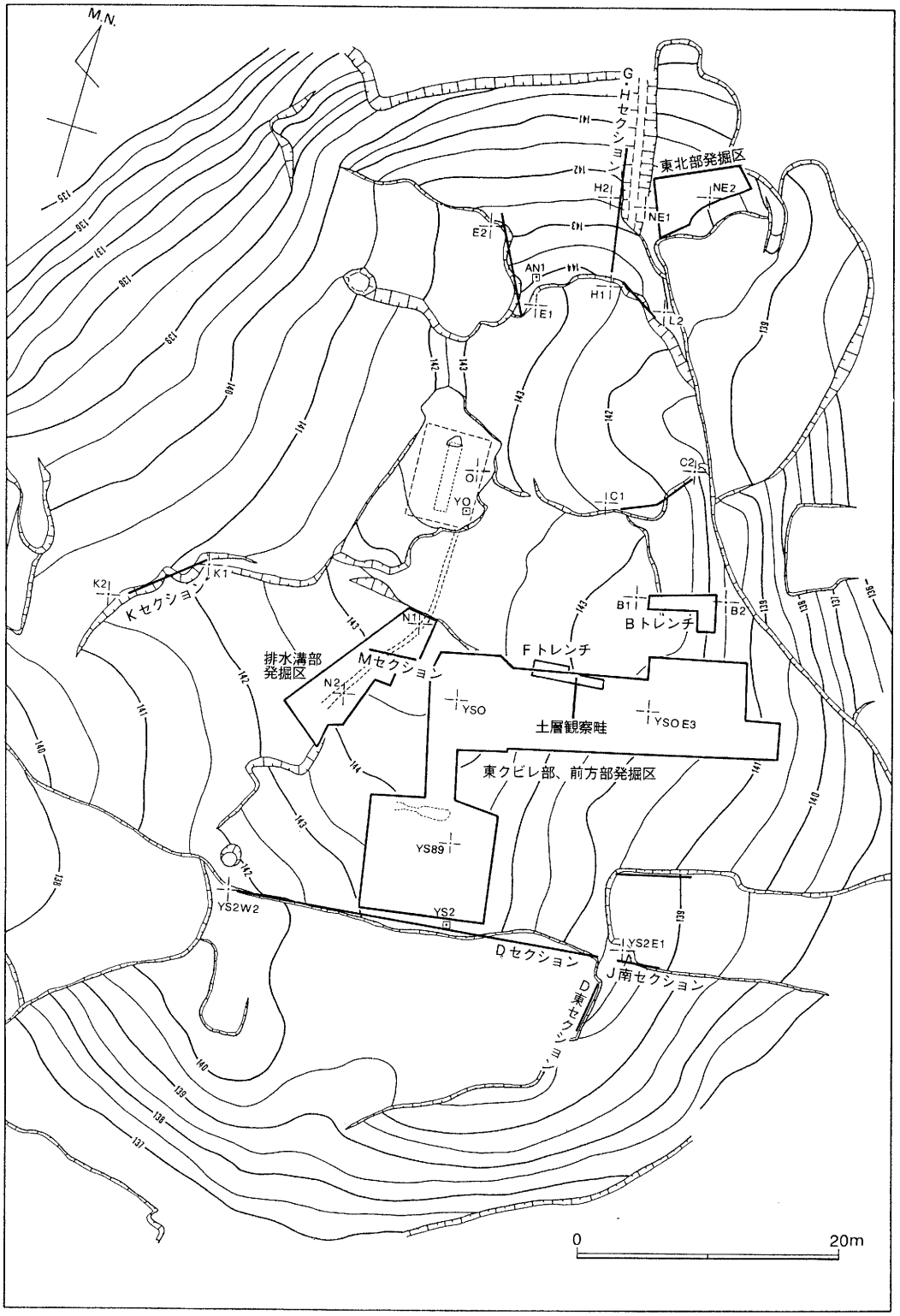

M.N.
G・Hセクション
東北部発掘区
NE2
NE1
H2
E2
AN1
H1
E1
L2
C2
C1
O1
YO
K2
K1
Kセクション
B1
B2
Bトレンチ
N1
排水溝部
発掘区
Mセクション
N2
Fトレンチ
YSO
土層観察畦
YSO E3
東クビレ部、前方部発掘区
YS89
YS2W2
YS2
YS2E1
Dセクション
J南セクション
D東セクション
0
20m

図10　調査区配置図

うに、この粘質土は盛土の一部であるから、旧表土下はそのまま墳丘残存面を示す（図15の第２層、第３層）。これに対して、後者では斜面の下方にいくにつれて墳丘築造以後の堆積土が深くなり、厚さは最大で１ｍにも達する。その堆積状況を図12によって説明しよう。

旧表土の黒色土層の下には、厚さ約50cmの暗黄褐色礫混じり砂質土層が存在している。一様な粒子の状態であり、比較的短期間に斜面を流れて堆積したものと考えられる。埴輪片を包含する。この下層に続く暗灰黄褐色粘性砂質土層は堆積土中で最も多量に埴輪片が出土する層であるが、そのほかに瓦器、布目瓦などの破片も少量含まれることから、堆積年代は中世にまで及ぶと考えられる。やや灰色の有機質味を帯びた土であるので、古墳築造後から中世にかけての表土層であった可能性がある。さらにその下層は厚さ約20cmの黄褐色ないし橙黄色の粘性砂質土をはさんで地山にいたる。粘性砂質土層の上面では多数の柱穴が検出された。上部の暗灰黄褐色粘性砂質土中からは中世の遺物も検出されているので、柱穴を持つ建物の年代推定の手がかりとなる。なお、地山は黄褐色粘土、またはよく締まった砂礫層である。

ところで、地山直上に堆積しているこの粘性砂質土の性格について、これまでは古墳築造後ごく初期に流出した墳丘盛土の堆積と考えてきた。しかし、土層中には古墳に伴う遺物が含まれない可能性が高いことから、流出土としては不自然な点もある。むしろ墳丘築造の際に地山上に施された盛土の残存部分と考えた方が状況を理解しやすい。ただ、こうした土層はどの部分でも見られるというわけではなく、地山直上に埴輪片を含む墳丘流出土が直接乗っている地

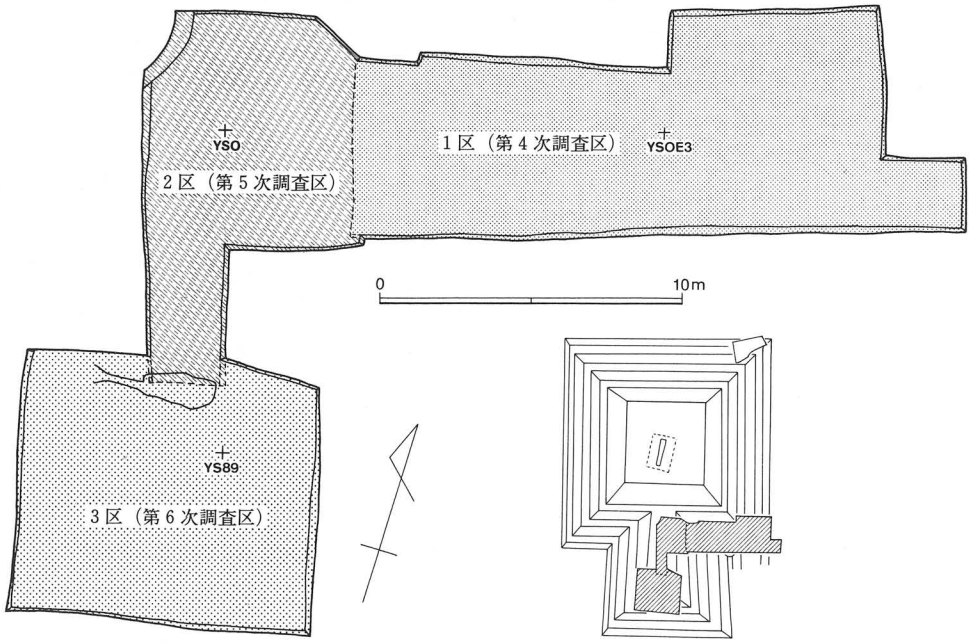


図11　第４次～第６次調査区の位置関係

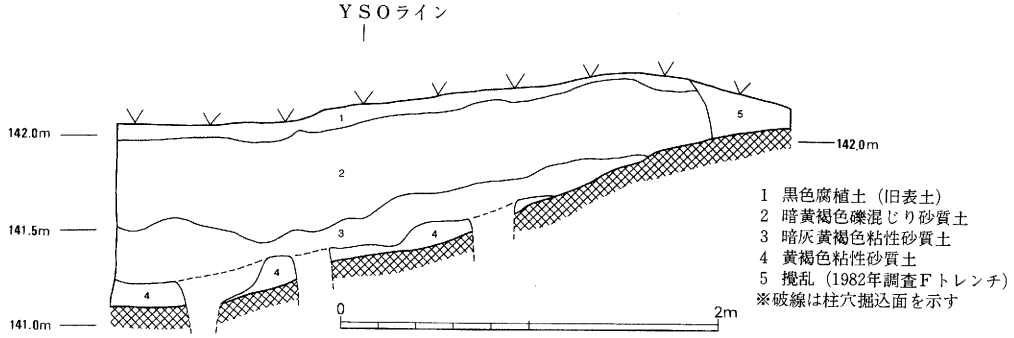


図12　東クビレ部の土層堆積(東から)

点もある。

後方部東南隅と陸橋部　図24は発掘区内の残存墳丘表面の傾斜を等高線で表したものである。これによると１区東半において、南北方向に走る140.7ｍ以上の等高線がほぼ直角に西方に屈曲しているのが認められる。あくまでも残存墳丘面の傾斜であるとはいえ、この屈曲はあきらかに地山を削り出して形成されており、後方部墳丘の東南隅を示すものといえよう。さらに１区東端では140.6ｍ以下の等高線も南北に直線的に続いており、後方部東側辺の形態を反映していると考えられる。この140.6ｍ以下の等高線は間隔を密にして存在している。墳丘段築の斜面部であることを示すとともに、下り傾斜の終わる140.0ｍラインがほぼ墳丘の基底部に相当すると判断できる。基底部付近は硬い地山を急激に削り落とすように加工されており、他の地点の崖面観察でも見られた墳丘裾の浅い溝の肩部にあたる整形がここでもなされている可能性がある。ただ、墳丘外側の溝の立ち上がりを追求すべく設定した１区東端拡張区では、基底面近くまで後世の削平が及んでおり、これを確定することはできなかった。

１区東半の等高線のあり方を東西方向、つまり後方部東側辺に直交する方向でたどると、140.0～140.7ｍが急斜面、140.8～141.2ｍが緩斜面、141.3ｍ以上が急斜面というように傾斜に部分的な違いがみられる。これがそのまま墳丘段築の姿を映すものではなかろうが、完成時の段築を考慮にいれた地山整形がなされたことを推測させる。

ところで、墳丘基底部の高さを140.0ｍとみなすと、これより高い等高線は後方部東南隅においてすべて西側へ屈曲して後方部南辺のラインとなって続いていくはずである。しかし、実際は北から走ってきた140.6ｍ以下の等高線は発掘区内では西への屈曲を見せずそのまま南へ向かう。そして、１区の中央部、ポイントYSOE３の南３ｍのあたりに140.5～140.6ｍという低い等高線が再び現れている。さらに後方部東南隅では140.7～140.8ｍの等高線が前方部側に張り出しながら西に屈曲していくことも指摘できる。つまり、ここには本来墳丘裾のラインが巡るべき位置に陸橋が存在しているのである。この陸橋部は現状では下端幅５ｍ、基底からの高さ0.8～１ｍ程度の、地山を削り残した南北方向の高まりとしてとらえることができる。浅い溝に

よって区画された墳丘内に外部からはいる際の墓道としての機能を持った遺構と考えられる。

東クビレ部　1区西半から2区東半にかけては、南に傾斜して下る地山面と東に傾斜して下る地山面とが谷状の地形をなし、ここが古墳の東クビレ部にあたることを示している。等高線を見れば、後方部東南隅から西に直線的に延びてきたラインがクビレの谷部ではやや鈍角になりながらも全体としてみればほぼ直角に南折していく。等高線を東西に追って前方部東側辺の傾斜を見れば、やはりそれは一様ではなく、微妙に緩傾斜とやや急な傾斜を繰り返しながら前方部頂の平坦面に達する。盛土の多くは流れ落ちているが、築造当初の段築をいくばくかは反映したものであると考えられる。

すでに述べたように、この谷部には埴輪を包含する土砂が厚いところでは1mも堆積しており、後方部と前方部の両側から墳丘流出土が流れ込んだことを物語っている。堆積土下は基本的には地山面であるが、所によっては墳丘盛土の一部と考えられる層が地山上に残存していた。

円筒埴輪　当古墳には葺石が施されていないために墳丘の崩壊、盛土の流出が激しく、そのため樹立当時の原位置を保って検出された円筒埴輪は認められなかった。しかし、第3次調査と第4次調査において、クビレの谷部付近の流出土内から1個体ずつ、底部が全周する円筒埴輪がほぼ立った状態で検出されている（図13, 14）。これらは、盛土流失にともなって原位置からは動いているが、出土状況からみてその移動距離は短く、樹立当初の位置にごく近い所に遺存していたものと推測できる[(1)]。平面的な位置は図24内に示したが、墳丘形態の復元にあたっては重要な手がかりとなる。ちなみに、検出時の両者の底部下端レベルは142.4～142.5mでほぼ一致し、同一テラス面に立てられていた可能性が高いことを示している。

前方部頂部　前方部頂部に相当する2区西半から3区にかけては等高線の間隔も広がってほぼ平坦な地形となる。旧表土を除去するとすぐに墳丘残存面が現れる。堆積土が少ないために後世の攪乱が墳丘面にも及んでおり、2区西半では埋土に腐植土の混じった落込みやくぼみが多く認められた。また、基準点YSO付近では旧表土層中で長径20cm程度の礫数個がほぼ1m間隔で並んで検出された。平らな面を上に向けていることから小建物の礎石と考えることができ

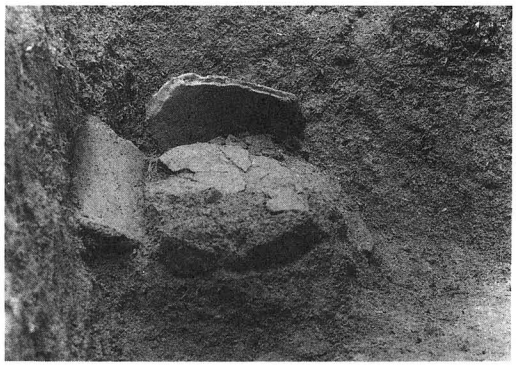


図13　東クビレ部埴輪出土状況（Fトレンチ）

図14　東クビレ部埴輪出土状況（1区西端）

る。まだ当地が松茸山であった時期に、松茸泥棒を見張るための小屋があったとする土地所有者の記憶と一致する。

第６次調査の発掘区である３区ではYSラインを中心として東西に緩やかに下っていく地形が観察できる。本来の墳丘傾斜とはかけはなれているであろうが、前方部両側辺の斜面部を反映していると考えられる。３区の中央北端では墳丘主軸に直交する埋葬施設が検出された。第５次調査において、発掘区最南端で掘り方がすでに確認されていた埋葬施設であるが、第６次調査の結果、小規模な竪穴式石室であることが判明した。石室は大きく削平されて遺存状況は悪いが、墓壙底のレベルが142.6ｍであることから、墓壙の深さを１ｍ余りと仮定すると、当初の前方部頂部の標高を144ｍ近くに想定することができる。３区南端での墳丘残存面の最高点が142.6ｍをはかるので、この部分の墳丘は少なくとも１ｍ以上の削平を被っていると推定される。また、おなじく３区南端付近ではYSラインから西側の斜面傾斜を表す等高線が東側へと回り込むラインを描くようになる。この部分がすでに前方部前面の斜面にかかっていることをうかがわせる。

墳丘の断ち割り調査　築造当初の盛土は斜面部ではほとんど流出しているが、前方部頂部にあたる３区においては比較的良好に残存していた。そこで、３区内に前方部を縦断する方向と横断する方向の断ち割りトレンチを設定し、盛土の状況を観察した（図15）。

まず、南北方向、つまり縦断方向の断ち割りトレンチの断面をみよう。砂礫層からなる地山は３区南端部では標高141.8ｍをはかる。地山は多少の凹凸をつくりながらもおおむね水平で北方向に続き、３区南端から約４ｍ北に行った地点でやや急激に0.5ｍほどレベルを上げる。さらに墳丘主軸方向で地山のレベルにかんするデータを探せば、ここから約25ｍ北に位置する後方部石室残存部の崖面において144.7ｍの高さに地山が現れている。反対の南方向では、３区南端から約２ｍ南に存在する前方部横断Ｄセクションにおいて地山最高点が141.6ｍを示している。これらの数値を勘案すれば、後方部石室付近で144.7ｍの最高点をもち、約25ｍ南に行って３ｍほど低くなるような尾根筋上を利用して古墳は築造されていることがわかる。

つぎに、墳丘横断方向の断ち割りトレンチによって同じく地山の様子を観察すると、数十cmの凹凸は見られるものの、全体としては142.0ｍ前後のレベルで水平となっていることがわかる。これは、後述するＤセクション地山上面の状況とも共通している。

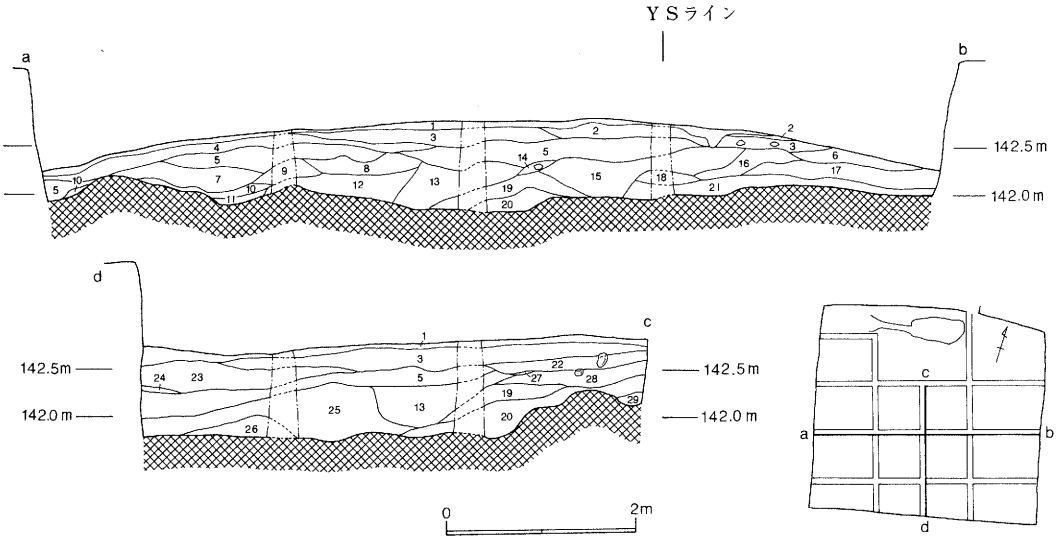
この２本の断ち割りトレンチの所見によると、前方部頂部にあたる３区においては、地山はほとんど傾斜を持たずほぼ水平面をなしていることが推測できる。北から徐々に下ってきた尾根筋が３区にはいって急にこのような幅広い平坦面を形成する事実は、ここに人工的な地山整形の手が加わっている可能性を示している。古墳の墳丘下で黒色土の帯としてしばしば観察される築造以前の旧表土が当古墳では認められないことも、かなりの規模の地山整形が事前になされたことを傍証するものであろう。そのうえでなおかつ地山上面にみられる凹凸は、整地後

の豪雨などに伴う水流の跡かとも推測される。

さて、現状では盛土の厚さは、最大で１ｍ程度である。ただ、前方部の小竪穴式石室の残存状況などからみて、前方部頂部の最高点はさらに１ｍ余り高かったと考えられる。したがって、当初の盛土の厚さは最も厚い部分で約２ｍ以上に及んだものと想定される。盛土は、142.5ｍ付近を境界として下部では土壇状または土手状に盛られたと考えられる部分が何箇所か認められるのに対して、これより上ではほぼ水平に盛られた層からなるという違いを指摘することができる。また、盛土中のところどころに拳大程度の礫が混じるのが認められた。人為的に混入されたものと思われるが、その意図はよくわからない。

その他の遺構　このほかの遺構としては１区西半から２区にかけての墳丘斜面部、クビレの谷部において検出された多数の柱穴があげられる。直径30～50㎝の円形のものが多い。調査が墳丘の残存状況をあきらかにし、その保存対策を講ずる目的であったため、柱穴すべての完掘は行わなかったが、掘り下げた一部の柱穴は深さ70㎝以上に及ぶものであった。

柱穴を検出した面からは瓦器片、布目圧痕を有する丸瓦片などが少量出土したことから、中世の小規模な建物が古墳の墳丘斜面を背にして立てられていたものと考えられる。建物の性格、構造などの解明については今後の調査に委ねることにしたい。



1 黒褐色砂質土
2 橙褐色粘質土
3 黄褐色粘質土
4 灰黄褐色粘性砂質土
5 灰黄色粘性砂質土
6 暗黄褐色粘質土
7 褐灰黄色粘性砂質土
8 橙褐色粘性砂質土
9 褐黄灰色粘性砂質土
10 褐灰黄色粘性砂質土
11 橙褐色粘質土
12 褐灰黄色粘性砂質土
13 暗灰黄色粘性砂質土
14 灰黄褐色粘性砂質土
15 褐灰黄色粘性砂質土
16 暗黄色粘性砂質土
17 橙黄褐色粘性砂質土
18 橙褐色粘質土
19 橙黄褐色粘性砂質土
20 橙褐灰色細砂
21 淡灰橙褐色細砂
22 灰黄褐色粘性砂質土
23 褐灰黄色粘性砂質土
24 橙黄灰色粘性砂質土
25 灰橙黄褐色粘性砂質土
26 灰橙褐色粘性砂質土
27 灰橙褐色粘性砂質土
28 橙黄褐色粘性砂質土
29 褐橙黄色シルト質粘土

図15　前方部３区盛土断ち割り断面図

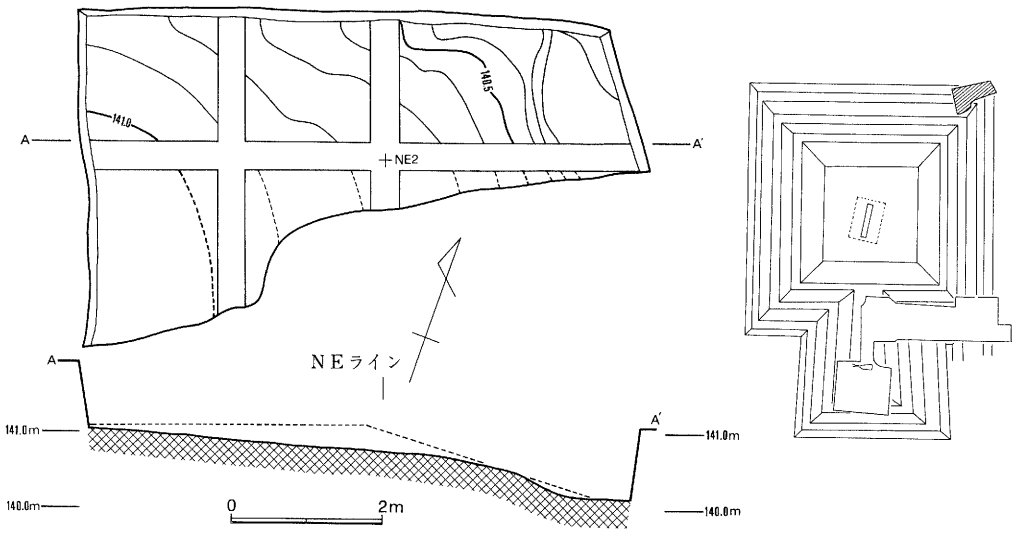


図16　東北部発掘区平面図

(2)　東北部発掘区（図16）

後方部の墳頂部から東北に約25ｍ離れた地点に発掘区を設定した。測量図によると、この地点では、墳丘北部においてほぼ等間隔で東西に走る141～144ｍの等高線が南方に直角に屈曲しており、発掘前から墳丘のコーナー部をうかがわせるような地形であることが注意されていた。

発掘してみると、竹藪開墾時にある程度の削平を受けたと見えて、約１ｍの厚さの竹藪客土の下部は直接地山となっており、墳丘面の段築の様子などは確認できなかった。しかし、図16によってもわかるように、地山はこの発掘区内であきらかに直角に屈曲してコーナーを形成している。また、発掘区東端ではこの地山面はにわかに落ち込んで溝状の凹部をつくる。そして、この溝状部は東北隅で西に折れてややレベルを上げながら延びていく。ここで認められた溝状凹部の平面的な位置は、東クビレ部発掘区の１区東端で検出された溝を墳丘傾斜に沿ってまっすぐ北に延長した線に重なる。溝底のレベルも140.1ｍでほぼ一致する。発掘区が崖面に近接しており危険なため、これ以上の拡張はしなかったが、東クビレ部発掘区の１区東端や後述するセクションなどで観察されるような、墳丘裾の溝と同じ性格の遺構である可能性が高い。つまり、この東北部発掘区の端に沿うように屈曲する溝状の凹部をもって後方部東北隅の墳丘裾と認めることができるのである。

ところで、溝状部は東北隅でコーナーをつくった後に西方向に延びてはいくが、溝底のレベルは徐々に上昇して発掘区北西端ではほとんど消滅してしまう。この部分に掘り残し部分をつくって陸橋部とした可能性も排除できない。

(3)　崖面の観察（図25）

墳丘各所には土取りによって形成された崖面が存在する。第３次調査時にはこれらの崖面の

土層断面が比較的忠実に墳丘傾斜を反映していると考えたが、冒頭で述べたようにその後の平面的な発掘調査が進んだ結果、墳丘復元に有効な崖面とあまり有効でない崖面があることがあきらかとなった。ここでは、有効な情報をもつ崖面を中心に記述するが、掲載した断面図は必要に応じて反転図として示しているものもある。

Dセクション　前方部を横断する形で３区の南方に存在する大きな崖面である。図25には、この崖面の東の延長線上に位置するＪ南セクションとつないだ断面図を示した。なお、整理作業の過程で、1983年に刊行した調査概報で公表したＤセクションの断面図中のレベル値が、実際より0.5ｍ高く記されていたことが判明した。今回掲載した図が正しいものである。

さて、この地点の地山の状況をまず見ると、ＹＳ２から西に約0.5ｍの位置で標高141.6ｍの最高点となる。しかし、尾根筋上であるにもかかわらず、すぐには下り傾斜は始まらない。ＹＳ２をはさむ東西約14ｍの間ではかなりの凹凸はあるものの、基本的に水平基調の地山が続くことが確かめられる。地山の傾斜が始まるのは東側ではＹＳ２から６ｍ、西では８ｍの地点からである。地山上には凹凸を埋めるようにまず黄褐色砂質土の盛土が厚さ１ｍ近く施され、さらにその上部に赤褐色～橙黄褐色の粘性砂質土が盛土される。黄褐色砂質土には明瞭な分層ラインが確認できなかったが、３区の断ち割りトレンチの所見からみて、細分は可能であろう。ただ、少なくともここでは質の異なる土を意識的に小単位で交互に盛土していく手法がとられていないことは指摘できる。Ｄセクションにおける盛土の最高点は142.6ｍであるが、当初の前方部頂部はさらに１ｍ余り高かったものと推定できる。したがって、盛土も厚いところでは２ｍ以上は施されていたと考えられる。

このセクションでは墳丘裾を示すと考えられる地山の落ちが検出されている。東側ではＹＳ２から13.5ｍの地点で、なだらかに下ってきた地山が急に0.3ｍほど落ち込み、幅１ｍ余りの浅い溝状の凹部を形成していることがＪ南セクションの観察によってわかる（図18）。西側ではＹＳ２から10ｍ地点で落差0.7ｍの段をつくったのち、12.5ｍ付近でさらに0.4ｍ落ち込んで、おなじく幅１ｍ程度の溝状の凹部に続く。この東西２つの溝状部のレベルは139.9～140.1ｍでほぼ一致する。さらに、墳丘盛土の残存部分と考えられる土層が東西ともこの溝状部の内側（墳丘側）で始まっている点も重視すると、この地点が墳丘の内外を分ける部分となる可能性はきわめて高い。断面に現れた浅い溝は墳丘裾部を巡るように意識的に掘り込まれた施設であると理解できるのである。

Ｄ東セクション　上述のＤセクション東端から直角に折れて南方に延びる崖面である。ここではセクションの北端から南に１ｍ行ったところで地山が削られたように0.4ｍほど落ち込む（図19）。そして、約１ｍ南で地山はふたたび立ち上がって、土手状の高まりを形成する。つまり、この部分にもまた幅１ｍ程度の浅い溝が認められるのである。溝底のレベルも139.9ｍとＤセクションで観察された溝とほぼ一致することから、機能的にも同様のものと考えうる。当セ

クションは墳丘を縦断する方向にあたることから、これを前方部前端の墳丘裾部を画する溝とすることができよう。

Mセクション　第２次調査で発掘した排水溝南端部の崖面である。既刊の調査概報に掲載している図は本来のMセクションから１ｍ南に同じ方向で形成された別の畦のものが誤って示されている。本報告の図が正しいものである。

Mセクション反転図をみると、現地表下１ｍの深さまで竹藪の客土があるが、その下に旧表土が残存している。旧表土下はセクション東部では直接地山に接しており、西部では最大0.5ｍの堆積土をはさんで地山となる。この堆積土には埴輪片が含まれることから、墳丘の流出土と考えられる。

当セクションで重要なのは地山の高さと傾斜である。地山はセクション東端で143.9ｍ、西端で143.2ｍをはかる緩やかな傾斜を有している。当初は地山上にいくらかの盛土がなされていたと考えられるから、墳丘面は東端部ではさらに数十㎝高いレベル値を示していたと推定できる。後述するようにこのMセクション東端部は前方部頂部にあたると推定されるが、ここで復元される標高は144ｍを超えることとなり、想定した前方部頂部のレベルをしのぐ高さとなる。前方部頂部平坦面のレベルにある程度の不揃いがあったか、あるいは後方部に向かって高さを増していくような構造であったか、２つの可能性が考えられる。

Kセクション　Mセクションから西に約20ｍの位置に存在する東西方向の崖面を観察した。反転セクション図によれば、地山はポイントK１から西に緩やかに下り、K１から1.5ｍの地点

図17　Dセクション

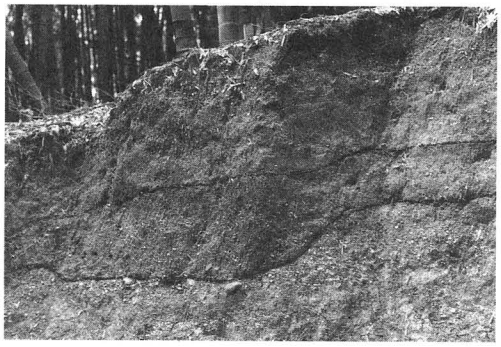


図18　J南セクションの土層

図19　D東セクションの土層

図20　Kセクションの土層

でほぼ平坦面となる。平坦面が１ｍ余り続いたところで急激に0.3ｍほど落ち込み、ふたたび2.5ｍの平坦面を形成したのち、0.2ｍ立ち上がって西方に向かう。つまり、Ｋセクションにおいても幅はやや広いが浅い溝状の落ちが観察できるのである（図20）。もっとも地山直上はすぐに竹藪の客土となっているため、竹藪開墾時に地山面に改変が及んだ可能性もないとはいえない。また、この溝の底部レベルは141.4ｍをはかり、Ｄセクションなどで計測された溝底のレベル値より1.5ｍ近くも高くなってしまう。しかし、地山面をさらに西方にたどってもほとんどレベルは下がらず、墳丘裾に比定できるような地山の加工は認められないため、上述の溝状部を後方部西側辺裾部の有力候補と考えうる。その場合、Ｋセクションのある後方部西側では墳丘基底部が他地点より高い位置にあったと理解できる。

Ｂトレンチ北セクション　後方部東側辺の位置に等高線に直交する方向で設定したトレンチのセクションである。地山直上に堆積した層からも埴輪片が出土するので、本来の墳丘盛土はすべて下方に流出したと考えられる。地山は微妙な傾斜の緩急を有している。築造前の地山整形の痕跡と思われるが、東クビレ部発掘区の所見から想定しうる墳丘各段のレベルを参考にすると、地山上には0.5ｍ前後の盛土が施されていたと推定される。

Ｇ・Ｈセクション　後方部東北隅付近に北から細く入り込んだ崖面を観察したＧセクションと、それをさらに墳丘側に延長したＨセクションを合成して示した。ポイントＨ１から0.5ｍ北の地点から地山面が確認できる。ここで142.9ｍをはかる地山は下り斜面で北に続き、Ｈ１から北２ｍで142.2ｍの平坦面をなす。この斜面から平坦面にかけては最大で厚さ0.6ｍほどの赤褐色粘質土の盛土が遺存している。Ｈ１から北5.5ｍの地点からはふたたび下り傾斜となったのち、7.5ｍ付近で緩傾斜に転じ、その後は140.8ｍの水平面が続く。

なお、当セクションの東に隣接する東北部発掘区で検出された後方部東北隅の墳丘裾レベルは140.1～140.2ｍであった。これに対して当セクションでは、墳丘裾と考えてしかるべき位置の地山レベルは140.8ｍを下らない。付近が岩盤の地山であるため、同一レベルで裾を造ることを省略したとも考えられるが、東北部発掘区の記述のなかでも述べたように、この部分に地山削り残しの陸橋部が取り付く可能性も指摘しておきたい。

4　墳丘の復元案

これまでに述べてきたように、第２次～第６次の調査では墳丘形態の復元を主要な課題として作業に取り組んできた。墳丘形態については、調査が断面観察にとどまっていた第３次調査終了の時点でその復元案を示したが、その後の平面的な発掘調査の結果、部分的に若干の修正を加える必要が生じている。ただ、第１次調査以来半世紀を経て墳丘は著しい改変を被っている。ここで提示する復元案は現時点ではもっとも妥当と考えられるが、墳丘上半部の構造については、残念ながら十分な手がかりがすでになくなっている。

(1)　前方部残存墳丘面の地形復元

これまでの調査結果からみて、現状でもっとも良好に墳丘構造が遺存していると考えられるのが東クビレから前方部にかけての一帯である。この部分では第4次～第6次調査において合計約300m²の発掘調査を行い、残存墳丘面の形状があきらかになっている。また、周囲に多く存在する崖面の土層観察によっても、点的とはいえ残存する墳丘面の位置とレベルを知ることができる。これらの情報によって、現在客土下に残存している墳丘面の傾斜を推定したのが図21である。

まず、前方部東側辺の等高線をみると、あまり前方部前端に向かって開く形とはならないことが注目される。墳丘盛土がかなり流出しているために、レベルについては築造当初の値を示しているわけではないが、乱れなく平行に走る等高線は本来の墳丘傾斜を反映している可能性が高い。従来提示してきた墳丘復元案と最も異なる点がこの前方部の開き具合いである。主軸とほぼ平行に北に延びる等高線は、東クビレ部発掘区内で東方へ直角に向きを変え、発掘区内東部でさらに北方に屈曲し、後方部東側辺を表すラインとなって北へ続いていく。

ついで、前方部西側辺から西クビレ部にかけての等高線をみよう。西クビレ部付近の地形は、排水溝上面にかつて一部存在していた崖面と排水溝に沿うように残された崖面で確認された盛土上面レベルを比較すると、まさにこの排水溝の真上で等高線が屈曲する様子が復元できる。つまり、排水溝はクビレ部の谷のラインを通るように施設されていたと考えられる。さて、排水溝は墳丘に掘り込んだ溝中に礫を詰めて、水を流す機能を持っている。したがって、排水溝沿いのある地点の墳丘レベルはその地点の排水溝底のレベルよりも必ず高くなるはずである。排水溝の最終端部における溝底のレベルが142.1m、溝内の礫のレベルが142.2mであるので、

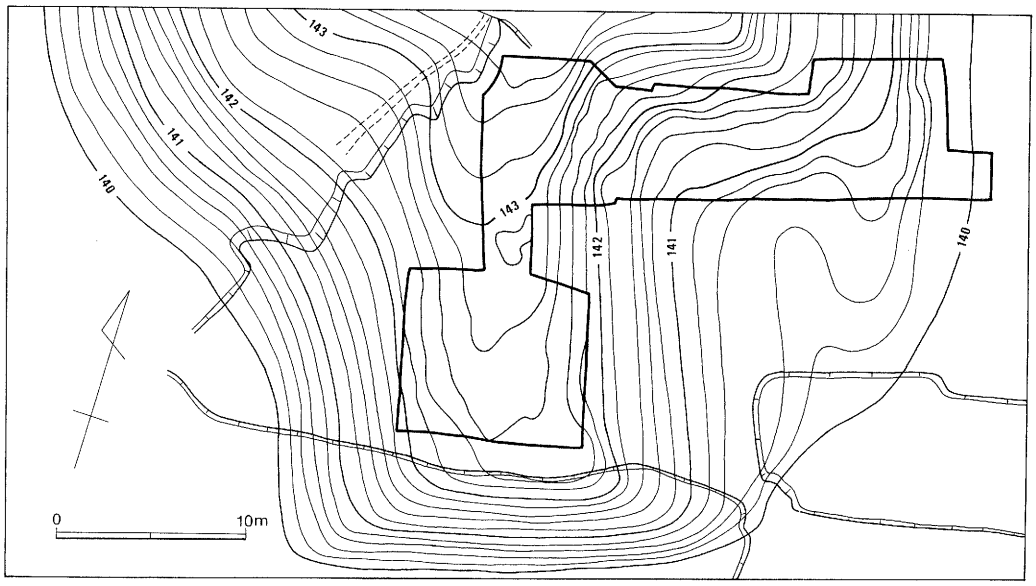


図21　前方部残存墳丘面のコンター復元図

少なくとも142.2mコンターが端部よりクビレの内側にはいることはありえない。ところが、反対の東クビレ部において走る142.2mコンターを中軸線で反転して西クビレ部に移せば、排水溝端部から5mも内側に入り込んでしまい、この条件と矛盾することになる。この点からみると、排水溝のある西クビレ部は、東クビレ部ほどクビレの谷が入り込んでいなかったと推定される。墳丘西側は平野部からは見えない側であることから、当初から十分な墳丘整形がなされなかった可能性が考えられる。

前方部前端については、上述のD東セクションで確認された墳端を画する溝を重視して等高線を復元すると、約25°の傾斜を持つ斜面が想定できる。このなかには実際にはテラス部分も存在したであろうから、斜面自体の傾斜角はもう少し大きくなると考えられ、築造時の姿に近いものに復元できるであろう。

以上のような検討を経て推定される残存墳丘面の形状が、1934年の第1次調査時に梅原末治によって作成された墳丘測量図（図9）のそれに近いことは興味深い。筍栽培によって改変される以前の墳丘が、盛土の流出はあったとしても、ある程度原形を反映していたことがうかがわれるのである。

(2)　墳丘形態の復元

墳丘の外形　墳丘の外形を推定するには、墳丘裾をめぐる浅い溝、いま検討した残存墳丘面の等高線などの情報が有効である。これにもとづいて、現段階で最も蓋然性の高い墳丘復元案を図22に示した。

前方部前端はD東セクションの標高139.9mに底を持つ溝の位置によっておさえることができる。前方部東側辺は、J南セクションで確認した139.9mをはかる溝と東クビレ部の谷部の位置から復元できる。前方部の開きは等高線の方向が示すようにそれほど開いたものとはならない。クビレの谷部は東クビレ部2区発掘区内で等高線が東に直角に向きを変える地点とみて誤りはなかろう。西クビレ部は推定する手がかりにとぼしいが、排水溝をクビレの谷に設けることが排水の点で合理的なこと、復元される等高線が排水溝上部でクビレ状のラインを描くこと、東クビレ谷部を墳丘中軸線で反転して西に移すとほぼ排水溝上に重なることなどからみて、排水溝の位置がまさに西クビレの谷部に相当すると理解するのが妥当である。ただ、すでに述べたように西クビレ部の築造はやや省略されて企画どおりには実施されなかった可能性が高い。

後方部東南隅には地山を削り残して下端幅5mの陸橋部を取り付ける。

後方部東側辺は東クビレ部1区発掘区東端の溝と、東北部発掘区東端で確認できた同様の溝を結んだラインに比定できる。この間にあるBトレンチ北セクションの所見もこれと矛盾するものではない。これに対して後方部西側辺はKセクションにおいて認められた溝を唯一の手がかりとする。溝底レベルは141.4mであり、他地点のものとくらべて1.5mあまり高くなっている。墳丘西側は平野から見えない位置にあるので、築造の厳密さが求められなかったとも考え

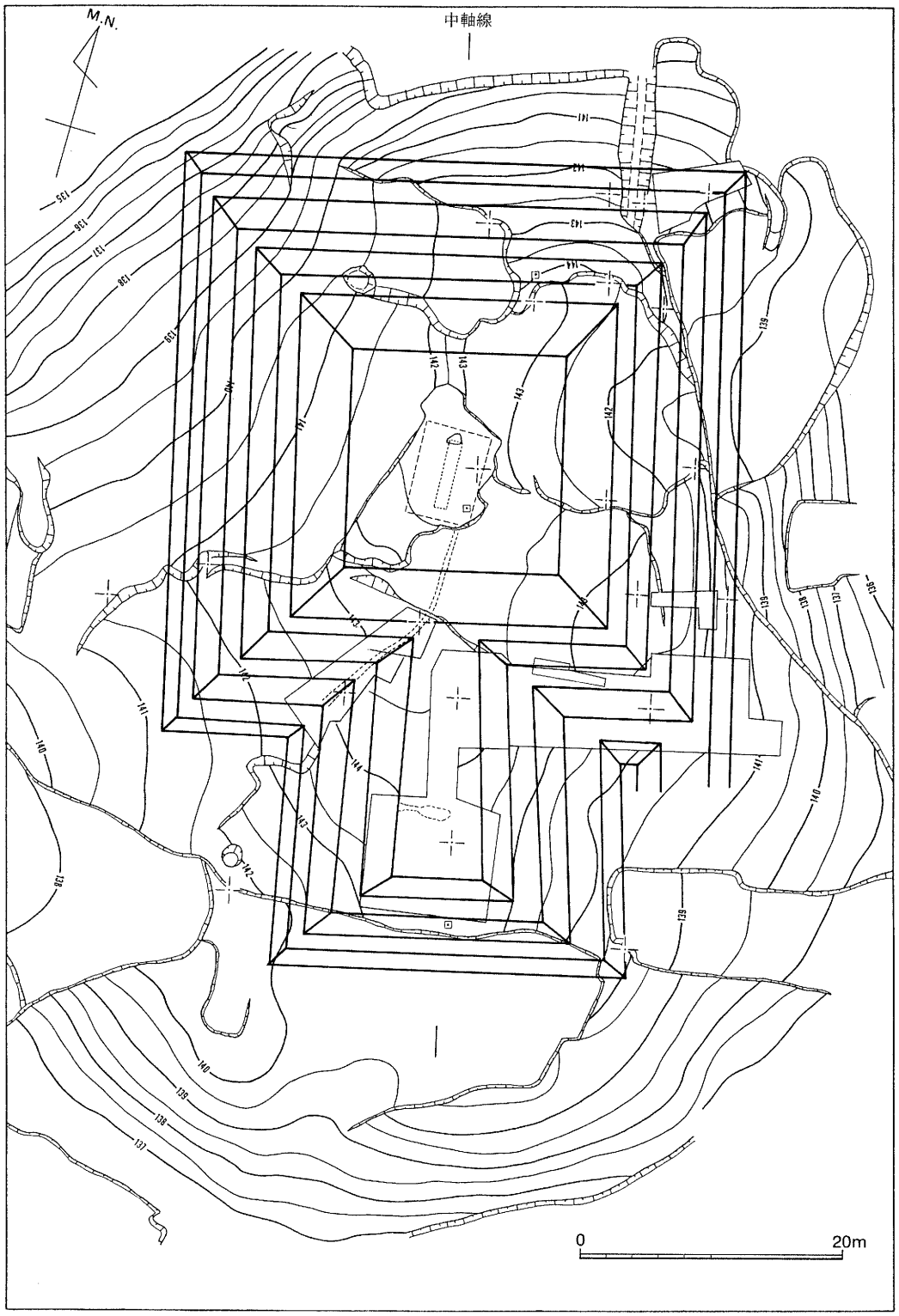


図22　長法寺南原古墳墳丘復元図

られる。そして後方部北辺は、東北部発掘区北端で検出した東西方向の溝によって推定できる。

最後に墳丘中軸線については、比較的信頼度の高い後方部東側辺と南辺に平行、直交の関係になるような軸方向を求め、それが前方部と後方部に存在する埋葬施設のほぼ中心を通るようにして定めた。従来仮に示していた中軸線（YSライン）からはわずかに西にずれた位置となった。ちなみに新たに設定した中軸の方位はMN14°Wである。

段築構造　東クビレ部を平面的に発掘した結果では、墳丘残存面に傾斜の急な部分と緩い部分が交互に現れる状況が観察されたことから、墳丘が段築構造を持っていたであろうことは容易に推定できた。しかしながら、盛土の流出や地形の改変が激しいために、その築造当初の形を復元する手がかりはきわめて限られたものになる。

そのなかでまず考慮にいれておくべき手がかりは、東クビレ部で直立状態で検出された2個体の円筒埴輪底部の存在である。現状ではこれらの底部下端のレベルは142.4～142.5mをはかる。流土中からの出土ではあったが、原位置からの移動距離はさほど大きくないという推定が正しいとすれば、いまこれらの存在する位置がほぼ墳丘のテラス面に相当することになる。そして、テラス面のレベルは、円筒埴輪の最下段が隠れる程度の盛土が施されていたとして約142.7mという推定値を導きうる。

第2点目としては、後方部と前方部の墳頂レベルを考える必要がある。後方部頂部の石室上にはいまも原位置をとどめている天井石があって、その上面は145.2mをはかる。第1次調査報告の中に「現在の表面から四尺内外の下位に天井石がある」という記述がみえることから、1934年時点の墳丘頂部の高さは約146.4mであったことが計算できる。築造当初の墳丘盛土は1500年の間にある程度は流出したであろうし、またこれを補う腐植土も堆積したであろう。したがって、ここではそれらを相殺して後方部頂部の当初のレベルを146.4m前後に考えておきたい。また、前方部頂部の当初の高さは、検出された小竪穴式石室の墓壙底のレベルが142.6mをはかり、この種の埋葬施設には墓壙の深さが1m余りのものが通例であることから類推すると144m近くに復元することができる。

第3点目に確認しておきたいのは墳丘裾のレベルである。すでに何度も述べたように当古墳では墳丘裾を巡る浅い溝が検出されており、その底部を墳丘裾としてとらえうる。墳丘西側のKセクションを除いては、溝底のレベルは140.0m前後でほぼ一定している。

いまひとつ注意したいのは後方部東南隅に取り付く陸橋部の上面レベルである。陸橋部は地山を削り残してつくられているが、地形的には141m前後のコンターが墳丘外南方に突出して来ることで認識できる。つまり、陸橋部上面は141m前後の高さで後方部墳丘に取り付いていたことになる。陸橋が取り付く後方部側墳丘にも同じ141m前後の位置に最下段のテラス面が設けられていた可能性が高いと考えられる。

これら諸要素を勘案して、当古墳の段築構造を復元すると140mの基底面を起点とし、141m、

142.7ｍのテラス面をへて、144ｍ近い前方部頂部に至り、さらに2.5ｍほどレベルを上げて146.4ｍの後方部墳頂平坦面に達するという立面形になる。

墳丘形態の復元　以上の検討によって、長法寺南原古墳は墳丘全長62ｍ、後方部の一辺44ｍ、前方部長18ｍ、前方部前端幅28ｍ、後円部高6.4ｍ、前方部高４ｍという規模をもつ前方後方墳であることが想定される（図23）。また、墳丘裾には幅１ｍ内外の浅い溝状凹部をめぐらせ、後方部東南隅には陸橋部を設けている。墳丘には段築があり、最下段にある高さ１ｍほどの小規模な段も含めれば、前方部３段、後方部４段という築成構造となるが、低い最下段をどのように評価するかによって段築のとらえ方も変わってこよう。墳丘のテラス部分には円筒埴輪が樹立されていたと考えられるが、その間隔等は不明である。葺石はまったく施されていない。

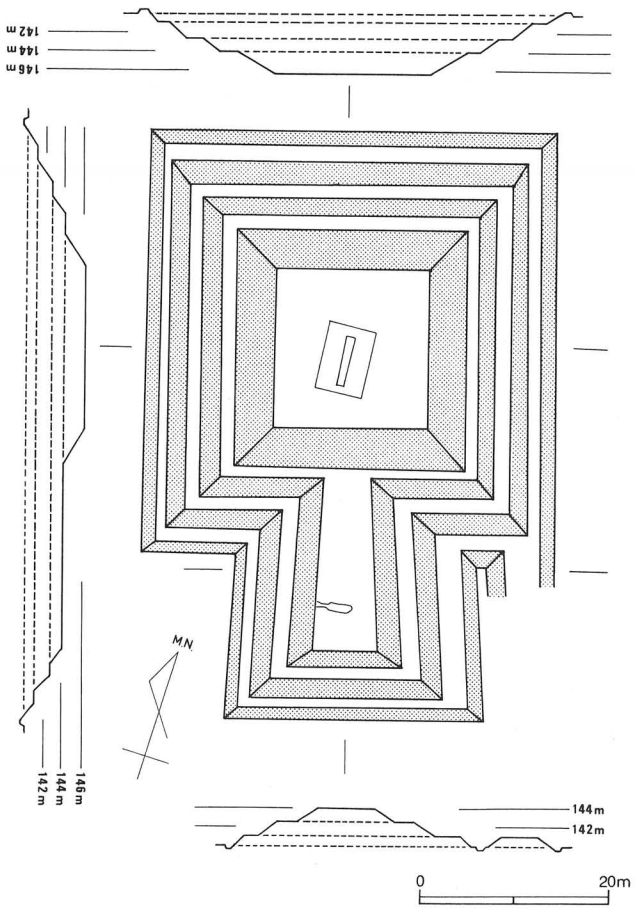


図23　長法寺南原古墳墳丘模式図

このような墳丘形態はあくまでも設計の企画として復元できるものである。実際の施工段階においては集落から見える墳丘東側は忠実につくられたものの、山かげに隠れる西側では墳丘整形にいくぶんかの省略がなされたことが、西クビレ排水溝部分の調査所見からも推定できる。

埋葬施設としては、後方部の竪穴式石室、前方部の小竪穴式石室があげられる。前者は後方部のほぼ中心に位置している。第１次調査の所見と現在石室上に原位置で残されている天井石などを照合することによって、墳丘と石室の位置関係を復元した結果によれば、石室主軸は今回設定した墳丘主軸と約12°の振れをもって斜交することになる。埋葬施設の主軸が墳丘主軸と斜交することには一定の意味があると考えられるため、将来的には石室の再調査を行って事実関係を確認する必要がある[(2)]。これに対して、前方部の小竪穴式石室は墳丘主軸とほぼ正しく直交して設けられている。

注

(1) この埴輪は第3次調査においてFセクションと呼んだ小トレンチから検出されたのもである。本報告ではFトレンチと呼称している。

(2) 福永伸哉「主軸斜交主体部考」(福永伸哉編『鳥居前古墳―総括編―』大阪大学文学部考古学研究室、1990年)。

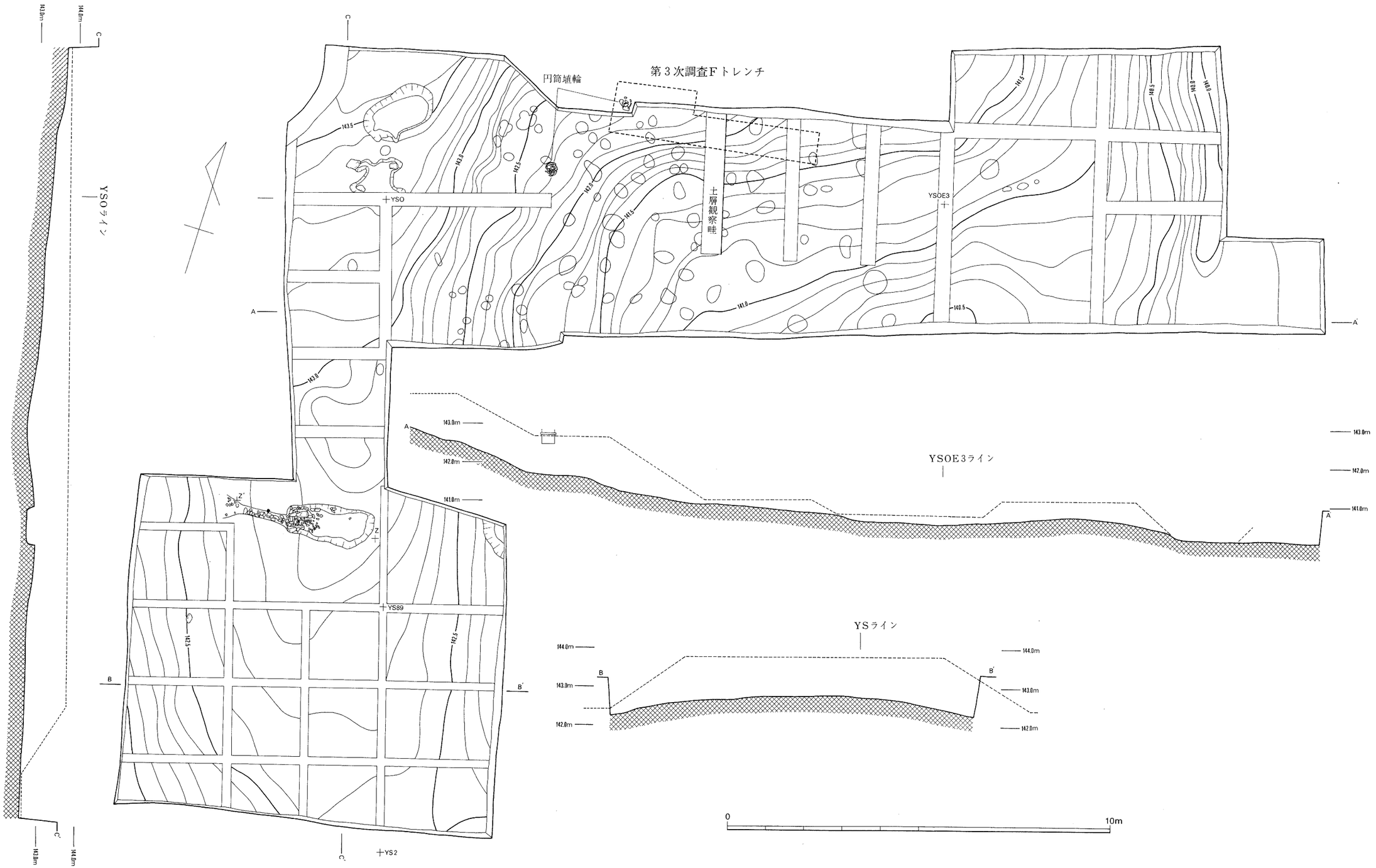
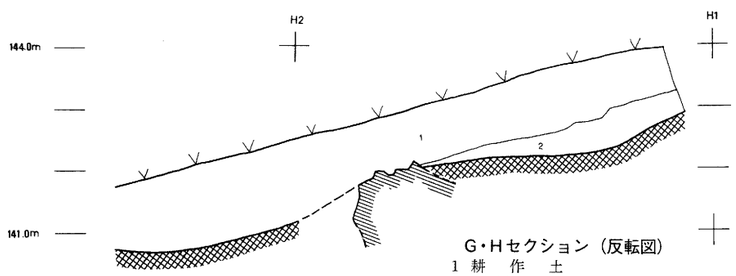
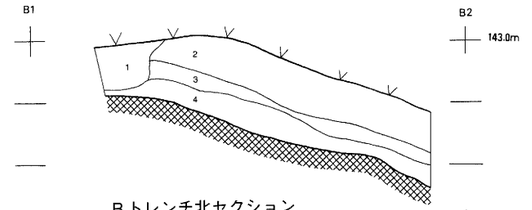


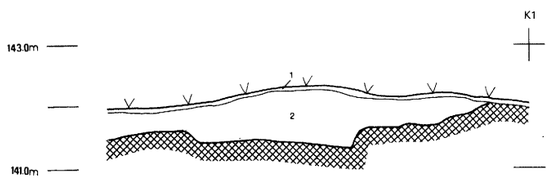
図24　東クビレ部、前方部発掘区平面図、断面図



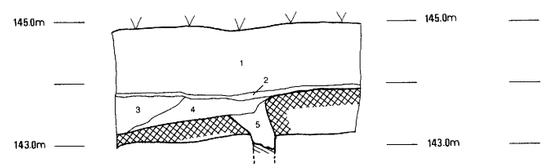
G・Hセクション（反転図）
1 耕　作　土
2 赤褐色粘質土



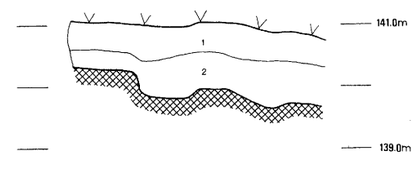
Bトレンチ北セクション
1 攪　乱　土
2 耕　作　土
3 黒色腐植土（旧表土）
4 黄褐色粘性砂質土



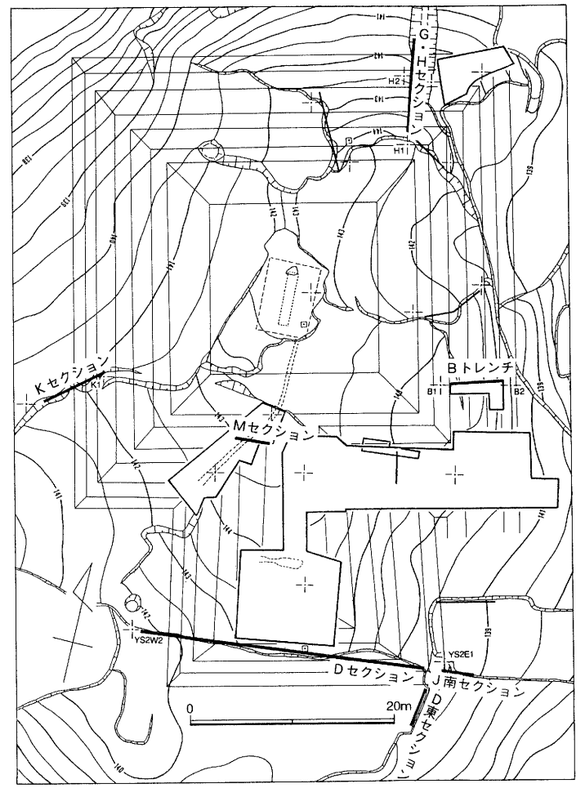
Kセクション（反転図）
1 黒色腐植土
2 耕　作　土



Mセクション（反転図）
1 耕　作　土
2 黒色腐植土（旧表土）
3 黄褐色砂質土
4 灰黄褐色砂質土
5 暗黄褐色砂質土



D東セクション
1 耕　作　土
2 赤褐色粘性砂質土



Dセクション
1 耕　作　土
2 暗黄褐色砂質土
3 黒色腐植土(旧表土)
4 赤褐色粘性砂質土
5 暗褐色砂質土
6 暗黄褐色土
7 橙黄褐色粘性砂質土
8 橙黄褐色砂質土
9 橙黄褐色粘質土
10 赤褐色粘質土
11 赤褐色粘性砂質土
12 橙黄褐色砂質土
13 黄褐色砂質土

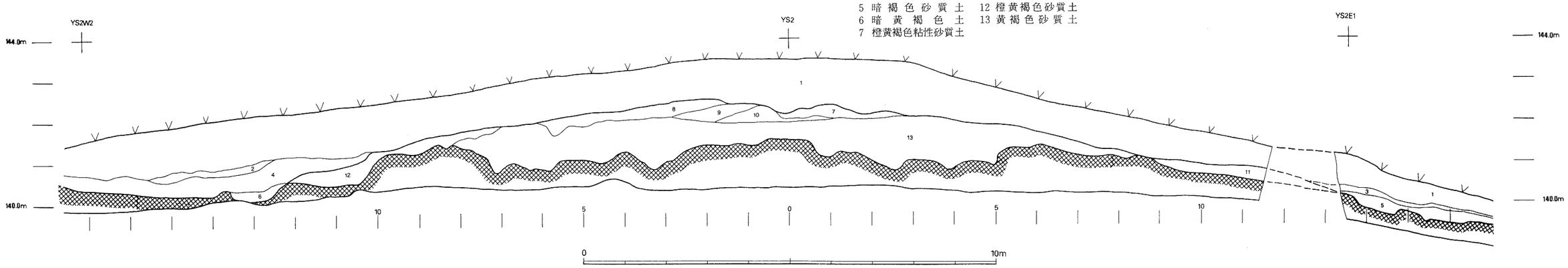


図25　墳丘断面図

第３章　埋葬施設の構造

１　後方部竪穴式石室

第１次調査の成果　第１次調査において明らかにされた石室にかんする知見の要点は以下のとおりである。

１）石室の天井石は墳頂の地表面から約1.2ｍ下で検出された。

２）石室は墳丘主軸に平行して築かれている。

３）石室の規模を内法で示すと、長さ5.3ｍ、幅1.0ｍ、高さは北端で1.35ｍ、南端で1.2ｍとなる。

４）石室の壁体は割石を小口積みにして、持ち送り積み技法を用い、この上に天井石を架ける構造である。壁体の下半部の約30㎝は垂直に積み、長さ約30㎝、幅６～９㎝の偏平な板石を使用する入念な造りである。これに対し、それより上半部は、やや大きな割石を用いる点で差が存在する。

５）石室の床面は、砂地の地盤を基礎として、その上に粘土床の範囲の外縁にそって板石を敷き並べ、その上に粘土の台をのせる。粘土床と壁体との間の幅約10㎝の空間には小礫を詰める。

６）床面は北が高く、南が低い。その勾配は石室全長530㎝に対して15㎝であり、35分の１勾配となる。

７）石室の天井石は11枚の長い長方形の板石を横架し、その隙間に小さい板石や割石あるいは粘土をつめて密封する。

第２次調査の作業　石室は埋めもどされており、土地所有者から再調査の許可が得られなかったので、墓壙内の裏込めが一部露出した箇所の調査結果および原位置をとどめる天井石の再調査結果を総合して考察する。また古墳の周囲に散逸した天井石の実測を含め、石材に関する岩石学的調査を実施した。

墓壙の規模の推定　石室遺存範囲はかろうじて破壊を免れ、周囲の墳丘は削平されたにもかかわらず、この部分のみが孤立した残丘となっている。さらに石室を収容する墓壙の東南隅の裏込めが一部露出する箇所がある。その観察によれば、板石と割石とが積まれており、それが石室壁体の外側の裏込めであることは間違いない。その残丘の外側では石材を観察できないから、露出したこの東南部以外では壁体裏込めの外側のギリギリのところで破壊が止まっていると判断できる。

なお、残丘部の北部と西部の断面で観察できる地山上面の高さは、144.6～144.7ｍであり、

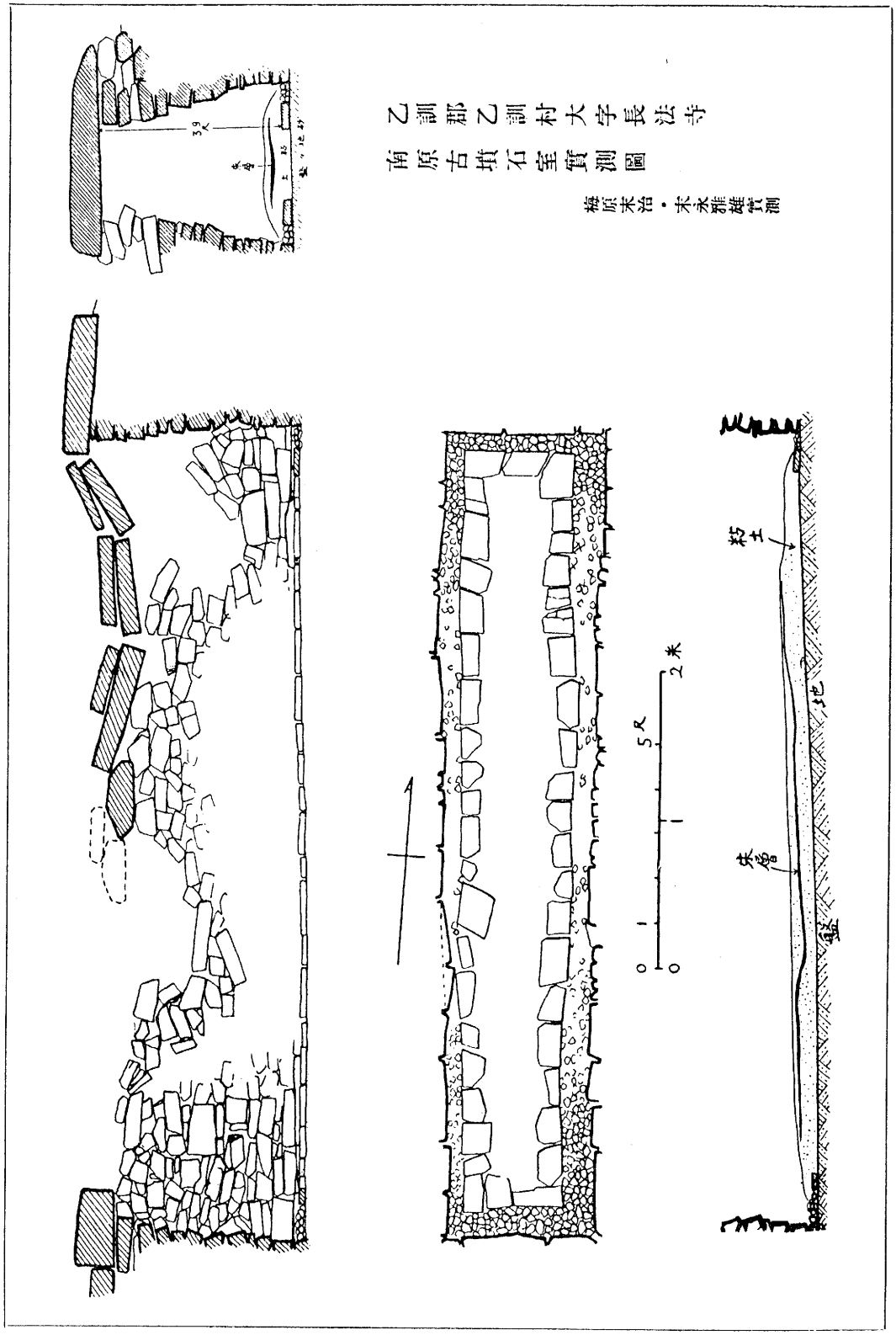


図26　後方部竪穴式石室実測図(府報17冊より)

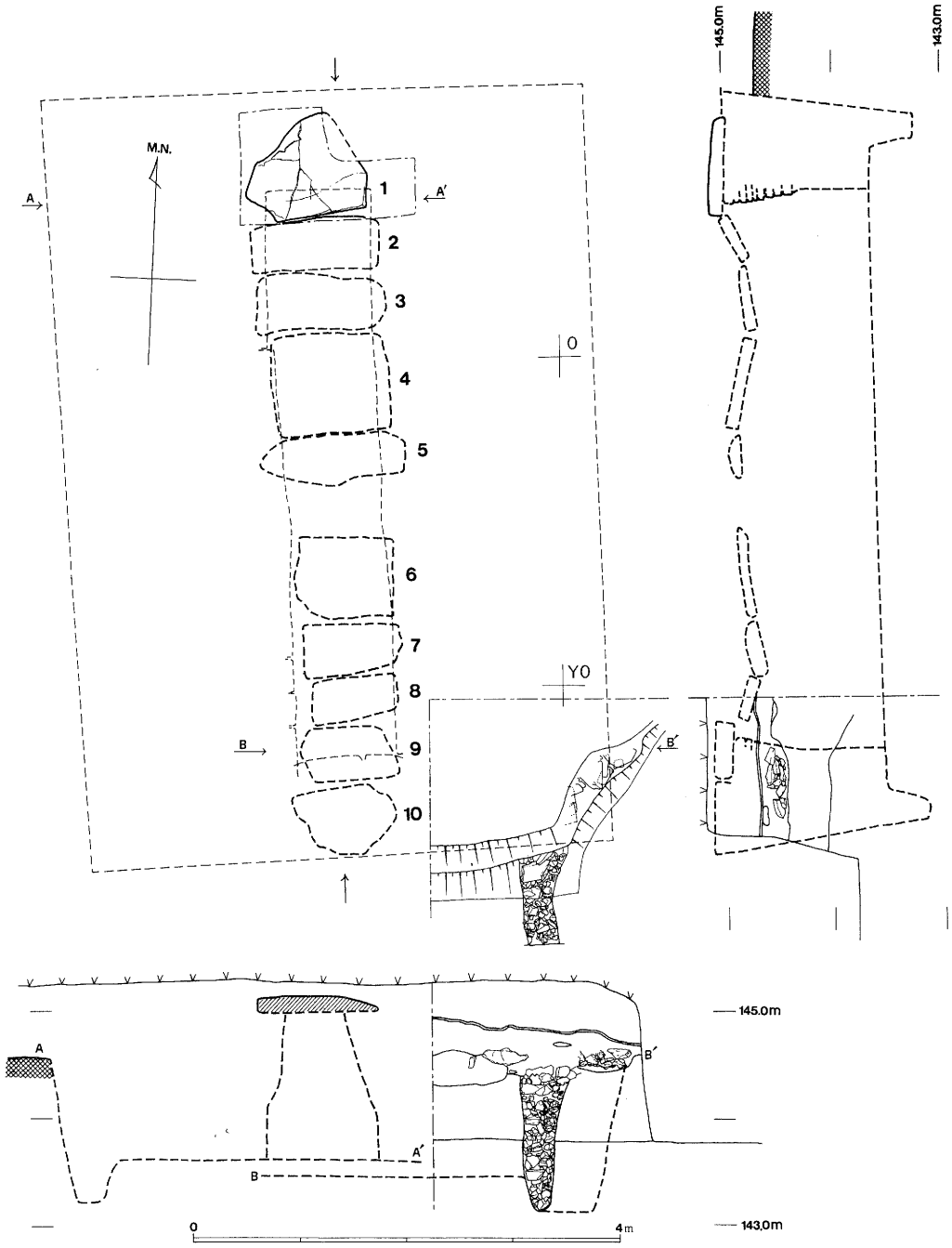


図27　石室と排水溝の関係

この図は，石室部東南部崖面における壁体と排水溝の露出部および石室天井石のうち原位置にある北端の石の実測図と1934年の石室実測図とを合成して，墓壙の輪郭を推定復元したものである。

墓壙東南露出部における地山の高さも144.7mである。したがって墓壙は標高144.7m前後の地山上面から掘削していることが判明する。

以上を前提とし、かつ第1次調査で明らかとなった石室の図を、石室をとりまく残丘の範囲および墓壙東南隅の裏込め部の図とを重ね合わせて考察すると、墓壙の大きさは地山上面において南北7.5m、東西4.8mと復元できよう。

墓壙の床面の構造　また第1次調査で判明した床面レベルは、原位置をとどめる天井石の高さとの比高を利用して推定すると、石室北端部で143.65m、同南端部で143.5mと計算できる。排水溝の底面のレベルは墓壙に取り付く部分において143.1mであるから、床面南端付近よりも0.4m低い。ところで京都府乙訓地域の前期古墳、たとえば向日市元稲荷古墳、同市寺戸大塚古墳、あるいは大山崎町鳥居前古墳などでは、墓壙内の四隅に溝をめぐらせる構造の墓壙が一般的である。このことを参考にすると、この古墳においても、排水溝と墓壙床面のレベルとの差に相当する深さの溝が墓壙の四隅にめぐらされており、北端からの水は南端に集められ、東南部から排水溝に流れる工夫と考えることができよう。以上に述べた石室および墓壙の構造を図化すると図27のようになる。

石室の石材　石材について橋本清一氏の研究成果を要説すると、壁体については緑色岩と砂岩が多く、玢岩、チャート、半花崗岩、脈石英が認められる。また天井石は、やや変成を受けた石灰岩、砂岩、頁岩～粘板岩、チャートからなっている。さらに排水溝に詰めた礫は緑色岩が最も多く、ついでチャートと砂岩となり、まれに頁岩～粘板岩と玢岩が認められる。緑色岩はこの古墳付近に露頭があり、天井石に使用された石灰岩は500m西南の小泉川付近に産するものが推定されている。

2　遺物の出土状況

(1)　副葬品の配置と出土状況の概要

第1次調査の際に後円部石室から検出された遺物の出土状況や埋葬形態の所見についての概要を紹介し、2、3の問題点を検討しておく。

粘土床上の朱層と粘土　掘り下げを開始した直後に検出されたのは、中心部がわずかにくぼむ粘土の堆積であったという。この粘土を若干取り除いた時点で朱層が検出されている。朱層は石室中央部から南北に約2mの範囲で顕著に認められ、もっとも厚いところはその南端部で約3cmの厚みをもち、薄いところでも約1cmはあったらしい。断面図によって中心軸での朱層の状況をみると、全体的に北側では薄く南側に厚いことがわかる。またその傾斜は北側から南へ徐々に下降するが、途中約1.7mの範囲で段状にくぼむ場所がある。記述からみて、この部分が朱の分布のもっとも濃密なところであったことは確実である。この中心部のくぼみは南側で深く約15cm、北側では浅く約4cm程度である。なお主軸と直交方向の断面図では、朱層の断面

形は中心部がわずかにくぼむ程度であり、典型的なU字形をなさない。

朱層は発掘時に板状をなしたまま取り上がる部分があり、総じて鮮やかな印象を与えたという。このことから、純度の高い朱が多量に用いられていたらしいことと、埋葬後のある時点で水漉しに近い作用を受けた可能性がうかがわれる。なお、朱の成分については水銀朱であることが明記されている。

棺内発見の遺物　梅原報告では粘土床上面から検出された遺物と壁体部付近から出土した遺物とに区別した記載となっているが、現在の研究水準からみると、これらを棺内と棺外とに呼び分けることが可能である。そのためこのように呼び換えたうえで、各種の遺物の出土状況を概観しておく。

棺内発見の遺物は玉類と鉄鏃であった。このうちガラス小玉と管玉、および鉄鏃は中心部分のくぼみ内に散在していたようである。一方、勾玉3点はくぼみの南半部から発見され、若干数の管玉やガラス小玉もまとまって発見された。これらの玉類の付近には木片や漆塗りの繊維片も認められたらしい。またこれらとは別に、取り上げた朱層のなかからも剣の断片が発見されたようであり、短剣の一部も棺内に配置されていた可能性が指摘されている。

木片については木目の走行方向が石室の長軸に平行することからみて、棺材の一部であった可能性が高い。また漆塗りの繊維は写真で判定するかぎり滋賀県雪野山古墳の棺内から発見された鞆などと酷似している。

なお発掘に先立ち地元の住民によって取り上げられた2面の鏡の出土位置にかんしては、聞

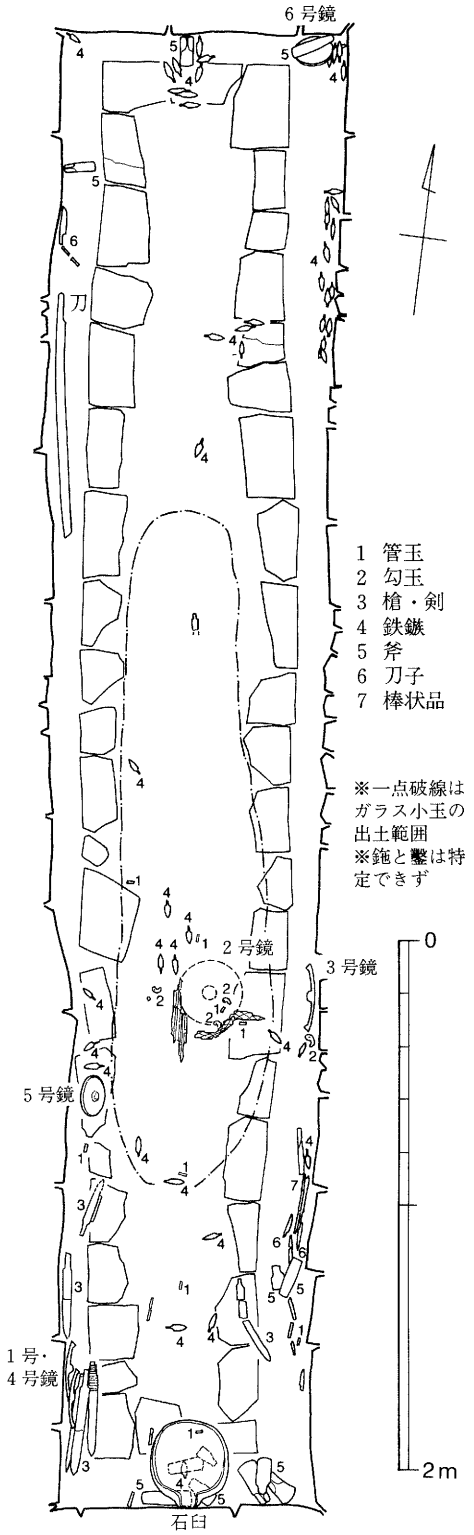


図28　石室内遺物配置図(府報17冊より再トレース)

き取り調査を実施した結果、このうち１面については木片や勾玉などが集中していた地点のやや上方の粘土中から取り上げられたものであり、本来は鏡背を上にして置かれていた可能性が高いとされる（２号鏡）。

棺外発見の遺物　棺外から発見された遺物には鏡、玉類、武器や工具など各種鉄器類と、石臼、石杵がある。これらの遺物はそのほとんどが粘土床と壁面との間に施された小礫の上面から発見されており、一部には朱に染まった状態のものや粘土に覆われていたものがあったようである。全体としてみると、北半部と南半部に遺物の分布は密で、中央部付近には疎である。

北側では北壁の中心部に有袋斧１点と鉄鏃８点があり、東北隅では盤龍鏡１面（６号鏡）と板状斧１点が重なりあって発見され、付近には数点の鉄鏃が集中していた。鏡は鏡面を北壁面に向け斜めに傾いていたが、一端を壁面に接するものの、全体は粘土床側に倒れかかった状態である。鏡面には毛髪が付着している。鉄斧は鏡の上に重なっていたようである。やや南の地点では西側に有袋斧１点、鉄刀１点、刀子１点などの鉄器があり、東側には10数点の鉄鏃が集中的に発見されている。刀は切先を南に向け、有袋斧は袋部が壁面にほぼ接するかたちである。鉄鏃は南北約60cmの範囲でまとまっているが、先端が北を向くものと南を向くものとが約半数ずつ存在し、一括して束ねられたような状況ではない。

南半部の遺物は棺内のくぼみの南端部付近から南側一帯に分布する。くぼみの南端部付近では崩壊しかかった西側の壁体部の石材上面から、１面の内行花文鏡が鏡背を上にし、かつ斜めに傾いた状態で発見されている（５号鏡）。この鏡についても、本来は鏡面を壁面に向けて立てかけられていた可能性が指摘されている。出土状況図からみると、本鏡の付近にも管玉１点、鉄鏃３点ほどが遺存したらしい。東側では勾玉１点が確認されたが、地元住民によって取り上げられたもう１面の鏡も本来はこの位置に置かれていた可能性が高いようである（３号鏡）。その配置状態についてはやはり鏡面を壁面に向け、壁面に立てかけるようなものであったと推定されている。さらに南側に目を移すと、石室の東南隅から北へ約50cmのところから150cmまでの約１ｍの範囲で、板状斧１点、有袋斧１点、鉄製棒状品や刀子、鉄鏃など数点からなる遺物の集中地点がある。３つに折れた剣１点もこの一群よりはやや中心によった場所から発見されている。この剣は切先を南に向けていたようであるが、他の工具類の配置状況についての詳細は不明である。一方、石室西南隅付近では２面の鏡と剣４点がまとまって発見された。２面の鏡（１、４号鏡）はともに鏡面を西側壁面に向け、重なりあう状態で立てかけられていたらしい。また剣についてはすべて切先を南に向けていた。なお、このまとまりのすぐ北側からも別に剣１点が出土しており、これは切先を北に向けている。また南壁の中心部では石臼１点、石杵１点、管玉２点、板状斧１点、有袋斧数点が集中していた。石臼は研磨面を上に置き、かつ注ぎ口を上に向け、壁面に立てかけられた状態で発見された。石臼の下には石杵と管玉、および板状斧や有袋斧３点があり、石臼のすぐ東側には有袋斧３点が重なりあっていたようである。

蓋石上面発見の遺物　石室内の出土遺物とは別に、蓋石の上面から石臼が１点発見されている。石臼はもっとも南側に架けられた蓋石の上面にあって、摩擦面を下側に伏せ置かれた状態で発見された。

(2)　副葬品配置の特徴と埋葬形態

副葬品配置の特徴　以上が梅原報告にもとづく副葬品配置とその状態にかんする概要であるが、特徴的な状況として次の諸点をかかげることができる。

１）鉄鏃は棺外の北半部において集中する場所があるが、他は棺内・棺外を問わず広い範囲に散在している。

２）他の武器、工具などの鉄器類は、ほぼすべてが棺外副葬品とみなされ、石室の北辺と南辺とに分け置かれる状態であり、剣については南辺にのみ置かれるといったように、特定器種の配置には偏りが認められる。

３）玉類のうち勾玉の一部は棺内にあるくぼみの南端付近にまとまる傾向があるのに対し、ガラス小玉はこのくぼみのほぼ全面に点在し、管玉は石室南半部の広い範囲に分布するといった状態である。

４）鏡は棺内中心部のやや上方からの出土と推定される１面を除き、５面はすべてが棺外副葬であることと、そのいずれもが鏡面を石室壁面に向けて立てかけられた状態である。

埋葬形態　梅原報告では埋葬の位置を中心部のくぼみ内に比定している。またそのくぼみは南端部でもっとも深いことやその平面形が北側が狭く南側に広がる形状であることに注目し、朱の密度および玉類の分布状態を併せ考えたうえで、遺骸は南枕であったと推定している。また埋葬には木棺の存在を想定せず、布等で包んだ遺骸を朱詰めにし、その上を粘土で覆う方式の埋葬形態であったとする。

５面の鏡のうち４面までが石室の南半部から出土することや、各種の棺外遺物も南半部に集中する状態であることをみると、埋葬頭位についての推定は一定の根拠をもったものといえる。ただし、現在までの調査事例のなかでは、石室の北側が高く南側が低い本例のような特徴をもつ竪穴式石室において、こうした状況を示すものは例外的である。一般的にはこうしたタイプの石室の場合、人骨の遺存した熊本県向野田古墳例では北枕であったことが判明しているし、そのほかの場合でも副葬品の配置関係や朱の分布範囲などの諸要素が、埋葬頭位は北枕であることを示す事例がほとんどなのである。今後、本例のような状況をどのように解釈すべきかを検討する必要があろう。

なお、現時点の資料的状況からみた場合、このような規模の竪穴式石室のなかにはほぼ例外なく木棺が設置されたことが広く知られている。本例でも木棺片とおぼしき木片が検出されているので、本来、木棺が存在したことはほぼ確実とみてよい。したがってその場合には中心部のくぼみが、木棺内の仕切りなど、木棺内部の構造を反映したものである可能性を考慮すべき

こととなろう。さらに朱の上面を覆う粘土の堆積については報告にしたがった場合、木棺の上面を覆う粘土の被覆であったことになるが、この点についてはなお検討の余地がある。本石室の蓋石の上面には多量の粘土被覆が認められており、その一部が構築後の長い時間経過のなかで石室内にわずかずつ落下し、次第に粘土床部分の上方を覆うことになった可能性も考慮すべきである。

3 排水溝

溝の走向 石室墓壙東南部にとりつけられた排水溝は、その南は消滅しているが、西クビレ部に、延長部分が遺存していた。遺存部の北端は平面図において、ちょうど後方部最上段斜面の下端付近にあたり、溝の掘り込み地点における地山上面のレベルは144.0mであるから、高さの点からも、最上段斜面の始まった付近と考えて矛盾しない。この位置と、先述の石室東南部の「取り付き部」とを結ぶと、ほぼ南北方向となり、ここまでは石室の主軸と同じ方向で、約7.5mほど延長されていることがわかるが、ここまでの溝底の比高差は0.3mであるから25分の1勾配となる。

さて、この北端部の断面観察によれば、地山を掘り込んで上面幅0.4m、深さ1.2mの、底がU字形を呈する溝を穿ち、厚さ0.6m、つまり溝の下半部を礫で詰めたあと、この上に土を覆って埋めもどしていることがわかる（図版16，図31）。

さらに、この地点から南へ約1.5mの地点で、急に西向きにカーブを描いて走向を変え、西南方向に約10.5mまで延びている。この西南方向の走向線の位置は、第2章第4節に述べた西クビレ部の谷の線に一致していることから考えると、排水溝は石室から南9mほどは、石室主軸と同じ方向に走り、クビレ部にぶつかったところで、西南に角度を転換したと説明できるのである。

さて、排水溝は実測図基準点N1の西南4m付近から徐々に幅を広くつくり、N1西南6.5m付近のセクション図に示すように、深さも浅くなっている。さらに、N1の西南9m付近では、さらに浅くなって厚さ0.3mぐらいに礫を詰めるのみとなる。このような変化を生んだ原因として、墳丘の低い部位ほど後世の土砂の流出が激しく、上面が削られたという一因も推定できるが、端部に近くなるにしたがって溝の深さを減じることは、最終的に地表面に排水する機能を考えると、ある程度本来の状態を示しているとみても不自然ではない。

溝底のレベルを比較すると、N1付近では142.85m、N1西南2.35m地点で142.55m、N1西南6.4m地点で142.15m、そして南端部では142.10mとなり、全体の平均勾配は14分の1ではあるけれども、N1西南6m付近から南で、急に緩やかな勾配に変わって、水平に近くなることがわかる（図31）。この勾配の転換点は位置的にはクビレ部第2段目の平坦面とほぼ一致することから、ここで傾斜度が急に緩やかになる状況を理解することができる。ただ、その延長上

も４ｍ以上にわたってきわめて緩い傾斜が続くだけで、第２段目斜面に相当する傾斜は認められない。墳丘構造の項でも述べたように、西クビレ部においてはこれより外側の墳丘整形が省略されていた可能性が高いと考えられる。したがって、排水溝はこの部分まで延ばせば、十分目的を達せられるわけであり、さらに傾斜をつけて排水を下方まで導く必要はない。排水溝南端部が緩傾斜のまま内部に詰めた礫の厚みも薄くなって終わることも理解できるのである。

詰石の作業単位　排水溝に使用された石材は角礫と円礫とからなる。石材分析の詳細は第３次調査概報にゆずるが、材質は緑色岩類、チャート、砂岩からなり、また地点によって礫の大きさの差が認められた[(1)]。すなわち、N1から南２ｍ付近を境にして、北は小さく、南は大きい。また、同じく６ｍ付近を境にして、南には特別に大きい礫が使われ、また８ｍ付近から南は、再び小さい礫となる。これは、溝内に石を詰めるに際し、ほぼ２ｍおきに作業工程の節目、あるいは作業単位が存在したことを示している。それぞれ異なる地点で採集された大きさの異なる礫群が使用されているとも考えられよう。

4　前方部小竪穴式石室

前方部では第５次調査において発掘区南端で礫を含む土壙の存在することがあきらかになった。第６次調査ではその部分を含めて前方部全体に発掘区を広げた。その結果、この遺構が前方部埋葬の小竪穴式石室であることが判明した。

上面の状況（図29）　第６次調査の前方部発掘区北端部において黒色腐植土（旧表土）直下で、礫の集積を検出した。角礫を主体とし、大きさは長径20㎝前後の大形のものから拳大以下

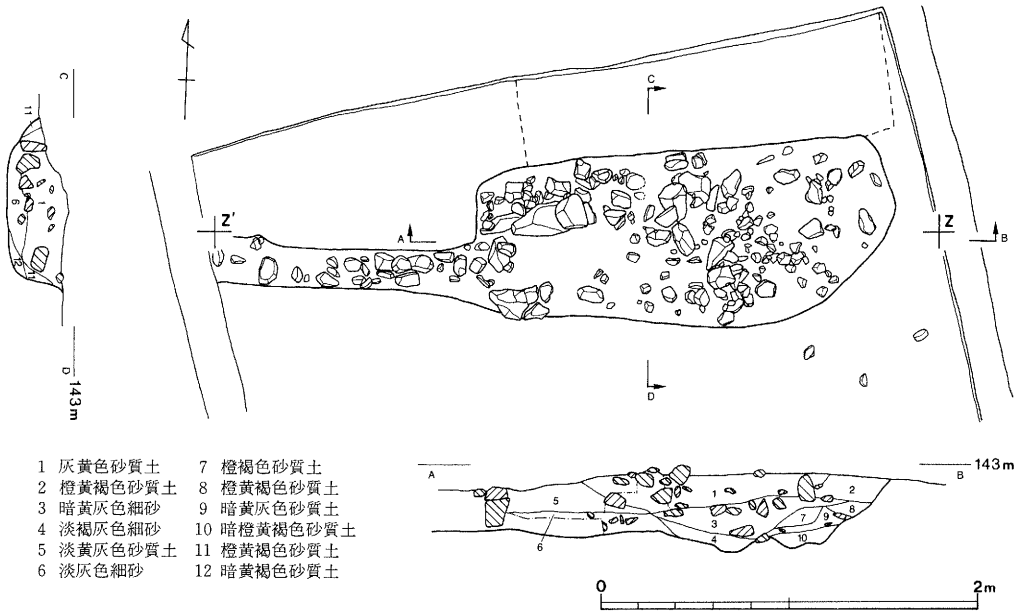


図29　前方部小竪穴式石室上面平面図、埋土断面図

の小形のものまである。これらの礫は、長軸2.3m、短軸１mの不整楕円形の土壙の中に入っており、第５次調査ではその北側の掘り方の一部を検出していたことが明らかになった。掘り方内側の土はしまりの悪い灰黄色砂質土で、淡黄色で堅くしまった周囲の墳丘盛土とは明確に識別できる。この土壙は調査の結果小竪穴式石室の墓壙であることが判明した。さらにこの西端から約20cmの幅で、約1.4m以上にわたって掘り方が帯状に延びて角礫が入っていた。これは後に排水溝であることがわかった。

埋土の状況　土層観察用の畦を残して掘り下げていくと、排水溝が取り付く側、すなわち西端に近い部分の埋土はほとんど礫を含まず、深さ15cm付近でほぼ水平な淡灰色細砂層の上面を検出した。この土の上面には直径５cm前後の、粒の揃った小礫が均等に含まれており、人為的に置かれた土であることがうかがわれた（図29，第６層）。同時に排水溝の取り付く部分に位置する大形の石、およびこれを両側から「コ」字状にはさむように置かれた大形の石がそれぞれ２段に積まれていることが判明し、この段階で遺構が小型の竪穴式石室であることが確認されたと同時に、かなりの削平を受けていることもわかった。

石室床面の置き土とみなされる小礫を含んだ淡灰色細砂層のひろがりを追うと、西側の小口から約70cmのところでとぎれていた。これより東側では、埋土の上層から下層にかけて、石室の壁体や裏込めを形成していたとみられる角礫多数が浮いた状態で含まれており、墓壙の底も深く抉られている（図29，第１～４，７～10層）。この点から、石室の東半分は墓壙底にまで及ぶ攪乱を受け、原形をとどめていないことがあきらかになった。ただ、墓壙の東端近くの、ちょうど西側小口と相対する位置に深さ５cm程度の掘り込みがあり、東側小口石を設置するために墓壙底を凹めた痕跡がかろうじて残っているとも推定される。

慎重に掘り下げたにもかかわらず、遺物や遺骸の残片などは１点も検出されなかった。ただ埋土の中に少量の赤色顔料の粒子が含まれている事実から、埋葬にあたって赤色顔料を使用したと考えられる。しかしその量がごくわずかなものであったことは疑いない。現存する西側小口付近の壁体や床面には赤色顔料の痕跡がまったくみられないことから、すでに破壊された中央より東の部分に赤色顔料は存在していたと思われる。この点および排水溝が取り付く方向からみて、埋葬頭位は東と推測されよう。

構造と規模（図32）　石室の壁体石は、西側小口を中心とする一部において２段分だけ現存しているに過ぎない。すなわち基底石は西側小口に１つと、これを両側から「コ」字状にはさむ形で北の側壁に２つ、南の側壁に１つの計４つが残っており、それぞれの基底石の上に２段目の壁体石が積まれている。

石室の断ち割り作業により、その構造の一部が明らかになった。まず墳丘盛土中に掘りくぼめた墓壙の底面に、石室壁体の基底石が置き並べられる。基底石には長方形またはこれに近い大形のものを箱式石棺のように立てて用いる。基底石の設置後、石室内部には淡灰色の精良な

細砂を厚さ10cm前後に敷き、さらにその上面には直径５cm前後の粒の揃った小角礫を均等に混じえながら床面を形づくる。２段目以上の壁体の積み上げはおそらく床面の形成以後に行なわれたと推定されよう。基底石が立てるように置かれるのに対して、２段目の石は平積みにされている。３段目以上は現存しないが、同じように平積みであった可能性が高い。壁体石の背後と墓壙壁の間には、やや小形の角礫を詰めて裏込めとしている。

さて、石室の正確な規模は、削平と攪乱のためにあきらかにすることが難しい。現存する石室床面部分での長さは70cmであるが、墓壙東端近くの掘り込みを東側小口石の痕跡とする先の推定が正しいとすれば、当初の石室内法の長さは1.7m前後との想定が成り立つ。石室内法の幅は、現存する西側小口部分の床面で30cmを測る。頭位方向と推定できる東側ではもっと幅は広かったと考えられる。石室高は、現存部分で20cmをはかるが、おそらく本来は基底石も含めて

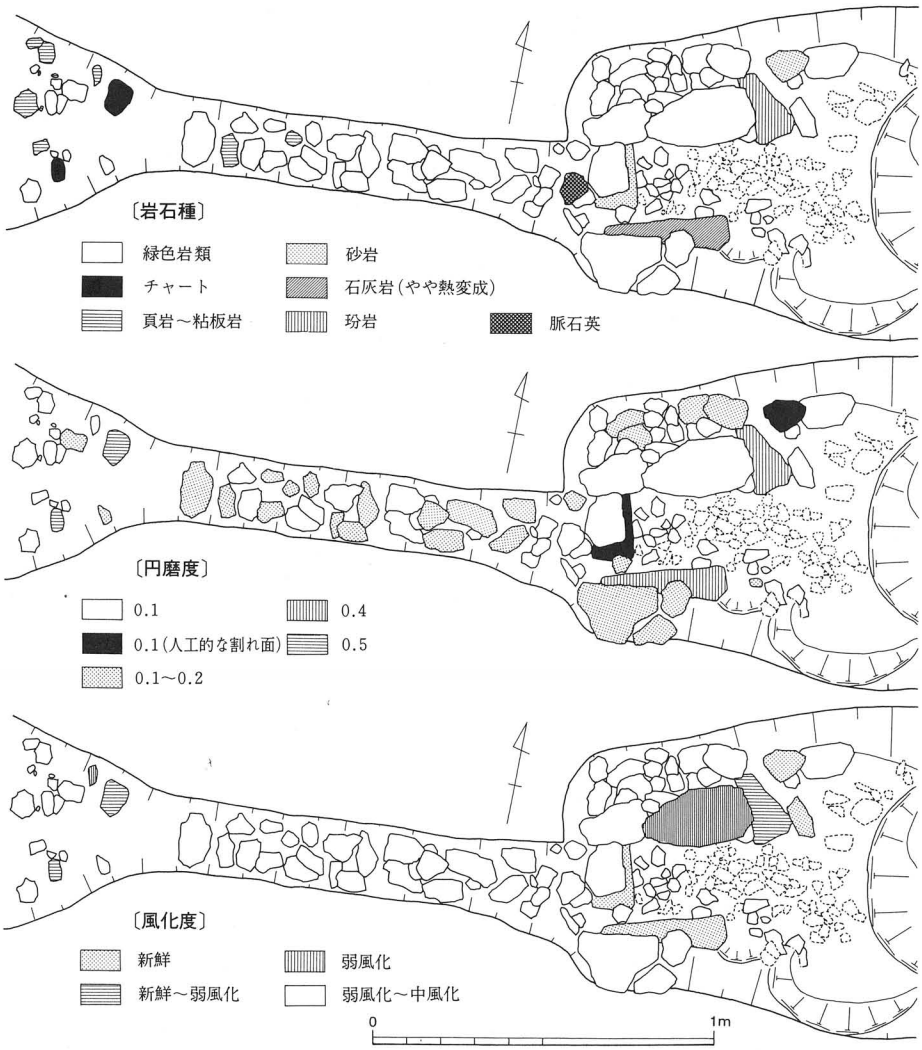


図30　小竪穴式石室の石材分析(輪郭が破線の石は未鑑別)

4～5段の石積みをもっており、40cm程度はあったと推定される。主軸方位はMN77°Eをとる。なお、墓壙は検出面で長さ2.3m、幅1m、深さ30cmをはかり、その底面のレベルは標高142.6mである。ただ、東半部の輪郭は攪乱時に掘り広げられたものである可能性が強い。

排水溝　排水溝は石室の西側小口石の背後から幅20cm、長さ1.7mにわたって西方へ延びる。底の平たい溝の中に長径10cmほどの角礫を充塡させた構造である。削平のため、現状では深さにして15～20cmを残すに過ぎない。石室への取り付き部から西へ約1.2mの付近で急激に幅を増すと同時に角礫の充塡が疎となり、礫の径も小さくなる。墳丘復元図および検出した盛土面の等高線の検討によれば、ちょうどこの付近が前方部最上段の斜面に当たることから、末広がり状にした末端部を墳丘斜面に開いて水の排出を図ったものと推測されよう。

使用石材　小竪穴式石室に使用された石材については、京都府立山城郷土資料館の橋本清一氏の御教示を得た。それによれば、岩石の種類としては緑色岩類が圧倒的に多く、そのほかにはチャート、頁岩～粘板岩、砂岩、石灰岩、玢岩などが少数混じっている。このうち緑色岩類は粗粒玄武岩質であり、円磨度0.1ないし0.1～0.2の角礫である。風化度は弱風化、弱～中風化である。[(2)] この緑色岩類は本古墳直下および古墳から約200m以内に分布する。また、チャートは円磨度0.5程度の亜円礫であり、表面の白色風化が著しい。大阪層群中の礫を使用しており、同じく本古墳直下あるいはごく周辺から入手できるものである。頁岩～粘板岩、砂岩、玢岩も近在のものを使用している。なお、石灰岩については円磨度が0.4であるが、やや熱変成している。1個だけなので確定的ではないが、丹波層群分布地の谷川から採取したものと考えられる。このような使用石材の傾向は後方部竪穴式石室および排水溝のそれに一致する。[(3)]

年代　この石室の年代を示す遺物はまったく発見されなかった。しかし、この石室の使用石材が緑色岩やチャートなど、後方部石室やその排水溝と同じものであることは、間接的ながらその構築年代を推測する材料となろう。すなわち、今回発見された小竪穴式石室は、後方部石室との密接な関連のもとに営まれたもので、被葬者同士の生前における結びつきもまた強いものであったと想定される。したがって、両石室の年代差も大きいものとは考えられず、後方部石室がつくられたとされる4世紀後半からさほど下らない時期に、小竪穴式石室の推定年代を置くことができよう。

注

(1)　都出比呂志、橋本清一「長法寺南原古墳第3次調査概要」(中尾秀正編『長岡京市文化財調査報告書』第11冊　長岡京市教育委員会、1983年)。

(2)　石材の分析法については橋本清一「今里車塚古墳の葺石と乙訓の古墳の葺石」(『埋蔵文化財発掘調査概報』1980　第2分冊　京都府教育委員会、1980年)。

(3)　注1文献pp.29-31。

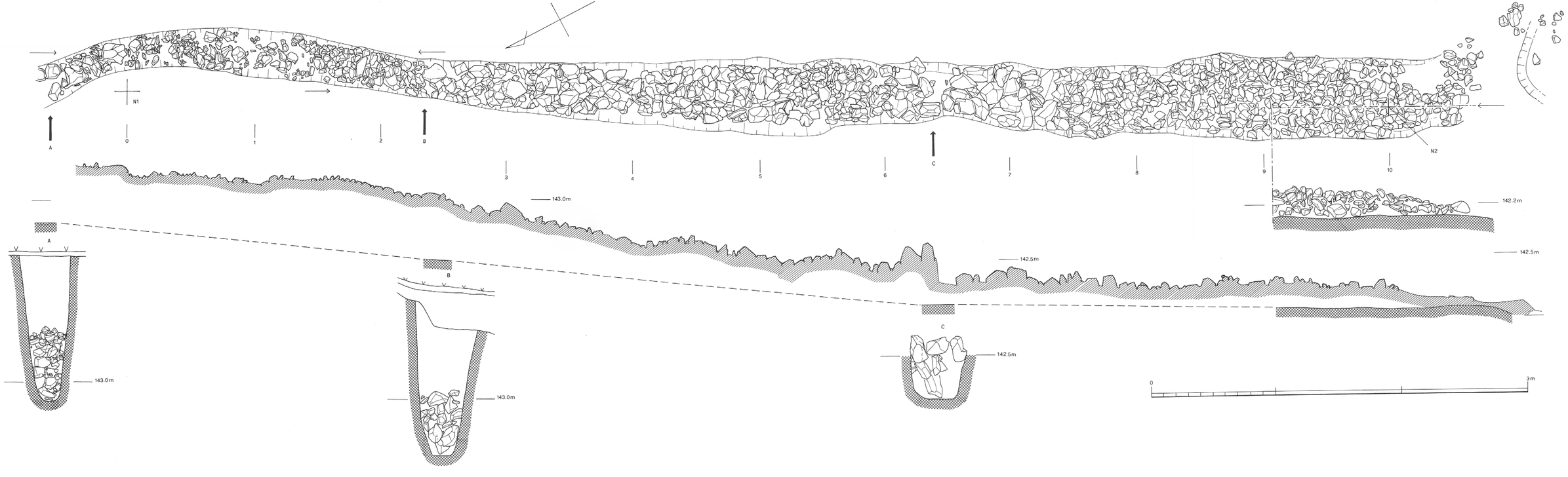


図31　排水溝平面図、断面図

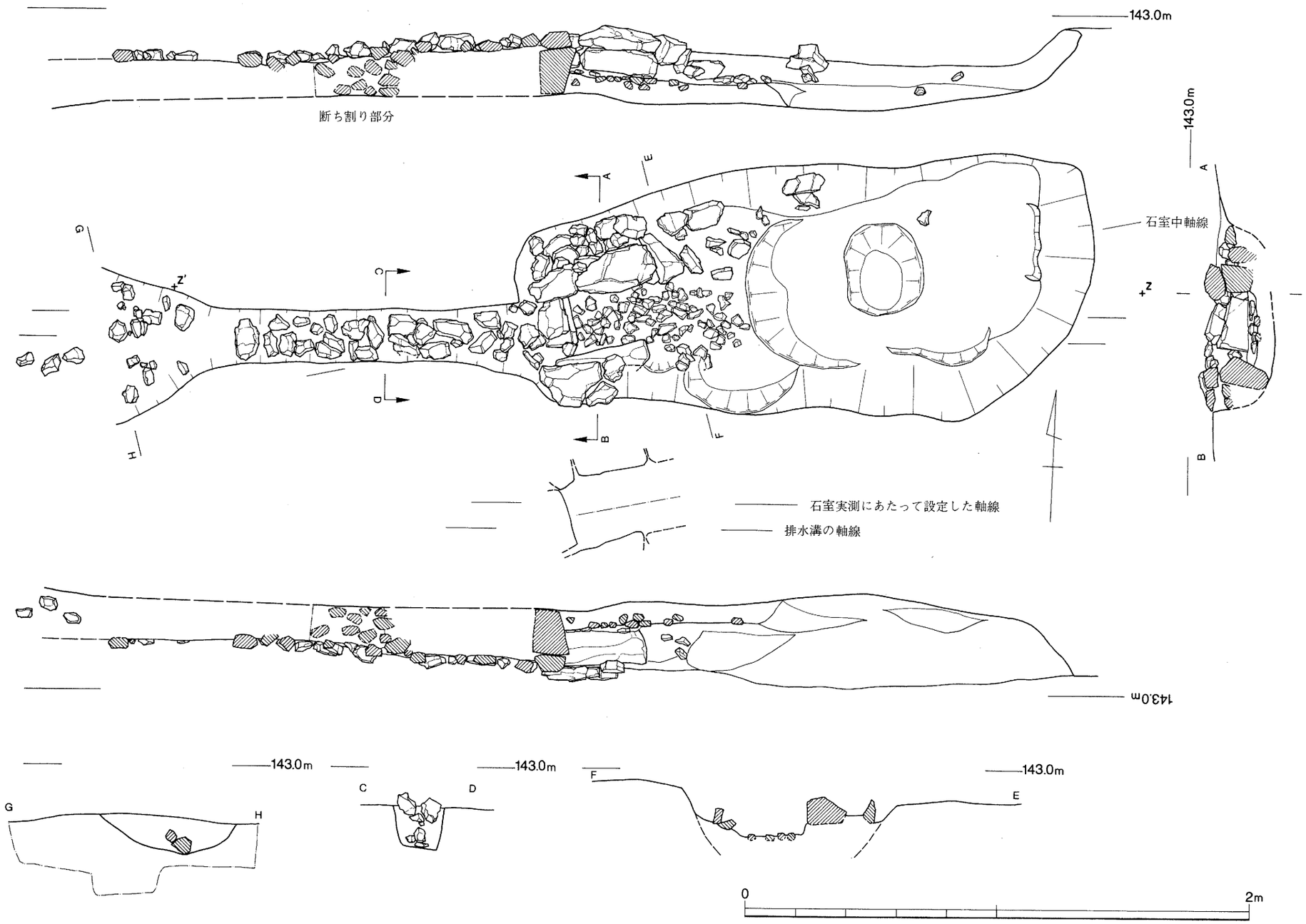


図32　小竪穴式石室平面図、断面図、断ち割り断面図

第4章　出　土　遺　物

本章で報告するのは、第1次調査において後方部竪穴式石室から出土した副葬品、第2次～6次調査で墳丘から出土した埴輪、土器などについてである。このうち、石室内出土遺物は調査後半世紀をこえる時間の経過の中で所在がわからなくなったものもある。また、今回再調査を行ったものは現在東京国立博物館に所蔵されている出土品を中心とするが、図示したのはそのうち主要なものである。なお、巻末の図版に掲載した遺物と、実測図で示した遺物との対応関係は図52のとおりである。

1　後方部竪穴式石室の出土遺物

(1)　鏡（図33，図版20～26）

1号鏡（三角縁天・王・日・月・唐草文帯二神二獣鏡）　石室南西隅で4号鏡とともに西壁に立てかけられた状態で発見された。鋳上がりの良い鏡で、鏡背面3分の1ほどに緑青が付着するほかは黒銅色を呈し、保存状態はきわめて良好である。面径21.5cm、重量928.4g。同型鏡は当古墳からもう1面出土しているほかに、兵庫県ヘボソ塚古墳、奈良県佐味田宝塚古墳、岐阜県長塚古墳、同県円満寺山古墳、愛知県東之宮古墳などで出土例がある。また、大阪府石切神社、奈良県鏡作神社所蔵鏡も同型であり、同型鏡の数は9面にのぼる。舶載三角縁神獣鏡の中では現時点で最も同型鏡の多い鏡式である。

鈕は直径3.2cm、鏡面からの高さ1.5cmをはかる半球状を呈し、頂部がわずかに突出する。鈕孔形態は片方がやや不整形になっているものの、いま一方は幅0.8cm、高さ0.3cmの整った長方形で、鏡面から0.3cm上がった位置に開口している。鈕座は幅0.3cm、蒲鉾形の断面をもち、表面には有節重弧文を表す。

内区主文区は四乳の間に二神二獣を配する小林行雄分類J_1配置をとる。乳は径1.0cm、高さ0.6cm、頂部がなだらかな丸みをもっており、斜縁二神二獣鏡などにみられるものと類似している。神像は上半身の衣の両裾が上方に巻上がった表現をもつ。一方の神像は三山冠を被り、向かって右傍らに笠松形と脇侍様の立位の人物を表わす。いま一方の神像は頭部に重弧文様の被物を付け、脇には座位の侍者を伴っている。獣像は右向きで頭部は横位に表現する。一方の獣がくわえた「巨」の先には「戚」が描かれている。

内区外周には唐草文帯と櫛歯文帯を有するが、内区主文区との間に界圏を設けない。唐草文帯は幅0.6cm、内区の四乳に対応する位置に方格を置き、そのなかに「天」、「王」、「日」、「月」の銘を一字ずつ時計回りに記す。方格は輪郭をかたどる線表現が勝ち気味でやや立体感に欠ける。方格と方格の中間にさらに円圏座をもつ小乳を配することによって文様帯を8区分し、そ

の区画内を唐草文で埋める。舶載三角縁神獣鏡の唐草文はＳ字形を基調とする構成が大部分であるが、本例だけはなぜか逆Ｓ字形の唐草文となっている。唐草文帯の外側には幅0.6cmの櫛歯文帯を置く。櫛歯文の条線は円周に対して正しく直交方向を向く。

外区は内区外周の文様帯から0.15cm高くなった位置にあるが、外区内側斜面には文様を施さない。外区に内側から外向鋸歯文、複波文、外向鋸歯文を描き、さらにその外側に一本の明瞭な外周突線を巡らしている。縁は頂点の厚さが1.0cmをはかる断面正三角形の三角縁である。

２号鏡（三角縁天・王・日・月・唐草文帯二神二獣鏡）　石室の第１発見者である村人によって取り上げられた鏡であるが、石室中央やや南よりの粘土床上から鏡背を上にして出土したという。発見時には鈕部分が割れて抜け落ちていた。１号鏡と同型鏡の関係にあり、一部に緑青が付着しているが黒銅色を呈し、１号鏡と同じく鋳上がり、保存状況とも良好である。面径は21.5cm、重量は861.2ｇをはかる。鈕孔形態は一方が幅0.8cm、高さ0.3cmの整った長方形で鏡面より0.2cm高い位置に開口している。いま一方の側も同程度の鈕孔であるが、下端が鏡面と同じレベルになっている。鈕の頂部は直径0.5cmほどの円形の範囲でわずかに突出する。１号鏡にも認められる突出であるが、鋳型を作る際の引型の心棒の痕跡であろう。図文の特徴は１号鏡と同様である。

３号鏡（三角縁君・宜・高・官・獣文帯三神三獣鏡）　石室の第１発見者である村人によって取り上げられた鏡であるが、石室東壁に接して出土したという。緑青で覆われているが、白銅色の光沢をもち鋳造時の鋳肌をそのまま残す部分も多くみられ、全体として保存状況は良好である。面径は22.7cm。同型鏡には奈良県白石で出土したと伝えられる１面がある。

鈕は直径3.6cm、高さ1.3cmの半球状である。鏡面から0.1cmほど上がった位置で鈕孔が設けられている。入口部分の鈕孔形態は幅0.8cm、高さ0.4cmほどの長方形を呈す。鈕座は0.6cmの幅をもつやや幅広の断面蒲鉾形のもので、表面には有節重弧文を刻む。

内区主文区は捩座をもつ径1.0cm、高さ0.6cmの乳の間に三神三獣を配するもので小林分類K_1配置をとる。神像は頭部に方形の被物を表現するものが２体、半円を２つ重ねたような被物を表現するものが１体ある。神像の膝の両側には特徴ある三角錐形の突起を鋳出す。獣像は通常の舶載三角縁神獣鏡において獣が口にする棒状の「巨」のかわりに、素環頭大刀や槍（あるいは矛）をくわえた表現で珍しい。神像と獣像の頭の間には、鈕座に沿うように円圏座をもつ２個一対の小乳を計12個配置する。このほかにも主要図文の空閑部分には渦文、重弧文、珠点などを充塡しており、全体を飾りたてようとする傾向が著しい。

内区主文区と内区外周の文様帯との間には、高さ0.2cm、内側斜面が長くなる断面三角形の界圏を設ける。内側斜面には外向鋸歯文、外側斜面には内向する弧形文を表現している。

界圏の外側には幅0.8～1.0cmの文様帯を有する。文様帯には内区の乳と対応する位置に６個の方格を置き、さらに方格間にも円圏座の小乳を配することによって、文様帯を12の区画に分

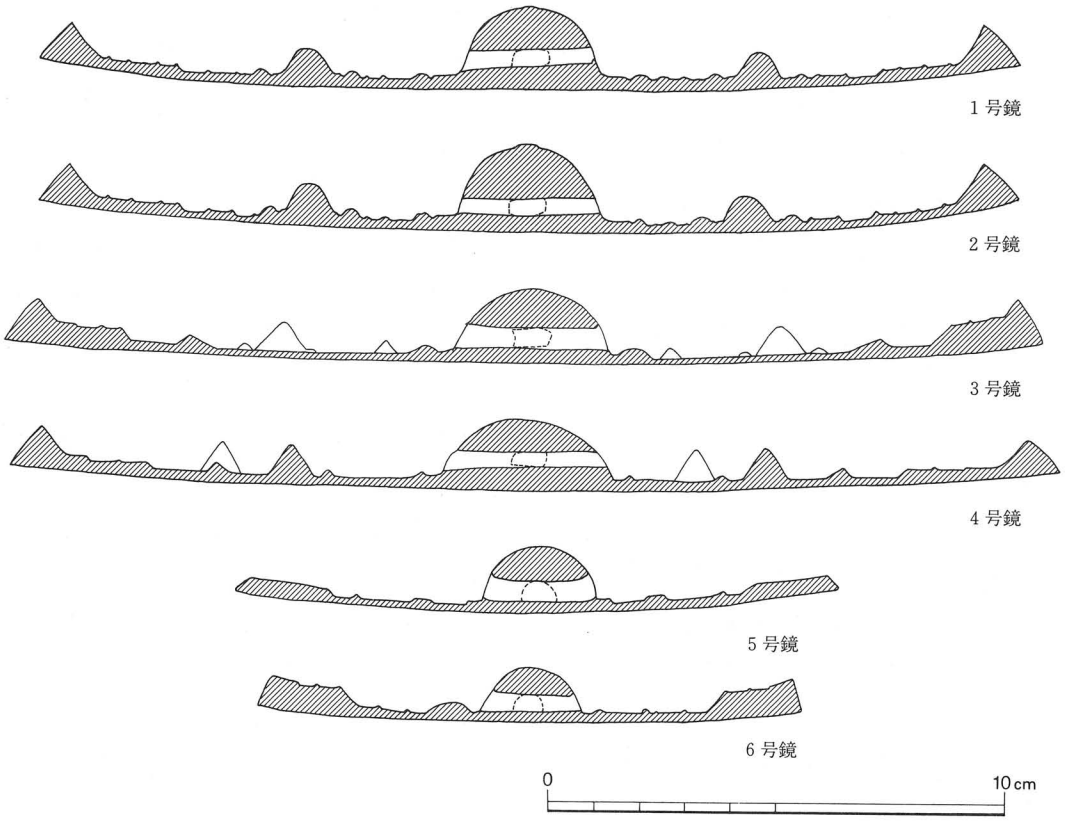


図33　鏡断面図

けている。方格内には時計回りに「君」、「高」、鳥文、「宜」、「官」、鳥文を描き入れる。この鳥文は舶載三角縁神獣鏡のなかでは特異であり、線表現で雛鳥を表わしたものと思われる（図34）。方格と小乳で区切られた文様帯には魚、鳥、兎、亀のほかに4足の獣形が右向きに表現される。

外区は内側の文様帯の部分から0.3cmほど高くなる。外向鋸歯文、複波文、外向鋸歯文の構成をとり、複波文帯にはさらに珠点が添えられる。外区内側斜面には外向鋸歯文が施される。この外区の3文様帯を画す同心円の突線に何箇所か乱れたところがある点は注目される（図35）。突線が乱れた部分では鋸歯文や複波文もまた乱れているようであり、鋳型の手直しがなされた可能性もある。ただ、本例と同型鏡の関係にある資料を実地に十分検討していないので、結論は今後の課題としておく。縁は頂点における厚みが1.0cmの断面三角形である。

この鏡は舶載三角縁神獣鏡のなかでも図文表現が特異な部類に入る。本例と表現の類似する例としては、同じ三神三獣タイプでは大阪府紫金山古墳から出土した長・宜・子・孫・獣文帯三神三獣鏡があげられる。紫金山鏡は渦文や小乳、珠点を多用する点、獣文帯に兎を表わす点、神像の両膝の脇に三角錐形の突起をもつ点などで共通するが、外区の複波文帯中には珠点がみられない。この点を重視するなら、四神四獣タイプではあるが、外区に珠点を添え、方格内に本

鏡と同じ「君・宜・高・官」の銘を有する静岡県午王堂山３号墳出土鏡との関連も考えられよう。ただ、紫金山鏡や午王堂山鏡と比べると、本鏡の図文表現はやや稚拙である。また、前２鏡に存在した外区の外周突線が本鏡では消滅していること、前２鏡の乳座の弧文が右向きであるのに対して、本鏡では左向きであることなどから考えると、前者を手本にして別の工人が本鏡を製作したと推定することもできよう。

４号鏡（三角縁天王日月・鋸歯文帯四神四獣鏡）　１号鏡とともに石室西壁の南端部に立てかけられた状態で発見された。面径23.2㎝。同型鏡は大分県赤塚古墳、奈良県桜井茶臼山古墳、京都府椿井大塚山古墳から各１面ずつ出土している。広い部分が緑青に覆われており、また外区の一部分が破損して欠失している。内区の神獣像は細部が不明瞭となる部分があるが、全体に認められるわけではないので、手ずれなどによる磨滅ではなく鋳上がりの悪さを示すものであろう。また、鏡背の一部には布の付着がみられる。

鈕は直径3.8㎝、鏡面からの高さ1.2㎝をはかるやや偏平な半球状を示す。鈕上には赤色顔料の付着が認められる。鈕孔形態は一方が幅0.7㎝、高さ0.3㎝の長方形で、鏡面から0.3㎝の高さに開口する。他方は湯回りが悪かったためか角の丸い逆三角形状になり、下端は鏡面から高さ0.1㎝の位置にくる。なお、鈕孔の開口方向の点で本鏡および椿井大塚山鏡と赤塚鏡の間では相違がみられることが注目される。鈕座は幅0.1㎝の円圏鈕座である。

内区主文区は四乳の間に神獣１体ずつを置くもので、小林分類のG'配置をとる。乳は径0.9㎝、断面は正三角形を呈する。周りには円圏座が取り付くようであるが、きわめて不明瞭である。乳のすぐ上方には小さな三角錐状の突起を添えている。神像は４体とも三山冠を被った姿を表わす。上半身と下半身は２個ずつの塊として表現しており、また、本来拱手する手の表現も退化して楕円形の突起が腰部に置かれるのみである。舶載三角縁神獣鏡の神像表現としてはごく稀なものである。獣像は右向きで、縦位の頭部を正面に向け、口には「巨」を噛む。

内区主文区と内区外周の文様帯とを画す界圏は、高さ0.2㎝、内側斜面が長くなる断面三角形のものである。内側斜面には外向鋸歯文を施すが、外側斜面は無文である。

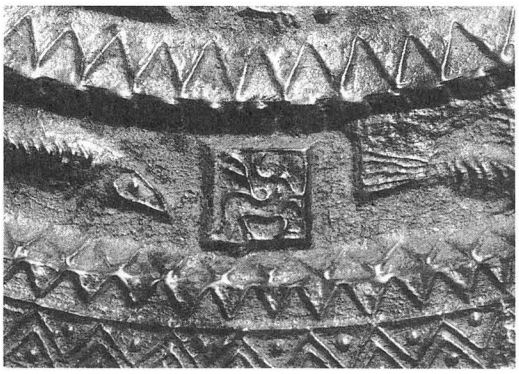


図34　３号鏡の細部(1)

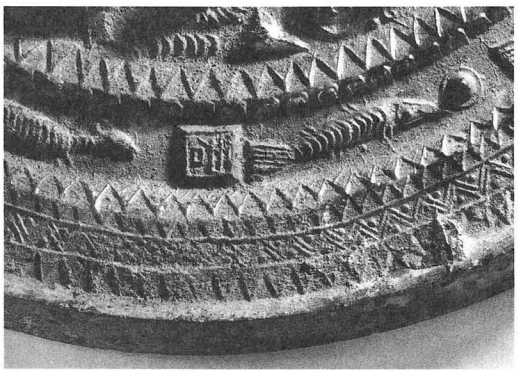


図35　３号鏡の細部(２)

界圏の外側には幅1.0㎝の文様帯を有する。文様帯は１条の突線によってさらに２帯に分けられ、内側から順に外向鋸歯文帯、櫛歯文帯としている。この櫛歯文はわずかに左に傾く傾向がうかがえる。文様帯には高さ0.1㎝の方格と径0.7㎝、高さ0.6㎝の乳が４個ずつ、交互に配置される。この乳と文様の鋳型製作時における先後関係については、乳の周囲に文様を刻んでいない部分が認められるため、乳の方を先と考えることができる。すべての方格内には天王日月の４字を内側から見るように記す。「天」の字は３画目が上部まで届かない字体となっている。

外区は櫛歯文帯から0.2㎝高い位置にあり、内側から外向鋸歯文、複波文、内向鋸歯文という構成をとる。鋸歯文は一単位が比較的大きいものである。外区内側斜面は無文である。縁は、頂点で0.9㎝の厚みとなる断面三角形を呈する。

５号鏡（長宜子孫内行花文鏡）　石室中央からやや南よりの位置で、西壁の近くに崩れ込んだ石の上に鏡背面を上に向けて傾いて存在していた。報告者は西壁に立てかけてあったものが内側に倒れた状況を推定している。面径13.3㎝、重量279.5ｇ、一部緑青に侵された箇所もあるが、全体としては漆黒色の錆に覆われて、保存状態は良好である。

鈕は直径2.5㎝、高さ1.3㎝の半球状を呈す。鈕孔形態は両孔とも幅0.8㎝、高さ0.4㎝の整った半円形で、鈕孔下端は鏡面と同じ高さにくる。鈕座は偏平な四葉座で四葉の間に時計回りに「長」、「宜」、「子」、「孫」の４字を入れる。鈕孔は四葉の間に開口しており、四葉座をもつ舶載内行花文鏡の原則にかなっている。

鈕座の外側は幅0.5㎝の素面の突帯をへて花文にいたる。花文は８弧、整った割付けがなされている。その外側には幅0.5㎝の凹帯を巡らせ、縁へと続く。縁は上面幅1.6㎝、厚さ0.3～0.4㎝の素面平縁で、外端部は外に傾く斜面を形成する。

本鏡は、図文の輪郭が鋭さを失ってあたかも磨滅したような状況を呈している。鏡背面は全面に鈍い光沢を帯びていることから、長期の使用による手ずれ現象を示しているとも受けとることができる。鏡背面の文様が不明瞭な場合、これを使用による手ずれとみるか、湯冷えなど鋳造時の要因によるものとみるか意見の分かれるところである。本鏡においては、四葉座の上面に、鈕を中心とする同心円の方向で細かい擦痕がみられる。この擦痕は製作時の表面調整の痕跡と考えられるが、観察される磨耗や光沢は擦痕の上面にも及んでいるため、そうした表面の変化が鏡の製作後に、言いかえれば使用時に起こった可能性が高いと推定されるのである。

６号鏡（青蓋作盤龍鏡）　石室東北隅で鏡面を上にしてやや内側に傾いた状態で遺存していた。面径11.8㎝、重量390.5ｇである。ところどころ緑青に侵されているが、ほぼ良好な保存状態である。鏡背面には赤色顔料が付着している。

鈕は直径2.1㎝、鏡面からの高さ1.0㎝の半球状を呈す。鈕には幅0.7㎝、高さ0.4㎝の半円形の鈕孔を設けている。鈕孔下端は鏡面のレベルとほぼ同一である。鈕孔の入口部分は面取り調整がなされているようにみえる。円圏鈕座をもつ。

内区主文区は鈕を中心にして右の龍と左の虎がわだかまる表現をもつ。龍虎の足元の間には羊かと思われる小獣像を鋳出す。内区外周には銘帯と櫛歯文帯を設け、銘帯には時計回りに「青蓋作竟四夷服多賀國家人民息胡虜殄滅天下復風雨時節五穀熟長楽巳」の31字からなる銘文を入れる。

櫛歯文帯から0.5cm高い位置に鋸歯文帯、複波文帯からなる外区を有する。鋸歯文は縦長の表現で、鋸歯文間にはさらに珠点を置く。縁は厚さ0.8cmをはかる素面の平縁である。

この鏡で注目されることは、鏡面に数十本の毛髪が付着している点である。長さ５cm以下の直毛で、分析は行っていないが、人間の毛髪の可能性が高い。出土位置からみて棺外の副葬品であるにもかかわらず毛髪が付着した要因を考える必要がある。

鏡群の時期　これらの鏡はすべて中国後漢～三国時代に製作され、わが国にもたらされた舶載鏡である。このうち、長宜子孫内行花文鏡は弥生後期～終末期の遺跡からもしばしば検出される鏡式であり、鏡背に手ずれと思われる磨滅が見られることを重視すれば、これが伝世された鏡であった可能性が高い。鏡群の主要部分を占めるのは三角縁神獣鏡であるが、三神三獣鏡、二神二獣鏡は舶載鏡の中でも相対的に新しい鏡群である。さらに、１面だけ含まれている四神四獣鏡も、獣像の表現は他の四神四獣鏡にはほとんど見ないものでむしろある種の三神三獣鏡と共通する新しい要素を持っている[(1)]。また、南原古墳と同型鏡を分有する関係にある古墳は、椿井大塚山古墳をのぞいてほとんどが三神三獣鏡、二神二獣鏡および古式の仿製三角縁神獣鏡を中心とする副葬鏡群を有しており、四神四獣鏡を主体とするものはほとんどない。それらの配布がやや新しい時期に行われたことを示すものといえよう。南原古墳の三角縁神獣鏡は、配布される鏡式の主流が四神四獣タイプから三神三獣、二神二獣タイプに移行する時期の鏡群である。伝世鏡を有していることからみて、この首長系譜内に配布時期のより古い三角縁神獣鏡が存在した可能性は低い。つまり、三角縁神獣鏡の配布開始後、若干の時期を経てはじめてその配布網のなかに取り込まれた首長系譜であったと考えられるのである。

(2)　玉類（図36，図版26）

発掘時に報告された玉類の構成は勾玉、管玉、ガラス小玉の三種類であったが、現時点で確認できたものは勾玉５点と管玉19点であり、勾玉についてはもっとも大型の丁字頭勾玉１点を欠く。勾玉はすべて一般にヒスイないし硬玉と呼ばれる石材であり、管玉は碧玉ないし緑色凝灰岩に属す。ただし東京国立博物館の岩石学的鑑定によれば、勾玉については長石を混入するヒスイ製と軟玉製のものとがあり、管玉については珪質凝灰岩、酸性凝灰岩で構成されているようである[(2)]。

勾玉（図36―１～５）　１は比較的大型の丁字頭勾玉で、その色調は半透明の緑色部を主体とするが、一部に白色を呈する部分がある。長さ3.4cm、頭部の厚さ1.5cmであり、全体に厚手のつくりとなっている。重量は15.2ｇである。丁字頭勾玉は本例と４および未確認の１点との合

計３点であったらしい。穿孔は両面穿孔であり、その交点は中心にあることからみて、穿孔作業は表裏両面から同程度に実施されていることがわかる。交点部分の内孔径は２㎜である。２は１よりやや濃い緑色半透明の石材で、長さ2.3㎝、頭部の厚さ９㎜、重量は5.6ｇである。穿孔状況は１と共通し、内孔径は２㎜にわずか満たない。３は２と同じ色調を呈し、長さ2.2㎝、頭部の厚さ９㎜で、重量は4.7ｇである。頭部背面に幅５㎜ほどのくぼみが観察されるが、その表面も研磨されていることからみて、このくぼみは製作時に生じた剝離面ないし荒割原材の時点から存在したものであり、本例はそれを部分的に残したまま完成にいたった可能性が高い。その断面形も他の勾玉に比べると丸みが顕著でなく表裏にわずかな平坦部分を残している。こうした特徴も背面のくぼみと関連することかもしれない。穿孔状況は１と共通し、内孔径は約１㎜である。４は小型の丁字頭勾玉で半透明の淡緑色を呈し、色調は１に似る。長さ2.0㎝、頭部の厚さ７㎜、重量は2.4ｇである。本例はもっとも細身のつくりであり、研磨も丁寧で全体に精緻な印象を与える。穿孔は片面穿孔で一方向から径１㎜ほどの内孔をうがつ。５は半透明の緑色部を主体とし一部に白色部を混入する石材で、長さ1.5㎝、本例は頭部より下半部のほうが厚く、もっとも厚い部分で５㎜ある。５点のなかではもっとも小型品であり、穿孔は片面穿孔で内径は２㎜、本例についてのみ内孔部分に朱の付着が認められる。

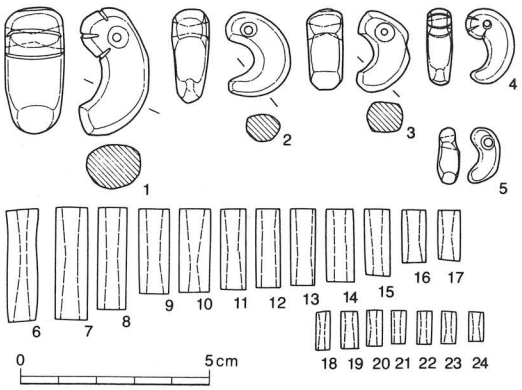


図36　玉類実測図

管玉（図36―６～24）　管玉はその寸法からみて、直径８㎜ないし６㎜までまとまり両端部での内孔径３ないし４㎜の一群（６～17）と、直径４㎜前後で両端部での内孔径２㎜程度の一群（18～24）とに大別できる。前者は長さ2.9㎝（６，７）を最大とし、長さ２㎝前後でまとまる７点（９～15）があるほか、長さ1.4㎝前後のもの（16,17）を含んでおり、長さの点で３グループほどに分類できる。これに対し後者は長さ８㎜から１㎝までまとまり、直径、長さともに規格はそろっている。なお両者が石材の差異と対応する状況は認められない。色調は淡緑灰色を呈するものがほとんどであるが、18と19の２点のみ濃緑色である。穿孔はすべて両側からの穿孔である。全体に丁寧な研磨が施されており、表面に光沢をもつものも多いが、６だけは風化が顕著であり、脆弱になっている。18,23,24の３点は内孔部に朱の付着が認められる。

(3)　武器類（図37～38，図版30～31）

鉄刀（図37―１）　１本が出土している。全長105㎝、幅2.5～3㎝の長刀で、内反りの形状を示す。茎は刀身よりもわずかに狭い程度であり、関の形状も破損のために明らかでない。目釘

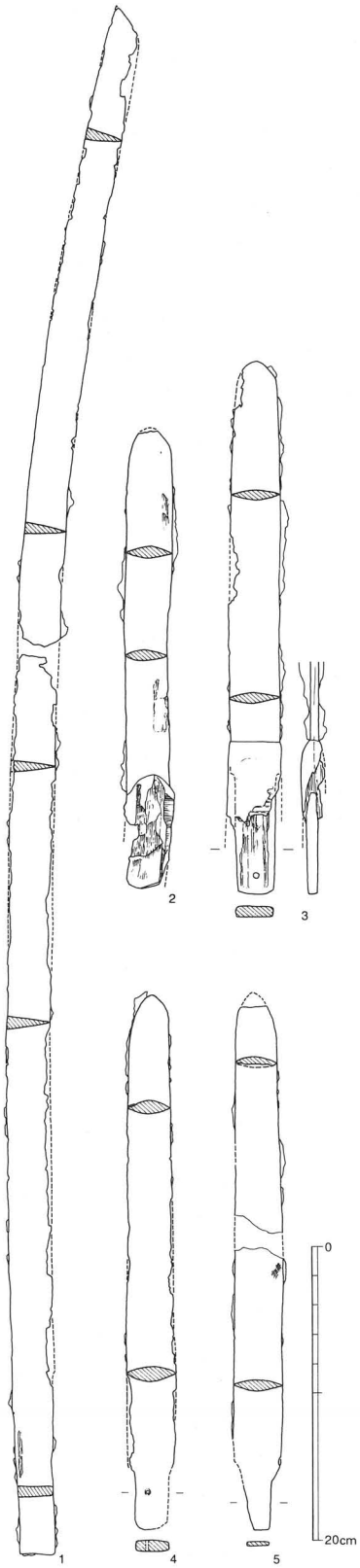


図37　鉄製刀・槍・剣実測図

孔は肉眼では確認できないが、茎に木質が残る。梅原報告では柄が付いていた形跡はないとの所見が提示されているが、茎部に付着する木質を考慮すれば、やはり柄付きであった可能性を認めておく必要がある。ただし刀身部には木質の付着がまったく認められず、副葬時に鞘に納められていた証拠はない。

鉄槍・鉄剣（図37―２～５）　梅原報告では「短剣」として７本の出土が報じられているが、ほぼ完形で確認できるのは図示した４本である。このうち呑口状の柄が付けられた２および３は槍の可能性が高い。

２は現存の長さ31cmで、先端をわずかに欠損するがほぼ完形である。身は最大幅が3.1cm、厚さ0.8cmで断面が凸レンズ形を呈し、稜は明らかでない。一部に木質が付着する。茎は、柄が遺存しているために詳しく観察できないが、長さ6.5cm前後で、幅は身に比べてかなり細くなると推定される。柄は木質に糸を巻いたもので、表面の一部に赤色顔料が残る。茎本体も含めての厚さは約1.5cmあり、呑口の先端部分はゆるくU字状に突出する。

３は完形で全長36.4cmをはかる。身は最大幅3.4cm、厚さ0.6～0.7cmで明確な稜はない。茎は長さ８cm、幅2.7cmと比較的幅広で、末端はわずかに突出するがほぼ直線に近い。末端近くに目釘孔１個が確認できる。柄は２と同様に木質に糸を巻き、漆を塗って仕上げるが、呑口状の先端部が直線をなす点が異なる。茎本体も含めた柄の厚さは約1.6cmである。

４はほぼ完形で長さは36.6cmである。身は最大幅3.3cm、厚さ0.8～1cmで、断面が分厚い凸レンズ形を呈するが、稜ははっきりしない。茎は長さ４cm、幅2.2cmと短く、目釘孔１個が確認される。ただし、縁辺の修復がなされているため、関や末端部も含めてもとの正確な形状は知りがたい。柄の痕跡はなく、槍、剣のいずれであったかは不明である。

５は現存での長さ35.8cmを計るが、両端部を欠く。身

は最大幅3.3㎝、厚さ0.8㎝で稜は認めがたい。茎は欠損のため正確な長さは不明であるが、比較的短いものと推定され、またきわめて薄い。柄の痕跡はみられないが、身の一部に布目の痕跡が残る。

鉄鏃（図38―１～11）　梅原報告ではほぼ形状のわかるものとして123本の鉄鏃の出土が報じられている。そのうち60本余を確認できたが、いずれも柳葉形で全長６～７㎝、最大幅1.2～1.5㎝の範囲に収まり、ほぼ同様の形状を示すといってよい。ただし、鏃身の長さや先端角度、側縁のカーブなどに微妙な個体差が認められる。鏃身の断面は一様に凸レンズ形を呈するが、はっきりした稜をもつものはない。関は比較的あいまいなものが多く、意識して明瞭に作り出したような個体はみられない。茎の断面はいずれも正方形またはそれに近い方形を示す。

銅鏃（図38―12, 13）　近年になって本古墳の出土品であることがほぼ確実となったものである。いずれも箆被をもつ柳葉形の銅鏃で、中央の稜をはさんで一対の凹部を作るのを特徴とする。京都大学保管の12は先端をわずかに欠き、現存での長さ10.1㎝をはかる。茎は主軸に直交する方向で12面に分けて研磨されている。藪内治作氏蔵の13はほぼ完形で全長10.2㎝、茎の研磨面数は９面である。また箆被の下端の削り方などにも、12とわずかな違いがみられる。この２本と同形同大で細部の特徴を同じくする２本の銅鏃が大阪府柏原市松岳山古墳から出土している。[3] これら４本の銅鏃が同一の工房で製作されたことはほぼ疑いなく、ごく微細な相違が研磨の工程で生じた差であるとすれば、すでに指摘されているように同笵関係にある可能性が高い。[4]

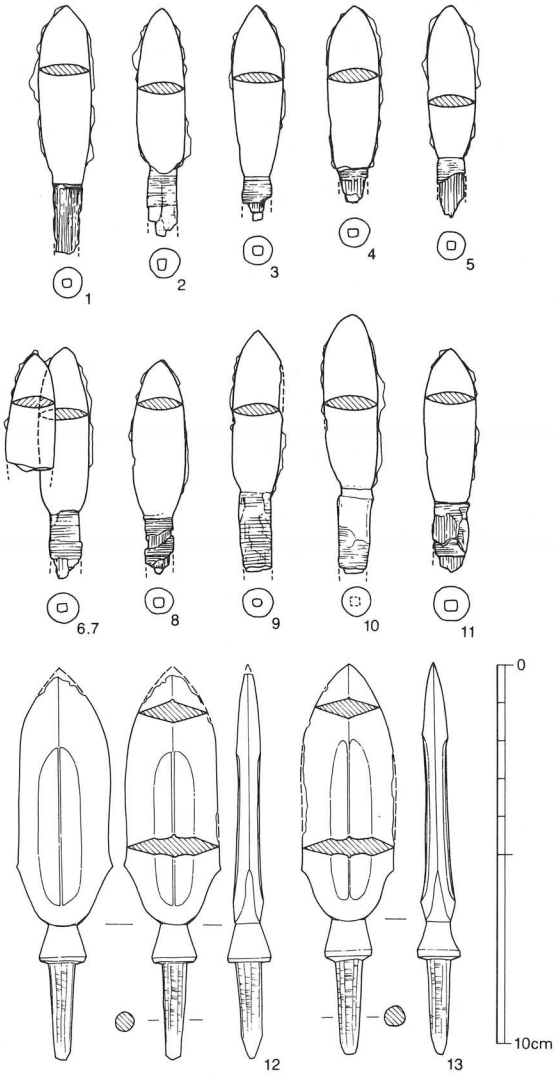


図38　鉄鏃・銅鏃実測図

(4)　工具類（図39～40，図版32～33）

工具には斧、刀子、鉇、鑿がある。これらのうち代表的な遺物を図示した。このほかに棒状品があり、器種は不明であるが工具の一部として扱っておく。

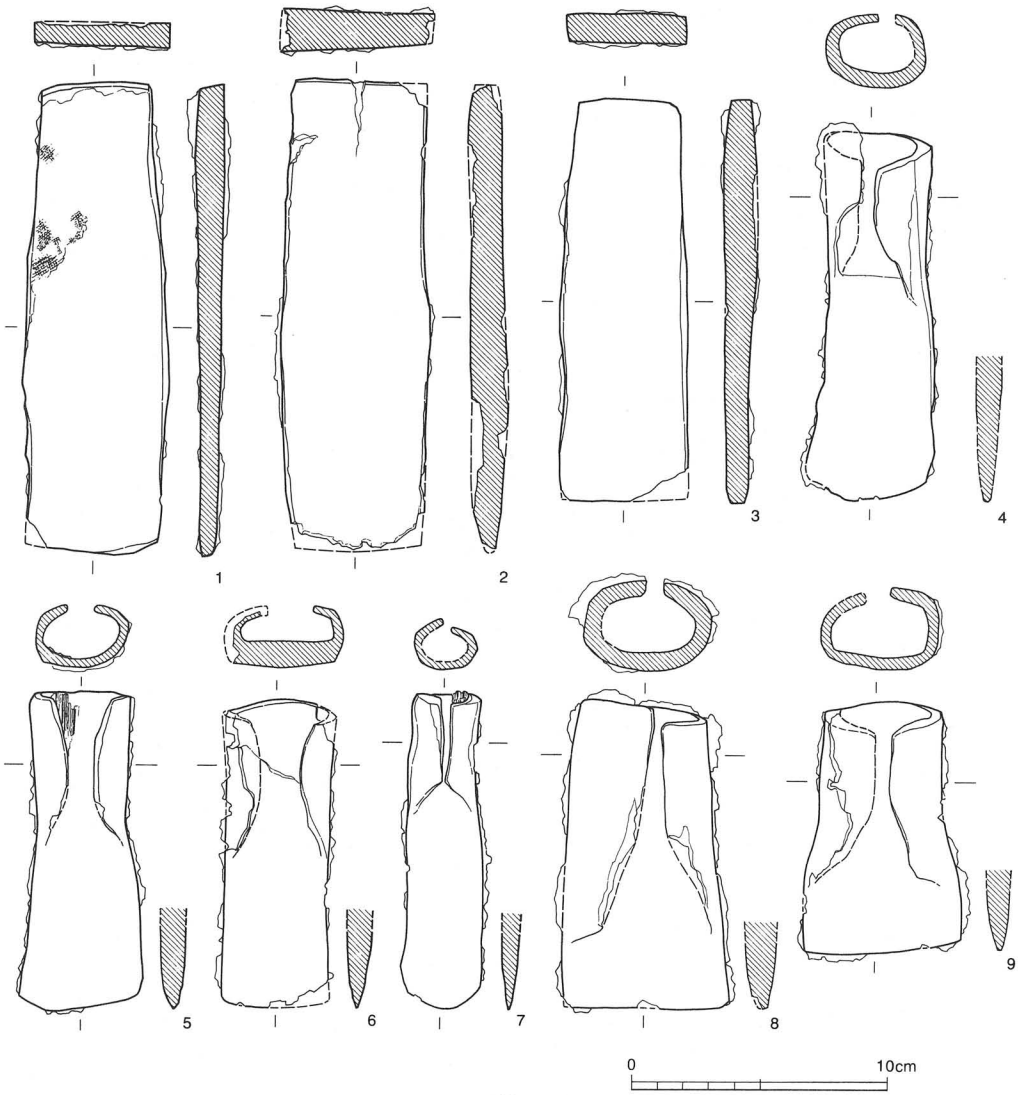


図39　鉄斧実測図

斧（図39）　短冊形の板状斧と有袋斧とがある。すべて鍛造品である。発掘時には12点出土したようであるが、確認できたものは11点であり、このうち９点を報告する。１から３は板状斧である。いずれも基部がややせばまる長方形を呈し、刃部はわずかに丸みをもつことや断面形が長方形である点で共通する。寸法は１が長さ18.2㎝、中央部での厚さ１㎝である。２は１とほぼ同大、３はやや小型で長さ15.9㎝、中央部での厚さ1.1㎝である。３点ともに木質の付着は認められず柄が付いていた形跡はない。なお１と２の表面には部分的に繊維が付着している。

４から９は有袋斧で、刃幅が狭く細身のもの（４～７）と、刃幅が広く偏平のもの（８，９）とがある。細身のものでは４と５の２例が、刃部の幅が袋部よりわずかに広いことで類似する。４の寸法は長さ14.5㎝、袋部の長さ6.5㎝、刃の幅4.7㎝である。７はもっとも細身のもので長

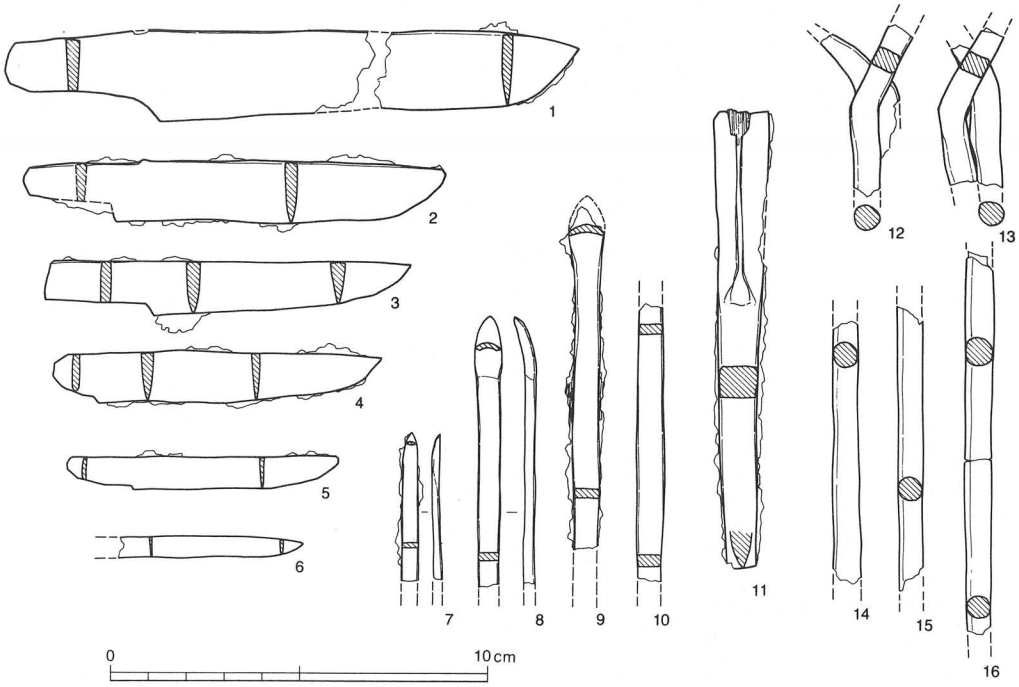


図40　鉄製刀子・鉈・鑿・棒状品実測図

さ9.4cm、袋部の長さ4.5cm、刃部の平面形は丸くなり、その幅は3.0cmである。一方８と９は、ともに刃部の平面形が丸みをもたず直線的であることや、袋部の範囲が全体の３分の２におよぶこと、および袋部の途中から基部にかけて幅がせまくなる点での形態的な類似がある。８の寸法は長さ12.2cm、刃幅6.5cmである。なお５と７の袋部内面には木質が遺存している。

刀子（図40―１～６）　刀子は10点前後確認されるが、そのうち６例を報告する。

刀子は刃部の長さや幅によって大型のもの（１）、中型のもの（２，３，４）、小型のもの（５，６）とに３区分できる。大型の１は推定全長15.2cm、刃部の長さ11.0cm、刃幅2.2cm、背の厚さ３mmである。茎部には部分的に木質が付着し柄がついていた可能性がある。もっとも小型の６は刃部片であるが、現長4.8cm、刃幅5mmで、背の厚さ１mmときわめて薄い。

鉈（図40―７～10）　梅原報告では12点前後あったと推定されている。刃部の確認できるものは３点あるが、８と９では中心部がわずかに広がる刃部をもち、断面の弯曲が顕著である。８を代表としてその寸法をみると現存長7.0cm、刃部幅７mm、茎部の幅６mm、厚さ３mmである。これに対し、７は刃部の先端が細くなるものの断面形は凸レンズ状になる。本例はやや細身で茎部の幅４mm、厚さ２mmである。茎部の断面形はすべて長方形であり、９には一方の長辺側に木質の付着が認められる。なお９と10は同一個体の可能性があるが、接合関係にはない。

鑿（図40―11）　袋部をもつ鑿で、長さ12.2cm、袋部の長さ3.8cm、中心部の厚さ1.1cmである。袋部の内面には木質を残す。

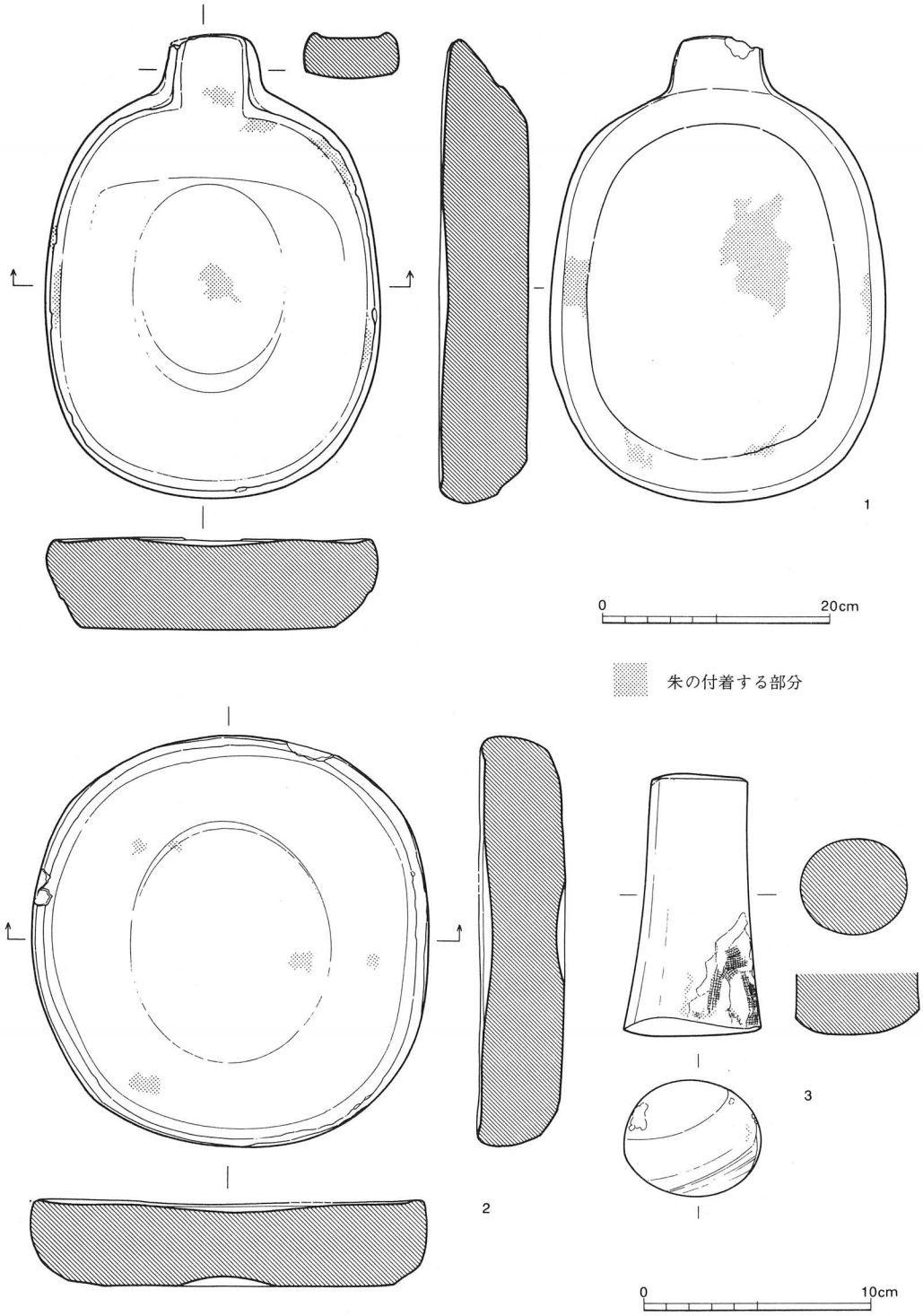


図41　石臼・石杵実測図（3のみ別縮尺）

棒状品（図40―12～16）　梅原報告では長さ23cm程度の長さをもつ棒状品が３点確認されている。これらは２本が端部付近で交差し、反対側の先端部は尖る形状であったことも指摘されている。12から16までの棒状品がその部分破片であることは確実であるが、全体の形状は復元しえない。寸法を16に代表させて述べれば、現存長9.7cm、断面は円形であり、２箇所で厚さを計測しているが、上方が径８mm、下方が径６mmとなり一方が徐々に細くなる。12と13は交差部分の破片であるが、いずれの破片でも２本の棒は交差部で「く」の字に屈折していることと、屈折部を境に断面形が円形から方形に変わることで共通する。ただし２本の棒がどのような組み合わせ関係をもっていたのかは不明である。たんなる銹着である可能性も残している。

(5)　石臼・石杵（図41，図版27～29）

石臼２点と石杵１点が出土している。１は石室内から出土したもので、楕円形を呈する摩擦面の一端に注ぎ口をつけた形態の、いわゆる片口式の石臼である。長径40.5cm、短径29.0cm、高さは7.8cmある。石材は東京国立博物館による鑑定によれば微斑糲岩であるとされる。[(5)]上面の成形にあたっては、外周部分を均等に削り込むことによって縁部を堤状の縁取りに仕上げ、同時に摩擦面の中心部を相対的に高くしている。注ぎ口は長さ5.6cm、幅6.0cmである。摩擦面は全体に平滑であるが、とりわけ中央部や注ぎ口との境界付近などは非常になめらかで摩耗が著しい。中心部には長径約18cm、短径13.5cmほどの範囲でくぼむところがあり、擦り合わせ作業にはこの部分がもっとも多用されたとみられる。このくぼみの中心部の深さは７mmほどである。なお側面は丸みをもつが、なかほどに段が設けられており、この段を境に底部は椀状におさめられている。底部は平坦であり、この面も比較的平滑に仕上げられている。ただし底面が使用された形跡はない。図の網カケ部は朱の付着範囲を示しているが、摩擦面の中心部のほか側面の下半部や底面にも認められる。２は石室の蓋石上に伏せ置かれていた石臼である。四方がやや角ばった円形を呈し、長径35.5cm、短径24.0cm、高さは7.5cmある。石材については１と同様微斑糲岩製であるとの所見が示されている。摩擦面の周縁に堤状の縁取りをもつ点や、摩擦面の中央部分が特別になめらかで径22cmほどの範囲でくぼむことなど、上面の形状は１と類似するところが多い。側面の下半部には稜をもち、底部にむかって幅を狭める。底部の中心部分には径９cm、深さ１cmのくぼみがつくられている。

３は石杵である。石室内から出土したもので、出土位置は１の石臼直下であるため、この石臼とセットで使用された可能性がある。石材については安山岩製であるとの所見が示されている。裾広がりの乳棒状品で、断面は楕円形を呈し、長さ11.5cm、中心部の厚さ4.5cmである。広い方の端面（図の下端部）は非常になめらかであるため、こちらが主要な擦り合わせ面であると考えられる。この面の長径は6.0cm、短径5.1cmで、長軸に沿うなだらかな稜線が入り、短軸方向に凸面をなす。反対側の端面も平滑であり、こちらの側も使用された可能性はある。なお、網カケ部には朱が認められ、側面の下半部には布が付着している。[(6)]

2　墳丘出土の埴輪、土器（図42～48，図版34～40）

墳丘からは埴輪と土師器が出土している。埴輪はコンテナに約60箱、土師器は破片が数点出土している。筍栽培のための客土、および墳丘盛土流出土中から検出されたものがほとんどであり、原位置にあったものはない。ただし、H15とH21は東クビレ部の原位置近くにあったものと推定されている。埴輪は円筒埴輪が大部分であり、以下では円筒埴輪を中心に記述する。

これまでの調査概要において、埴輪はすでに部分的に報告されているが[(7)]、今回さらに整理作業と検討を行い、2次から6次までの調査で出土した埴輪をまとめて報告した。なお、本報告で図示した埴輪、土器の番号は、今回新たにつけ直したもので、これまでの調査概要の実測図番号となんら関係はない。今回掲載した実測図とこれまでに発表した実測図の関係は表1に示したので参考にしていただきたい。本報文はこれまでの調査概要の内容を基礎とし、新たな知見を加えるとともに一部訂正を行った。これまでの報告と内容が異なる記載がある場合は、本報告の記述を採用されたい。

(1)　円筒埴輪（図42～47，図版34～40）

形態の特徴　大きく接合できた個体もあるが、完全に復元できたものはない。したがって、段数は不明であるが、H36の状況からみて少なくとも突帯5条で6段以上の構成であることがわかる。底部には全周するものもあるが、口縁部や胴部では残存率が良好なもので円周の3分の1である。本古墳からはヒレ付円筒が出土している。また、H1において、透孔から90°振った位置にヒレの付く痕跡が見あたらないことから、ヒレを有しない普通円筒は確実に存在する。外面には黒斑がみられる。また、数片だけであるが、外面に赤色顔料を塗布したものが存在する。

口縁部径は28～31cmの小さいものと、33～38cmの大きいものの2者がある。底部径にも

表1　埴輪実測図の新旧番号対応関係

新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
H1	H1(11冊)	H12	H42(15冊)	H23		H34	
H2	H2(11冊)	H13	H40(15冊)	H24		H35	H25(11冊)
H3	H3(11冊)	H14	H68(24冊)	H25	H47(15冊)	H36	H27(11冊)
H4	H10(11冊)	H15	H9(11冊)	H26	H86(24冊)	H37	第42図-1(13冊)
H5		H16	H69(24冊)	H27	H26(11冊)	H38	H80(24冊)
H6	H12(11冊)	H17	H32(15冊)	H28	H46(15冊)	H39	H34(15冊)
H7		H18	H70(24冊)	H29		H40	H33(15冊)
H8	H66(24冊)	H19	H62(24冊)	H30	H48(15冊)	H41	
H9	H81(24冊)	H20	H4(11冊)	H31	H83(24冊)	H42	H18(11冊)
H10	H43(15冊)	H21	第42図-2(13冊)	H32	H49(15冊)	H43	H60(15冊)
H11	H39,50(15冊)	H22	H7(11冊)	H33		H44	H61(15冊)

新番号は本報告書の実測図番号を、旧番号はこれまでの調査概報での実測図番号を表し、(　)内は『長岡京市文化財調査報告書』の冊数を示す。

24.5～26cmのものと27.5～30.5cmの大小２種が存在する。口縁部と底部の大小はそれぞれ対応する可能性が高いので、埴輪には大小の２種類が共伴し、その形状は両者ともに口縁部径と底部径の差が小さく、やや外開きになるものの直立に近い姿が考えられる。

口縁部の形態　口縁部は端部を鋭く屈曲させるものが多い。最上段突帯から口縁端までの長さは６～10cmとばらつきが顕著である。端部の形態にもいくつかバラエティーがうかがわれる。強いヨコナデが施され、明瞭に端面をなし上下に肥厚をするもの（H16, H17, H18）や、端面を作らず丸く終わるもの（Ｈ１）がある。特異なものとしては、端部をつまみ上げるようにナデを施し、受け口状になっている個体（H11）もある。なお、口縁部にヘラ描きの線刻を持つもの（Ｈ５）がある。本例は２本の直線を約75°に組み合わせ、山形を描いている。出土埴輪中、線刻を有するものはこれ１点のみである。

突帯　突帯の幅は0.6～1.4cm、器壁からの高さは0.8～1.5cmである。突帯には強いナデによって中位が薄く端部は厚くなった細身のものと、幅が広く突出度の小さいものがある。それぞれの端面には内弯するものとしないものとがある。

突帯間の長さが判明する資料は、ヒレ部に残る痕跡から推定できるものを含め14点存在する。Ｈ３を除いた場合、すべて11～13cmの範囲におさまり、口縁部の長さやヒレ部の幅に比べると長短の差が小さい。Ｈ３はただ１点16cmと幅が広い。H15の場合、底部から最下段突帯までの長さは19.5cmである。

突帯を付ける際には、あらかじめ突帯を付ける位置に棒状工具で円ないしは方形の刺突を施す（図版37―２）。刺突の代わりに幅0.5cm、深さ0.1cmの凹線を引くこともあるが、これは少数である。この刺突の性格については突帯の接着をよくするための工夫、突帯の位置を決めるための目印[8]の２通りの考えがある。どちらの可能性も考慮する必要があるが、ここで注意したいのは突帯間の長さである。南原古墳の場合、口縁部の長さが個体ごとに異なることとは対照的に一定幅にまとまるのである。したがって、この刺突は突帯間の間隔を一定にするための目印であった可能性をうかがうことができよう。このことと関連して同じ乙訓地域の鳥居前古墳の埴輪では、その突帯間の長さが12～15.5cmであり、長短の差が大きい。鳥居前古墳の埴輪には突帯を貼り付ける前の刺突はなく、この点からも上記の推論が支持される。

透孔　透孔には長方形、円形、三角形の３種類がある。それぞれ、長方形22、円形８、三角形４、長方形か三角形か判別のつかないもの14個の破片が出土した。本来の透孔の比率を直接示しているわけではないが、長方形のものが目立つことは指摘できる。各段の透孔の数、方向は不明である。ただしヒレ付円筒においては、ある程度の推定が可能である。Ｈ２は倒立の三角形の透孔を有する。透孔のある部分から90°振ったところにヒレの剝離痕が存在する。このことより、４方向に透孔が入ることはありえず、３方向か２方向であったと考えられる。しかし、３方向と想定した場合、ヒレを境にして表に１個、裏に２個の透孔が入ることになり不自然で

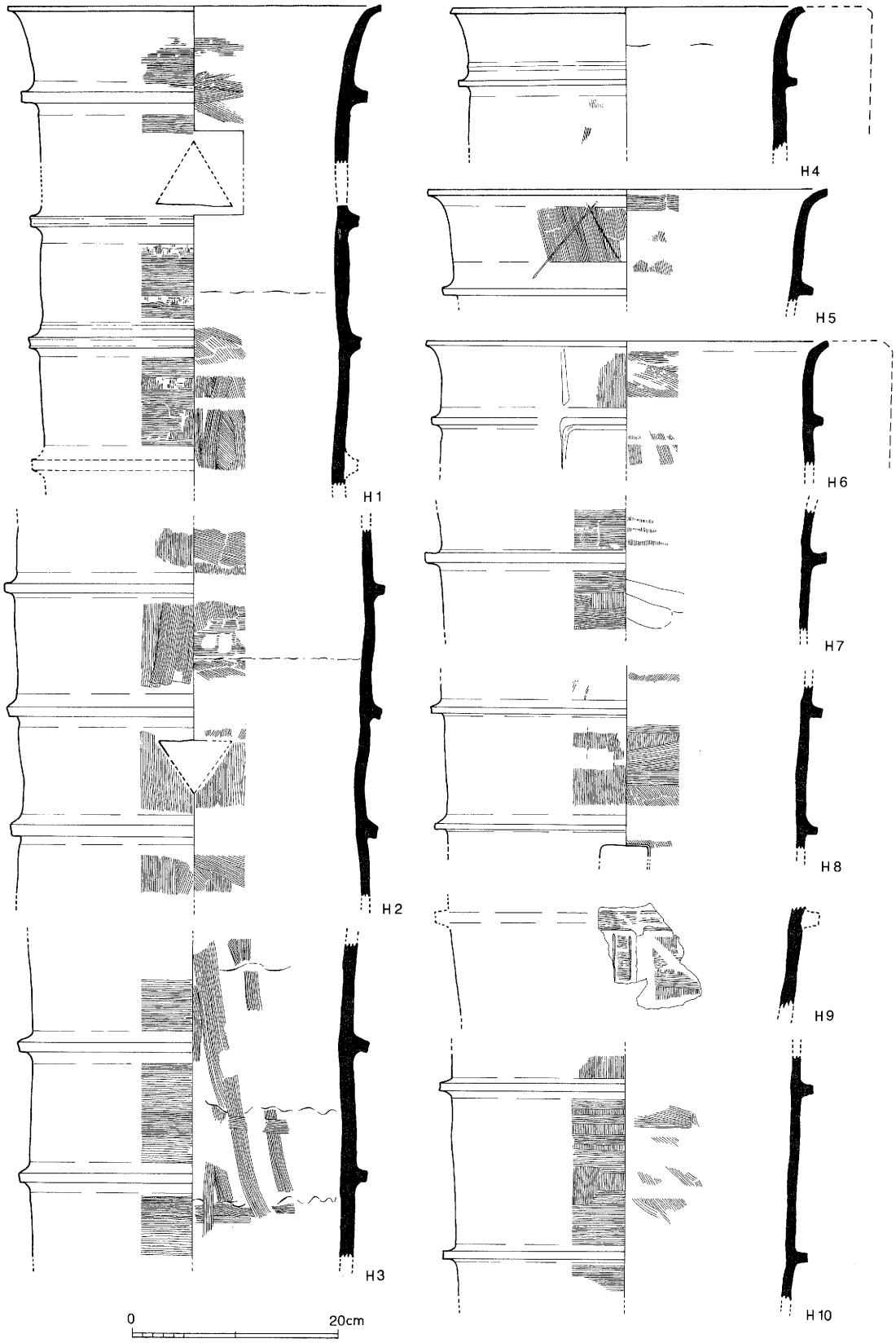


図42　円筒埴輪実測図(1)

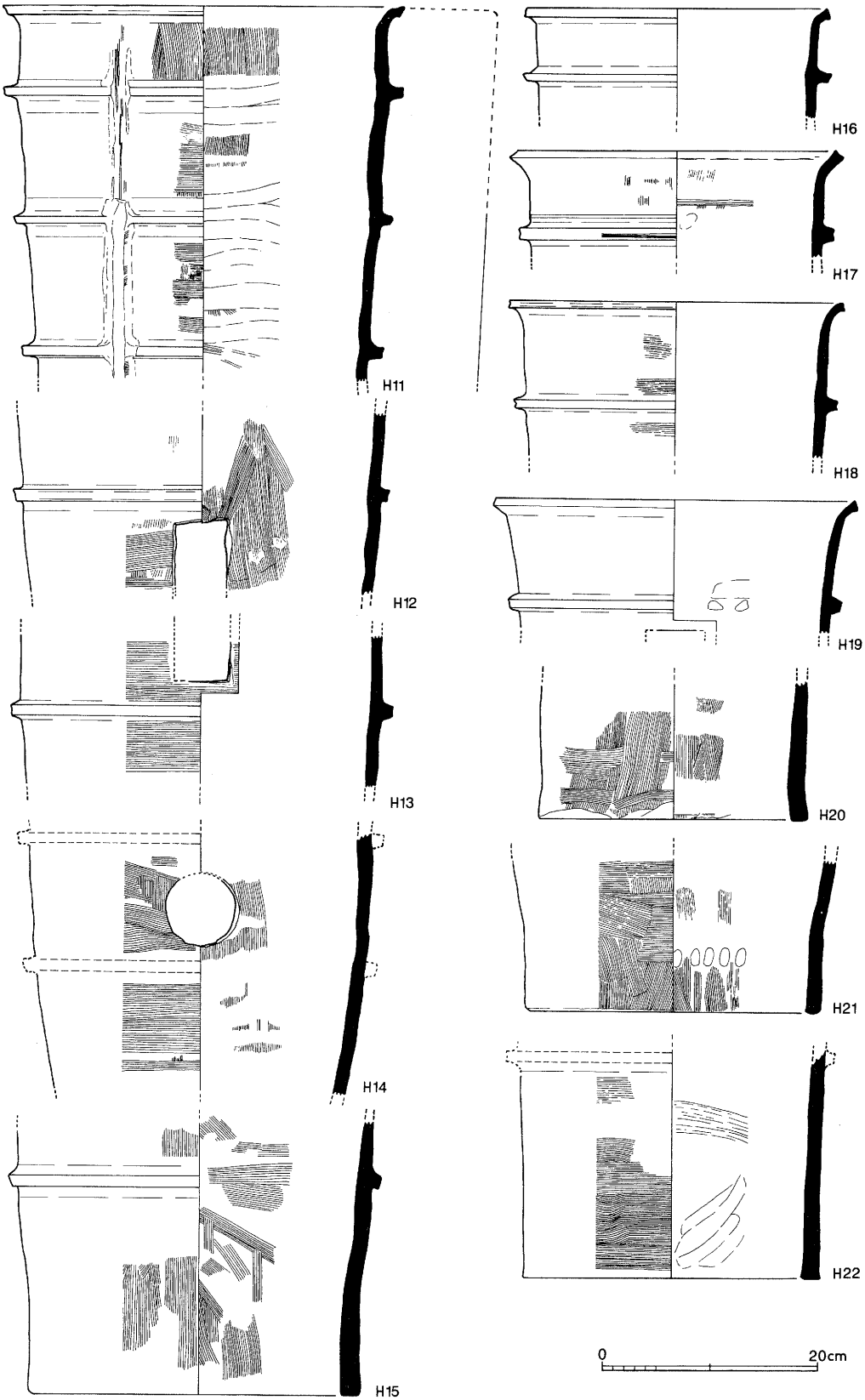


図43　円筒埴輪実測図(2)

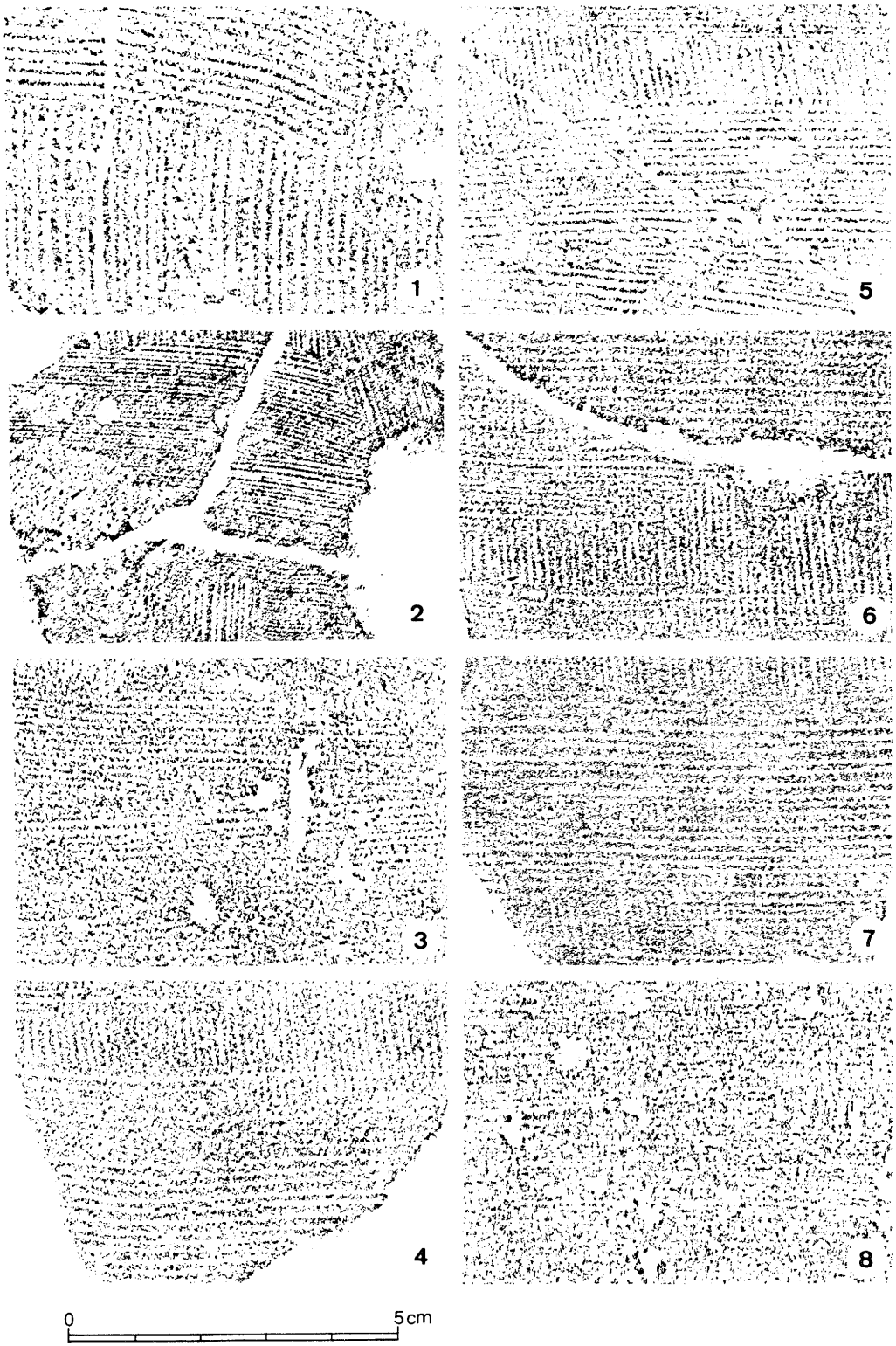


図44　円筒埴輪ハケメ拓影

ある。こうした理由からヒレ付円筒は１段に２方向の透孔を持つものと考えたい。

調整　内面調整はタテハケ、ナナメハケが一般的である。一部にはタテハケのあとユビナデを施しハケメを消すもの（Ｈ７，H11）や、ヨコハケを施すもの（Ｈ２，Ｈ８）がある。外面調整は１次調整にタテハケ、２次調整でヨコハケが施されることが多いが、ヨコハケが施されない個体（Ｈ２，Ｈ８）もある。このほかに、口縁部ではハケメを丁寧に消してしまう個体（Ｈ４，H17）もある。底部の外面調整にも１次調整のタテハケのみのもの（H15）と、タテハケの後ヨコハケを施すもの（H20，H21，H22）があり、その割合はほぼ１：１である。ヨコハケは一般に突帯を貼り付けた後になされるものであるが、一部に突帯貼り付け前にヨコハケを施す個体（Ｈ９）もある。ヨコハケは断続的かつ切り合いを有するもので、器壁の上で工具を止める静止ヨコハケはまったく見られない。南原古墳では同一個体の内面調整、外面の１、２次調整ともすべて同じ原体を用いているものと、２次調整に別の原体を用いているものがある。ハケの原体は条線の密度から少なくとも９種類が存在するようである（図44，図版40）。

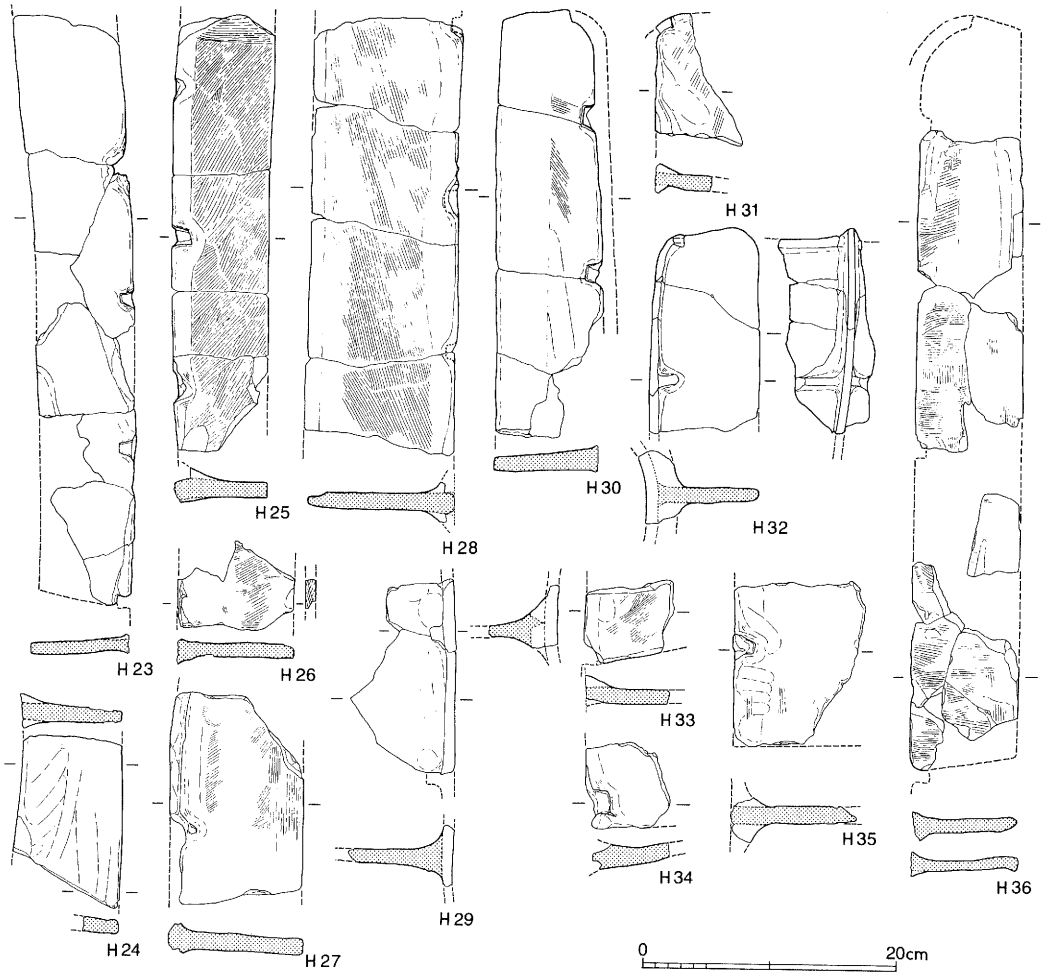


図45　埴輪ヒレ部実測図

原体A（4本／cm）図版40—1

原体B（5本／cm）H12、図44—1、図版40—2

原体C（7本／cm）H10、H15、H25、H28、図44—4、図版40—3

原体D（8～9本／cm）H5、H7、H11、図44—5、図版40—4

原体E（9本／cm）H1、H2、H14、H21、H22、図44—3、6、図版40—5

原体F（10本／cm）H19、図44—7

原体G（11本／cm）H26

原体H（13本／cm）H3、H8、H27、図44—2、図版40—6

原体I（17本／cm）図版40—7

ほかに、通常のハケメのような条線が見えない個体（図44—8，図版40—8）がある。これは、夏目が十分に磨滅していない原体か、特に何の加工も施さない板状工具でヨコ方向のナデを施したものと思われる。

ヒレ（図45）　コンテナ10箱分が出土している。ヒレの幅は6.5～11.5cm、厚さ1～1.5cmである。ヒレはすべて口縁端部から取り付く[9]。下端は最下段突帯で終わるもの（H33，H34）と最下段突帯の下7cmまで伸びるもの（H35）がある。上端は水平であるが、下端は水平のもの（H35）と若干斜め上がりになるもの（H23，H33，H34，H36）がある。調整はナナメハケを施すもの（H25，H26，H27，H28）、ヨコハケを施すもの（H36）、ハケメを丁寧にナデ消すもの（H23，H24，H29，H32）がある。H28はナナメハケの後、端部に強いナデ調整を加えたため、端部がくぼむ。円筒埴輪の胴部に2～3本の沈線を刻むもの（H9，H11）がある。これは、ヒレを取り付けやすくするための工夫と思われる。さらに、ヒレを突帯部分に取り付ける際、突帯をそのまま残すもの以外に、突帯を切り取るもの、指で押しつぶすもの、突帯にV字形の切込みをいれるものがある。

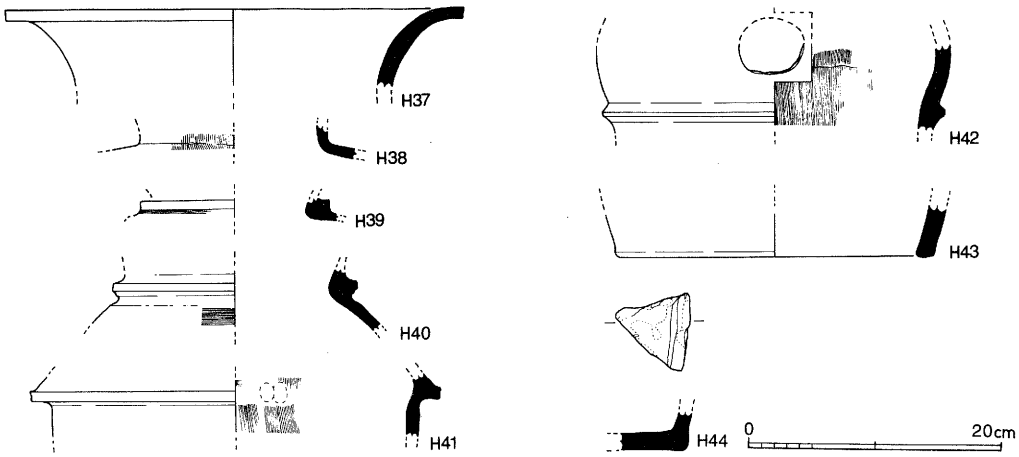


図46　朝顔形円筒埴輪・形象埴輪実測図

朝顔形円筒埴輪（図46）　朝顔形円筒の口縁部、頸部、肩部の破片が10余片出土した。口縁部は１片しか出土していない（H37）。口縁部の復元径36cm。傾きが急なことからみて、中途で一度屈曲するタイプと推定される。頸部には突帯を持つもの（H39，40）と持たないもの（H38）がある。また、肩部に透孔を持つものが存在する（H42）。H43は小破片のため不確定であるが、他の底部より外傾することから壺形埴輪の底部となる可能性がある。なお、朝顔形円筒の胴部にヒレが付くかどうかは不明である。

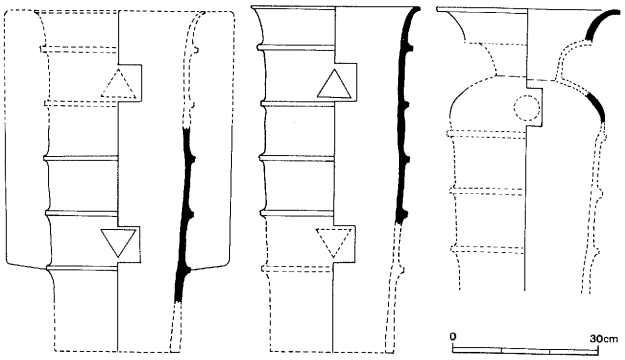


図47　円筒埴輪の復元案

胎土　黄褐色を基調とし、小豆色のクサリ礫、長石、石英、チャートを少量含むものと、暗茶褐色を呈し、角閃石様の粒子を含むものの２者がある（巻頭図版５）。前者は乙訓地域の他の古墳のものとかわらず、南原古墳においてもこの胎土の埴輪が大部分を占める。一方、後者は当地域では見られない胎土であって、他地域産と考えられる。南原古墳でも10数片しか出土していない。この胎土にて製作された埴輪には円筒埴輪の胴部数点、朝顔形円筒の口縁部（H37）のほかに、H43、H44がある。

当古墳の埴輪について、三辻利一氏により螢光X線による胎土分析が行われ、すでにその結果が報告[10]されている。あわせて参考にされたい。三辻論文において用いられた試料のNo.１、２、14が明褐色の胎土を、No.13が暗茶褐色の胎土をもつ破片である。この分析によれば、黄褐色の胎土を持つ埴輪は、Sr—Rb分布において同じ乙訓地域にある鳥居前古墳の埴輪と同様の傾向を示すが、暗茶褐色の胎土はまったく異なった分布域をなすということである。

円筒埴輪の復元案（図47）　次に円筒埴輪の段数を検討する。H１は上から２つめの段に正立の三角形の透孔を持ち、さらにその下の２段は透孔を持たない。この２段の残存率は円周の３分の１強であり、１段に施される透孔の数が３、４個と仮定した場合、この破片にはその一部があらわれるはずである。２個と仮定した場合も、上段の透孔の軸線上から90°振った部分に透孔の痕跡はなく、この仮定は成り立ちにくい。したがって、この個体は上から口縁、透孔を有する段、無孔の段が２段という段構成になる。

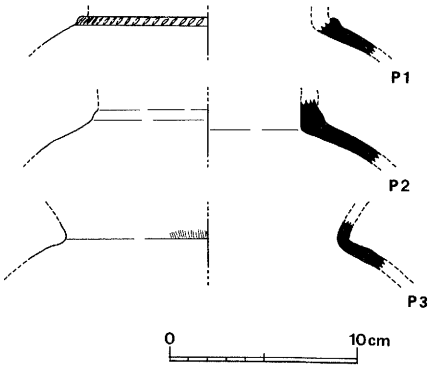


図48　土器実測図

次に、Ｈ２では残存部の最下段突帯は幅が大きく、下向きであり、底部（H15）の突帯の形状に類似する。このことより、Ｈ２の最下段は底部にあたると推定される。すなわち、Ｈ２の残存部は、上から２段連続して透孔のない段、その下に透孔を持つ段、底部と続くことになる。このＨ１とＨ２の無孔の段がそれぞれ対応すると考えられるので、南原古墳の埴輪は少なくとも５条突帯６段構成に復元され、図47のようになる。これは、Ｈ８、H36の状況とも矛盾しない。その場合の復元高は最低70cmとなる。

これまでの復元案[11]と比べて、ヒレが口縁端部から始まる点以外はおおむね変化はない。ただし、透孔の数と配置および段数についてはあくまでも推定であることを断わっておきたい。

(2)　形象埴輪（図46―H44）

Ｌ字形に屈曲する破片が１片出土している。形象埴輪の一部となる可能性が高いが、もとの形状を復元することは困難である。前述のように暗茶褐色の胎土を有しており、他地域産の可能性がある。

(3)　土器（図48，図版39―２）

第２次調査で墳丘を測量中、数点の土器片（Ｐ１，Ｐ２ほか）を採集した。さらに、第５次調査でも前方部からＰ３が出土した。Ｐ１は以前、朝顔形円筒の頸部と報告[12]したが、埴輪の胎土とは異なって砂粒をあまり含まず精良であり、器壁も薄いことから土器の頸部と判断した。頸部径14cm。頸部に幅0.8cmの突帯を有し、突帯に刻み目が入る。外面には丁寧なナデ調整が施されるが、内面調整は風化のため不明である。Ｐ２は垂直に立ち上がる頸部を持つ。その径は12.5cmである。頸部に隆起する部分があり、Ｐ１のような突帯と思われるが、磨滅しており詳細はわからない。調整は内外面共に磨耗のため不明である。Ｐ２はＰ１と共に二重口縁壺になる可能性がある。Ｐ３は壺形土器の頸部である。頸部径15cm、外面にタテハケを残す。内面調整は風化が激しく不明である。

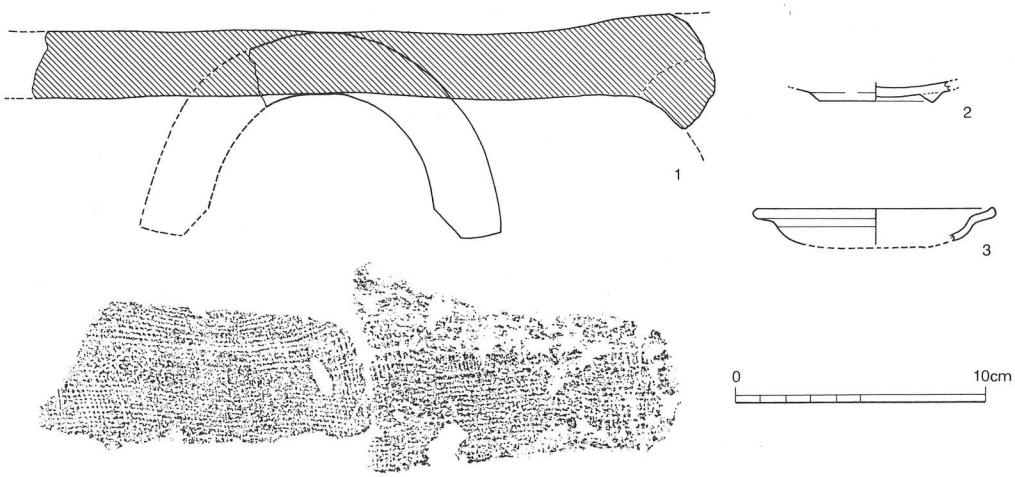


図49　瓦・土師器・瓦器実測図

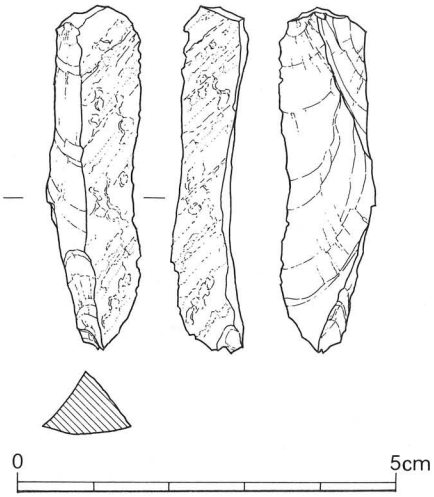


図50　石器剝片実測図

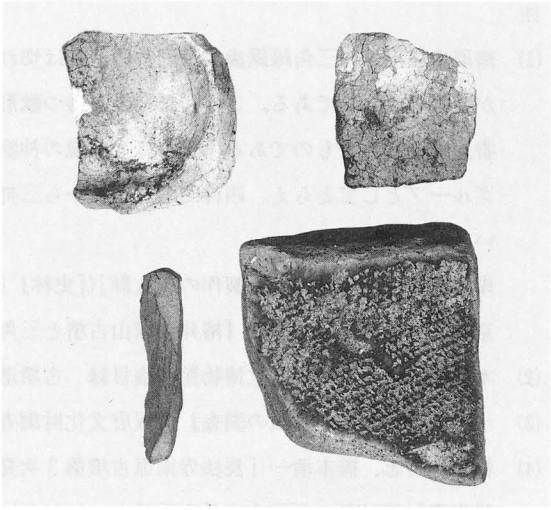


図51　瓦・瓦器・石器剝片

3　その他の遺物（図49～51）

１区において、墳丘盛土直上に堆積した黄灰褐色土中より丸瓦および瓦器椀が、また西クビレ部排水溝上部の攪乱土中から土師器皿が出土した。このほか墳丘上より剝片が採集されている。このうち丸瓦と土師器皿、および剝片は各１点であり、瓦器椀についても１個体分であろうと思われる。

丸瓦（図49―１）　玉縁付のものであり、凹面に布目痕を残す。布目痕には綴じ合わせ目が認められる。玉縁部は肩、基部の部分で折損するが、断面に粘土つぎ目が残る。玉縁部の粘土板に胴部を形成する粘土板を上から重複させて接合する手法をとったものであろう。側面は凹面に面取りを施す。凸面の調整は風化が顕著なため観察不可能である。

瓦器椀（図49―２）　破片が10数片出土したが、実測可能な部分は底部に限られる。断面三角形の簡単な高台がつき、高台径は4.5cmをはかる。

土師器皿（図49―３）　復元口径は9.5cmとなる。淡黄褐色を呈し、精良な胎土が用いられている。本例は器壁がうすく、口縁端部のナデを施した部分は強く外反しており、いわゆる「て」の字状口縁をなす。

剝片（図50）　本例はサヌカイト製の縦長剝片であり、長さ4.5cmである。主要剝離面には打点を残し、調整痕は認められない。表面の風化が顕著で灰白色を呈することからみて、旧石器の可能性が高い。断面は三角形で１辺には自然面を残す。

注

(1) 南原古墳出土の三角縁鋸歯文帯四神四獣鏡は切れ上がった目尻と直線的で鋭い鼻筋を持った獣形が特徴のひとつである。こうした特徴を持つ獣形は一部の獣文帯三神三獣鏡（京大目録104、105番）にみられるものである。三角縁神獣鏡の神獣像表現を分析した岸本直文はこれらを表現③のグループとしてとらえ、四神四獣タイプから三神三獣鏡タイプへの過渡期に位置する一群としている。

岸本直文「三角縁神獣鏡製作の工人群」(『史林』第72巻第5号　史学研究会、1989年)。

京都大学考古学研究室編『椿井大塚山古墳と三角縁神獣鏡』京都大学文学部、1989年。

(2) 本村豪章ほか『東京国立博物館図版目録　古墳遺物篇（近畿Ⅰ）』東京美術、1988年。

(3) 小林行雄『松岳山古墳の調査』大阪府文化財調査報告書第5集　大阪府教育委員会、1957年。

(4) 都出比呂志、橋本清一「長法寺南原古墳第3次発掘調査概要」(中尾秀正編『長岡京市文化財調査報告書』第11冊　長岡京市教育委員会、1983年)。

(5) 本村豪章ほか『東京国立博物館図版目録　古墳遺物篇（近畿Ⅰ）』(注2文献)。

(6) 付着する赤色顔料については「朱」と表記しているが、化学的な分析は経ていない。肉眼観察の結果、色調が鮮かなピンク色であるため水銀朱であろうと判断した。

(7) 都出比呂志、橋本清一「長法寺南原古墳第3次調査概要」(中尾秀正編『長岡京市文化財調査報告書』第11冊　長岡京市教育委員会、1983年)。

都出比呂志、福永伸哉「長法寺南原古墳第4次調査概要」(中尾秀正編『長岡京市文化財調査報告書』第13冊　長岡京市教育委員会、1984年)。

都出比呂志「長法寺南原古墳第5次調査概要」(中尾秀正編『長岡京市文化財調査報告書』第15冊　長岡京市教育委員会、1985年)。

福永伸哉、松木武彦、杉井健「長法寺南原古墳第6次調査概要」(中尾秀正編『長岡京市文化財調査報告書』第24冊　長岡京市教育委員会、1990年)。

(8) 坂靖「円筒埴輪の技法―特に凸帯設定前の方形刺突について―」(森浩一編『園部垣内古墳』同志社大学文学部文化学科、1990年)。

(9) 注7の1983年文献では、ヒレが口縁直下の突帯から取り付いている個体を図示しているが、新たな接合の結果、口縁端部までヒレが及ぶことが判明した。

(10) 三辻利一「南原古墳および鳥居前古墳出土埴輪の螢光X線分析」(福永伸哉編『鳥居前古墳―総括編―』大阪大学文学部考古学研究報告第1冊、1990年)。

(11) 注7、1983年文献。

(12) 注7、1983年文献。

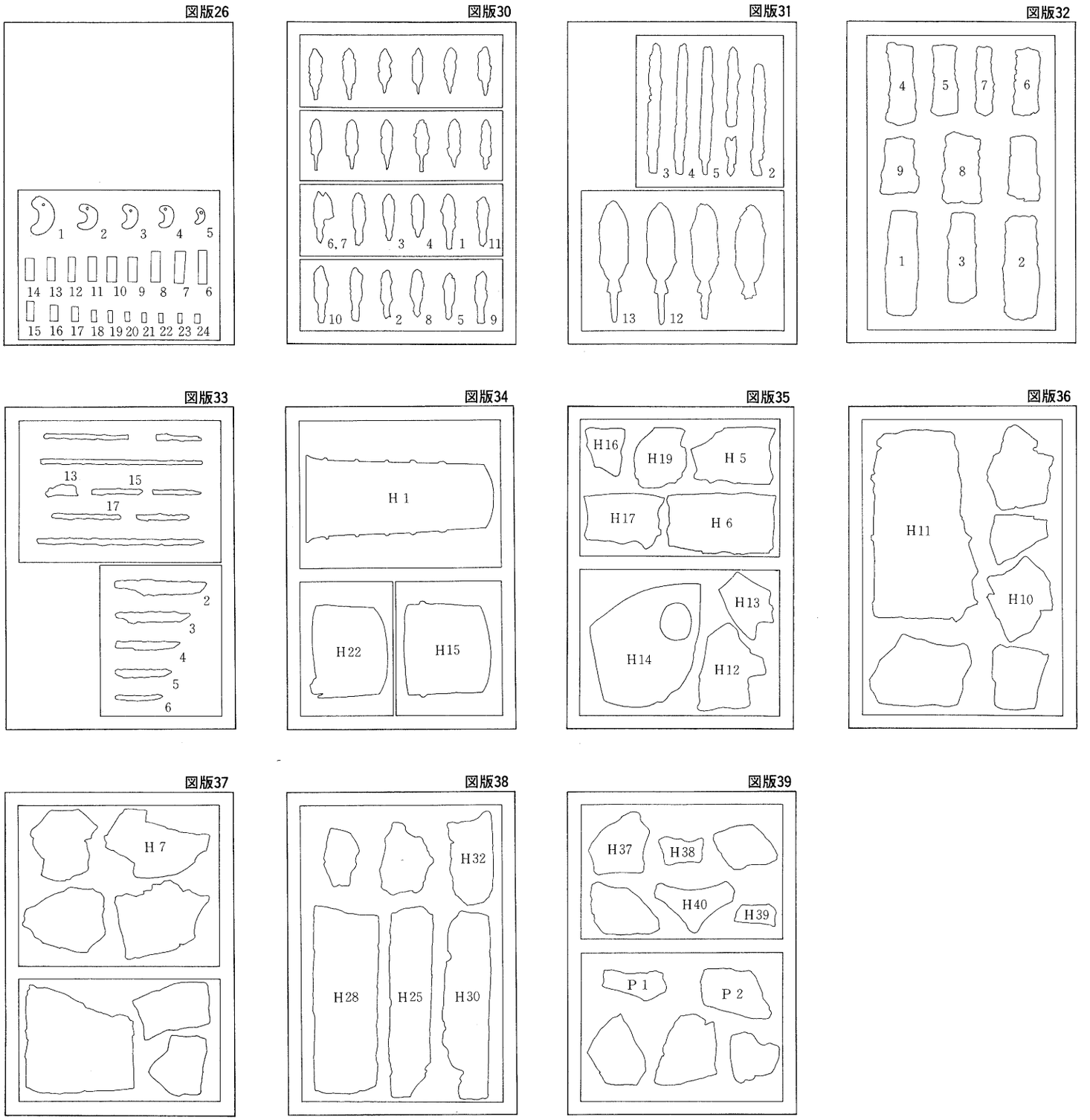


図52　実測図番号と図版番号の対応関係

第５章　南原東３号墳の調査概要

１　埴輪棺の出土状況（図53，54，58）

南原東３号墳は1985（昭和60）年度の遺跡パトロールによって発見されたものである。これは前年の1984（昭和59）年度に農道新設工事に伴って1984年３月７日に実施した第84182次調査[(1)]の再調査として行ったもので、埴輪棺の検出に伴い第85037次[(2)]として1986年６月15日から７月13日にかけて断続的に立会調査を行うこととなった[(3)]。

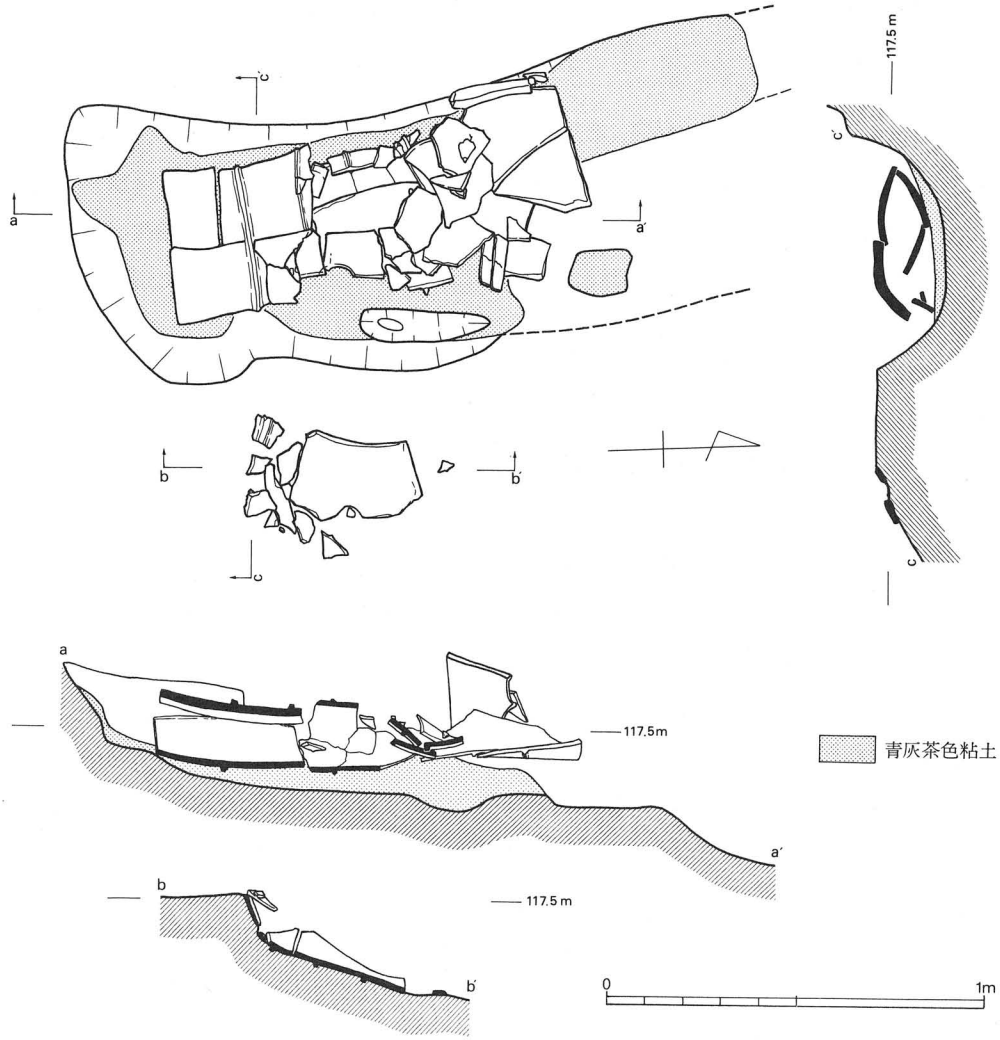


図53　埴輪棺出土状況実測図

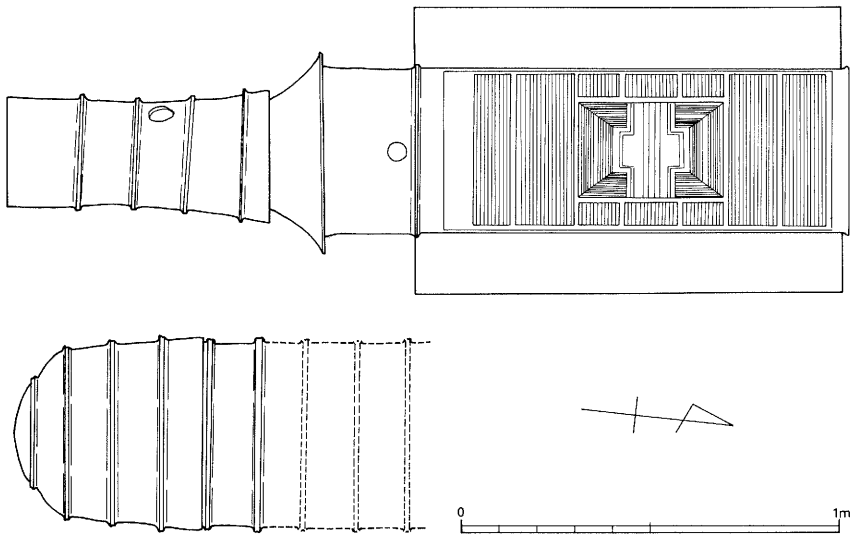


図54　埴輪棺出土状況復元模式図

場所は長法寺南原古墳の東、南原東古墳群１号墳の南に位置する竹藪内で、北西から南東方向に落ちる傾斜面にあたり、付近での標高は約118ｍを測る（図２）。転用埴輪棺は農道工事によって削られた崖面に一部が露出した状態で確認され、破片が周辺および既に道路として整備された盛土内に散乱した状態で検出された。

転用埴輪棺の埋納施設は、傾斜面にほぼ直交するように南北方向に掘られた長方形の土壙で、北東部分は完全に削平され、上部もかなり攪乱を受けていた。そのため土壙の正確な規模は不明な点が多いが、幅約0.8ｍ、長さは２ｍ以上をはかる。土壙内部には厚さ約0.1ｍの青灰茶色粘土を敷き、その上に埴輪を埋置している（図53）。埴輪は南側から、上部を北に向けた普通円筒埴輪、その北に朝顔形円筒埴輪の口縁部、さらにその北に上部を北に盾面を上に向けた大型の盾形埴輪を置くが、先述の如く北東部は完全に削平されており、盾形埴輪の北側の状況は不明である。ただ南側同様朝顔形円筒埴輪の口縁部によって塞がれていた可能性は高いとみられる。

埴輪はいずれも土圧によって潰れており、南側の普通円筒および朝顔形円筒埴輪口縁部はほぼ現状のまま残されていたが、盾形埴輪は盾面の大半と口縁部および一方のヒレ部を完全に失っていた。なお現存する部分からは人骨や副葬品等は一切検出されなかった。

またこの他に、いわゆる特製埴輪棺も検出されている。これは釣鐘形を呈する蓋の部分で、普通円筒の東側で縦半分に割れた状態で出土しているが、原位置を保つものではない。周辺からは棺身の口縁部を検出しており、蓋を受けるために先すぼまり気味に作っている。出土状況に不明な点が多いが、上記の転用埴輪棺と並行する埋葬施設が存在していた可能性も考えられる（図54）。

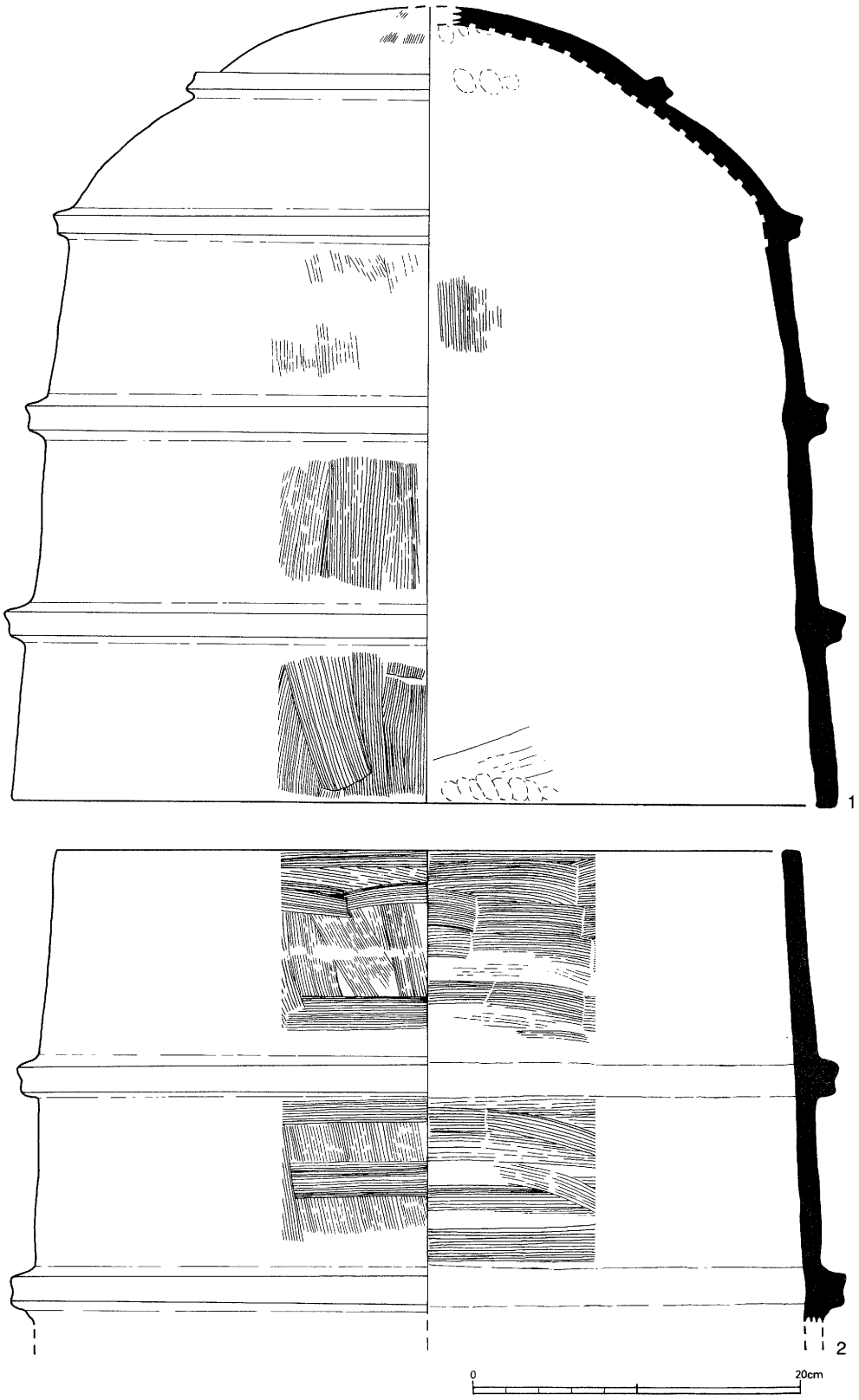


図55　特製埴輪棺実測図（1の上半部の厚さは計測不能）

2　埴輪棺の観察（図55～57，59）

本古墳からは埋葬のため特別に製作された特製埴輪棺と転用埴輪棺が検出された。特製埴輪棺は蓋と棺身からなっており、転用埴輪棺には普通円筒、朝顔形円筒、盾形と思われる形象埴輪が利用されている。副葬品は検出されなかった。

特製埴輪棺（図55）　特製埴輪棺は蓋と棺身部分から構成される。蓋は底部径51cm、器高48cm、４条突帯を有する。残存率は円周の約２分の１である。遺存している範囲では黒斑は見られないが、後述するように棺身では黒斑が見られるので、黒斑を有していた可能性もある。外面調整は基本的に１次調整のタテハケのみである。上部３段はハケの後丁寧なナデを施し、ハケメを消している。内面はタテハケが看取されるが、丁寧なナデが施され、ハケメは消えている部分が多い。天井部と底部内面には指頭圧痕が残る。突帯の幅は２cm、器壁からの高さは1.3cmである。突帯の端面はやや内弯する。胎土には長石、石英、クサリ礫を含むが、砂粒は少量で緻密な胎土である。大形品であるにもかかわらず、器壁も薄く、全体的に丁寧な造りである。本例のような釣鐘状の形をした特製埴輪棺の蓋は珍しい。突帯の数は異なるが、京都府八幡市狐谷横穴周辺から出土した特製埴輪棺の蓋[(4)]が本例に比較的類似する。

棺身となる円筒部は２段分が残っているにすぎず、全長は不明である。口縁部径は46cmである。外面に黒斑を有する。遺存する範囲では透孔は認められない。外面は１次調整にタテハケ、ナナメハケ、２次調整にヨコハケが施される。ヨコハケはすべて断続的なヨコハケで、器壁の上でハケ原体を静止させるヨコハケは見られない。内面調整にはヨコハケが施される。内面調整のヨコハケは短い間隔で切り合いを有する。突帯の幅は約２cm、器壁からの高さは1.3cmである。突帯は丁寧にナデ調整が行われており、端面は内弯する。突帯間の距離は13cmをはかる。器壁は１cmと薄い。胎土は石英、長石、クサリ礫をやや多く含む。乙訓地域の胎土の可能性が高い。

盾形埴輪（図56－１）　転用埴輪棺において、朝顔形円筒埴輪の口縁部に底部を差し込んだ形で出土した。本例のような文様を持つ実用の盾はこれまで検出されておらず、この埴輪が盾を模倣して作られたかどうか疑問があるが、ここではいちおう盾形埴輪として報告する。

埴輪の遺存状況は良好でなく、文様を有する面を正面とするなら、正面向かって右半分はほとんど失われている。底部径は46cm、残存高130cmである。底部は正円に近いが、上部にいくにしたがい横に長い楕円となる。側面にはヒレを持ち、外見はヒレ付円筒埴輪のようである。外面には黒斑が見られる。胎土は石英、長石、クサリ礫を含み、伴出した普通円筒と胎土は類似する。径１cmの小礫を少量含み、やや粗雑な感じのする胎土である。

外面調整は、下から１～５段目までは基本的に１次調整のタテハケの後、ヨコハケを施したものである。ヨコハケは断続的なヨコハケである。ヨコハケはすべて突帯を貼り付ける際のナ

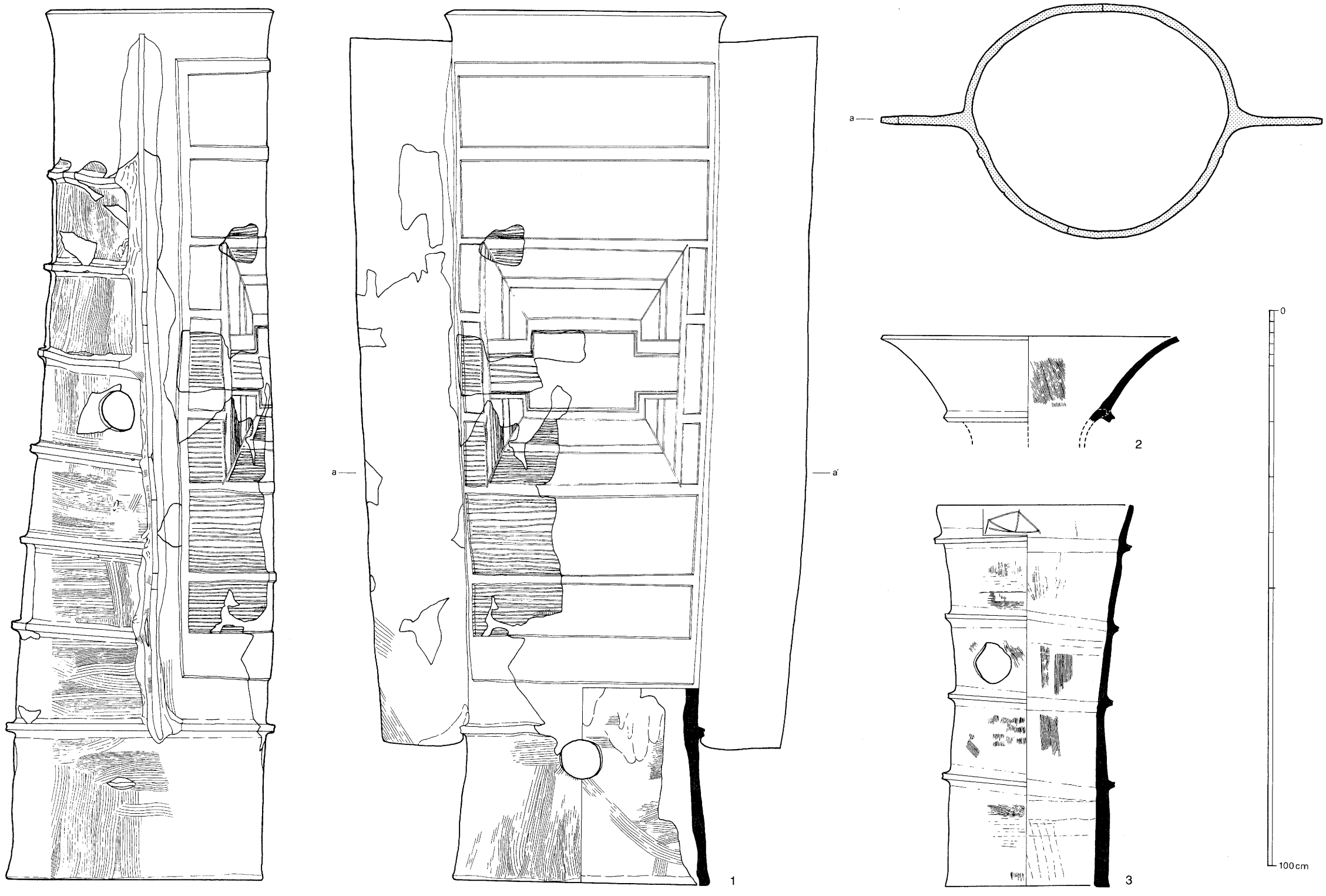


図56　転用埴輪棺実測図

デによって切られており、突帯を貼り付ける前に施されていることがわかる。下から３段目ではヨコハケの後、さらにもう一度タテハケを施している。６段目より上ではヨコハケは施されない。ここで注意したいことは、６段目にみられるタテハケが下から５条目の突帯を貼り付けた後に施されていることである。そして、このタテハケは６条目の突帯の位置ではナデによって切られており、６条目の突帯を貼り付ける前に施されていることがわかる。このことより、５条目の突帯のところまで粘土を積み上げ、そこより下部の整形と調整を行い、突帯を取り付けたあと、再び粘土を積み上げていったという工程が想像される。また、５条目の突帯を境にして、ヒレの胴部への接合法が異なることも注意される。ヒレを胴部に取り付ける際、５条目の突帯以下ではナデとハケを用いる。５条目の突帯より上ではハケは用いられず、ナデ調整のみが用いられる。内面調整はナナメハケの後にヨコハケが施されている。

最下段に一対の円形透孔が存在する。透孔の径は7.5cmである。また、下から５段目ではヒレ部のすぐ背後の位置に円形透孔が認められる。この段における透孔の数は不明である。

ヒレの下端部は最下段突帯の位置から始まる。上端部がどこで終わるかは不明である。ヒレの幅は15～17.5cmで、上方にいくにしたがい、やや幅を増していく。ヒレの表の面はナナメハケが施された後にナデ調整がなされ、ハケメが丁寧に消されている。裏面はナデが施されず、ナナメハケ、ヨコハケが残る。

文様が施される面は、まず幅1.3cm、厚さ２～３mmの突帯で区画される。区画は大きく分けて、区画内の文様が横方向の平行沈線だけからなる外区と縦、横、斜めの沈線を用いて文様を

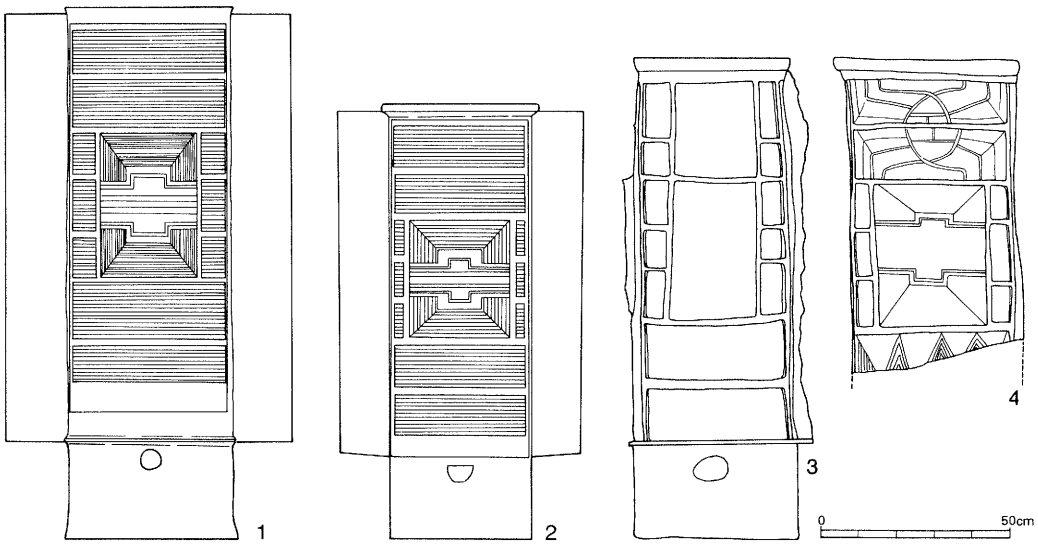


図57　南原東３号墳盾形埴輪復元模式図とその類例

1　南原東３号墳　**2**　乾垣内遺跡
3・4　不退寺裏山古墳（一部改変）
注２、６、７文献より再トレース

描く内区の２つに分けることができる。

外区では突帯によって区画されたあと、区画内のハケメをナデ調整で消すとともに、表面を平滑にする。その後、ヘラ状の工具で横方向の沈線を描く。１区画ごとの沈線数は定まっておらず、１区画に13から17本の沈線が引かれている。

内区は区画後、区画内に厚さ２～３㎜の粘土を貼り、区画の突帯と同じくらいの高さに隆起させる。このことにより、内区の文様帯は外区よりも一段高くなる。表面をナデによって平滑にした後、沈線で文様を描く。どのような順番で沈線が引かれたかは不明確である。内区の向かって左下では、２本の対角線が施されている。そのうち１本は短く、横の沈線によって切られている。しかし、長い方の対角線には横方向の沈線は１本も届いておらず、その前後関係は不明確である。長い方の対角線は縦方向の沈線を切っていることから、その後に引かれたことがわかる。横方向の沈線の中には、途中で消えてしまうものも存在する。

文様帯の遺存状況は良くないが、類例などから図57―１のように復元されている[(5)]。南原東３号墳の盾形埴輪と類似した埴輪に、京都府向日市乾垣内遺跡例[(6)]、奈良市不退寺裏山古墳例[(7)]がある。すべて埴輪棺として出土しており、棺専用に作られた可能性も考えられるが、埋葬する際にヒレ部は不要であり、乾垣内遺跡例や不退寺裏山古墳例では底部が失われているものがあることから特製棺ではないと判断する。盾形埴輪の円筒部の径が大きく、このことが死者を埋葬することに適していたため、棺身として利用する際に選択されたのであろう。

朝顔形円筒埴輪（図56―２）　転用埴輪棺において普通円筒埴輪と盾形埴輪の間に使用され、普通円筒埴輪の口縁部に頸部を挿入する状態で出土した。口縁部径は53㎝と大形である。残存高は15㎝である。口縁部の途中でやや屈曲し、屈曲部に突帯を持つ。口縁端部に近づくにつれ、口縁の開き方は大きくなる。口縁部の端面は凹面をなす。内外面共に風化が激しく、調整はほとんど見ることができないが、内面にはタテハケの後、ナナメハケが施されている。タテハケの条線の密度は６～７本／㎝、ナナメハケは13本／㎝と異なることから、２種類のハケ原体が利用されたものと思われる。屈曲部の突帯の幅は1.4㎝で、その端面はナデ調整により内弯する。胎土は長石、石英、クサリ礫を含むもので、普通円筒埴輪のそれに類似する。色調は黄橙褐色である。

普通円筒埴輪（図56―３）　転用埴輪棺の南半部に用いられていた。全体的に粗雑な造りである。底部から口縁部までほぼ完存しており、４条突帯５段構成の埴輪である。底部径29㎝、口縁部径36㎝、器高68㎝である。下３段はほぼ直立し、上２段はやや外に開く。外面には黒斑を有する。下から３段目に２個の透孔を有する。透孔の形状はいびつな円形である。口縁部はやや歪んでおり、ところによっては外弯するところもあるが、基本的にまっすぐ伸びる。端部は丸くおさまる。口縁部の長さは他の段の幅に比べて短い。外面には、基本的に１次調整のタテハケ及びナナメハケが施される。下から１段目と４段目には、タテハケの後に板状工具を横方

向に動かした痕跡が見られる。この痕跡には通常のハケメの様な条線が見えないことから、ヨコハケとは表現しがたい。おそらく、夏目が十分に摩滅していない原体を用いて横方向になでたものと思われる。内面はタテハケの後にヨコナデが施される。下から1段目の内面には縦方向のユビナデが施される。また、口縁部内面にはヨコナデの後、ヘラによる線刻が施される。突帯の幅は1㎝、器壁からの高さは1.2㎝を測る。突帯の端面はナデ調整により内弯する。突帯間の距離は約14㎝である。胎土は長石、石英を多量、クサリ礫を少量含み、黄橙褐色を呈する。乙訓地域の埴輪によく見られる胎土である。南原古墳の埴輪より砂粒を多く含み、粗雑な感じがする。

3　南原東3号墳の年代

当古墳の時期を考えるには転用埴輪棺に用いられた埴輪が参考になる。出土した普通円筒埴輪の突帯の突出度は南原古墳の円筒埴輪のものより低く、口縁部は外反せず南原古墳の埴輪より後出的な要素を持つ。朝顔形円筒埴輪の口縁部は南原古墳のそれよりも大きく外反し、やはり後出的である。ただ、これらは黒斑を有し、静止ヨコハケを持たないことから5世紀前葉を下らないものと思われる。したがって、円筒埴輪の時期は4世紀末から5世紀前葉の範囲でおさえることができる。また、南原東3号墳の盾形埴輪と類似する埴輪を出土した不退寺裏山古墳は4世紀末から5世紀初頭に位置づけられており、当古墳の盾形埴輪にも同じ様な年代を与えることができる。ただ、これらの埴輪は転用されたものであるから、埴輪の年代が当古墳の時期を直接示すわけではない。しかしながら、普通円筒埴輪は完形で出土し、盾形埴輪も当初は完形品が用いられていた可能性が高いので、埴輪自体の年代と古墳の年代はさほど開きはないと考える。

さらに、特製埴輪棺の年代は円筒埴輪の編年と必ずしも一致するわけではないが、その調整や焼成法を円筒埴輪の編年に照らしあわせてみるならば、転用埴輪棺の埴輪から与えられる年代と矛盾しない。これらのことから南原東3号墳の築造時期を4世紀末から5世紀前葉と考える。

注

(1)　岩崎　誠・小田桐　淳「立会調査」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和59年度　長岡京市埋蔵文化財センター、1985年)。

(2)　木村泰彦「遺跡パトロール」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和59年度　長岡京市埋蔵文化財センター、1985年)。

(3)　現地での調査は宇都宮　平、小田桐　淳、木村泰彦、白川成明、近澤豊明が行った。

(4)　久保田健士「狐谷横穴群発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第8冊　京都府埋蔵文化財調査研

究センター、1983年)。

(5) 木村泰彦「遺跡パトロール」(注2文献)。

(6) 岩崎誠「乙訓で初めて見つけられた円筒棺」(『乙訓文化』35号、1978年)。
都出比呂志「古墳時代」(『向日市史』上巻　向日市、1983年)。

(7) 伊達宗泰「不退寺裏山古墳」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第10輯　奈良県教育委員会、1958年)。

図58　埴輪棺出土状況

図59　棺に使用した埴輪

第6章　考　　察

1　長法寺南原古墳におけるヒレ付円筒埴輪の製作技法

杉井　健

(1)　はじめに

これまでの調査において、長法寺南原古墳にはヒレ付円筒埴輪が存在することが確認され、それが南原古墳の編年的位置づけの大きな根拠の1つとなっている。それと同時に、これまでの報告の中で、ヒレ部の円筒部への接合法に幾つかの種類があることもすでに指摘してきたところである。[(1)] 本稿では、これまでの調査を総括する意味で、南原古墳を代表する遺物の1つであるヒレ付円筒埴輪を詳細に観察し、これまでほとんどかえりみられなかったヒレ部の製作技法を明らかにしたい。また、そのことを通じて埴輪製作の状況を復元したいと思う。こうした検討作業は南原古墳のみに止まる問題ではなく、ヒレ付円筒埴輪を出土する古墳の相互関係を推察する手がかりの一端を提示するものであると考える。

(2)　研究略史

ヒレ付円筒埴輪の研究は、1931年、太田陸郎が兵庫県を中心にヒレ付円筒埴輪を集成したところに始まる。[(2)] ただそれ以降目立った研究は存在せず、ようやく1970年代になって、その起源および編年的位置づけに注目する論考が出現してきた。ヒレ付円筒埴輪の起源に言及したものの中で注目されるものは、都出比呂志が1971年に示した視点であろう。都出はヒレ付円筒埴輪の「口縁端と口縁直下のタガとの間隔が特別に狭」いことに注目し、それを都月1号墳出土口縁部例の退化形態として捉えたうえで、ヒレ付円筒埴輪を「本来その上に他の埴輪を載せる器台としての用途を意識されて」いた埴輪の1つであるとした。[(3)] この観点はその後広く受け入れられ、坂靖や喜谷美宣もこれに従って編年等を進めている。[(4)] 一方、円筒埴輪編年の中におけるヒレ付円筒埴輪の位置づけは、川西宏幸、赤塚次郎、都出比呂志らによって論究され、その出現や消滅の時期はほぼ明らかにされている。[(5)]

以上のヒレ付円筒埴輪の起源と編年的位置づけは広く承認されていることであり、筆者もそれに異論はない。ただ、各論考ともヒレ部の製作技法の分析を目的としたものでないため、ヒレ自体の観察が省略されてしまっている。

ヒレ付円筒埴輪の形態分析を行ったものに、河内一浩の論考がある。河内はヒレ部の円筒部への接合位置に注目して分類を試み、そのことから「埴輪製作集団の関係」を読み取ろうとす

る。しかし、埴輪製作者の分析に欠かせない接合技法や調整技法などの製作技法にまでは言及されていない[(6)]。

ヒレ付円筒埴輪の製作技法についてまとまった指摘を行ったのは赤塚次郎である。赤塚は、古市方形墳から出土した埴輪を整理した報告のなかで、ヒレ部を円筒部へ接合する際において、円筒部に線刻を行うこと、突帯を切り落とすことなどを指摘している[(7)]。このヒレ部の貼り付け技法にかんしては南原古墳の概報の中でも指摘している。

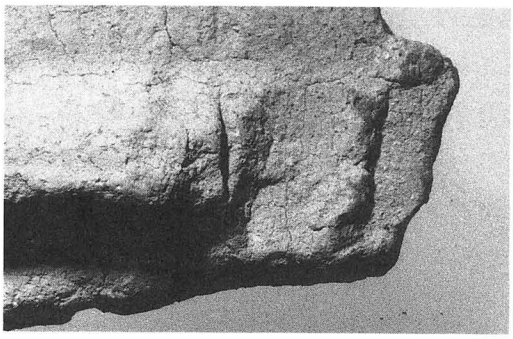
埴輪の分析においては、その製作技法の分析がまず基本となる。それが編年研究を進展させ、工人集団を復元する根拠にもなってきた。しかしヒレ付円筒埴輪の研究史を振り返ると、円筒部にヒレ部を貼り付けるという形態的特異性のみが注目され、その技法の分析がないがしろにされてきた観がある。ヒレ付円筒埴輪の研究において、この点が、今最も急がれる課題の１つであると考えられる。

(3)　ヒレ部貼り付けにおける技法

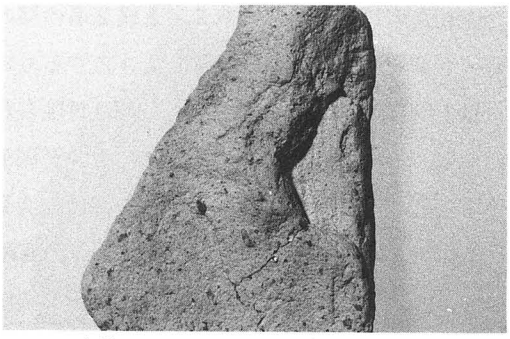
第４章で記述したように、南原古墳では、コンテナ約10箱分のヒレ部破片が出土している。またヒレ部が剥離した痕跡を明瞭に観察することのできる円筒埴輪の破片も数多い。今回は、これまでの調査で検出されたそれらの破片すべてを対象にした分析を試みる。

ヒレ部を円筒部へ貼り付けるのは、円筒部がすべて完成したのちのことである。このことは、ヒレ部が剥離した円筒部器面にも２次調整のヨコハケメが観察されることや、突帯の痕跡がヒレ部に明瞭に残されることからうかがうことができる。ヒレ部を円筒部に貼り付ける際には、円筒部側にしばしば幾つかの接合上の工夫がみられる。それは、突帯に対するものと、円筒部器面に対するものに大きく分けることができる。

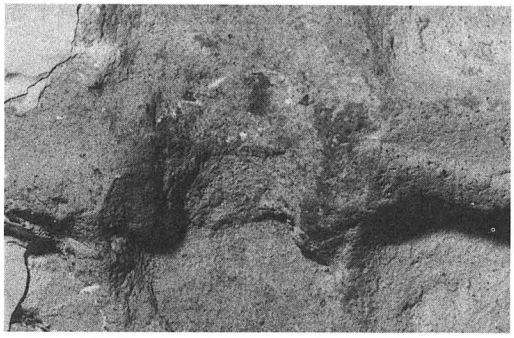
突帯に対する接合技法　突帯に対する接合技法には、４つのタイプが存在する。第１は、ヒレを接合する位置の突帯をヘラ状工具で切り取り、ヒレの厚み分の空間を突帯部分に完全に確保するタイプである（図60－１）。第２は、ヒレ接合位置の突帯を指で押しつぶすことによって、突帯部分に空間を確保しようとするものである（図60－２）。第３は、突帯を完全に切り取ってしまうのではなく、ヒレを接合する部分にあたる突帯の１箇所にヘラ状工具でＶ字形の切り込みを入れるタイプである（図60－３）。このタイプは切り込みを入れるだけであるから、前２者と異なり、ヒレの厚み分を突帯部分に空間として確保しようとするものではない。そのため切り込み位置が必ずしも貼り付けられるヒレ部本体の位置には一致せず、ヒレ部と円筒部の接着部分の両側に補充される補強のための粘土が、その切り込み部分を充填していることが多い。第４は、突帯に細工を行わないタイプである（図60－４）。以上の４タイプをそれぞれ「突帯切り取りタイプ」、「突帯押しつぶしタイプ」、「突帯Ｖ字切り込みタイプ」、「突帯残存タイプ」とする。



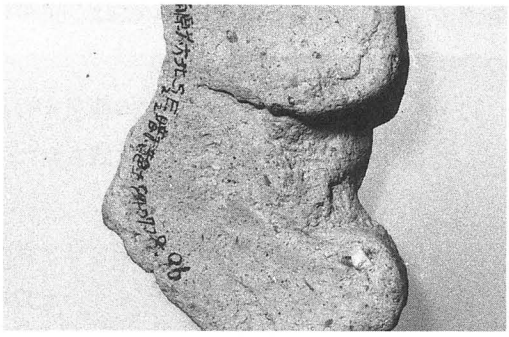
1　突帯切り取りタイプ



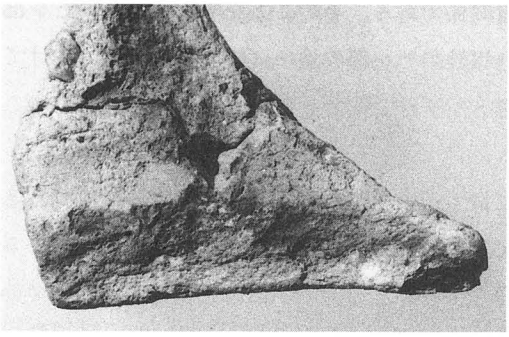
5　突帯切り取りタイプに対応



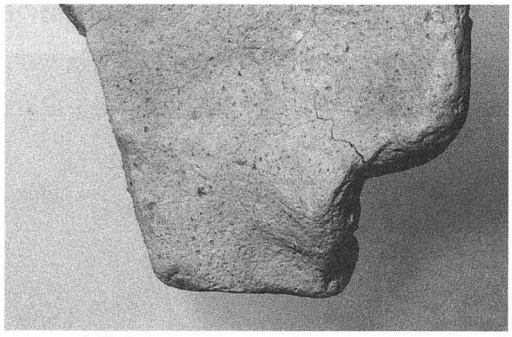
2　突帯押しつぶしタイプ



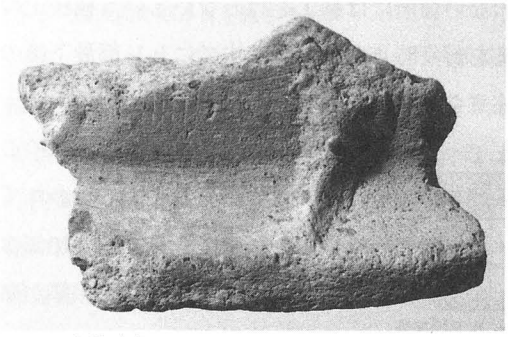
6　突帯押しつぶしタイプに対応



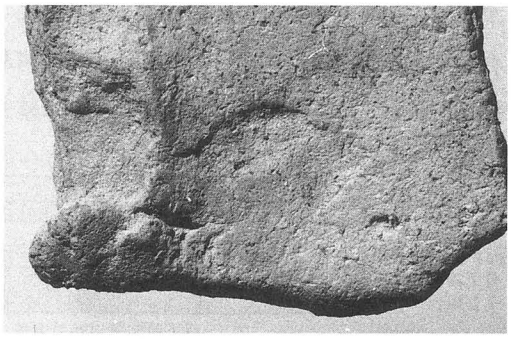
3　突帯V字切り込みタイプ



7　突帯残存タイプに対応



4　突帯残存タイプ



8　ヒレ部最下端が突帯を越えた例

図60　突帯に対する接合技法

これらの技法のうち、前２者と後２者の間の相違が重要であろう。つまり、ヒレが挿入されるべき空間を突帯部分に確保しようとするものと、そうでないものの相違である。

以上の突帯への細工は、そこに貼り付けられるヒレ部の側にも当然圧痕として残されることになる。その代表的な３つを示したものが図60―５～７である。それをみてもわかるように、突帯切り取りタイプに対応するヒレ部は、突帯の形状がヒレ部の両側に補充された粘土に反映されて残るだけで、ヒレ本体には何らその痕跡を残さない（図60―５）。ところが、突帯押しつぶしタイプでは、突帯を完全に除去するものではないのだから、突帯が押しつぶされて円筒部に残存している様子がヒレ本体に凹みとして残されることになる（図60―６）。同様に、突帯残存タイプに対応するヒレ部においては、突帯の本来の形状をそのまま反映した凹みを観察することができる（図60―７）。

以上のような突帯およびヒレ部の観察をもとに、突帯に対する接合技法それぞれの数量比を示したものが図61である。ヒレ部に残された痕跡については、突帯１ヶ所に対応する痕跡それぞれを１つとして数えている。

これをみてわかることは、突帯切り取りタイプが過半数をしめ、それに突帯押しつぶしタイプを加えると８割以上をしめるということである。つまり先に分析した前２者の技法が主流をしめるのである。一方、後２者は少数派にすぎない。

さらに注意が必要なのは、突帯とヒレ部の位置関係である。そのことを考慮に入れ、ヒレ部の最下端に最も近い突帯（最下段突帯）と、それ以外のヒレ部の途中に位置する突帯に分けて、技法各タイプの数量比を示してみると、突帯残存タイプが、他の３者と異なった意味を持つことがわかる（図61―下）。

突帯残存タイプの接合法は、ヒレ部の最下端に最も近い突帯に限って用いられる技法であるということである。さらに重要なことは、ヒレ部最下端がちょうど突帯上で終わるものにのみ用いられる技法であるという点である。それに対し、ヒレ部最下端が突帯を越えたところで終わるものは、突帯切り取りタイプの技法を用いている（図60―８）。このことは、ヒレ部を接合する際、突帯を跨いでヒレ部が接合されることのない箇所には細工を行わないという技法上の合理性を示したものであると同時に、突帯に細工を行う時点において、すでにヒレ部最下端の位置が決定されていたことをも示すものとして注意される。

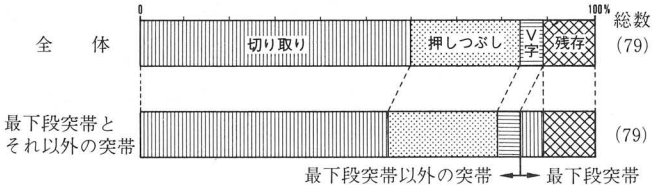
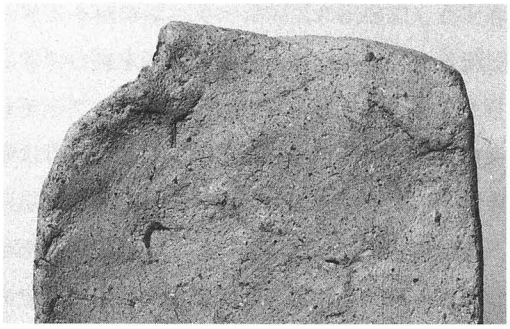


図61　突帯に対する接合技法の比率

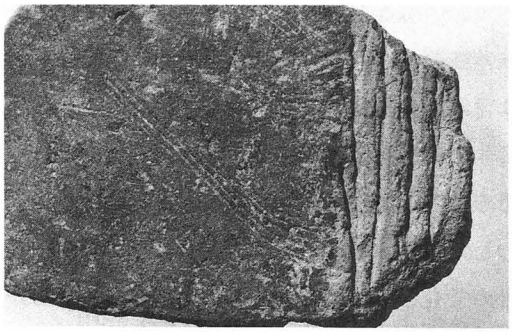
突帯に対する細工と同様のことが口縁部に対しても行われている。観察できるものは10個体にしかすぎないが、ヒレ部が貼り付く位置に対応する口縁部を切り取るもの（図62―１、口縁

1　口縁部切り取りタイプ



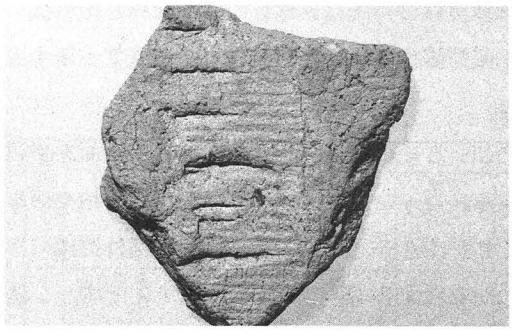
2　口縁部残存タイプ

図62　口縁部に対する接合技法



1　数条の沈線を刻むタイプ

2　1条のみの沈線を刻むタイプ



3　横方向の刻み目を施すタイプ

4　細工を行わないタイプ

図63　円筒部器面に対する接合技法

部切り取りタイプ）が6点と、口縁部をそのまま残すもの（図62―2、口縁部残存タイプ）が4点あり、両技法がほぼ同程度の比率で行われていたことが推察される。

円筒部器面に対する接合技法　ヒレ部が貼り付く円筒部の器面上には、しばしば縦方向の数条の沈線が観察される。これまではその沈線を刻むものの存在が強調されてきているが、円筒部器面に何ら細工を施さないものも確実に存在する（図63―4）。また沈線を刻むものの中においても、数条の沈線を明瞭に刻むもの（図63―1）と1条のみの沈線を刻むもの（図63―2）の相違が存在する。さらにハケ原体を用いて、ヒレ接着部位に横方向の刻み目を施すものも存

在する（図63—3[8]）。

以上の4つの技法—数条の沈線を刻むタイプ、1条のみの沈線を刻むタイプ、横方向の刻み目を施すタイプ、細工を行わないタイプ—それぞれの正確な数量を示すことはできないが、数条の沈線を刻むタイプが多数をしめることは確実である。また、横方向の刻み目を施すタイプは図示した破片1個体のみであり、南原古墳においては決して主流の技法ではない。

器面に細工を施すことは、ヒレ部の円筒部への接着を良くするための工夫であると同時に、ヒレ接着部位の目安をつける役割もあったであろう。

なお、突帯に対する細工の場合と同様に、器面に対する細工の場合もヒレ部の接合面にその痕跡が残されるため、ヒレを観察することからもその技法の判断がある程度可能である。

(4)　ヒレ自体の形態的特徴と調整技法

南原古墳出土のヒレはすべて口縁端部から取り付くものであり、多くが最下段突帯で終わるものであると考えられる。しかしその全長を分析するに足るほど残存状態が良好な破片は存在していない。しかしヒレの幅や厚さについてはその特徴を知ることが可能である。

ヒレの幅が判明するものをグラフの上に度数として落とすと図64のようになる。ヒレの上下で幅が一定しないものも存在するが、それらを含めてもヒレの幅を3タイプに分類することが可能であることがわかるであろう。つまり、ヒレの幅が10cm以上の大型、9cm～10cm未満の中型、6cm～8.5cmの小型の3タイプである。また、厚さについては、ヒレの側端部分と円筒部に取り付く側との厚さがほぼ一定しているものと、円筒部へ取り付く側へいくほど厚さが増すものの2者が存在する。

形態上の特徴としてヒレの幅以外に重要なものは、ヒレの側端部の形状である。端面を平坦に成形するのか、丸く収めるのかの相違が存在する。いったん平坦面を形成した後に粘土紐を貼り付けることによって、丸く収めたものも存在する（図45—H36）。さらにヒレ部外側辺の片面が強いタテ方向のナデにより凹面状に窪むものが存在する（図45—H28）。ほとんどのヒレ側端部はナデによって調整されているにもかかわらずこのような相違が存在することは、それが意識的に実施された可能性を示すものとして注意を要しよう。

ヒレ部の器面にはさまざまな調整痕が残されている。しかしそれらは大きくは器面にハケメを残すものと、ハケメをナデによって消そうとするものの2者に区分することができる。

器面調整にハケを用いるものの基本は、ヨコハケ・ナナメハケを施したのち、それを切るかたちでタテハケを行う。前者を第1段階のハケ調整、後者を第2段階のハケ調整とした場合、その両者の間でハケ原体を変更するもの

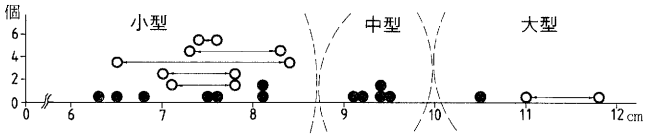


図64　ヒレの幅（白丸は上下で幅の異なる個体）

と、同一原体を用いるものが存在する。原体を変更する個体は、その側端面の調整にもハケを用いている。そのハケメは第2段階のハケメと原体が一致すると思われることから、ヒレ側端面の調整は、ヒレ付円筒埴輪製作における最終段階に行われたと推測できよう。

円筒部とヒレ部の接合部に補充される粘土部分の最終調整に、ハケを用いる個体が存在する。このハケメはヨコ方向に施されており、それ以前に施されているタテハケメを切っている。大半の個体はその部分にユビナデを行うことで調整を終了しているのであるが、ハケメが観察されるこの個体は、第2段階のハケ調整と接合部のナデ調整が完了した後にさらにヨコハケが行われたものであると考えられる。

ナデ調整を行うものには、板ナデによってハケメを消すものと、ユビナデの痕跡は残るがハケメが観察されないものが存在する。

南原古墳で検出されたヒレのうち、残存状態が比較的良好なものに限って、前項および本項で検討した各要素についての観察結果を示したものが表2である。これをみてわかることは、ヒレ接合法、ヒレの形態、ヒレの器面調整の各要素間において、明瞭な相関関係が示されないということである。このことはいったい何を反映したものなのだろうか。次項ではヒレ付円筒埴輪の製作手順を想定することによって、そのことを考察してみたい。

(5)　ヒレ部製作手順の復元からみる埴輪製作と工人関係

これまでみてきたことから、ヒレ付円筒埴輪の製作には3段階の工程を想定することが可能である。すなわち、円筒部の器面と突帯に細工を施す第1工程、ヒレ部を円筒部に貼り付ける

表2　ヒレ部の観察結果

個数	ヒレ接合法		ヒレの形態			ヒレの器面調整	
	突帯	円筒器面	幅	厚さ	側端面の処理	ハケ	ナデ
2	?	沈線多条	中型	一定	平坦、ハケ調整	全面ハケ調整、原体の変更ヨコハケ（13／1cm）→タテハケ（8～9本／1cm）	
2	切り取り	沈線多条	小型	一定	平坦、ナデ調整	全面ハケ調整、原体の一致ヨコ・ナナメハケ→タテハケ（6本／1cm）	
1	切り取り	沈線多条	小型	一定	平坦、ナデ調整		全面ナデ調整
2	切り取り	細工なし	大型	一定	片面に凹面、強いナデ調整	ナナメハケ（6～7本／1cm）→側端部を強くナデ	
2	切り取り	細工なし	小型	一定	平坦、ナデ調整		全面ナデ調整
1	押しつぶし	沈線多条	小型	一定	丸、ナデ調整	タテハケ（9本／1cm）→円筒部との接合部をヨコハケ（9本／1cm）、側端部ナデ	
1	押しつぶし	沈線1条	小型、上下で相違	円筒側が厚くなる	平坦、ナデ調整	ヨコ・ナナメハケ（9本／1cm）	→全面ナデ（板ナデ?）
2	押しつぶし	細工なし	小型、上下で相違	円筒側が厚くなる	片面に浅い凹面強いナデ調整		全面ナデ調整
4	V字切り込み	細工なし沈線あり	小型～中型?	円筒側が厚くなる	丸、ナデ調整		全面ナデ調整

第２工程、ヒレの形を整え全体を調整する第３工程である。

この３段階の工程のうち、第１工程は円筒部を製作している時点における作業であるのに対し、第２工程と第３工程は純粋にヒレ部を完成させるためだけの作業であり、この点において、第１工程と第２・第３工程の間に作業内容上の断絶をみることができる。

第１工程では、円筒部にヒレ部貼り付けのための細工を施すが、突帯を切り取ったり押しつぶしたり、また器面に沈線やヨコ方向の刻み目を施したりする作業であるため、円筒部が完全に乾燥した状態では作業に困難が生じると思われる。円筒部が完全に乾燥しきらない段階での作業であると考えるのが妥当であろう。

第１工程が終了したのち、乾燥のためにいったん作業が中断されたと考えられる。ヒレ部に残る突帯の痕跡が本来の突帯の形状を保っていること、切り込みを入れられた突帯の切り込み以外の部分が本来の形状を保っていること、突帯残存タイプの突帯が何ら変形していないことなどから、ヒレ部貼り付け時に器面に加えられる圧力によって変形が生じないほどの硬度を持つまで乾燥が進んでいたと推察されるからである。

この乾燥作業ののち、ヒレ部の貼り付けが行われる。それは、あらかじめ全形が完成されたヒレを貼り付けるものではなく、一定の長さに分割されて円筒部へ貼り付けられていく（図65）。おそらくその過程で、分割されて接合された部分どうしを接着させたり整形したりするために、ナデとともに行われたのが、先に観察した第１段階のヨコハケ・ナナメハケであろう。こうしてヒレ部を分割接合していく過程が第２工程である。

第３工程は、全体の接合が完了したヒレの形を整えるために、器面に第２段階のタテハケを施したり、ヒレ側端部にタテ方向のナデを施す過程である。いうなれば、ヒレ全体を完成させるための最終調整の過程となろう。

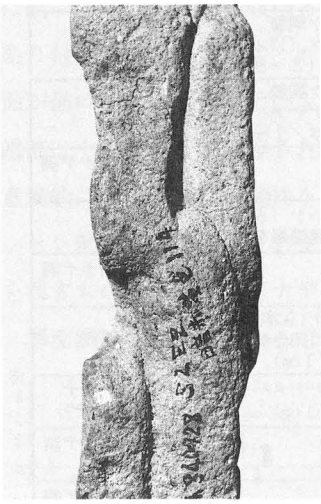


図65　分割接合部

先に作業内容の点から、第１工程と第２・第３工程の間の断絶を考えたが、乾燥作業をはさむ点からも、両者の間に工程上の断絶が存在することがわかる。

前項でヒレが持つ各要素について表２にまとめたが、そのうちヒレ接合法―突帯・円筒部器面に対する細工―は第１工程にかんするものであり、ヒレの形態と器面調整は第２・第３工程にかんするものである。第１工程と第２・第３工程の間に作業工程上の断絶を認めるならば、ヒレ接合法とヒレの形態・器面調整を分けて考える必要があろう。

そこで注意されるのは、前項で指摘した各要素の間に、相互の対応関係がうかがえない点である。特にヒレ接合法と器面調整の間において明瞭な相関関係を示さない。例えば、突帯を切

り取りかつ器面に沈線を数条施すという接合法上の共通点を持つものの間においてその器面調整は異なり、突帯押しつぶしタイプという同じ接合法をとるものの中にあってもその器面調整はそれぞれ異なる。逆に、器面全面をナデによって調整するヒレそれぞれにおいてもその接合法は異なるのである。このことは、おそらく作業工程上の断絶と密接に関係してこよう。ヒレ付円筒埴輪の製作工程のうち第1工程は円筒部を製作する過程の1つとしてなされたものであり、それが終了した時点でいったん作業が中断されている。その第1工程を行う工人と第2・第3工程を行う工人が必ずしも一致しないことが、相関関係を示さないことの要因として考えられよう。仮に第1工程から第3工程まで一貫してひとりの工人が担当していたとするなら、ヒレ接合法とヒレの器面調整の間にもっと密接な相関関係が示されてもよいはずである。

以上の状況から、円筒部に対してヒレ部接合のための細工を行うまでの作業工程と、実際にヒレを接合してヒレ付円筒埴輪を完成させるまでの作業工程の間で、異なる工人が関与する余地があったことが推察される。

ただし、その作業分担がまったく別の製作集団を組織してなされたものなのか、それとも乾燥作業の時間を置いたのちに製作担当者が代わっただけなのかという問題がある。

ここで注目したいのは、ヒレの形態や器面調整にみられるバラエティーの多さである。もしヒレ部の接合と調整を専門にする工人が存在していたとするなら、ヒレの形態や器面調整の各要素間にもっと統一性がみられてもよいのではなかろうか。このことは、少なくとも、ヒレ製作のみにかかわる工人の存在を否定する。むしろ、ヒレ部を製作する工人は円筒部の製作にも従事していたが、円筒部製作とヒレ部製作の間に工程上の断絶が存在することから、両者の製作を担当する工人が厳密には一致せず、1つの個体に対する製作担当者の交代が生じていたと見なすべきであろう。

このような製作状況から、さらに重要な視点が示される。

ヒレ部製作における第1工程は円筒部製作と一連の作業工程である。そして、南原古墳の場合、普通円筒埴輪とヒレ付円筒埴輪の円筒部がほぼ共通した形態をとる。以上の2点は、円筒部を製作している工人が、普通円筒埴輪とヒレ部を接合するヒレ付円筒埴輪の両者の製作に携わっていたことを推測させる。すなわち、南原古墳の埴輪製作工人は、ヒレ付円筒埴輪を製作する技術を持つ工人であり、彼らが普通円筒埴輪とヒレ付円筒埴輪の両者に対応する円筒部を同時に製作していたとの推測が成り立つのである。

ここで、ヒレ付円筒埴輪を出土する各古墳におけるヒレ部製作技法をみてみよう。例えば、奈良県マエ塚古墳[9]では、ヒレ部の器面調整にナデを用いたものとハケを用いたものものが両者存在し、また円筒部の器面に沈線を施すものと施さないものの両者が存在することも確認される。奈良県東殿塚古墳[10]で検出された円筒部には、ハケ原体を用いてヨコ方向に刻み目を施すものが一定の割合で存在している。これは南原古墳では1片しか確認できなかったものである。

畿内から遠く離れた福岡県鋤崎古墳[11]のヒレ付円筒埴輪は、接合法や器面調整、ヒレ幅など概して南原古墳のものと類似する。

乙訓地域に目を転じてみると、大山崎町鳥居前古墳[12]と長岡京市今里車塚古墳[13]でヒレ付円筒埴輪が存在する。鳥居前古墳のものは円筒部の破片１片のみであるが、突帯にＶ字形の切り込みを入れるタイプの接合法であることが確認されている。今里車塚古墳のヒレは、南原古墳のものに比べその厚さが大きいことが特徴である。ヒレ部の器面調整にはハケ調整のものとナデ調整のものがあり、ナデ調整のものに赤色顔料が塗布される。突帯切り取りタイプ、突帯押しつぶしタイプ、突帯Ｖ字切り込みタイプの各接合法が確認され、その点において南原古墳との共通性をみせる。

このように、ヒレ付円筒埴輪の製作技法において各古墳間にかなりの共通性がみられることは重要である。つまり、突帯や円筒部器面に対する細工は完成した個体をみただけでは知ることのできない細部の技法であり、このことは、ヒレ付円筒埴輪を製作する工人の間には、かなりの技術的交流が存在したことを示すのである。

反対に、ヒレ付円筒埴輪を持たない古墳における埴輪製作工人は、ヒレ部の製作技法に対する知識をもたない工人であるとの推測が可能となる。ヒレ部製作技法の知識を持つ工人が普通円筒埴輪のみを製作したと考えるよりは、その知識をもたない工人が埴輪製作に携わっていたと考えるほうが、より妥当性があると考えるのである。

以上のことより、ヒレ付円筒埴輪を有する古墳の埴輪製作工人とそれを有しない古墳の埴輪製作工人の両者を、埴輪製作技法の点において、系譜的に異なる存在として理解できよう。このように考えると、ヒレ付円筒埴輪を有する古墳間には、密接な結び付きが存在することを認め得るのである。

近年、埴輪の分析を精力的に進めている高橋克壽は、特に器財埴輪の分析から古墳時代の政治史を解明しようとするが、その分析のなかでヒレ付円筒埴輪を器財埴輪の動向と関連づける視点を示している[14]。ヒレ付円筒埴輪と器財埴輪が密接な関係を持つことは、高橋の説くとおりであると考える。そして高橋は器財埴輪やヒレ付円筒埴輪製作に関係する「特定の工人集団の移動、派遣」に「大和政権」が関与したと考える[15]。

この視点に立つと、ヒレ部製作技法の共通性は、単なる技法の一致というだけではなく、政治的なつながりを背景に持つ現象であると捉え得る。つまり、ヒレ付円筒埴輪を有する古墳どうしに、政治的一体性を認める視点が示されるのである。

この点で注目すべきことは、乙訓地域では、現在ヒレ付円筒埴輪の存在が確認されているのは都出比呂志のいう長岡グループ[16]のみであるという点である。長岡グループにおける最古の古墳である南原古墳にヒレ付円筒埴輪が存在し、５世紀以降には当グループが盟主的古墳を築造し、乙訓地域において優位にたつことは示唆的である。乙訓地域において、ヒレ付円筒埴輪を

成立させた畿内政権内部のある勢力[17]と最初に政治的関係を結んだものが南原古墳に葬られている首長であり、そのことが、後の長岡グループの優位性につながっていく要因となったと考えられる。それを示すのが、今里車塚古墳におけるヒレ付円筒埴輪の存在なのである。

(6)　おわりに

ヒレ付円筒埴輪は大和を中心に約70箇所において確認されており、資料の蓄積が進んできている。しかしヒレ付円筒埴輪が存在するという事実にのみ注目が集まり、ヒレ部製作技法についての分析はほとんどなされていない。そのことを端的に示すのは、製作技法の分析を行うために必要なヒレにかんする情報が十分に公表されていないということである。これが現在のヒレ付円筒埴輪にかんする研究の現状である。

本稿では、その状況を一歩でも進めようと考え、ヒレを観察することから読み取れる製作技法や工人の問題に言及してきた。本稿がヒレ付円筒埴輪の研究の新たなステップの一つとなれば幸いである。

本稿は、南原古墳の埴輪を整理する中から生まれたものである。整理作業中には大阪大学文学部考古学研究室の構成メンバーから多くのヒントを得た。また、田中壽夫、木村泰彦、吉村和昭の各氏には、資料の観察に際し、多くの便宜をはかっていただいた。ここに記して感謝の意を表したい。

注

(1)　都出比呂志、橋本清一「長法寺南原古墳第3次調査概要」(中尾秀正編『長岡京市文化財調査報告書』第11冊　長岡京市教育委員会、1983年)。
都出比呂志、福永伸哉「長法寺南原古墳第4次調査概要」(中尾秀正編『長岡京市文化財調査報告書』第13冊　長岡京市教育委員会、1984年)。
都出比呂志「長法寺南原古墳第5次調査概要」(中尾秀正編『長岡京市文化財調査報告書』第15冊　長岡京市教育委員会、1985年)。
福永伸哉、松木武彦、杉井健「長法寺南原古墳第6次調査概要」(中尾秀正編『長岡京市文化財調査報告書』第24冊　長岡京市教育委員会、1990年)。

(2)　太田陸郎「有鰭埴輪圓筒」(『考古学』第2巻第4号　東京考古学会、1931年)。

(3)　都出比呂志「元稲荷古墳前方部墳丘の調査」(『史林』第54巻第6号　史学研究会、1971年)。

(4)　坂靖「埴輪文化の特質とその意義」(『橿原考古学研究所論集』第8　吉川弘文館、1988年)。
喜谷美宣「市街地に消えた古墳Ⅰ—念仏山古墳—」(『神戸市立博物館研究紀要』第6号　神戸市立博物館、1989年)。

(5)　川西宏幸「円筒埴輪総論」(『考古学雑誌』第64巻第2号　日本考古学会、1978年)。

赤塚次郎「円筒埴輪製作覚書」(『古代学研究』90　古代学研究会、1979年)。

都出比呂志「埴輪編年と前期古墳の新古」(小野山節編『王陵の比較研究』京都大学文学部考古学研究室、1981年)。

(6) 河内一浩「埴輪をめぐる製作集団の動向―生駒西麓における試み―」(『考古学論集』第3集　考古学を学ぶ会、1990年)。

(7) 赤塚次郎「「古市方形墳」整理ノートより」(『古代学研究』89　古代学研究会、1979年)。

以上の他に、ヒレ付円筒埴輪に注目した論考に以下のものがある。

轟俊二郎「鰭付円筒埴輪に関する一考察」(『埴輪研究』第1冊、1973年)。

関川尚功「大和における大型古墳の変遷」(『橿原考古学研究所紀要　考古学論攷』第11冊　奈良県立橿原考古学研究所、1985年)。

大船孝弘「埴輪と古墳の築造集団について」(『大阪の埴輪窯　埴輪窯の検討・発表会資料』財団法人大阪文化財センター、1989年)。

高橋克壽「器財埴輪の編年と古墳祭祀」(『史林』第71巻第2号　史学研究会、1988年)。

高橋克壽「器財埴輪」(『古墳時代の研究』9　古墳III　埴輪　雄山閣、1992年)。

(8) 南原古墳ではこの4者が観察されるが、他の古墳のヒレ付円筒埴輪において、縦方向の沈線に横、斜め方向の沈線を加えた格子状の線刻を施すものが存在する。

(9) 小島俊次「マエ塚古墳」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第24冊　奈良県教育委員会、1969年)。

中井一夫「マエ塚古墳外堤」(泉森皎編『奈良県古墳発掘調査集報』I　奈良県文化財調査報告書第28集　奈良県立橿原考古学研究所、1976年)。

(10) 東潮、関川尚功「東殿塚古墳」(千賀久編『磯城・磐余地域の前方後円墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第42冊　奈良県立橿原考古学研究所、1981年)。

(11) 柳沢一男編『鋤崎古墳』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第112集　福岡市教育委員会、1984年)。

(12) 福永伸哉編『鳥居前古墳―総括編―』(大阪大学文学部考古学研究報告第1冊　大阪大学文学部考古学研究室、1990年)。

(13) 木村泰彦ほか「長岡京跡右京第352次(7ANITT－13地区)調査概要―今里車塚古墳第7次調査―」(中尾秀正編『長岡京市文化財調査報告書』第27冊　長岡京市教育委員会、1991年) など。

(14) 高橋克壽1988、1992文献 (注7文献)。

(15) 高橋克壽1988文献、p.99 (注7文献)。

(16) 都出比呂志「古墳時代首長系譜の継続と断絶」(『待兼山論叢』史学編　第22号、1988年)。

(17) 畿内政権内部のある勢力について、高橋克壽は具体的に「器財埴輪の創出が大和でも北部のごく狭い地域、すなわち佐紀盾列古墳群西群を築いた勢力の下でなされた」と考えている。高橋1992年文献、p.104 (注7文献)。

2　銅鏃の終焉―長法寺南原古墳出土の銅鏃をめぐって―

松　木　武　彦

(1)　はじめに

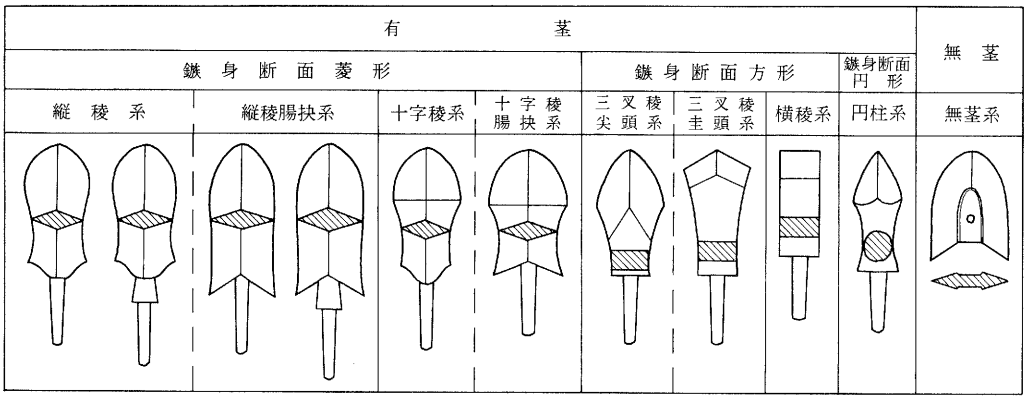
長法寺南原古墳の出土遺物である可能性がきわめて高いものとして、２本の銅鏃がある。うち１本は1934年の竪穴式石室の調査の直後に発掘排土中から取り出されたと伝えられ、残る１本も同じような経緯で採集された公算の強いものである。２本は同じ鋳型で作られたと考えられる同形同大の柳葉形銅鏃で、全長10cm強ときわめて大形であること、および中央の稜をはさんで一対の凹部を作り出すことを最大の特徴とする。

従来は前期の古い段階に位置づけられていた南原古墳の年代がその後半にまで下ることを裏付ける有力な論拠として、円筒埴輪の型式とともに注目されたのがこの２本の大形銅鏃の存在であった。すなわち、大形の柳葉形銅鏃が前期の新しい段階の編年的指標になりうることを1983年に都出比呂志が指摘したのである。[(1)] これよりさき、1960年に今井堯が、1966年には西川宏が新しい段階の銅鏃の特徴として鋭さを失い形式化するなどの現象を挙げ、[(2)] さらに1968年には桐原健が銅鏃の大形化や形態の誇張などが前期末頃から認められる事実に着目していたが、[(3)] 古墳の編年研究が緻密さを増してきたなかでの都出の指摘は注意をひき、各地の古墳の編年研究においても大形の銅鏃の存在が指標として用いられつつある。[(4)] しかし、資料の集成と整理を前提とした細かい所属時期の決定や系譜の特定などの作業はまだほとんどなされておらず、視点を深めるうえでの妨げとなってきた。小稿においては、まずこうした基本的な作業を通して、大形の銅鏃を手がかりに最末期の銅鏃の動向を明らかにしたうえで、その背景について若干の考察を試みたい。

(2)　類例の集成と整理

古墳時代銅鏃の規格性　古墳時代の銅鏃は、図66に整理したように、およそ９つの類型に区分することができる。[(5)] これらの類型間の区別は非常に明確で中間的な形態の個体は認めがたく、各類型ごとの画一性がきわめて高い。この点は、弥生時代の銅鏃と明確に異なるところであり、古墳時代銅鏃の性格や製作体制を考えるうえで重要といえる。すなわち、古墳時代銅鏃がこのような特性を持つことの主な要因として、各類型ごとに形状に関する厳密な規則があり、秩序だった体制のもとでこの規則に準拠して製作されていた状況が考えられよう。

たとえば、もっとも多数を占める縦稜系を例にとると（図67―１）、鏃身の両側縁は緩やかなＳ字を描き（図中ａ）、関をなす下縁部（ｂ）も同じＳ字状のカーブとなるように注意深く研磨されている。こうした細かい規則が、類型の成立当初からほとんどすべての個体に適用され、



図示しなかったが、円柱系を除くすべての類型に箆被をもつ例がある。三叉稜圭頭系には無茎のものがある。

図66　古墳時代銅鏃の分類

結果としてプロポーション上の微妙な要素や細部にまで及ぶ画一性の強さを印象づけるのである。さらに、鏃身の外形をＳ字カーブで構成するという規則が実戦的機能の向上と無関係であることは、側縁をＳ字状に仕上げる造作により、かえって先端が丸く鈍い形となって貫徹力の劣化につながっている点からも明らかであろう。(6)

同じような状況は、十字稜系（図67―２）においても見いだされる。ここでは縦方向に加えて鏃身を横切る方向にも稜を作り出すが、その機能的な意味は認めがたい。また、この横方向の稜を境として、鏃身上半部（ｃ）はわずかな凸面を、下半部（ｄ）は緩い凹面をなすように丁寧に仕上げられる。これも機能面と無関係であることはいうまでもない。

以上のように、類型ごとに遵守される形態上の規則がかならずしも実戦的機能の保持や向上のためではないという点は、古墳時代銅鏃の用途や役割を考えるうえで重要である。実用とは関係のない微細な造作に工程を費やし、一定の規格に当てはめるべく丁寧に磨いて仕上げられた古墳時代銅鏃の多くを、大量の生産と消費が想定される実用のやじりと判断するのはむずかしい。すでに前稿で推測したように、前期古墳から出土する銅鏃のほとんどは儀器とみなすのがより妥当であり、鏡や腕輪形石製品と同じく、首長間の政治的関係を顕示する威信財としての役割を演じた可能性を考えることができよう。(7)

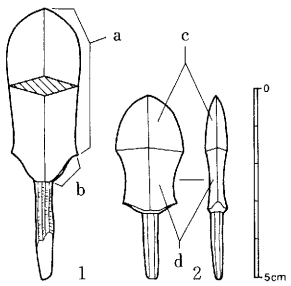


図67　古墳時代銅鏃の規格性

1 岡山・用木１号(縦稜系)
2 静岡・新豊院山Ｄ２号(十字稜系)
(各報告書等より再トレース)

そうであるとすれば、いまみた縦稜系銅鏃のＳ字カーブなどに示される形態上の規則は、鏡や腕輪形石製品の文様や表現にみられる規則と同等の性格を持つものと理解しうる。したがって、最末期の銅鏃がその規則から逸脱して急速に形を変容させたり、逆に新しい規則を取り入れたり、従来の規格から外れるような大形品を生み出したりする状況は、単なる消滅直前の退

化現象にとどまるものではなく、その製作・流通体制や首長間の関係の変化として表われるような政治的・社会的な動きを反映している可能性が強い。以下ではまず、規格性の崩壊による変容や退化の様相がもっとも明らかな縦稜系を中心に、具体例の検討を通じて最末期の銅鏃の実態をつかんでおこう。

類例の提示と分類　最末期の銅鏃は形態や法量の面でさまざまな変容をみせ、これらを体系的に整理するのは容易ではない。ただし、変化の方向性の違いから、次のようないくつかの系列を抽出しうる（図68）。

①鏃身側縁および下縁（関）のS字カーブが弛緩あるいは消滅することなどにより、プロポーションに間延びや崩れが生じたもの（1～5）――――――――――――――― 弛緩型

②鏃身中央の稜をはさんで1対の樋状の凹部を作り出すもの（6～8）――――――― 有樋型

③鏃身中央に新たに1面を作り出し、2本の稜をもつに至ったもの（9）――――――― 複稜型

④著しく大形化するもの ――――――――――――――――――――――――――――― 拡大型

これらのうち、弛緩型と有樋型とは、それぞれの系列のなかで型式学的変化に基づく新古の序列を想定することができる。

まず弛緩型から検討すると、第一として区分できるのは、奈良県天理市東大寺山古墳[8]の例（1）のように、S字カーブは保持しながらも、鏃身の長幅比が大きくなることによって、それまでのものよりわずかに間延びした印象を与えるグループである。これらのうちには、鏃身上半の膨らみの部分よりも鏃身下端部の方が幅広になるという従来みられなかったプロポーションをとるものや、篦被が長くなってスカート状の広がりが誇張されるものなどが含まれ、規則の厳密さや画一性がわずかながらも失われ始めた状況をうかがうことができる。弛緩型の第二のグループは、S字カーブ自体に崩れが認められるもので、奈良県広陵町佐味田宝塚古墳[9]の例（2）などが該当しよう。第三のグループは、S字カーブの消滅や

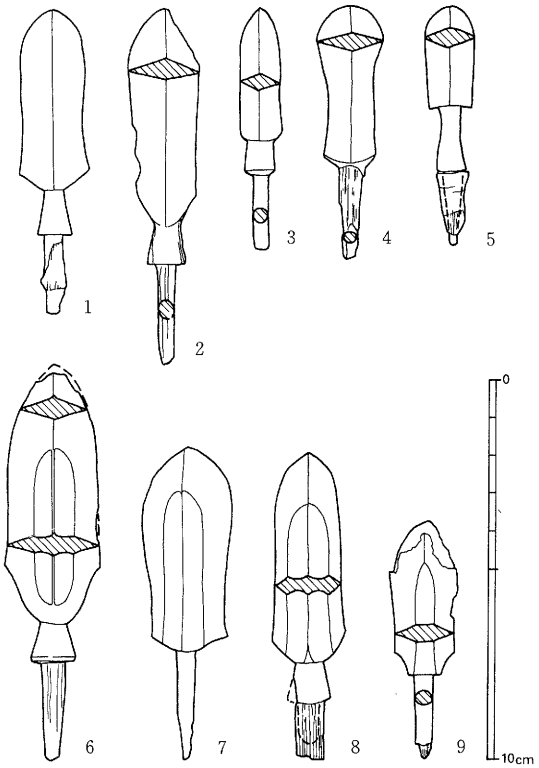


図68　最末期の銅鏃の諸例

1，7奈良・東大寺山　2奈良・佐味田宝塚　3奈良・富雄丸山　4，5，8京都・園部垣内　6京都・長法寺南原　9兵庫・西野山3号（各報告書等より再トレース　1，7は写真トレースにつき縮尺は不正確）

誇張、あるいは箆被の極端な強調などによって、もとのプロポーションの原型が失われたものである。奈良市富雄丸山古墳[10]（3）、京都府園部町園部垣内古墳[11]（4，5）などの例をこれに当てたい。以上の第一から第三は規則からの逸脱の程度による区分であり、それぞれの境界は漸移的で戴然と類別することは困難である。ただし、新古の序列に関しては、逸脱による変容の度合がもっとも小さい第一のグループがもっとも古く、第二、第三の順に新しくなると考えることができよう。

つぎに有樋型をみたい。まず挙げられるのは長法寺南原古墳の2本（6）、およびこれと同笵関係が指摘される大阪府柏原市松岳山古墳[12]の例である。鏃身の側縁と下縁とはやや緩やかながらS字カーブで構成され、樋状の凹部は鏃身下縁の少し手前で終わるよう丁寧に仕上げられている。さらに東大寺山古墳の例（7）をみると、S字カーブは残るが、凹部が鏃身下縁まで達している。また、園部垣内古墳の例（8）は、S字カーブの弛緩がより進行してプロポーションが崩れたもので、これも凹部は鏃身下縁に達する。そこで以上の諸例の新古を考えると、まず凹部下端の処理のしかたにおいては、鏃身の途中で徐々に細くなって終わるように造作を施すよりも、そのまま鏃身下縁に放つ方が手数を省く結果になるといえよう。これにS字カーブの弛緩の度合を加味すれば、南原・松岳山例がもっとも古く、東大寺山例、園部垣内例の順に新しくなるという序列を示すことができる。

以上のように組み立てた弛緩型、有樋型の型式序列を軸として、共伴関係を考慮に入れながら、次項では古墳時代銅鏃の規格性が崩壊し、退化と変容が進行していく過程をあとづけてみよう。その概要を図69に表した。

(3)　規格性崩壊の諸段階

第Ⅰ段階＝有樋型の出現　前項での検討によって、弛緩型では東大寺山例が、有樋型では南原・松岳山例が、型式学的に各々最古の形態を示すことが明らかになった。残る複稜型と拡大型については序列を組み立てうるほどの資料に恵まれないため、まずは東大寺山の弛緩型と南原・松岳山の有樋型の新古を比較することが、古墳時代銅鏃の規格性崩壊の開始を確認するうえで必要な作業といえよう。

そこで注目すべきは、東大寺山の弛緩型が、南原・松岳山例よりも型式学的に新しい有樋型と共伴するという事実である。すなわち、東大寺山の弛緩型と有樋型との間に一定以上の製作時期の差を想定しなければ、南原・松岳山の有樋型は東大寺山の弛緩型よりも遡るものと判断することができる。問題となる東大寺山の弛緩型と有樋型とは、肉眼による限りでは、銅質や鋳上がりの状況も類似しており、製作段階における時間的・空間的断絶を積極的に主張しうる根拠は見いだしにくい[13]。これらの点から、今のところ南原・松岳山の有樋型（図69—D）がより古く置かれる可能性が高いということが許されよう。

いっぽう、弛緩型の初現が東大寺山例であるとすれば、南原・松岳山の有樋型がそれよりも先行することが上の検討によって明らかであるから、この段階にはまだ弛緩型が現れていなかったとの推測が成り立つ。京都府向日市妙見山古墳[14]（図69—C）、大阪府高槻市弁天山C１号墳後円部石室[15]、奈良県桜井市メスリ山古墳[16]などの縦稜系銅鏃において、S字カーブなどの規則が厳密に保たれている事実から考えても、弛緩型の出現がさほど遡るものでないことがうかがわれよう。複稜型、拡大型についてもこの段階に出現していたことを示す材料はない。したがって、現有の資料による限りでは、南原・松岳山の有樋型が、他の各種に先駆けて出現した公算が強いといえる。伝統的な規格性からの逸脱は、この種の有樋型の出現によって始まったということもできよう。

ただし、南原・松岳山の有樋型は全長約10cmの大形品であり、鏃身の側縁と下縁とがS字カーブによって構成されていることからも見て取れるように、プロポーション上の崩れはない。また、細い隆起線状に突出する鏃身中央の稜や、それをはさむ樋状の凹部などの造作はごく丁寧である。このように、全体の形状や造りが整美かつ入念である点や、樋状の凹部のように従来なかった要素が付加されている点などから、この種の有樋型は、在来の縦稜系銅鏃の規格性が崩壊することによる退化や変容の結果として出現したものではなく、新たな規格の銅鏃として意図的に作り出された可能性が高いと考えられる。旧来の規格的な縦稜系銅鏃が存続しながらも、それとは別に有樋型という新規格の銅鏃が生み出された時期を第Ⅰ段階と捉えたい。

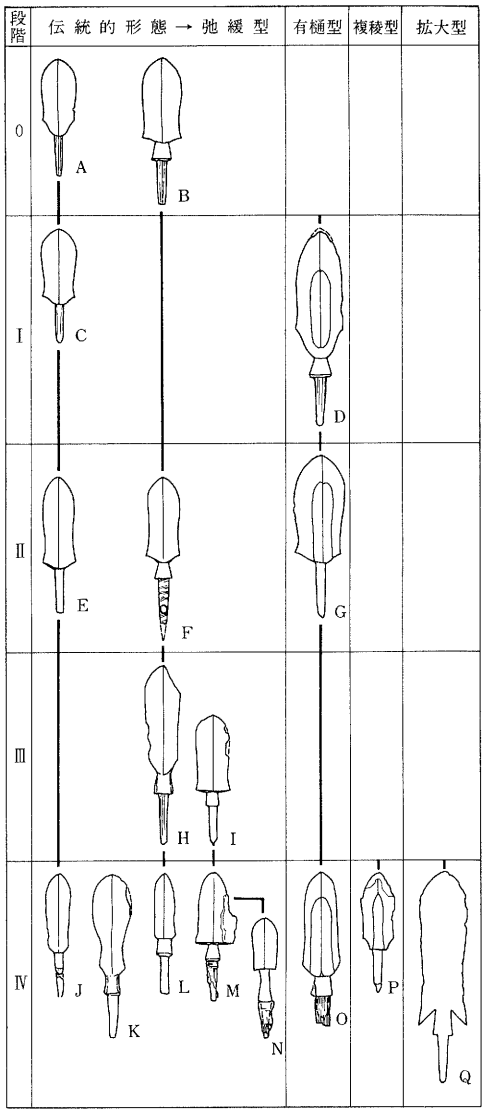


図69　最末期の銅鏃の変遷過程（縮尺1/4）

A，B岡山・浦間茶臼山　C京都・妙見山　D京都・長法寺南原　E，G奈良・東大寺山　F岡山・月の輪　H奈良・佐味田宝塚　I奈良・新沢500号　J，P兵庫・西野山３号　K，N，O京都・園部垣内　L奈良・富雄丸山　M大阪・黄金塚　Q三重・石山（各報告書等より再トレース、ただしE，G，Qは写真トレース）

第Ⅱ段階＝規格性弛緩の開始　主系列ともいうべき旧来の縦稜系銅鏃にわずかな弛緩が現れる時期、すなわち最古相の弛緩型の出現をもって第Ⅱ段階とする。東大寺山古墳（E）、岡山県

柵原町月の輪古墳[17]（F）などの銅鏃群がこの段階にあたる可能性が高い。さきにも述べたように、これらは従来のものより若干ながら細長いプロポーションを持ち、個体によっては鏃身下端部の拡幅、篦被の誇張など、伝統的規則からのわずかな逸脱が認められる。とりわけプロポーションの変化については、がんらい2.5：1前後であった鏃身の長幅比が３：１に近づくという傾向が見て取れる[18]。ただし、鏃身の側縁や下縁をＳ字カーブで構成するという意識は、この段階までは保たれている。いっぽう有樋型では、東大寺山例（G）で知られるように、樋状の凹部の下端が鏃身下縁に放たれるなど、製作における入念さが失われ始める。複稜型、拡大型の存否については判然としない。

この段階でいまひとつ注目すべきは、肉眼による限り、従来のものに比べて明らかな銅質の劣化が認められる点である。いわゆる白銅質の優品は影をひそめ、全面に青錆が浮き出た、質の劣るものが大多数を占めるようになるが、その主因として青銅原料中における錫分の低下が推定されよう[19]。

以上のように、第II段階は、主系列の縦稜系においても規格性の弛緩が認められるようになり、第Ｉ段階に生み出されたばかりの有樋型もまたその形態を保持することなく変化を始めた時期と位置づけられる。また、全般的に銅質が劣化する点から、この段階を境として青銅原料の供給体制にも変動が生じた状況を推測することができよう。

第III段階＝規格性崩壊の進行　縦稜系の伝統的な規格性を支える最大の要素であったＳ字カーブにも崩れが生じる時期、すなわち第II段階よりもさらに崩れの進行した弛緩型の出現を第III段階の開始と捉えたい。類例としては奈良県橿原市新沢500号墳[20]の銅鏃群が挙げられる。この群には前段階の東大寺山例に類するものも含まれ、第III段階のなかでは比較的古く位置づけられる可能性もあるが、鏃身下縁のＳ字カーブが完全に直線と化した例（Ｉ）が約半数を占めており、伝統的規則からの逸脱による規格性の崩壊が一段と進んだ段階に属すと判断できる。岐阜県大垣市遊塚古墳[21]の銅鏃群や佐味田宝塚古墳の例（H）などもほぼ同じ段階とみなせよう。前段階に引き続き、いずれも銅質はよくない。

有樋型、複稜型、拡大型の動向は明らかでないが、縦稜系以外では佐味田宝塚古墳の出土品としてプロポーションの間延びした三叉稜系銅鏃が注目されよう。

第III段階は、第II段階までかろうじて保たれていたＳ字カーブに対する意識が薄れ、主系列の縦稜系が急速な変容を開始した時期と捉えられる。

第IV段階＝退化と変容　縦稜系銅鏃のＳ字カーブが消滅するか、もしくは誇張されることなどにより、その伝統的な形態とは大きくかけ離れた姿になる時期をもって第IV段階としたい。奈良市富雄丸山（L）、大阪府和泉市黄金塚[22]（西槨、M）、京都府園部垣内（K，N）、兵庫県赤穂市西野山３号[23]（Ｊ）、岐阜県糸貫町舟木山24号[24]などの各古墳の例が挙げられる。変化の方向はさまざまであり、それにより多様な形状を示すようになるようすを見て取ることができよう。

いっぽう、有樋型としては園部垣内古墳の例（O）が知られ、前段階よりもなおプロポーションの崩れが進行した状況が見いだせる。また、西野山3号墳には複稜型（P）が伴う。拡大型については三重県上野市石山古墳[25]に例があり（Q）、詳細は不明であるが他の伴出遺物から判断すればこの段階に属する可能性が高い。

このように、第Ⅳ段階は、主系列の縦稜系における規格性からの逸脱が極限に達して多様な変容形態が生み出されるとともに、あるいはそのバリエーションの一部として複稜型、拡大型などがいっせいに出現することを特徴とする。古墳時代銅鏃の細部に至るまでの画一性を律していた伝統的規則は、この段階に至って完全に消滅したといえよう。また、銅質の劣化はますます著しく、錆による浸蝕のため本来の形状を大きく損なったような資料がめだつ。加えて、富雄丸山、舟木山24号の両墳を除けば1古墳当りの出土数は1～数本程度となり、同種多量を基本とする古墳時代銅鏃の伝統的な副葬方式が保たれなくなった状況が知られる。[26]

以上のような状況は、この段階の銅鏃製作組織が、もはや一定の規則を厳密に遵守せしめるほどに秩序だった体制でなくなり、規則から逸脱して随意の形状の製品を生み出すことが許されるようなルーズなものに変質したことの反映といえる。原材料確保の困難さをうかがわせるような銅質の劣化や個体数の著しい減少などの点も考慮すれば、背景として、その製作組織がまさに瓦解しつつある状況を想定することができよう。じっさい、従来の伝統的な系譜を引く銅鏃は、この段階を最後に姿を消すのである。

ただし、この段階前後から5世紀代にかけて、石川県金沢市長坂二子塚古墳[27]（図70―1）、群馬県藤岡市三本木古墳[28]（3）の例のように、以上に検討してきたものと明らかに異なった系譜に属する銅鏃が残存する点には注意が必要であろう。これらについては、在来の古墳時代銅鏃からの系列がたどりがたく、むしろ同時期の鉄鏃の形態を模すことによって生み出された可能性が高い。たとえば長坂二子塚例は、大阪府藤井寺市アリ山古墳[29]、京都府長岡京市恵解山古墳[30]など、畿内以東では5世紀前半

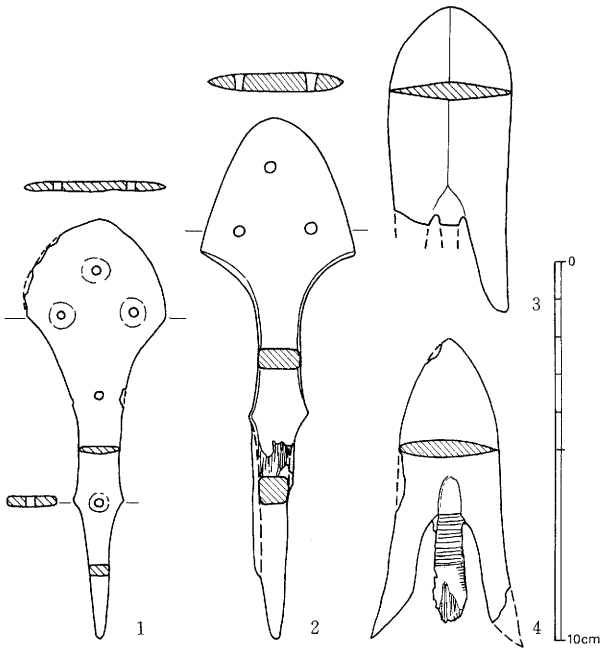


図70　鉄鏃と鉄鏃模倣型銅鏃

1 石川・長坂二子塚（銅鏃）　2 大阪・アリ山（鉄鏃）
3 群馬・三本木（銅鏃）　4 栃木・山王寺大桝塚（鉄鏃）
（各報告書等より再トレース）

古墳名	銅鏃	鏡			玉			銅器		碧玉品		滑石品			鉄鏃		短甲			その他の編年要素
		三角縁・船載	三角縁・仿製	小形仿製	硬質勾玉	碧玉勾玉	雑勾玉	筒形	巴形	腕輪	鏃の他	容器	琴柱	農具	工具	玉類	旧式	新式	方板革綴	長方板革綴	三角板革綴	
松岳山	I				○					○												古式組合式石棺
長法寺南原	I	○			○												○					
東大寺山	II				○				○	○	○	○										
園部垣内	IV	○	○		○	○				○	○						○			○		
新沢500号	III		○	○			○	○		○		○	○							○		
富雄丸山	III	○				○			○	○	○	○		○	○	○	○					
佐味田宝塚	III	○	○	○	○				○	○	○				○	○	○					
西野山3号	IV	○			○		○										○					水晶製切子玉
舟木山24号	IV			○	○		○			○					○							
黄金塚西槨	IV				○										○			○		○		
月の輪	II			○			○										○			○		
遊塚	III									○				○				○				陶質土器　革製盾

＊雑勾玉＝水晶製、琥珀製、瑪瑙製などの勾玉　鉄鏃新式＝断面方形の頸部(箆被)をもつもの

図71　古墳編年との関係

以降にみられるようになる型式の鉄鏃（2）を祖形に製作されたものと考えて疑いあるまい。三本木例もまた4世紀末から5世紀前葉にかけてとくに盛行した、短い茎部と長い逆刺をもつ三角形の平根系鉄鏃（4）と関連する可能性が考えられよう[31]。ただし、鉄鏃模倣型ともいうべきこれらの銅鏃の類例はごく少数にとどまり、その消滅の正確な時期や製作の背景は明らかにしがたい。

古墳編年との関係　以上では、おもに型式学的変化と共伴関係の検討から、最末期の銅鏃がみせる規格性崩壊と消滅の過程をあとづけてきたが、その序列は古墳の築造順序と整合的な関係にあるといえるだろうか。これを確認するため、図71として、副葬品を中心とした他の編年要素との関係を整理してみた。古相を示す古墳が表の上方にくるように並べている。この表からまず判断できることとして、古相の古墳には、以上に検討した型式序列において古く位置づけられる銅鏃がみられ、新相の古墳ほど新しい段階の銅鏃をもつという傾向はおおむね認められる。また、そうした整合性から、検討した序列が大筋において誤りでなかったと判断することが許されよう。

ただし、この整合性を乱す少数の例外には注意しなければならない。それらのうち、園部垣内古墳において、他の副葬品に比べて銅鏃が第IV段階という新しい様相を示すことについては、この古墳が通説よりも下る時期の築造である可能性を示唆するものといえる。逆に、月の輪・遊塚両古墳の銅鏃が他の要素よりも古い様相を呈する現象は、何らかの事情によって、古く作られた銅鏃が副葬時点まで残存したと考えるのが妥当であろう。こうしたあり方は鏡や腕輪形石製品と共通しており、この点もまた古墳時代銅鏃が実用武器でなく、威信財としての役割を果たした儀礼具の可能性が強いとした先の考えを支持する。

以上のように、銅鏃における規格性からの逸脱の有無やその程度は、それが出土した古墳の編年的位置を知るための手がかりとなりうるが、古く作られたものがしばしば新しい時期になって副葬されるという儀礼具特有の性格を考慮すると、確実にはその埋葬施設の年代の上限を押さえる指標として使用すべきであるといえよう。

(4)　銅鏃消滅の歴史的背景

前方後円墳の成立と前後する時期に、小形・厚手で稜をもった、在来のものとは型式学的に断絶する一群の鉄鏃ならびに銅鏃が現れ、10数本から100本以上というまとまった本数で古墳に副葬されるようになるという現象が認められる。この種の鏃について、まず1988年に宮田浩之が「首長権継承の儀器や権威の象徴」としての性格を想定[32]し、1990年には川西宏幸が、これらを畿内より各地の有力者へ分与された「儀仗用矢鏃」とみなして古墳時代開始の一指標と捉えた[33]。筆者もまた前稿において、これらの鏃を、前方後円墳の成立期にその主導勢力によって創出・配布された武器形の威信財と位置づけ、その配布と共有の背後に軍事的色彩の強い首長間の政治的関係の存在を推測した[34]。

これらの鏃が、鏡や腕輪形石製品などと同じように威信財として中央および各地の首長間で授受されたとの想定が許されるとすれば、その形態や分布の動態を把握する作業を通じて当該期の政治的諸状況の一端に触れうることが期待されよう。前項までの検討においては、この種の鏃のうちでも主流を占める縦稜系銅鏃を取り上げ、その最末期から消滅までの形態上の変遷を4つの段階に分けてたどってみた。以下では、これをもとにして銅鏃の退化・変容・消滅の背景について若干の展望を示したい。

規格性崩壊の背景　弥生時代銅鏃と明確に区別される古墳時代銅鏃、すなわち形態上の細かい規則を遵守する定型化した銅鏃が製作され始める時期は、古墳時代前期の早い段階に遡りうる[35]。その当初からの形態上の伝統的規則は、縦稜系でみる限り最初の弛緩型が現れる東大寺山古墳の段階まで厳密に保たれている。すなわち、前期前葉から後葉のある時期までの数十年間、銅鏃の形態はほとんど変化しないといってよい。また、それらの大部分はいわゆる白銅質の優品である。これらの点は、この期間に含まれる銅鏃がきわめて短時日のうちに集中して生産されたか、あるいは細かい形態要素における伝統的規則と青銅原料の品質とを厳格に保持することができるような秩序だった組織のもとで逐次製作されていた状況が想定できよう。

ところが、前期後葉のある段階に、まったく新しい規格である有樋型が生まれ、これを嚆矢として主系列の縦稜系に規則からの逸脱やプロポーションの変化が始まる。同時に銅質もまた錫分の低下による急激な劣化が認められる。こうした現象は、それまでの伝統的な銅鏃製作組織がこの段階に何らかの変化をこうむったことの反映と評価されよう。その背景についてはにわかに明らかにしがたいが、前段階において伝統的形態の縦稜系236本を副葬していたメスリ山

古墳と、この段階で弛緩型を中心に260本強が出土した東大寺山古墳とを、その傑出した出土量から、各々の段階において銅鏃の製作・配布の中枢に携わった首長の墳墓であると想定することは不可能ではあるまい。この想定が正しいとすれば、メスリ山が奈良盆地東南部に築かれる前期初頭以来の大前方後円墳群の一員であるのに対し、東大寺山は盆地東部の一角を占める天理市櫟本の地域に前期後葉になって初めて築かれるいわば新興の前方後円墳であり、おそらくこの櫟本の古墳群の出現が時期的にみて盆地北部の佐紀盾列古墳群の成立と有機的に関連する可能性が考えられることは注意すべきである。すなわち、現段階では憶測の域を出ないが、この段階に推測される銅鏃製作組織の変化が盆地北部への大王墓の移動と何らかの関わりをもった状況も想定することができよう。

銅鏃消滅の要因　東大寺山から新沢500号・佐味田宝塚などの出土銅鏃に示される段階を経て前期末の富雄丸山や園部垣内の段階になると、かつて数十年という長期間にわたって保持され続けてきた各種の形態上の規則は完全に放棄され、粗雑な造りで個体差の大きい製品が大多数を占めるようになる。それと同時に、１古墳当りの副葬本数として１～数本程度の場合が多くなることに示されるように生産数は著しく減少し、銅質の劣化はさらに進行する。これらの点から判断して、潤沢な青銅原料に保証された統一的な量産体制が瓦解し、小規模で個別分散的な製作体制へと変化した状況が推測されよう。すなわち、首長同士の政治的関係の証しとして機能した威信財としての銅鏃が、もはやその役割を終えつつあり、製作組織も縮小を余儀なくされたか、あるいはおのずと衰滅に向かったものと想定される。

類似の状況は鏡や腕輪形石製品においても認められる。鏡のうち、たとえば倭製の三角縁神獣鏡は図像表現などの退化[36]と鋳造技術や銅質の劣化のなかで終末を迎え、腕輪形石製品も、とくに鍬形石にはっきりと示されるように当初の形態上の規則が忘れられて変容すると同時に、石材の劣化を指摘しうる[37]。鏡、腕輪形石製品および銅鏃の３者は、その成立時期におのおの差はみられるが、いずれも大和を本拠とする古墳時代前期の中央政権が各地首長との間の政治的関係の表徴として創出・配布した儀器的な威信財と位置づけることができる。この３者が前期後半から末にかけてのほぼ同じ時期に、形態や表現における伝統的規則から逸脱して変容や退化をみせ、材質も劣化させつつ終焉を迎えるという共通した動きを示すことは、偶然とは考えられない。

いっぽう、銅鏃が消滅する過程と並行して新しい型式の甲冑や鉄鏃が登場し[38]、中期前葉にかけてそれらの武器を別施設や陪墳へ大量に集積する大形古墳と、１セット程度を棺内へ副葬する小形古墳とが重層性をもって成立してくる状況には注意をひかれる。前者から後者に対して武器の供与が行われた可能性はつとに説かれるところである[39]し、都出比呂志が述べるように、これらの武器副葬古墳のあり方の背後に階層的な軍事編成の存在をも推測できよう[40]。以上の点から、儀器的威信財の配布と共有を表徴とした旧来の首長間の結び付きが、この段階を境に、

実用武器の授受を伴った軍事的な階層秩序を主体とする関係に変化した可能性を考えることができる。

以上のような理解が妥当だとすれば、儀器的威信財の配布の中核となったのが大和を中心に大形前方後円墳を築いた勢力であり、鉄資源の掌握をバックに武器・武具類の生産と供与を統括して軍事的階層秩序の頂点を占めたのが古市・百舌鳥両古墳群の首長たちであったと考えられる点は重要である[41]。古市・百舌鳥両古墳群の成立、すなわち大王を含む中央の最有力首長の墓域が大和から河内へと移動する現象については、これを単なる墳墓造営地の移動と捉えて、政権中枢は動かないとする考えがある[42]。しかし、時間的にも空間的にもこの移動と軌を一にして、儀器的威信財の配布・共有が示す首長間の盟約関係を実体とする前期の政治体制が、軍事的な階層秩序を中核にもった中期の政権へと性格を変えるとみられる点は、古市・百舌鳥両古墳群の出現が単なる墓域の移動でなく、こうした政権構造の大きな変革の一部であった可能性を示すものであろう。さらに、この政権構造の変革が中央や地方の首長間の勢力関係の激変を伴って進行したであろうことは、各地域における首長墓系譜の断絶現象の分析を通じて都出比呂志が説いた通りである[43]。

おそらく、古墳時代初頭以来、流通機構を掌握してきた中央権力が鉄を中心とする諸物資の占有を進めることによって、各地方首長に対しても経済的優位の度をますます強め、それぞれの生産関係における自給性を崩壊させる動きをみせ始めたと考えられる[44]。こうして中央権力と地方首長の実質的関係がしだいに変化するにつれ、両者の政治的関係もまた、前方後円墳成立当初の盟約関係やその背景をなすイデオロギーでは律し切れなくなりつつあったものと推測される。このような状況のもとで、旧来の盟約関係の証しであり、そのイデオロギーを象徴化・具象化する意味をもっていた鏡、腕輪形石製品、銅鏃の3者に代表される各種威信財も、それが生み出された当初の地位と役割を保つことがしだいに困難になっていったであろう。前期の後葉から末にかけて3者がたどった変容、退化、衰滅の過程は、こうした儀器的威信財が結合の媒体となるような旧態の盟約関係を実体とする前期の政治体制が、社会・政治的諸関係の歴史的発展、あるいは対外関係の進展[45]に抗しきれず解体しつつあったことの反映であり、より新しい社会・政治的関係や国際環境に即応した軍事的階層秩序を中核とする中期的な政権構造に取って替わられることの予兆をなす現象であったと位置づけることができる[46]。

(5)　おわりに

長法寺南原古墳出土の銅鏃を出発点に、古墳時代銅鏃が消滅の直前にみせる退化と変容の過程をあとづけ、その背景について考察を展開してきた。南原古墳例は、こうした一連の過程のまさに発端に位置づけられる資料であり、背景として推測を重ねてきたような政治的動向に、南原古墳もまた密接に関わっていたものと考えられる。たとえば南原例が、それまでの伝統的

形態から離れた新規格の銅鏃の最古型式と位置づけられることは、一定の政治的意図のもとにこれを生み出した勢力と南原古墳の被葬者とのつながりを示唆するものといえる。このような点は、南原古墳が乙訓南部における最初の首長墓として長法寺・今里地域に出現してくることの意義を考えるための一助となりえよう。

古墳時代銅鏃の研究はこれまで武器としての観点から進められることが多かったが、小稿ではむしろ儀器的な威信財としての役割を想定し、その消滅の状況に焦点を当てることによって、背景にある古墳時代前期から中期の政治的動向を読み取ろうとした。荒削りな仮説に過ぎず、より広範な資料収集や綿密な考察によって補強・修正されるべき点も少なくないと思われるが、いまは今後の課題として他日を期したい。

小稿をなすにあたり、小野山節、高橋克壽、中井正幸、楢崎彰一、菱田哲郎の各氏から有益な御教示をいただいたり、資料調査や文献探索の御援助を賜った。記して心から感謝したい。

注

(1)　都出比呂志ほか「長法寺南原古墳第３次調査概要」(中尾秀正編『長岡京市文化財調査報告書』第11冊　長岡京市教育委員会、1983年）p.28。

(2)　今井堯「銅鏃について」(近藤義郎編『月の輪古墳』月の輪古墳刊行会、1960年）pp.306～308。
西川宏「武器」(近藤義郎・藤沢長治編『日本の考古学Ⅴ　古墳時代（下)』河出書房新社、1966年）p.257。

(3)　桐原健「長野県諏訪市美術館収蔵の銅鏃」(『信濃』20巻８号、1968年）p.636。

(4)　たとえば、中井正幸「大垣地域の前期古墳」(赤塚次郎ほか『美濃の前期古墳』美濃古墳文化研究会、1990年）p.40。

(5)　古墳時代銅鏃の分類案は、近年では杉山晋作、三木文雄、川西宏幸らが提示している。
杉山晋作「古墳時代銅鏃の二、三について」(『古代探叢　滝口宏先生古稀記念考古学論集』1980年）pp.183～189。
三木文雄「駒形大塚古墳出土の銅鏃について」(三木編『那須駒形大塚』吉川弘文館、1986年）pp.120～126。
川西宏幸「儀仗の矢鏃―古墳時代開始論として―」(『考古学雑誌』76巻２号、1990年）p.39。

(6)　今井堯は、月の輪古墳の銅鏃を考察するなかで、その先端が鋭角をなさないことに注目し、実戦的役割を否定する根拠のひとつとした（注２今井文献、p.308)。

(7)　松木武彦「前期古墳副葬鏃の成立と展開」(『考古学研究』37巻４号、1991年）p.41。
ここでいう「威信財」とは、都出比呂志に従い、その流通が首長間の政治関係の成立に重要な役割を果たす非日常品であり、とくに「畿内地方の中央権力が、各地の首長の政治的地位に保証を

与える証し」という性格をもつものと規定しておきたい。

都出比呂志「古代文明と初期国家」(都出編『古墳時代の王と民衆』古代史復元6　講談社、1989年）p.49。

なお、新納泉は、個々の鏃の機能を実用、儀礼用というように限定的に考えることに対して懐疑的な見解を示した。聴くべき批判である。ただし、古墳時代銅鏃については、いま述べたような理由から、非実用的な役割を担うべく特別に製作または加工されたものと考えることが許されると思う。

新納泉「武器」(『古墳時代の研究』8　古墳II　副葬品　雄山閣出版、1991年）p.36。

(8) 金関恕「東大寺山古墳の発掘調査」(『大和文化研究』17巻1号、1962年)。

同「卑弥呼と東大寺山古墳」(小野山節編『古墳と国家の成立ち』古代史発掘7　講談社、1975年)。

東京国立博物館『日本考古展目録』1969年、pp.62～68,133。

同『特別展観　高松塚などからの新発見の考古品―文化庁保管の埋蔵文化財（昭和40年～50年度)』1977年、pp.29～33,77～78　ほか。

(9) 梅原末治『佐味田及新山古墳研究』岩波書店、1921年。

(10) 久野邦雄・泉森皎『富雄丸山古墳―奈良市大和田町富雄丸山古墳群発掘調査報告―』奈良県文化財調査報告書19冊　奈良県教育委員会、1973年。

(11) 森浩一・寺沢知子編『園部垣内古墳』同志社大学文学部考古学調査報告第6冊　同志社大学文学部文化学科、1990年。

(12) 小林行雄『河内松岳山古墳の調査』大阪府文化財調査報告書第5冊、1957年。

(13) 東大寺山古墳の資料については、東京国立博物館の展示品の観察や展示図録類（注8）などによってできる限りの把握に努めたが、詳細な報告が未刊のためその全体像を確実につかんだうえでの記述でないことを断わっておきたい。

(14) 梅原末治「大枝村妙見山古墳の調査」(『京都府史蹟勝地調査会報告』第4冊　京都府教育委員会、1923年)。

同「向日町妙見山古墳」(『京都府文化財調査報告』第21冊　京都府教育委員会、1955年)。

(15) 堅田直・原口正三ほか『弁天山古墳群の調査』大阪府文化財調査報告第17冊、1967年。

(16) 伊達宗泰編『メスリ山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第35冊　奈良県教育委員会、1977年。

(17) 近藤義郎編『月の輪古墳』(注2文献)。

(18) 奈良県桜井市外山茶臼山古墳、福岡県苅田町石塚山古墳の資料もこれに近いプロポーションを取るが、鏃身側縁は最末期の銅鏃のそれとは異なる直線状を示し、銅質も白銅質で優れている。これらについては規格性の崩壊によって出現する最末期の一群とは区別し、銅鏃が定型化する段階で生み出された変異型のひとつと捉えておきたい。

中村春寿・上田宏範「桜井茶臼山古墳」(小島俊次編『桜井茶臼山古墳　附櫛山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第19冊　奈良県教育委員会、1961年)。

(19) 月の輪古墳出土銅鏃に対しては実際に化学分析が行われ、他例に比べて著しく錫分が低いという結果が得られている（注２今井文献)。

(20) 伊達宗泰ほか「500号墳」(伊達ほか『新沢千塚古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第39冊　奈良県立橿原考古学研究所、1981年)。

(21) 中井正幸編『大垣の古墳』大垣市教育委員会、1987年。

遊塚古墳出土資料については、楢崎彰一氏、大垣市教育委員会・中井正幸氏のご厚意により実見することができた。また、遊塚古墳の詳細や年代的位置づけについて、中井氏より多くの有益なご教示をいただいた。

なお、1982年に木下亘が、遊塚古墳の銅鏃に類似する資料として月の輪古墳、東大寺山古墳、兵庫県豊岡市森尾古墳、新沢500号墳、岐阜県糸貫町舟木山24号墳の各出土例を挙げている。妥当な見解といえるが、規格性の崩れの度合から、遊塚の銅鏃群は新沢500号のそれとともに月の輪・東大寺山よりも新しく、舟木山24号よりも古く位置づけられよう。

木下亘「更埴市城の内遺跡出土の陶質土器について」(『信濃』37巻1号、1985年）p.177。

(22) 末永雅雄・嶋田暁・森浩一『和泉黄金塚古墳』東京堂出版、1954年。

(23) 楢崎彰一ほか『兵庫県赤穂郡西野山第三号墳』有年考古館研究報告第１輯　有年考古館、1952年。西播流域史研究会『有年考古館蔵品図録』有年考古館　1991年、pp.67～68。

(24) 楢崎彰一「舟木山古墳群」(『岐阜県史　通史編・原始』1972年)。

なお、舟木山24号墳の銅鏃30本のうち４本は弛緩の認められない縦稜系で、肉眼による限りでは錫分の多い白銅質の優品である。26本ある最末期の弛緩型とは製作時期や入手経路が異なるものと推測される。

(25) 小林行雄「三重県石山古墳調査略報」(『日本考古学協会第８回総会研究発表要旨』1954年)。

小林行雄「三重県名賀郡石山古墳」(『日本考古学年報』１・３、1951年、1955年)。

ただし、公表された写真（『世界考古学大系』日本III　平凡社、1959年、図版77）によると側縁はＳ字カーブを保って全体に整美な形状を保ち、銅質もよいようにみえることから、製作時期は遡る可能性も考えられる。

(26) 桐原健は「誇張された形をとる鏃、大形の鏃」が少数の上差矢として成立したと説く（注３桐原文献、p.636)。上差矢とは１束の実用の矢に数本添えられる儀仗用の矢で、通常いわゆる平根の大形鏃を付け、目立つ形をしている。最末期の銅鏃にはむしろ粗悪な小形品が多いが、南原・松岳山の有樋型や福岡県筑紫野市阿志岐Ｂ26号墳出土の十字稜系の大形品は、造りも丁寧なうえ副葬本数も少ない。注25で触れたように石山古墳出土の拡大型の製作時期が遡る可能性も考えると、前期後葉のある段階において、少数の精製品を企図した大形の一群が生み出された段階があったとの想定も成り立ちうる。

奥村俊久『阿志岐古墳群II』筑紫野市文化財調査報告書第12集　筑紫野市教育委員会、1985年。

(27) 石川考古学研究会「北加賀地域古墳分布調査報告」(『石川考古学研究会会誌』22、1979年)。

(28) 浜田耕作・梅原末治「日本発見銅鏃聚成表」(浜田・新村出・梅原『吉利支丹遺物の研究附録・日本青銅利器集成』京都帝国大学文学部考古学研究報告第7冊、1926年)。

(29) 北野耕平「野中アリ山古墳」(藤直幹・井上薫・北野『河内における古墳の調査』大阪大学文学部国史研究室研究報告第1冊、1964年)。

(30) 山本輝雄「恵解山古墳第三次発掘調査概要」(山本編『長岡京市文化財調査報告書』第8冊　長岡京市教育委員会、1981年)。

同『史跡恵解山古墳』(長岡京市文化財調査報告書第25冊　長岡京市教育委員会、1990年)。

(31) ただし、同じ形態の銅鏃で中央に孔をうがつ例がある。これは弥生時代の東海地方で盛行した銅鏃と共通する特色であり、系譜的につながる可能性もあるので今後の検討を要する。

田中勝弘「弥生時代の銅鏃について」(『滋賀考古学論叢』第1集、1981年) p.22。

同「銅鏃」(金関恕・佐原眞編『弥生文化の研究』9　弥生人の世界　雄山閣出版、1986年) pp.95～96。

小野田勝一「渥美半島の銅鏃」(『知多古文化研究』2、1986年)。

(32) 宮田浩之「鉄鏃」(宮田『津古生掛遺跡II』小郡市文化財調査報告書第44集、1988年) pp.98～99。

(33) 川西宏幸「儀仗の矢鏃―古墳時代開始論として―」(注5文献)。

(34) 松木武彦「前期古墳副葬鏃の成立と展開」(注7文献)。

(35) 共伴遺物その他から現在確認できる最古の例として、岡山市浦間茶臼山古墳出土の資料（図69―A，B）が挙げられる。

近藤義郎・新納泉編『岡山市浦間茶臼山古墳』浦間茶臼山古墳発掘調査団　真陽社、1991年。

(36) 岸本直文「三角縁神獣鏡製作の工人群」(『史林』72巻5号　史学・地理学・考古学　史学研究会、1989年)。

(37) 渡辺貞幸「鍬形石の基礎的研究」(『島根大学法文学部文学科紀要』第2号、1979年)。

北條芳隆「腕輪形石製品の成立」(『待兼山論叢』第24号史学篇　大阪大学文学会、1990年)。

蒲原宏行「腕輪形石製品」(『古墳時代の研究』8　古墳II　副葬品　雄山閣出版、1991年)。

(38) 松木武彦「前期古墳副葬鏃の成立と展開」(注7文献) p.52。

(39) おもな論者の代表的論考としてつぎのものがある。

北野耕平「五世紀における甲冑出土古墳の諸問題」(『考古学雑誌』54巻4号、1969年)。

田中晋作「武器の所有形態からみた古墳被葬者の性格」(『ヒストリア』93号、1981年)。

藤田和尊「古墳時代における武器・武具保有形態の変遷」(『橿原考古学研究所論集』第8　吉川弘文館、1988年)。

(40) 都出比呂志「日本古代の国家形成論序説―前方後円墳体制の提唱―」(『日本史研究』343号、1991年) p.31。

(41) 田中晋作は、前期から中期にかけて古墳の副葬品目が転換する背景として、それらの生産・供給・配布を主導した勢力が交代する状況を想定する。
田中晋作「埋納遺物からみた古墳被葬者の性格―三角縁神獣鏡、石製腕飾類、甲冑の分析―」(『関西大学考古学研究室開設三十周年記念考古学論叢』、1983年)。

(42) 代表として、近藤義郎『前方後円墳の時代』(岩波書店、1983年) pp.299～303。

(43) 都出比呂志「古墳時代首長系譜の継続と断絶」(『待兼山論叢』第22号史学篇　大阪大学文学会、1988年)。

(44) 都出比呂志「日本古代の国家形成論序説―前方後円墳体制の提唱―」(注40文献)。

(45) 4世紀後葉から倭は朝鮮半島に対して何度かの軍事行動を行ったが、407年の戦闘で大きく敗退したらしい。この後まもなく中国南朝への通交を開始するという外交上の転換がみられる点には注意すべきであろう。川口勝康は、「広開土王碑の示す倭軍の敗退を契機として、盟主権は、佐紀の勢力から河内古市の勢力に移動した」とする。
川口勝康「五世紀の大王と王統譜を探る」(原島礼二・石部正志・今井堯・川口勝康『巨大古墳と倭の五王』青木書店、1981年)。

(46) 銅鏃の消滅の要因について、今井堯は、新しい体制のもとにおいて「銅鏃的な、いわば古き権威の象徴を必要としなくなった」状況を推測した（注2今井文献、p.310)。また、銅鏃と共通した動きを示すことで注目した鍬形石の消滅について渡辺貞幸は、「かかる配布物を必要としないようなある種の変革」を考え、「首長間の同盟関係」が、「中枢的首長の圧倒的優位性の確立を契機として」新たな段階を迎えたことの反映と位置づけている（注37渡辺文献)。

その他引用・参考文献

(1) 神原英朗『用木古墳群』岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報第1集　山陽町教育委員会、1975年。

(2) 山村宏・柴田稔編『新豊院山墳墓群D地点調査概報』磐田市教育委員会、1982年。

3　葬送儀礼における朱と石臼

北　條　芳　隆

(1)　南原古墳出土の石臼と石杵

長法寺南原古墳から出土した石臼と石杵は、古墳時代の葬送儀礼における施朱の問題と深く関わる資料として注目されている。

石臼や石杵が古墳の副葬品として発見される事例は今日でも10例程度が知られているに過ぎず、全体としてみればごく少数である。ただしこれらの資料が発見される場合、その表面にはほぼ例外なく赤色顔料が付着している。そのため、古墳から発見される石臼や石杵は、葬送儀礼にあたって遺骸や埋葬施設などに塗布する水銀朱やベンガラの細粒を粉状に擦り潰す用途にもちいられたと考えられている。

縄文時代の石皿や擦り石と大差ない形態のこうした石臼や石杵が、日常の厨房用具とはみなされず、埋葬儀礼に関わる特殊な用途に限定されて考えられている背景には、今述べたような出土状況の特異性とともに、集落遺跡からの出土数は古墳からの出土以上にわずかであるといった事実がある。弥生時代の基本的な石器組成からは欠落し、古墳時代に再び出現することも、こうした性格を考えざるをえない状況証拠のひとつである。また集落遺跡から出土するものはほとんどが石杵であるが、少なからぬ比率で表面には朱が付着していることも解明されつつある。したがって集落遺跡出土の場合でも、朱の精製やそれをもちいた祭祀に関連したものであろうと理解されている。さらに朱の生産遺跡からは類似形態の石臼や石杵が多量に出土していることを考慮すると、こうした石器が日常生活とは別に、朱の精製といった限定的用途をもって成立した蓋然性は高い。(1)

ところで、古墳出土の石臼や石杵には形態差が存在することも判明している。市毛勲は古墳出土の石臼・石杵を集成した上で形態分類を行い、石器としての加工が顕著に認められるものと、河原石などを直接利用したものとが存在することを明らかにし、前者を石製品、後者を自然石とする分類案を示した。(2) また石製品に属す石臼には「片口式」と「円形」との2形態があり、石杵にも「乳棒状」と「手杵状」との形態差が認められるとする。さらに石臼や石杵には、砂岩・凝灰岩などで作られ実用品とみなしうるものと、滑石や碧玉製で非実用品と考えうるものとが存在することを指摘している。

その後、本田光子は市毛の区分案に立脚しつつ、新たな分類案を提示している。(3) 本田案では非実用品とみなしうるものを対象から除外したうえで、非常に入念な成形と研磨を行った定形のものと、簡単な整形で実用本意の不定形のものとに区分し、前者をａ類、後者をｂ類とする。なお古墳出土の石臼・石杵についてはこれら2種類に限定されるようであるが、石杵について

はこのほかにａ類やｂ類にはみうけられない敲打痕の観察されるものを抽出し、これをｃ類としている。

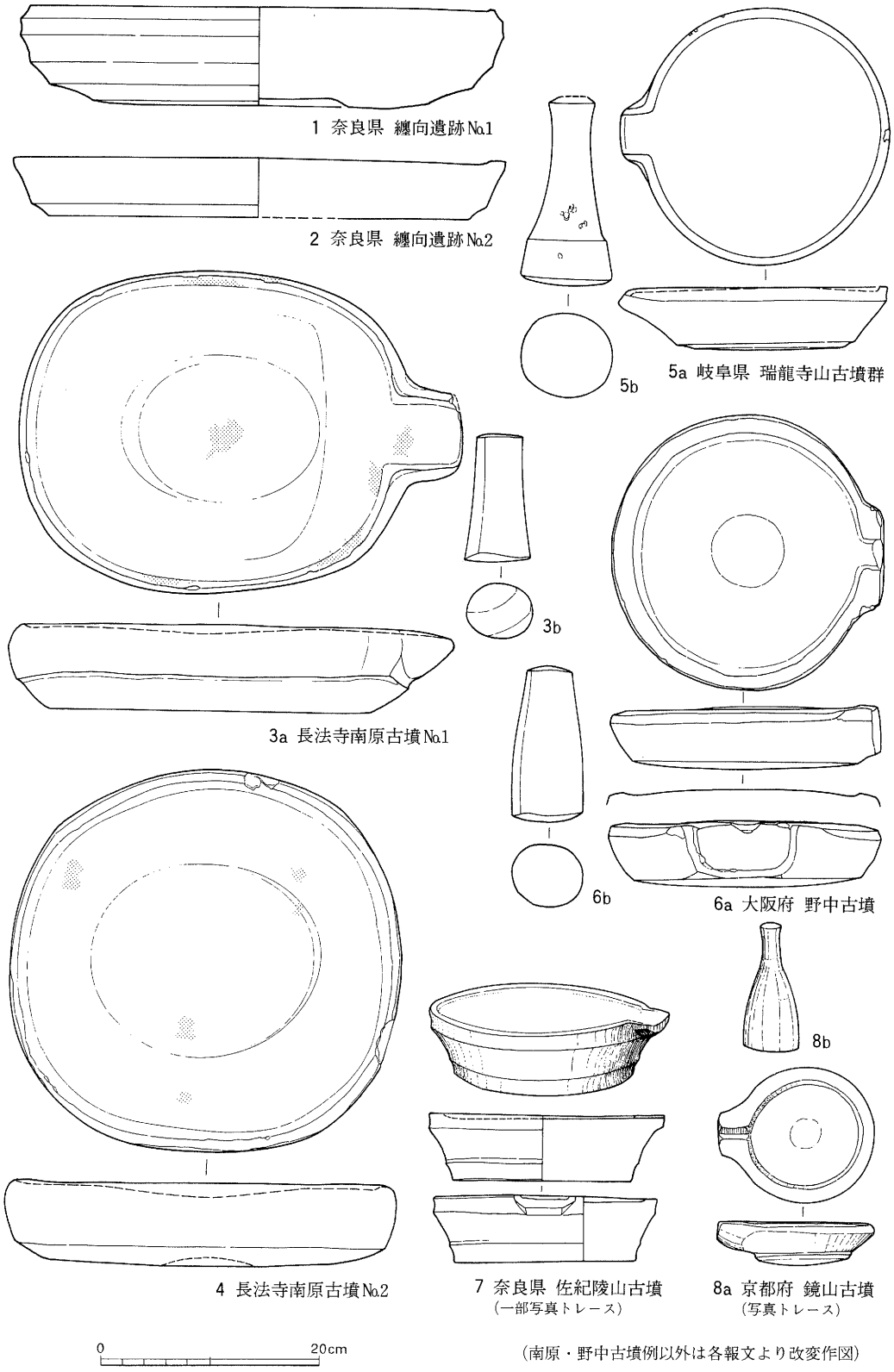
長法寺南原古墳出土の３点が赤色顔料を擦り潰した形跡をもつか否かについては、これまでかならずしも確定的ではなかったようである。今回の資料調査によって、水銀朱であるかベンガラであるのかは不明ながら、いずれの資料でもその摩擦面には赤色顔料が付着する事実を確認できたので、この点は従来からの想定を補足するものとなろう。また形態的には市毛分類案の石製品にあたり、第４章の図41で示した石臼１が「片口式」に、２が「円形」に属するものであり、３の石杵は「乳棒状」であることは改めていうまでもない。もう一方の本田案にもとづけば、すべてａ類となる。

なお本石室から検出された赤色顔料は水銀朱である。第１次調査の記載によれば、床面のくぼみに厚い朱層をなしていたとされる。このことから多量の朱がもちいられたことを知りうる。また近年東京国立博物館が実施した分析結果では、この朱層が実際には水銀朱と粘土の混じり合ったものであることも解明されている[(4)]。報文中でも述べたように、朱層が検出された範囲には本来木棺が存在した可能性が高い。したがって、朱は棺の内外面や遺骸の周囲に塗布されたと考えられる。ただし石室の壁体部に朱やベンガラが塗布されたか否かについての明確な記載はない。唯一、調査に至る直前の警官による実地検証の状況が記載されている部分において「朱に染んだ室内から若干の鉄鏃を採集し[(5)]」云々との記述がみられるので、微妙な表現ながら、石室自体にも赤色顔料が塗布されていた可能性をうかがわせるにとどまる。

(2)　大型の石臼と小型の石臼

ここで、長法寺南原古墳出土の石臼や石杵が形態的にはどのような位置にあるのかを再度検討してみたい。図72には石器としての丁寧な加工が施されている石臼と、それに共伴した石杵の代表的資料を掲げている。このうち年代的にもっとも先行する可能性の高いのは、石臼のみの出土であるが、奈良県纒向遺跡旧河道出土の資料[(6)]であり、もっとも後出するとみられるのは大阪府野中古墳出土例[(7)]である。長法寺南原古墳例は岐阜県瑞龍寺山古墳群第３群１号古墳出土例[(8)]とともに両者の中間にあたる。なお、奈良県佐紀陵山古墳（伝日葉酢媛陵）出土の石膏模型資料[(9)]は碧玉製であったとされており、その材質からみて模造品であると考えられている。同様に京都府鏡山古墳出土資料[(10)]は石臼、石杵ともに滑石製であり、これも模造品とみて差し支えない。

さて、この図からただちに判明するのは、実用品とみなされる石臼の場合、長径40cm前後の大型品と25cm前後の小型品とに区分しうることである。またこれらの石臼に伴う石杵は３例ともに棒状品であり、段の有無や握り部の形態に差異は認められるものの、寸法の点では顕著な差のないことがわかる。このことから長法寺南原古墳例は、石杵についての形態や寸法は一般



(南原・野中古墳例以外は各報文より改変作図)

図72 石臼・石杵の代表例

的なものであり、石臼の寸法に関しては２点とも大型に属すとみることができる。

なお石臼上面の形状は、すべての資料について次のような成形上の共通点が認められる。すなわち外周部を均等に削り込むことによって縁部に縁取りを作り、同時に摩擦面の中心部を高くしているのである。南原古墳例では摩擦面の中心部が７㎜ないし９㎜程度くぼむため、このくぼみがあらかじめ作出されていた可能性も考慮しておく必要があろう。ただし、それ以外の資料ではこうしたくぼみが顕著ではなく、平坦であるか、ごくわずかなくぼみが認められるものがほとんどである。そのため南原古墳例のみを例外とみなすことは困難であり、本例にみる中心部のくぼみは成形時に作出されたものではなく、実際の作業の結果生じた摩耗であると判断しうる。これに対し朱の生産遺跡から出土する石臼は、その多くが摩擦面を摺鉢状にくぼませている。こうした形状の方が石杵側の摩擦面との接点は大きくなり、朱の粒子を細かく擦り潰す作業はより効率的であったと考えられる。したがって、ここに掲げた石臼は生産遺跡で発見されるものとは形態的に差をもち、実際の作業内容や性格も異なっていた可能性が高い。一方の石杵については摩擦面がゆるやかな丸みをもつ点での共通性がある。

では大型の石臼と小型の石臼とで、どのような使用状態が復元できるのかを具体例に即して検討しておこう。復元作業にあたっては臼と杵の摩擦面に残る摩耗状態を重視する。

南原の石臼№１と石杵とが組合せで使用された可能性は高く、石臼の摩擦面中央部にみられる顕著な摩耗はこの石杵との擦り合わせによって生じたとみなされる。石臼に残る摩耗は中心から長軸側に半径10㎝、短軸側に半径７㎝程度の範囲で顕著であり、中心部がもっとも深くなっている。したがって実際の擦り合わせ作業の主体は、この部分での螺旋状の回転摩擦であったと考えうる。摩耗の範囲が長軸方向に長く認められることは、作業者が石臼の短辺側に座して擦り合わせを実施した可能性の高いことを示すものであろう。なお、こうした比較的広範囲の回転摩擦が可能であったか否かは、実際のところ石臼全体の安定性に、つまり底部の寸法や形状に規定される。本例の場合、底部の長径は30㎝であり、摩耗が顕著な部分の約1.5倍である。また底面は丁寧に研磨され平滑で、ガタツキもない。そのため十分な安定性を備えていることがわかる。石杵にも顕著な摩耗が認められ、その状況は楕円形をなす摩擦面の長軸方向にほぼ平坦となり短軸方向に丸くなっている。そのため、石臼との擦り合わせの際には摩擦面における長軸方向のほぼ全体が接する関係になっているのである。

もう一方の石臼№２についても類似した作業が実施されたことをうかがえる。摩耗の顕著な範囲は№１よりやや広く、中心部分のくぼみも深い。組み合った石杵の材質にも左右されるであろうが、それが№１と共通であった場合には、一層長期にわたって使用されたことになろう。

大型の石臼の場合、擦り潰された粉末は一旦周囲に寄せられ、次の擦り合わせ作業が繰り返された可能性もある。こうした推定を行いうることの最大の根拠は石臼自体の重量にある。資料調査時に実際の重量を測定することはできなかったが、№１と№２はいずれも非常に重い。

一人の手で頻繁に持ち上げるのが困難であることはいうまでもなく、一方を傾けるだけでも相当な労力を要する。No.1には注ぎ口が付いているので、擦り上がった粉末は臼の片側を傾けて別の場所へ移したと推定されるが、その都度臼を傾け粉末を別の場所に移す作業が行われたとは想定しがたいのである。注ぎ口のないNo.2についても、粉末を別の器具ですくい取るのでなければ、No.1と同様の作業形態であったとみなされる。周囲に寄せられた粉末が上面を満たすか擦り合わせるべき顔料の細粒をすべて処理し終える時点まで、製品は上面の周囲に残された可能性を考慮しておきたい。実際の擦り合わせ作業が上面全体の半分程度の範囲に限定される事実や、仕上げ時に摩擦面の中心部分が周囲より高く作られていることも、こうした推定を傍証するものである。なお石臼No.1の側面に施されている段やNo.2に認められる稜は、把手としての機能を備えている。このことも経験上知りえたことであるが、臼を持ち上げるときや傾ける際には不可欠な設備である。

その一方、対照的な作業状況を復元しうるのが小型の石臼である。瑞龍寺山古墳群例では石臼側面が鉢形を呈し、器高も相対的に高い。そのためこれを置いて使用する場合には、上面で擦り合わせが可能な範囲は底部の寸法に制約され、底部径は14cmであるから、半径7cmを越えることは不可能である。先の大型品の場合に比べるとごく小規模な作業面しか作出されていないのである。また底部の形状もゆるやかな丸みをもっており臼自体の安定性に欠ける。なお、これと組み合う石杵は、擦り合わせ面の直径が8.2cmであり、石臼側の摩擦面の範囲に対して不自然なほどに大きい。

より典型的な状況は野中古墳例に示されている。本例において石臼の摩耗が顕著な部分は中心部から半径3.5cmの範囲であり、この部分はわずかにくぼむ程度である。材質が砂岩であることに起因する可能性をも考慮すべきであろうが、南原例とは比較にならないほど摩耗の範囲も程度も少ないことが注意される。また石杵の摩擦面の直径は6cm前後であるものの、臼と接する部分は点でしかない。こうした摩耗状態から判断する限り、ここで実施された作業はきわめて細かなものであったと考えざるをえず、石杵全体を回転させる摩擦作業と呼ぶよりは捻り作業に近いものであった可能性が高い。この点と関連して注目されるのは底部の状況である。底部径は21cmであるが全体的に緩やかな丸みを帯びており、瑞龍寺山古墳群例と同様、臼自体の安定性に欠ける。こうした底部の丸みによって生じる不安定さに関しては、土の上など一定の弾力性があるところに置いた場合や、作業者自身が足を組みあぐらをかいた中に石臼を固定した場合には解消される可能性もあろう。ところが本例については左右の厚さも異なっているため、全体の重心は上面の中心と一致していない。つまり作業範囲における安定性が必須である筈の石臼としては決定的ともいえる欠陥を有しているのである。また本例については注ぎ口先端部の成形が不十分である点も注意しておく必要がある。擦り上がった粉末を容器などに移す際には不都合が生じたであろう。

このように、小型の石臼の場合には擦り合わせ範囲が狭く、石杵全体の大きな回転運動を支えるには形態的な無理がある。臼自体の安定性を考慮しないことも重要な特徴である。その反面、臼の寸法からみれば不自然なほど大きな杵が組み合い、多量の赤色顔料を処理するにはおよそ不向きであったと理解しうる。

(3)　模造品との関係

ここで模造品と考えられている資料との関係を検討しておきたい。模造石臼としては佐紀陵山古墳例と鏡山古墳例との２例が知られているが、ともに上面の寸法は20cm未満であり、小型石臼よりもさらにひとまわり小さい。ただし形態的な特徴を考慮した場合には相互の祖形を確定できると考える。

佐紀陵山古墳例は摩擦面の直径約17cmで、側面の下半部に段をもち、段から底部までの間には幅1.5cmほどの浅い匙面が施されている。また底部径は16cm前後である。摩擦面と底部とにみられる寸法の比率や、側面に施された段などの特徴が大型の石臼に特有のものであることは明らかなので、本例は大型の石臼を祖形にしているとみなされる。

これに対し鏡山古墳例は摩擦面の径10cm前後、底部の径は約６cm、側面は底部に向かって急速にせばまる形態であり、底部はわずかに丸みをもつ。これら諸特徴は小型の石臼と一致している。したがって、本例は小型の石臼が直接のモデルであったと考えることができよう。なお鏡山古墳例では石杵も共伴しているので、石杵との関係も検討することが可能である。石杵は上半部の握り部がせばまる形態の棒状品で、断面は楕円形を呈し、長さ9.3cm、摩擦面の長径は5.4cmである。石臼の摩擦面の寸法に対しては異常に大きく、祖形となった小型品における両者の関係が一層顕著になっているともみなしうる。

このようにみてくると、模造品と考えられる石臼についても、先にみた大型品、小型品の区別は明確に反映されていることがわかる。

(4)　石臼・石杵にかんする型式学的変化の概要

石器として加工された石臼には大小の２種類があり、相互に使用状態は異なっている可能性が高いことをみてきた。また、それぞれが模造石臼とされる石製品の祖形をなしていることも明らかになった。こうした状況は、２種類の石臼が実質的に使い分けられていた可能性すらうかがわせる。つまり多量の赤色顔料を処理する必要のあるところでは大型品が使用され、少量の赤色顔料の使用で足るところでは小型石臼が用いられたという復元モデルを提示しうるのである。ただし年代的な関係をみると、両者が一定期間共存していたとはみなしがたく、別の形で整理する方が自然である。

先に各資料の年代的位置づけを簡単に紹介したが、大型の石臼が先行し、小型品は後出であ

る。繰り返しになるが大型品における最古の資料は纏向遺跡例であり、小型品の最古の資料は瑞龍寺山古墳群例である。前者は布留式の最古相に属し、後者についてはやや不確定的ながら、おおむね4世紀末にあたると推定される。一方、模造品とされる資料についてみれば、佐紀陵山古墳例が4世紀後半であり、鏡山古墳例は5世紀前葉に比定される。つまり模造石臼が出現する時期と、実用とみられる小型石臼の出現時期との関係は微妙で、前者が先行している可能性すらあり、小型石臼の模造品が認められる時期についても祖形となった実用品の出現自体と相前後しているのである。なお、佐紀陵山古墳と長法寺南原古墳の築造年代はどちらが先行しているか微妙で、後者が先行する可能性はあるものの、ほぼ同時期と把握しておくべきであろう。

このように年代的関係の大筋をみると、大型石臼に置き換わって小型品が出現し、その成立と前後して双方の模造品が出現すると理解しうる。

こうした関係と大小の石臼にみる使用状態の差は密接に関連するとみてよい。その場合、大型品から小型品への移行は、多量の赤色顔料を実質的に処理する機能を備えたものから、ごく少量の顔料しか処理しえないものへの変化であると把握することができる。また模造品の出現は石臼・石杵を用いた擦り合わせ作業の象徴化ないし形式化を意味するものであろう。すなわち小型石臼の出現と模造品の出現は、年代的に近接し、変化の方向においても共通する部分が多いのである。いいかえれば小型石臼自体が赤色顔料の擦り合わせ作業を所作行為的に行う儀礼用具として、大型石臼にかわって出現した可能性が高いとみなされる。

この点に関連して、模造品と考えられている2資料がまったくの模型であり、なんら実用には耐えがたいのかを検討しておく必要があろう。寸法の点からみて、これらが模造品であることは確実であるが、問題は小型石臼と同程度に小規模な擦り合わせ作業であれば可能であったか否かである。佐紀陵山古墳例が模造品であるとされる主要な根拠は石材の材質であるが、これが碧玉ないし緑色凝灰岩製であれば、赤色顔料の擦り潰し作業を形式的に行うには十分耐えうる硬度であるし、砂岩以上に緻密であるため、こうした作業には適した石材だといえる。もっとも現資料には上面の中心部が顕著にくぼむような状況はみうけられない。一方の鏡山古墳例は滑石製であるが、石臼上面の中央部がわずかにくぼんでいることが注意される。模造に際してモデルの使用痕までをも忠実に模倣したとは考えがたく、本例については実際に赤色顔料の擦り合わせが行われた可能性を指摘しうる。もとより滑石製であるから、顔料の擦り潰し作業は可能であるものの、臼や杵自身の摩耗も急速に進行する。したがって材質的に適さないことはいうまでもない。あくまでも所作行為として使用するには十分であり、その形跡すらうかがわれることを重視しておきたい。

以上の理解にもとづき、石器として加工された石臼や石杵に関する型式学的変遷過程の概要を整理しておく。石臼にみる大小の差はおおまかな時期差を反映しており、同時に性格的にも異なると理解される。つまり石臼における変化の方向は小型化であり、擦り合わせ作業の所作

行為化ないし形骸化である。さらにその変化が漸時的推移であったとはみなしがたく、大型品に対する模造化の動きが直接の契機をなしたと考えうる。小型石臼はその材質からみると実用的ではあるが、機能上は模造品と共通の性格をもっている。その意味で、小型石臼の出現は石臼・石杵の型式学的変遷過程における最大の画期であると理解することができよう。

なお大型石臼、小型石臼ともに形態の細部には年代的な変化が認められる。大型品の場合には纏向遺跡例と南原古墳例との間で、側面の仕上げにおける簡略化をたどることが確認できるし、小型品の場合にも瑞龍寺山古墳群例と野中古墳例との間で、後者には全体的な成形の粗雑化を指摘することができる。

他方、石杵については形態の細部における差は認められるものの、寸法の点では明瞭な変化がみられない。臼の寸法は大幅に縮小しているのに対し、ほぼ一定の寸法を保っている。滑石製の模造石杵についても若干の寸法の縮小は認められるものの、臼の方にみる顕著な寸法の縮小化とは比例しないのである。この事実こそは、擦り合わせ行為の形式化とみなした大筋での変化がもつ別の側面を示唆している。葬送儀礼にもちいる赤色顔料のすべてを処理する機能は喪失していても、杵を実際に握り、若干の顔料を臼に置いて擦り合わせる行為自体は可能な状態に維持されたことを示すものであろう。

(5)　古墳時代における施朱の問題と石臼・石杵

以上、石器として加工された石臼と石杵についての簡単な検討を行ってきた。最後に、これらが古墳時代の葬送儀礼においてどのような位置を占めたのかをみておきたい。埋葬施設に赤色顔料が塗布される行為は縄文時代以来の長期的な歴史をもつ。ただし、古墳の成立と直接関連するのは弥生時代後期後半以降、列島の主要な地域で顕在化した動きであるとみてよい。本田は水銀朱の粒度分析から、この時点で墳墓に供給される朱の精製状況に大きな変化が生じたことを解明している[11]。続く終末期には列島内で朱の採掘を開始したことも明らかになってきた[12]。この段階での弥生墳丘墓における朱の使用状況についてはなお不明な点が多いが、赤色顔料の擦り潰しに使用されたと思われる擦り石が墓壙上面から出土する事例も報じられており[13]、石臼や石杵の性格を考えるうえで興味深い。

古墳時代の前期には埋葬施設に対する施朱が普遍化し、竪穴式石室の場合には石室壁面にベンガラを塗り、木棺内や遺骸の周囲には水銀朱を塗布するといった顔料の使い分けも認められる。特に近畿地方の一部では、竪穴式石室を構築する際に墓壙の側面にも赤色顔料を塗布したり、壁体構築から蓋石を架けるまでの各段階で赤色顔料をふり撒く行為が存在したことも知られている。また奈良県桜井茶臼山古墳の埋葬施設[14]に示されるごとく、奈良盆地に築かれる巨大前方後円墳では石室自体にも水銀朱が塗られており、多量の朱が使用されているのである。この時期以降、水銀朱やベンガラの差を問わず、赤色顔料は各地で実施される葬送儀礼において

多量に消費されるべき品目の一部をなしたと理解できる。

こうした朱の消費にみる全体的傾向のなかで、石臼や石杵はどのような意味をもつのであろうか。埋葬施設に赤色顔料が使用される場合、その搬入や擦り合わせ作業に関する遺物との関係は次のような形に整理できる。

① 埋葬施設には多量の赤色顔料がもちいられており、それを精製した石杵と石臼が組み合って副葬ないし埋置される事例である。これには実際に顔料を精製した可能性の高い南原古墳例のほか、石臼には丁寧な加工を施さないで使用したとみられる千葉県鳥越古墳例[15]や福島県会津大塚山古墳例[16]と、形式的・儀礼的な意味しかもたない小型品や模造品をもちいる事例との2者が含まれる。

② 埋葬施設には赤色顔料がもちいられており、それを精製したとみられる石杵のみが副葬ないし埋置される事例である。これにも実質的に精製を行った可能性の高い奈良県池の内1号墳[17]例や兵庫県森尾古墳例[18]などと、模造品をもちいる岐阜県長塚古墳例[19]などとの2者が存在する。

③ 埋葬施設には赤色顔料がもちいられているが、石臼や石杵は認められず、それを運搬したとみられる土器が副葬される事例である。千葉県手古塚古墳例[20]や大阪府野中アリ山古墳例[21]はその代表例として著名であるし、滋賀県雪野山古墳例[22]もこれに属する。

④ 埋葬施設に赤色顔料はもちいられているものの、石臼・石杵、運搬用の土器も遺存しない事例である。ここに属するものがもっとも多く一般的である。

これら4区分される事例の意味するところが埋葬施設における赤色顔料の多少とは直接関係しないことも明らかである。なお、④については古い時期に調査されたものや後世に大規模な改変を被ったものも少なくないので注意を要する。ただし圧倒的多数の埋葬施設がここに該当することをみれば、①から③までが少数派であったことも確実であろう。葬送儀礼の中に赤色顔料の擦り合わせ行為が組み込まれることや、少なくともその痕跡を意図的に残す行為が、普遍的で不可欠の要件ではなかったとみて差し支えあるまい。

なお現時点で性格上明らかに区分しうるのは③とそれ以外であろう。③の場合は葬送儀礼を実施するにあたり、別の場所で既に精製された赤色顔料を搬入しているのである。この点で手古塚古墳例にみる状況は特徴的である。この土器自体が布留式土器であり、ひいては近畿地方で製作された可能性すらうかがえる。そのため、本例については近畿地方であらかじめ精製された赤色顔料が容器とともに遠隔地へともたらされ、葬送儀礼のなかで使用された可能性を指摘しうる。

また雪野山古墳例では、土器の内部に遺存した赤色顔料は水銀朱であろうと調査時点から注意してきたが、本田光子による分析の結果それが裏づけられた。本例では水銀朱が遺骸や棺内の靱など、主だった副葬品に散布される状況であり、木棺や竪穴式石室には全面にベンガラが塗られていた。つまり赤色顔料の中でも水銀朱は特別な扱いを受けており、既に精製された朱

が棺内に埋置された土器によってもたらされたと考えられる。こうした2例の状況から、③の事例はその葬送儀礼において、朱を塗布する行為が伴ったであろうと推定しうると同時に、形式的であれ赤色顔料を擦り潰す行為は伴わなかった一群であると理解することができよう。

では①と②とは相互にどのような関係をもつのであろうか。実数が多いのは②である。また年代的に古くから認められるのも②のようである。一方、①のうち年代的にもっともさかのぼる可能性の高いのは鳥越古墳例であり、古墳時代初頭に比定される。これら2者はともに葬送儀礼のなかで赤色顔料が精製される行為を伴ったことがうかがえるのであるが、石臼を伴うか否かの差が何を意味するかについては次のような二つの可能性を想定しうる。

その第1は石杵がかならずしも石臼とのみ対応するのもではなかった可能性である。市毛や本田が推定するように、赤色顔料は生産地でおおまかな精製を終了しており、葬送儀礼の際に実施された行為は細粒の微粉化であったとみなされる。[23] 本田によれば水銀朱の場合、16ミクロン程度の粒度に粉末化された時点で初めて鮮やかな赤色の発色となり、それ以上の粒度では黒紫色の発色にとどまるという。福岡県老司古墳からは黒紫の水銀朱自体が検出されているので、[24] 生産地から各地にもたらされた朱の一部にはこうした粒度のものが含まれていたことを証明している。粒子の大きさにして最大380ミクロン程度であるらしい。こうした細粒を粉状にするのであれば、石杵と対応する摩擦面は石臼でなくとも可能であったとみることができよう。例えば土器や木器などの容器類に細粒を入れるなり、革などの上に粒子を置くなりして、平坦な板や石の上で擦り潰すこともありえた筈である。石杵の方が年代的には石臼に先行して出現した可能性の高いことも、こうした推定を行いうることの根拠のひとつである。

その第2は、石杵と石臼とを異なった埋葬施設に置き分けた可能性である。石臼のみが検出される実例は少ないが、南原古墳の場合でも石室の蓋石上に置かれた石臼No.2と組合う石杵は検出されていない。また池の内1号墳例では赤色顔料が塗布された埋葬施設からは石杵が出土せず、赤色顔料がみられない隣接の埋葬施設から発見されているのである。こうした状況は、個別葬送儀礼でもちいられた用具がそのまま副葬、あるいは埋置されることなく別の機会にも再利用されるか、埋葬にあたっての置き分けが意図的に実施された可能性を暗示するものであろう。

いまのところ2つの可能性のいずれか一方に限定することはできない。これ以外にも複数の原因が介在したとみなければなるまい。

現状で①について確認できるのは、4世紀の後半以降、急速な形式化が生じることである。石臼や石杵をもちいる行為自体は形骸化し、葬送行為に際してのいわば所作儀礼に転化しつつあったと考えられる。現時点で把握できる現象は模造品の出現であるが、この変化を促した主体が石臼や石杵の側であったとみるより、擦り合わされる顔料の方に直接的な要因を求めることの方が自然であろう。つまり石臼における変化の画期となった4世紀の末葉の段階における

近畿周辺地域では、既に擦り合わせ作業を必要としない程度の粒度にまで精製された赤色顔料が広く供給される状態に立ち至っていたがために、葬送儀礼にあたっての更なる擦り潰し作業は不要となり、事実上形式的な意味しかもたなくなったと考えたい。

一方、石臼や石杵の出現については不明な点が多いのであるが、次のことを確認できる。①は古墳時代の初頭には出現し、②は弥生時代後期後半にまでさかのぼる。したがって、葬送儀礼において赤色顔料を擦り合わせる行為が実質的に伴ったとみなされるのは、後期以降の弥生墳丘墓と前期古墳の一部である。弥生墳丘墓からの出土は石杵ないし擦り石のみであり、石臼の出土は知られていないが、古墳においていちはやく出現するのは、簡単な整形にとどまり丁寧な加工の施されない石臼であった。石杵の方はこの段階ですでに丁寧な加工が認められる。したがって入念に成形された大型石臼の出現は、石杵に対応させる形で後発的に促された可能性がある。その出現が意味するところもまた、朱の粒子を擦り潰す行為が葬送儀礼の一環として整備される動きであったと推測しうる。ただしそれがどのような系譜にあるのかを解明していくのは今後の課題である。

もとより、①と②を合わせた場合でも全体としてみればごく少数である点を重視するならば、古墳から出土する石臼や石杵がその被葬者の職掌や葬送儀礼に携わった集団の職掌を反映するといった、より限定的な意味をもっていた可能性もある。この点についても今後十分な検討が必要であろう。ただし集落遺跡から出土する石杵の場合、その頻度が高いのは徳島県や奈良県など朱の生産遺跡や鉱床の存在が確認できる地点に近い場所であるといった傾向を確認できるのに対し、古墳出土例の場合にはこうした形の地理的対応関係を示さない。この点は職掌との関係に限定することを躊躇せざるをえない状況証拠のひとつである。また①や②の場合、分布は点在的であるものの、岐阜県域に複数例が目立つことや、近畿諸地域のなかでは乙訓地域に2例が集まるなどの地域的偏在性も認められる。その反面、瀬戸内地域の弥生墳丘墓や前期古墳からはまったくの未見であることも注意すべきである。こうした現状であるため、ここでは①と②に対し、職掌との関係などに限定することは避け、やや包括的な形で、朱擦りの行為を葬送儀礼のなかに組み込む祭祀形態が共有された一群として把握しておきたい。

以上の検討結果から、長法寺南原古墳出土の石臼や石杵は、佐紀陵山古墳など一部の巨大古墳を含みつつも、ごく少数派にとどまった古墳時代前期の葬送儀礼における一系統の存在を物語ると理解しうる。

小稿をなすにあたり、本田光子氏からは有益な助言や教示を賜った。また資料調査に際しては次の方々に便宜をはかっていただいた。芳名を記して感謝したい。本村豪章、杉山晋作、瀬戸谷皓、辻秀人、吉村和昭（敬称略）。

注

(1)　以上の一般的理解については次の文献に詳しい。市毛勲『朱の考古学』(雄山閣考古学選書、1974年)、本田光子「石杵考」(『古代』第90号　早稲田大学考古学会、1991年)。

(2)　市毛勲『朱の考古学』(前掲注１)。

(3)　本田光子「石杵考」(前掲注１)。

(4)　東京国立博物館編『東京国立博物館図版目録　古墳遺物篇（近畿Ⅰ)』1988年。

(5)　梅原末治「乙訓村長法寺南原古墳の調査」(『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第17冊　1936年)、本文注（p．２－ℓ10)。

(6)　石野博信・関川尚功『纒向』桜井市教育委員会、1976年。

(7)　北野耕平『河内野中古墳の研究』(大阪大学文学部国史学研究室研究報告２、1976年)。

(8)　楢崎彰一、萩野繁春「瑞龍寺山古墳群」(『岐阜市史』岐阜市、1979年)。

(9)　石田茂輔「日葉酢媛御陵の資料について」(『書陵部紀要』19　宮内庁書陵部、1976年)。

(10)　東京国立博物館編『東京国立博物館図版目録　古墳遺物篇（近畿Ⅰ)』(前掲注４)。

(11)　本田光子「弥生時代の墳墓出土赤色顔料」(『九州考古学』62　九州考古学会、1988年)、同「石杵考」(前掲注１)。

(12)　岡山真知子編『若杉山遺跡発掘調査概報―昭和60年度―』徳島県博物館、1986年。
岡山真知子編『若杉山遺跡発掘調査概報―昭和61年度―』徳島県博物館、1987年。

(13)　島根県西谷３号墓が代表的事例である。出雲地域を含む山陰地域の状況が北部九州地域とともに今後注目される。渡辺貞幸「出雲市・西谷３号墓の墓上施設跡（コロタイプ図版解説)」(『考古学研究』第37巻第２号、1990年)。

(14)　上田宏範・中村春寿『桜井茶臼山古墳附櫛山古墳』奈良県教育委員会、1961年。

(15)　椙山林継「木更津市鳥越古墳の調査」(『考古学ジャーナル』171号、1980年)。

(16)　伊藤玄三ほか『会津大塚山古墳』会津若松市教育委員会、1964年。

(17)　泉森皎「池の内１号墳」『磐余・池の内古墳群』奈良県教育委員会、1973年。

(18)　瀬戸谷皓「森尾古墳の再検討」『北浦古墳群』豊岡市教育委員会、1980年。

(19)　楢崎彰一『岐阜県史（通史編原始)』(岐阜県、1972年)。

(20)　杉山晋作「千葉県木更津市手古塚古墳の調査速報」(『古代』第56号　早稲田大学考古学会、1973年)。

(21)　北野耕平ほか『河内における古墳の調査』(大阪大学文学部国史研究室研究報告第１冊、1964年)。

(22)　都出比呂志編『雪野山古墳』(八日市市教育委員会、1990年)。

(23)　市毛勲『朱の考古学』(前掲注１)、本田光子「石杵考」(前掲注１)。

(24)　本田光子「老司古墳出土の赤色顔料」『老司古墳』福岡市教育委員会、1989年。

4　近畿地方の小竪穴式石室

―長法寺南原古墳前方部小石室の意義をめぐって―

福　永　伸　哉

(1)　はじめに

長岡京市長法寺南原古墳の第6次調査において、前方部頂部から小竪穴式石室が検出されたことは、ある意味でわれわれ調査団を驚かせるものであった。それはこの種の石室が畿内の前期古墳の埋葬施設としてはきわめて稀な存在であり、なおかつ、前方部埋葬とはいえ全長60余mの前方後方墳の主要な埋葬施設として構築されていたからである。

残念なことに、この石室はすでに著しい削平を受けており、得られる情報の量は多くない。しかし、畿内の前期古墳においてこうした埋葬施設が存在すること自体に、実は古墳時代墓制の性格の一端を明らかにする手がかりが示されているともいえるのである。

(2)　研究略史と小稿の目的

竪穴式石室に平面形態や大きさの異なる複数のタイプが存在することは小林行雄によって早くから指摘されていたことである。氏は1941年に公表された「竪穴式石室構造考」の中で、当時明らかになっていた各地の竪穴式石室の規模を比較して「Aは長さ1.5ないし3.5メートル、幅0.5ないし0.9メートル（高さ0.5ないし0.9メートル）のもの、Bは長さ5ないし8メートル、幅1メートル前後（高さ1ないし1.5メートル）のもの、Cは長さ2.7ないし6メートル、幅1.5ないし2.5メートル（高さ1.2ないし2メートル）のもの」という3者の違いを見いだし、B群は割竹形木棺を使用した長大な石室、C群は内部に石棺を持つ石室であるとするすぐれた見解を示した[(1)]。ただ、小稿のテーマとかかわるA群については、良好な資料の蓄積が十分でなく、また論述の主眼がそこに置かれていなかったこともあって、A群には木棺を使用したものと使用しないものがあったと推定されること、分布が畿内より西に偏っていることなどを指摘するにとどまっている。

その後の竪穴式石室研究は、小林がB群とした長大な石室にかんするものを中心に展開した。その一方で、北部九州においては箱式石棺と竪穴式石室を折衷したような小規模な埋葬施設の発掘例が1960年代後半以降その数を増し、「石棺系（竪穴式）石室」という名称で呼ばれるようになった[(2)]。こうした状況を受けて、1974年には上野精志、山中英彦が九州地方に存在する竪穴式石室を構造面に着目して3者に類別した[(3)]。設定したタイプの評価についてはやや見解の相違がみられるものの分類そのものはほぼ共通しており、山中の記述を借りれば「偏平割石小口積みの畿内型（Ⅰ類）と畿内型を受容し伝統的墓制を脱した塊石積みの竪穴式石室（Ⅱ類）と箱

式石棺を母胎に竪穴式石室を導入した石棺系石室（Ⅲ類）」に分けることができる。そして、基本的にはⅠ類の長大な畿内型石室の要素を在地化した形で受容してⅡ、Ⅲ類の小竪穴式石室が成立したととらえている。その後、北部九州の小竪穴式石室は小田雅文、木下修、中間研志らによって整理が行われているが、おおむね同様の理解に達しているといえよう。(4)

ところで、ここ20数年の新たな墳墓研究の進展によって、弥生時代終末期（庄内式併行期）～古墳時代初頭の中部瀬戸内地域において小規模な竪穴式石室を有する首長墓の存在が明らかになってきた。これらは割石や塊石あるいは河原石を積み上げて構築する石室であり、箱式石棺の枠組みを基礎に持つ石棺系石室とは異なるものである。名本二六雄はこの種の石室について広島県の事例を整理している。(5) また、都出比呂志は竪穴式石室の型式学的研究を行うなかで、石室を長大型と短小型に分けてとらえ、長大型石室の出現については弥生終末期の短小型石室が飛躍的に規模を拡大したものとする見解を示した。(6)

このように同じ小竪穴式石室という名で呼ばれるもののなかには、長大な竪穴式石室の祖形になったような弥生終末期以来の小石室と、古墳時代になって首長墓の竪穴式石室からの影響下に新たに成立した小石室の２者が含まれるのである。小竪穴式石室の分析にあたってはそれぞれの石室の系譜を見極めながら議論を進めて行くことが必要であるが、多くはこれからの課題である。

近畿地方においては、小竪穴式石室の検出例が少ないこともあって、加古千恵子が兵庫県山東町柿坪中山古墳群の小石室について若干の検討を行った以外には、これまであまり分析が加えられることはなかった。(7) したがって、まずその実態を把握することから出発する必要がある。小稿では、これまでの研究史をふまえて古墳時代前期を中心に近畿地方の小竪穴式石室の様相を明らかにすることを第１の目的とし、さらに畿内では稀なこの種の埋葬施設が南原古墳に存在する意義についても考えてみたい。

(3)　近畿地方の小竪穴式石室とその分類

小竪穴式石室を集成して検討を行う場合、本来ならまずその定義が必要であろう。ただ、筆者自身近畿地方の竪穴式石室のすべてを比較する作業を行っていないので、ここではかりに内法全長が３ｍ未満、壁体のすべてまたは一部が２段以上の積み石で構成されているものを小竪穴式石室（小石室と略称することもある）として扱うことにする。現在の発掘状況からみて長さ3～４ｍあたりに度数分布の谷間が存在すると推定されることも、消極的ではあるがとりあえずここに線引きをする理由である。(8) 対象とする資料の時期は古墳時代前期を中心とし、一部中期前半と考えられるものもこれに加える。

文末の表３にはこれまでに知り得た近畿地方の小竪穴式石室をあげた。18の遺跡から類例が確認されているが、これらは壁体構造からみていくつかのタイプに分けることができる。

石積み小竪穴式石室　石室の四壁を下段から上段まで積み石によって築くものである。壁体を構成する石の大きさは下段から上段までほぼ同じであるが、兵庫県佐用町吉福遺跡[9]のように円礫（河原石）を用いる例と大阪府柏原市松岳山古墳[10]のように割石を積み上げるものがある。

石棺系小竪穴式石室　箱式石棺の石組の上に石を積んで壁体を構築する。最大の特徴は壁体最下段により大きな石を原則として立位で使用していることである。箱式石棺との折衷の程度によりさらに細別できる。

a型　箱式石棺の壁体上に板石を置き、上面観を小口積みの竪穴式石室に似せたもの。兵庫県揖保川町養久山1号墳第6主体など[11]（図76—8）。

b型　壁体の一部を2段以上の積み石で構成するもの。兵庫県出石町田多地3号墳第5主体など[12]（図76—19）。

c型　側壁全体を2段以上の積み石で構成するもの。柿坪中山4号墳第1主体など[13]（図76—14）。

d型　四壁を2段以上の積み石で構成するもの。柿坪中山2号墳第1主体など[14]（図76—11）。

構造面に認められるこうした細部の違いがいかなる意味を持っているのかという点については、さらに検討の余地がある。後述するように、石棺系小竪穴式石室は箱式石棺が長大な割石積み竪穴式石室の影響を受けて成立したものであると考えるなら、箱式石棺にもっとも近いa型をこの種の石室の原初的な形態としてとらえることができる。そして、b、c、d型の順で構造的には割石を積んだ竪穴式石室との類似度が増していく[15]。

さて、これらの小竪穴式石室のうち、吉福遺跡の石積み小石室は内法長が1m内外という小規模なものであり、また墳丘を持たず集団墓的なあり方を示している点でやや異質な存在といえる。これらをひとまず除いてみると、近畿地方の小竪穴式石室は大部分が石棺系のもので占められる。以下では、主として石棺系小石室の諸要素について検討を加えていくことにする。

(4)　小竪穴式石室の諸問題

石室規模と木棺の有無　考古学本来の用語法からいえば、「石室」の中には別の埋葬容器が納められていなければならない。しかし、小竪穴式石室の多くはそれを可能とするだけの内法が確保されていない。図73には、成人埋葬用と考えられる石室の床面内法を示している。石室の両小口で幅の異なるものは最大値と最小値を結んだ直線で表わしている。これをみるとほとんどの事例で最大幅が55cm未満という値をとる。また最小値は25cm程度である。この25～55cmという数値は、成人の肩部および足部の幅にかなり近いものであり、さらに木棺材の厚みを加えたとしたら石室内に遺体を収容することが困難と思われる規模である。ちなみに、図73には柿坪中山古墳群において小石室と共存している木棺直葬墓の棺の外形規模を併せて表示している。明らかに石室内法よりも大きい値を示しており、この木棺外形規模から棺材の厚さを減じた値

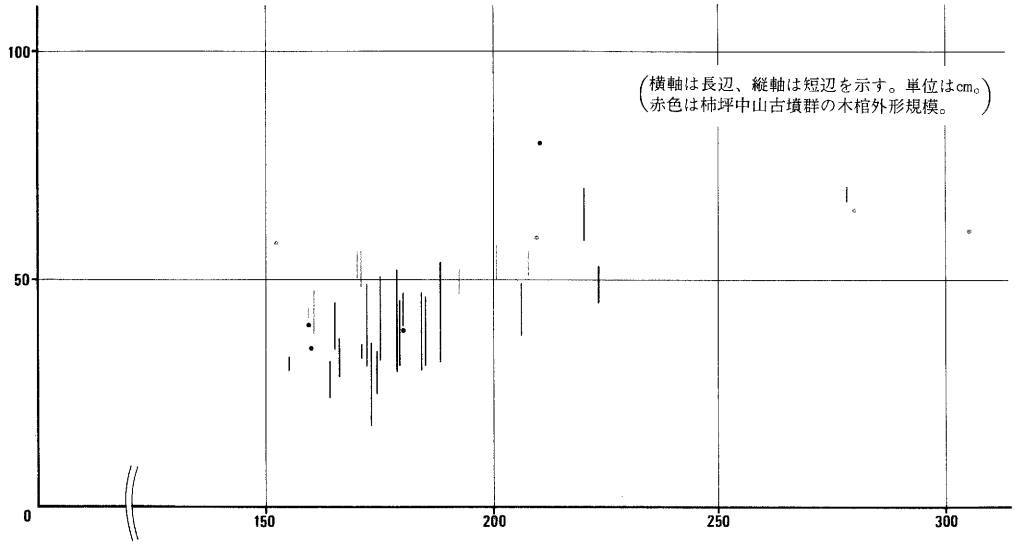


図73　小竪穴式石室の内法

がまさに石室内法の規模に相当することが推定できる。つまり、小石室の大部分は石室自体が機能的には「棺」の役割を果たしているのである。石棺系小石室が箱式石棺を基礎としていることからみても当然のことといえよう。

なお、石室の小口幅が頭側と足側で異なることもこの種の石室に顕著に認められる特徴である。一般に長大な竪穴式石室に見られる同様の差は、内部に納められた割竹形木棺の形状との関連で説明されている[16]。これに対して、内部に木棺が存在しないこれら小石室の平面形は人間の身体の形に合わせた造りであったと考えられる。壁体の上面観だけは長大な竪穴式石室に似せているものの、平面企画の原理はまったく異なるものだったのである。

さて、いま一度図73にもどると、少数例ではあるが最大幅が70cm以上に達するものが存在していることに気づく。兵庫県姫路市横山７号墳[17]、同県豊岡市中ノ郷深谷１号墳第４主体[18]、京都府大宮町大内１号墳主体[19]である。横山例については詳細がわからないが、中ノ郷深谷例では石室床面が横断面U字形となるように整えられており、内部に割竹形木棺が置かれていたことが推定されている。また、大内例では石室床面に長さ275cm、北端幅45cm、南端幅35cmの範囲で横断面U字形にくぼむ部分があり、ここに割竹形木棺が据えられていた可能性も考えられている。両者は石室長辺も220cmを超え、石棺系小石室の中でも規模の大きい部類に含まれる。このように、最下段の石を立位で使用するという箱式石棺の手法をとり入れた石棺系石室においても、規模の大きいものの中には内部に木棺を持つ文字どおりの石室機能を担った例も少数ではあるが存在している。規模の点でいうなら、小口幅60cm前後がその境界の目安になろうか。

床面の構造　割竹形木棺を設置するために床面を横断面U字形に整形した例は別として、普

通小石室の床面は平坦に整えられている。地山を削った面をそのまま床面とするもの、砂や土を敷くもの、小礫を敷くもの、板石を敷くものなどさまざまな手法があるが、石室のタイプとの相関関係はうかがわれない。むしろそれぞれの埋葬当事者たちの習俗の違いといえよう。

こうした砂や礫石は基本的には石室内の床面だけに施されている。これは遺体の収納が石室を築き、床面を整えた後に行われたことを示すものであり、木棺を設置した後に壁体の構築が始められる長大型石室とは埋葬の手順を異にしている。

蓋石上面では被葬者の頭位から足位の方向に低くなるような傾斜を持つ例が多いが、床面においては顕著な傾斜が見られないものもかなりある。

分布と展開　図74は近畿地方における小竪穴式石室の分布を示したものである。図中には石棺系小石室と石積み小石室の両者を示しているが、分布はかなり偏っている。すなわち、現状では畿内では南原古墳と松岳山古墳のわずか2例が確認できるだけであり、そのほかは兵庫県および京都府北部に分布域が限られている。なかでも、とくに但馬地域に集中する傾向があることは、発掘件数に地域的な不均衡があるとしてもなお認めることのできる特徴である。

時期的にもっとも遡る例としては、吉福遺跡の石積み小石室と養久山1号墳の石棺系a型小石室などがあげられよう。弥生時代終末期～古墳時代初頭にかけての築造である。吉福例は河原石を積み上げるタイプであり、規模の小さい点などを除けば広島市西願寺遺跡などで検出されている同時期の小竪穴式石室と類似している。[20] ただ、多数派である石棺系の小石室の祖形とするには構造的な隔たりが大きい。

これに対して、養久山1号墳第6主体などは、箱式石棺の石組の上面に別の板石を平積みして、あたかも積み石で構築した竪穴式石室のような上面形を呈しており、石棺系小石室全般に通じる構造を有している。養久山1号墳は全長約31mの前方後円墳であり、後円部中央には長さ407cm、幅102～112cmの塊石、割石を積み上げた竪穴式石室

図74　小竪穴式石室の分布

が築かれている。したがって、おなじくこの古墳に設けられた石棺系小石室が、中心主体の竪穴式石室の形態を参照した可能性は十分考えられるのである。養久山1号墳の各主体部の蓋石は幾重にも入念に施されている。箱式石棺を組み立てて残った石材は蓋石として使用すれば有用であるにもかかわらず、とくに箱式石棺の壁体上面に重ね積みしている点からみても、こうした造作が目的を持って意識的になされたことを物語っている。つまり、近畿地方における石棺系小竪穴式石室の源の一つが播磨地方に存在していることが推定されるのである。

しかし、この地方においてその後の石棺系小石室の展開は不明瞭である。いっぽう但馬地方でも古墳時代前期からかなりの類例を知ることができる。山東町柿坪中山古墳群、出石町御屋敷遺跡[21]、同町田多地引谷墳墓群[22]などにみられる石棺系小石室は4世紀代まで遡るものと考えられる。また、当地方では正始元年銘三角縁神獣鏡をはじめ古式の遺物を出土した出石町森尾古墳でも、細部の構造は不明ながら小竪穴式石室の存在が推定されている[23]。養久山墳墓群の存在する播磨西南部の集団と但馬地方の集団との間に埋葬施設にかんする情報交換があったか否かはにわかに結論を出せる問題ではない。ただ、この種の小石室が市川～円山川流域、あるいは加古川～由良川流域といった瀬戸内と日本海側を結ぶルート上に点在していることは示唆的である。石棺系小石室は箱式石棺の構造を基礎としているから、その分布域は当然のことながら箱式石棺分布域と重なる傾向にある。しかしながら、但馬以西の日本海側の地方では、箱式石棺は多く分布するにもかかわらず石棺系小石室の存在は顕著でない。これに対して播磨を含む東部瀬戸内は弥生時代終末期には箱式石棺の分布がすでにみられ、さらに古墳時代前期にかけて多数の竪穴式石室が築かれる地域である。石棺系小石室はまず竪穴式石室の外観を箱式石棺にとり入れることによって成立したと考えられる。養久山墳墓群にみられるような初期の石棺系a型小石室が河川の流域を上って但馬地方やその周辺に伝播したことも想定できよう[24]。もっとも、長大な竪穴式石室を築く葬送儀礼に参列した但馬地方の有力層が石棺系小石室を独自に考案した可能性もないとはいえない。いますこし調査事例が増加するのを待ちたい。

いずれにせよ、現状の分布をみる限り近畿地方の小竪穴式石室は播磨と但馬を結ぶ市川～円山川流域を中心として丹後、丹波の一部に分散している状況が指摘できる。南原古墳例と松岳山古墳例はこのような分布からはかけ離れた位置に存在している。とくに松岳山古墳例は最下段から板石を平積みにする石積み小竪穴式石室であり、但馬地方を中心とする石棺系小石室とは構造的には異なるものである。さらに別の地域との関連を考える必要があろう。

石棺系小竪穴式石室と木棺直葬墓　但馬地方の古墳時代前期の成人用埋葬施設には木を使ったものと石を使ったものがみられる。これらがどのように使い分けられていたかという点はまだ十分解明されていない。現在までに調査された資料をみる限りでは、木製の埋葬施設に葬られた者と石で造ったそれを使う者との間に、年齢、性別、階層による顕著な差異を見いだすことはできない。むしろ埋葬施設の違いは個々の小古墳を造営した家族集団それぞれの習俗の違

いとして説明しうる可能性がある。ここでは小竪穴式石室を含む石を使った埋葬施設と木棺墓とを対比させながら検討を進めよう。

八鹿町小山3号墳は直径25mの円墳であるが、墳丘頂部には小竪穴式石室2基、箱式石棺2基、土器棺3基が営まれており、しかも土器棺のうち1基は石棺様の石囲いを持つものであった。[25] 4世紀後半にこの古墳を築造した集団には石を使った埋葬施設への強い指向がうかがえるのである。これに対して、5世紀初頭前後から造営が始まる豊岡市北浦古墳群においては調査された50基を超える埋葬施設の大半が木棺墓で占められている。木棺を使用する習俗を持った集団の墓域といえるだろう。[26]

木棺と石棺の両者が用いられている古墳群もある。豊岡市長谷ハナ古墳群では8基の小古墳のうち6基の主体は木棺墓であるが、1―1号墳と5号墳の2基は箱式石棺を内部主体としている。[27] 同じ尾根上に古墳を築く集団の中にもこのような違いがみられることから、埋葬施設にかんする習俗は家族集団レベルで決定されていた可能性が高い。一つの墳丘上に木棺、石棺の両者が混じりあっている例もみられる。たとえば、田多地3号墳においては墳丘裾部の埋葬施設も含めて15基の主体部が設けられているが、その内訳は木棺墓・土壙墓12基、小竪穴式石室2基、箱式石棺1基であり、多数派を占める木棺墓のなかに石を使った埋葬施設が少数派として混在している。[28]

異なるタイプの埋葬施設が同じ墓域内に存在することは弥生時代の遺跡においても認められるところである。かつて筆者は、弥生時代の共同墓地における木棺型式を検討し、墓地内で少数派型式の木棺被葬者は出自の異なる他集団からの移入者であると考えた。[29] 上述したような但馬地方の古墳時代埋葬施設のありかたをみると、埋葬施設が被葬者の出自を反映するという原理が、少なくとも小古墳を築くような有力層以上の階層では依然として存続していた可能性が高いといえよう。

石棺系小竪穴式石室の階層性　石材を使った埋葬施設と木棺墓との使い分けは、それぞれの家族集団の習俗として選択される事柄であったと考えられる。その意味では両者の材質の違いには被葬者の身分的上下関係を示すような性質の差異はなかったとみてよい。差異はむしろ木棺墓どうしで、あるいは石材を使った埋葬施設どうしの間で顕在化する。木棺墓の場合その要素の一つとしては木棺の規模が考えられる。前述の田多地3号墳では第10主体のように木棺規模1.6m程度のものから第2主体の3.3mの棺に至るまで大小の差が存在する。これに対して、石材を使用する埋葬施設おいてはこれほどの規模の違いが認められない点が特徴である。この場合には埋葬施設の規模そのものよりも、石材にどの程度加工を施しているか、いかに入念な構造に造るかといった側面が被葬者の社会的性格を反映する要素になると考えられる。[30] 石棺系小竪穴式石室は、石材を使った埋葬施設を用いる集団のなかで社会的にやや有力な地位にある者の墓として、箱式石棺を基礎に長大な竪穴式石室の外観のみをとり入れて造られた埋葬施設

と理解することができるのである。

ところで、田多地3号墳などの小古墳でも木棺には全長3mを優に超えるものがあるのに対して、石棺系小石室となると2mを超える例さえ稀である。もし石材さえ確保できるならば長大な石棺系石室を構築することは技術的にさほど困難なことではあるまい。にもかかわらず、同時期のほぼ同様の階層で用いられた木棺なみの規模さえも確保できていないことは、当時の石室規模には木棺と比べてかなり厳密な秩序と規制が貫かれていたことをうかがわせるものである。秩序とはここでは石室規模によって首長の地位の上下が表現されるシステムである。長大な竪穴式石室は、当時の政権の中枢にかかわる大首長の埋葬施設として位置づけられたものであった。地域の有力層が自己の判断で簡単に石室規模を増大できる状況にはなかったと考えられるのである。

石棺系小石室からはついに長大な竪穴式石室が生まれることはなかった。古墳時代の「棺制」ともいうべき秩序をふまえてこの事実をみるとき、そこには地域内の有力層の埋葬施設として認定されるべきこの種の小石室の階層性が端的に表われているといえる。兵庫県山南町に全長48m、丹波地方有数の前期の前方後円墳である丸山1号墳が存在している[(31)]。後円部に割石小口積みの長大な竪穴式石室を持つこの古墳の前方部に1基の石棺系石室が構築されている。内法長366cm、幅51cmをはかる近畿地方最大の石棺系石室が前方部埋葬として設けられているあたりに、当地方の石棺系石室の階層的な限界をみることができるであろう。

(5)　南原古墳における小竪穴式石室の存在意義

前項では、おもに石棺系の小石室をとりあげて検討し、これが中小古墳を築くような有力層の埋葬施設として、近畿地方では但馬を中心に播磨、丹波、丹後などに分布域を広げていることを示した。では、こうした性格を持つ埋葬施設が南原古墳に存在していることにはどのような意味が認められるであろうか。

南原古墳の小竪穴式石室構造　南原古墳前方部から検出された小竪穴式石室は、東半部がすでに破壊されていたが、残存部分の情報によってほぼ構造を知ることができる。詳細は第3章に述べたとおりであるが、その特徴をいま一度確認すると、壁体は最下段に大きな石を立位で使用してその上に角礫を平積みする、床面には小角礫を敷く、西側に排水溝を取り付けるなどの点があげられよう。規模については墓壙底部東端で確認された掘り込みを小口石据え付けのためのものと考えると、石の厚みを勘案して内法長170cm程度に復元できる。幅は西端部で30cmと狭く、こちらを足部としても内部に木棺が収納された可能性は低い。また、主軸はN77°Eで石室幅や排水溝の位置からみて頭位は東と推定される。

このような構造を持つ石室はまさに石棺系小石室としてとらえられるものである。しかし、畿内の前期古墳においてこれまでに石棺系小石室が検出された例はこの南原古墳以外にはみら

れず、きわめて異例の存在である。

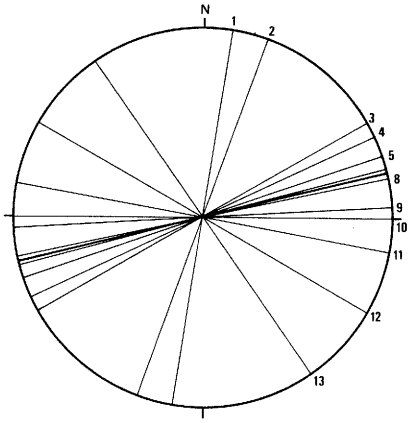
埋葬施設と被葬者の出自　長大な竪穴式石室は、首長の地位の上下を地域を越えた全国レベルの秩序のなかで表現するための埋葬施設であると考えられる。これに対して石棺系小石室は前項で述べたように地域内の習俗に根づいた埋葬施設であり、ほんらい地域を大きく飛び越えて点的に存在する性質を持つとは認めにくい。石棺系小石室をこのように理解する時、南原古墳に小石室が存在する理由は、被葬者がこの種の埋葬施設を使用する他地域の集団と深い関連を有する人物であったという推定がもっとも妥当であろう。具体的にいえば、そうした他地域の集団から婚姻などによって山城南部のこの乙訓地域に移入してきた人物を想定しうるのである。畿内にないタイプの埋葬施設をわざわざ採用したのはそれが出身集団において使用されていた埋葬施設だったからである。

弥生時代には埋葬施設の形式は集団ごとに決められており、婚姻などによる集団間の人間交流があった場合でも移入者は出身集団で使っていた形式の埋葬施設に葬られるため、共同墓地の中には両者が混在するといった現象がみられた。古墳時代になっても有力層においては依然としてこうした原則が守られていたと考えられる。[32] というよりもむしろ、この時代には婚姻自体が、首長間の政治的同盟関係を締結あるいは維持していく際の手段のひとつとしてしばしば利用されていたとみる方が正しいであろう。故人の葬送儀礼の場はそうした関係の確認、表示にとって重要な役割を担ったはずである。南原古墳においては他地域の埋葬施設ともいえる石棺系小石室を構築することにこそ大きな意味があったのである。埋葬頭位をも念頭において周到に造られた小石室ではあったが、ただひとつ、短いながらも排水溝を取り付けている点はふつうの小石室には見られない特徴である。前方部埋葬とはいえ、畿内の首長墓の墳丘上に造られるだけの入念さを備えたものといえようか。

南原古墳小石室の被葬者像　では、この小石室に葬られた被葬者の出身地はどこに求められるであろうか。小石室は前方部頂部に墳丘主軸とほぼ直交する方向で設けられており、墳丘主軸との関係は後方部竪穴式石室とは異なる。立地の条件からみても、幅の狭い前方部頂で主軸直交方向に構築すべき利点はとくに認められないにもかかわらず、あえてこれを実行している理由には、埋葬頭位との関連が考えられる。

畿内においては前期の首長墓の埋葬頭位が北優位となることが指摘されており、南原古墳の後方部竪穴式石室も南北主軸でこの原則にかなっている。[33] また、埋葬頭位と方位との関係には地域によってさまざまな傾向が存在することも判明している。そこで、近畿地方で石棺系石室が多く用いられている但馬地方とその周辺の、前期の首長墓およびそれに準ずる古墳の埋葬施設主軸方位を示したものが図75である。[34]

これをみればこの地方では埋葬施設の主軸が東西優位となる傾向のあることがわかる。首長層の地域間交流、政治的同盟関係などのありかたによっては、地域の傾向とは異なる頭位をと



1　兵庫県伊和中山１号
2　京都府蛭子山１号
3　京都府大谷
4　兵庫県丸山１号南石室
5　兵庫県丸山１号北石室
6　京都府権現山
7　京都府長法寺南原
8　兵庫県北浦18号
9　兵庫県城の山
10　兵庫県森尾
11　京都府園部垣内
12　京都府広峯15号
13　京都府作り山１号

図75　但馬地方周辺の埋葬施設主軸

る埋葬施設が造られることが考えられる。このような見方に立つと、南原古墳の前方部被葬者としては石棺系小竪穴式石室を使い、東西方向の埋葬頭位を選ぶような地域の出身者であり、後円部被葬者との婚姻などによってやって来た乙訓の地で生涯を終えた人物像を想定できる。近畿地方でその出身地を捜すなら、但馬地方周辺が有力候補のひとつになりうるであろう。

(6)　首長層の地域間交流と埋葬施設構造

首長層の婚姻関係には政治的な意味合いが含まれていたであろう。それにともなって異なる地域の埋葬習俗が移動することもしばしば起こりえたと考えられる。埋葬施設が木棺であった場合には、腐朽して細部の構造がわからないため形態的な議論が進めにくいが、それが石材を用いた埋葬施設であるならば、発掘事例としても目につきやすい。

畿内およびその周辺の古墳を見渡せば、南原古墳をはじめとして、地域内の伝統では説明しきれない埋葬施設を設けている例が少数ながら認められる。神戸市処女塚古墳前方部斜面の箱式石棺[35]、同市天王山５号墳主体部の箱式石棺[36]、茨木市将軍山古墳裾部の箱式石棺[37]、枚方市楠葉古墳主体部の箱式石棺[38]、柏原市松岳山古墳クビレ部テラスの小竪穴式石室と箱式石棺[39]などである。長大な竪穴式石室は別として、石材を使ったこうした小規模な埋葬施設は畿内ではきわめて例外的な存在である。

上に例示した古墳の多くが、畿内以外の地域とのつながりをうかがわせる要素を持っている点は示唆的である。処女塚古墳から出土した山陰系の土器、将軍山古墳の竪穴式石室に使われた結晶片岩、一部に鷲の山石を使用した松岳山古墳の後円部石棺などがそれにあたる。つまり、これらが示す被葬者の出身地域、出身集団で使用されていた埋葬施設が畿内地方に持ち込まれたものとして解釈できるのである。小児棺の場合はその親の出身地との関連が考えられよう。現状ではまだ確認された例は少ないが、今後前方後円（方）墳の墳丘や墳丘周辺の調査が進めば、こうした事例の増加が予想される。

(7)　結　語

南原古墳の小竪穴式石室をとりあげて、古墳時代の埋葬施設が持つ性格を検討した。古墳時代の有力層の埋葬施設としては、首長墓の長大な竪穴式石室のように地域を越えた身分秩序を示すものと、小竪穴式石室や箱式石棺、小規模な箱形木棺のように地域内の家族集団レベルの

習俗を表わすものが存在している。南原古墳の小石室は埋葬施設としては後者の性格を持つものであるが、婚姻などによって地域を越えた人間交流が行われた場合にはこうした埋葬施設を用いる伝統のない地域においても、例外的に存在することがありえたのである。この時代、特に首長層にとっては、どのような地域勢力と関係を取り結ぶかという選択が自らの集団の浮沈にかかわる重要な政治問題であったと考えられる。他地域とつながりの深い埋葬施設を営むことは、葬送儀礼の場を利用してこうした諸関係を広く顕示する役割をも担った行為であったといえるのである。

注

(1) 小林行雄「竪穴式石室構造考」(『紀元二千六百年記念史学論文集』京都帝国大学文学部、1941年)。のち『古墳文化論考』(平凡社、1976年）に再録。

(2) 福岡県炭焼5号墳などが調査の早い例である。柳田康雄編『炭焼古墳群　筑紫郡那珂川町大字中所在方形周溝墓の調査』福岡県教育委員会、1968年。

(3) 上野精志編『七夕池遺跡群発掘調査概報』志免町文化財調査報告書第1集　志免町教育委員会、1974年。

山中英彦『東宮ノ尾古墳群』東宮ノ尾古墳群発掘調査団、1974年。

(4) 小田雅文「野田東部7号墳主体部について」(小田ほか編『柿原野田遺跡』柿原野田遺跡調査団、1976年)。

木下修ほか「原古墳群」(木下ほか編『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第2集　福岡県教育委員会、1976年)。

中間研志「竪穴式石室・石棺系竪穴式石室」(中間編『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告6　甘木市所在柿原古墳群の調査II』福岡県教育委員会、1986年)。

なお、柿原古墳群の事例を検討した中間は、四壁を小口積みで構築する小規模な竪穴式石室が逆に箱式石棺の影響を受けた結果、石棺系石室（氏は石棺系竪穴式石室とよぶ）が生まれた場合も考えられるとする。

(5) 名本二六雄「竪穴式石室A群小論—広島県の例を中心に—」(『遺跡』第23号　遺跡発行会、1983年)。

(6) 都出比呂志『竪穴式石室の地域性の研究』大阪大学文学部国史研究室、1986年。

(7) 加古千恵子「内部構造」(櫃本誠一、加古編『柿坪中山古墳群　第2集』山東町教育委員会、1978年)。

(8) 都出『竪穴式石室の地域性の研究』(注6文献）p.11、図2。

(9) 石野博信ほか「播磨・吉福遺跡—古墳時代前期集団墓の調査—」(『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第2集　兵庫県教育委員会、1974年)。

(10) 桑野一幸『松岳山古墳墳丘範囲確認調査概報　1986年度』柏原市教育委員会、1987年。

(11)　近藤義郎編『養久山墳墓群』揖保川町教育委員会、1985年。

(12)　森内秀造ほか『田多地古墳群　田多地経塚群Ⅰ』出石町教育委員会、1985年。

(13)　櫃本、加古編『柿坪中山古墳群　第2集』(注7文献)。

(14)　櫃本誠一編『柿坪中山古墳群　第1集』山東町教育委員会、1975年。

(15)　形態面からみてa型の成立が早いとしても、a型にも時期のくだるものがある。型式学的にはa型→d型への変遷が辿れるであろうが、この違いは構造的にどれだけ入念に造るかという違いでもあり、階層差、地域性も含めてもう少し検討する必要がある。

(16)　『古墳文化論考』(注1文献) p.169。

(17)　近藤義郎『前方後円墳の時代』岩波書店、1983年。
『定型化する古墳以前の墓制』(第24回埋蔵文化財研究集会資料)、1988年。

(18)　瀬戸谷晧編『中ノ郷・深谷古墳群』但馬考古学研究会、1985年。

(19)　波多野徹、久保哲正編『大内1号墳発掘調査概報』大宮町教育委員会、1983年。

(20)　金井亀喜編『西願寺遺跡群』広島県教育委員会、1974年。

(21)　前田豊邦「御屋敷遺跡」(『出石町史』第3巻　資料編Ⅰ　出石町、1987年)。詳しい図面等は未公表であるが、竪穴式石室1号出土の四獣鏡は古式の仿製鏡と思われる。

(22)　『田多地引谷墳墓群現地説明会資料』出石町教育委員会、1989年。

(23)　瀬戸谷晧「森尾古墳の再検討」(瀬戸谷編『北浦古墳群』豊岡市教育委員会、1980年)。

(24)　播磨地方の弥生時代終末期の墳墓である揖保川町養久山5号墓や姫路市山戸4号墓では小石室の中に土器棺を納める埋葬法がみられるが、近年但馬地方においても八鹿町小山3号墳、同町源氏山1号墳などで土器棺のまわりに石棺状の石囲いを設ける古墳時代前期の埋葬施設が検出されているのは興味深い。今後両者の関係を検討する必要がある。
養久山5号墓は『養久山墳墓群』(注11文献)、山戸4号墓は『定型化する古墳以前の墓制』(第24回埋蔵文化財研究集会資料、1988年)、小山3号墳、源氏山1号墳については、谷本進、山田宗之編『小山古墳群・東家の上遺跡』(八鹿町教育委員会、1990年) を参照。

(25)　谷本、山田編『小山古墳群・東家の上遺跡』(注24文献)。なお、八鹿町教育委員会谷本進氏から同町域の古墳について有益な御教示を得た。

(26)　瀬戸谷晧編『北浦古墳群・立石墳墓群』豊岡市教育委員会、1987年。

(27)　瀬戸谷晧編『長谷・ハナ古墳群』但馬考古学研究会、1984年。

(28)　森内ほか『田多地古墳群　田多地経塚群Ⅰ』(注12文献)。

(29)　福永伸哉「弥生時代の木棺墓と社会」(『考古学研究』第32巻第1号、1985年)。

(30)　豊岡市中ノ郷深谷2号墳の箱式石棺は丁寧に加工した石材でつくられ、特製の石枕も設置されている。石室構造は持たないが、入念な造りである。瀬戸谷編『中ノ郷・深谷古墳群』(注18文献)。

(31)　山本三郎、井守徳男『丸山古墳群―調査の概要―』山南町、1977年。

(32)　福永伸哉「共同墓地」(都出比呂志編『古代史復元』6　講談社、1989年)。

(33) 都出比呂志「前方後円墳出現期の社会」(『考古学研究』第26巻第3号、1979年)。ただし、南原古墳の後方部石室の埋葬頭位は南頭位である可能性も残っている。

(34) 中小の古墳の多くは尾根筋や等高線の方向に合わせて埋葬頭位が変化する。埋葬頭位と絶対方位の検討は、原則として前方後円墳などの首長墓や尾根筋の方向に左右されない丘陵頂部に築かれた規模の大きい古墳においてのみ有効である。

(35) 『史跡処女塚古墳』神戸市教育委員会、1985年。

(36) 『天王山古墳群5・6号墳現地説明会資料』神戸市教育委員会、1988年。

(37) 堅田直「将軍山古墳調査概報」(『大阪市立博物館報』No.4　大阪市立博物館、1965年)。

(38) 北野耕平「楠葉古墳」(『枚方市史』第6巻、1968年)。

(39) 桑野『松岳山古墳墳丘範囲確認調査概報　1986年度』(注10文献)。

表３　近畿地方の小竪穴式石室集成表（古墳時代前期）

遺跡名（所在地）		図番	墓壙規模（長×幅×深）(cm)	石室内法（長×幅×深）(cm)	壁体構造	床面施設	主軸方位	副葬品	被葬者	文献
吉福遺跡（兵庫県佐用町）	石室１	1	210×156×95	115×60×—	積(円)		N12W			①
	石室３	2	128×100×55	77×27/24×42	積(円)		N３W			
	石室４	3	165×115×40	100×30×—	積(円)		N88E			
	石室５	4		—×26×—	積(円)					
	石室８	5		160×40×—	棺d		N54W			
養久山墳墓群（兵庫県揖保川町）	１号墳第２主体	6	180×110×90	60×27/26×26/22	棺a	小円礫	N11E	剣		②
	〃　第３主体	7	—×160×140	180×47/40×20/15	棺a		N13E	剣、斧、ガラス玉		
	〃　第６主体	8	—×215×117	180×46/32×19	棺a	小円礫	N87E	鉇		
横山７号墳（兵庫県姫路市）				210×80×110						③
秋葉山墳墓群（兵庫県和田山町）	２号墳第２主体	9	405×257×138	185×46/31×35/25	棺b		N78W	刀、鉇	♀成人	④
	〃　第４主体	10	334×180×125	179×52/30×30/25	棺b		N75W			
柿坪中山古墳群（兵庫県山東町）	２号墳第１主体	11	315×245×95	171×36/33×25	棺d	小石			♀40代	⑤
	１A号墳第１主体	12		59×30/26×27	棺d		N35E			
	３号墳主体	13	495×295×137	188×54/33×32	棺d	小円礫	N39E	剣、鏃	♂20～30	
	４号墳第１主体	14	395×270×135	165×45/30×40	棺c	板石	N14E	剣、鏃、斧、針	♂50以上	
明治山石棺（兵庫県氷上町）		15	320×190×85	175×50/32×30/24	棺a	板石	N46E	鉇	♀?	⑥
小山古墳群（兵庫県八鹿町）	３号墳第１主体	16	398×278×204	155×33/30×38	棺c	板石	N83E	鏃、鉇	♂２体30～40	⑦
	〃　第２主体	17	359×282×118	173×36/18×32	棺c	小円礫	N87E	剣、鉇	♂50代	
	〃　第７主体	18	149× 99×43	97×24/17×20/15	棺a		N89W	鏃		
田多地墳墓群（兵庫県出石町）	３号墳第５主体	19	328×184×87	166×38/27×34	棺b		N90E	鉇	♀壮年	⑧
	〃　第６主体	20	435×284×100	164×32/24×22/16	棺b		N81W	剣	♂40代	

遺跡名（所在地）		図番	墓壙規模（長×幅×深）（cm）	石室内法（長×幅×深）（cm）	壁体構造	床面施設	主軸方位	副葬品	被葬者	文献
田多地引谷墳墓群（兵庫県出石町）	数基あり									⑨
森尾古墳（兵庫県出石町）	可能性あり									⑩
御屋敷遺跡（兵庫県出石町）	2号主体		420×310×—	172×49/31×—	棺c			鏡、刀子、管玉櫛、ガラス玉		⑪
	3号主体		350×270×—	206×49/38×—	棺c			鏡、ガラス玉		
長谷・ハナ古墳群（兵庫県豊岡市）	5号墳第1主体	21	325×225×80	175×32/25×25	棺d		N22W			⑫
中ノ郷・深谷古墳群（兵庫県豊岡市）	1号墳第4主体	22	395×230×75	220×70/59×45	棺b		N85E	鏡		⑬
	〃　第5主体	23	400×230×—	—×45×26	棺c		N80E	鉇		
新浜古墳群（京都府網野町）	2号墳主体	24		175×38×28	棺a		N37E			⑭
	3号墳主体	25	—×160×65	185×47/40×20	棺a		N77E	剣		
大山墳墓群（京都府丹後町）	10号墳第3主体	26	455×235×87	223×53/45×70	棺d		N48W	鉄片		⑮
大内古墳群（京都府大宮町）	1号墳主体	27	470×290×50	278×70/67×45	棺d		N17W	剣、斧、鎌、鉇刀子		⑯
八ヶ谷古墳（京都府福知山市）	第3主体	28	310×150×—	180×40×40	棺a	小円礫	N5E			⑰
長法寺南原古墳（京都府長岡京市）	前方部主体	29	230×100×—	—×30×—	棺d	N77E				⑱
松岳山古墳（大阪府柏原市）	クビレ部埋葬	30		160×35×—	積(割)	板石	N59W			⑲

近畿地方における古墳時代前期（一部中期前半のものを含む）の小竪穴式石室を示した。壁体構造欄の棺aとは石棺系a型小石室、積（円）は円礫を使った石積み小石室、積（割）は割石を使った石積み小石室を表わす。図番は図76の集成図中の番号を示す。

〈文献一覧〉

①石野博信ほか「播磨・吉福遺跡―古墳時代前期集団墓の調査―」(『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第2集　兵庫県教育委員会、1974年)。

②近藤義郎編『養久山墳墓群』揖保川町教育委員会、1985年。

③近藤義郎『前方後円墳の時代』岩波書店、1983年。

『定型化する古墳以前の墓制』(第24回埋蔵文化財研究集会資料)、1988年。

④藤井祐介ほか『秋葉山墳墓群』和田山町教育委員会、1978年。

⑤櫃本誠一、加古千恵子編『柿坪中山古墳群　第2集』山東町教育委員会、1978年。

櫃本誠一編『柿坪中山古墳群　第1集』山東町教育委員会、1975年。

⑥櫃本誠一ほか「氷上郡氷上町明治山箱式石棺の調査」(『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第2集　兵庫県教育委員会、1974年)。

⑦谷本進、山田宗之編『小山古墳群・東家の上遺跡』八鹿町教育委員会、1990年。

⑧森内秀造ほか『田多地古墳群　田多地経塚群Ⅰ』出石町教育委員会、1985年。

⑨『田多地引谷墳墓群現地説明会資料』出石町教育委員会、1989年。

⑩梅原末治「出石郡神美村の古墳」(『兵庫県史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第2集、兵庫県、1925年)。

瀬戸谷晧「森尾古墳の再検討」(瀬戸谷編『北浦古墳群』豊岡市教育委員会、1980年)。

⑪前田豊邦「御屋敷遺跡」(『出石町史』第3巻　資料編Ⅰ　出石町、1987年)。

⑫瀬戸谷晧編『長谷・ハナ古墳群』但馬考古学研究会、1984年。

⑬瀬戸谷晧編『中ノ郷・深谷古墳群』但馬考古学研究会、1985年。

⑭杉原和雄、三浦到「新浜2・3号墳発掘調査概要」(高橋美久二ほか編『林遺跡発掘調査報告書』網野町教育委員会、1977年)。

⑮常盤井智行、黒田恭正編『丹後大山墳墓群』丹後町教育委員会、1983年。

⑯波多野徹、久保哲正編『大内1号墳発掘調査概報』大宮町教育委員会、1983年。

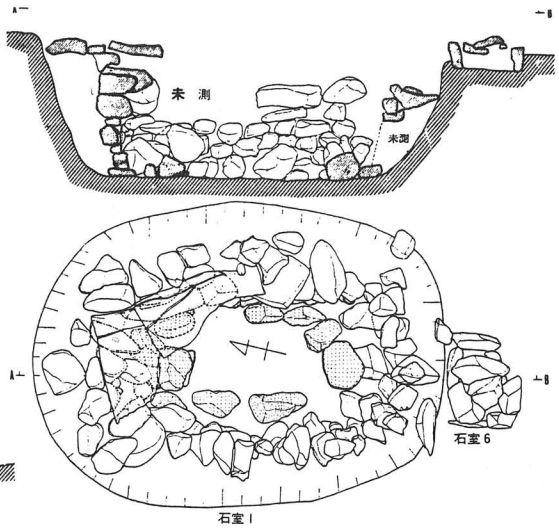
⑰平良泰久「八ケ谷古墳」(常盤井智行ほか編『丹波の古墳Ⅰ―由良川流域の古墳―』山城考古学研究会、1983年)。

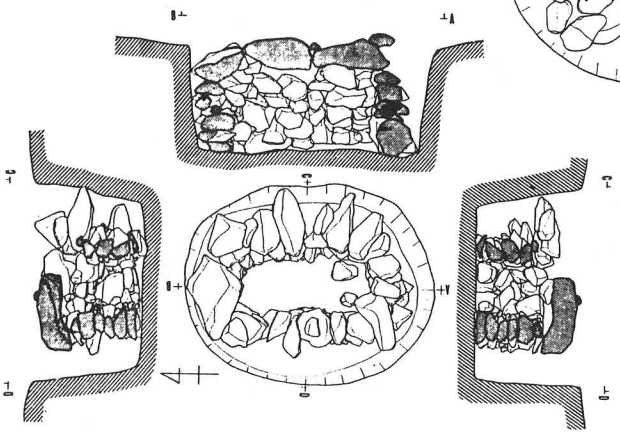
⑱福永伸哉ほか「長法寺南原古墳第6次調査概要」(中尾秀正編『長岡京市文化財調査報告書』第24冊　長岡京市教育委員会、1990年)。

⑲桑野一幸『松岳山古墳墳丘範囲確認調査概報　1986年度』柏原市教育委員会、1987年。

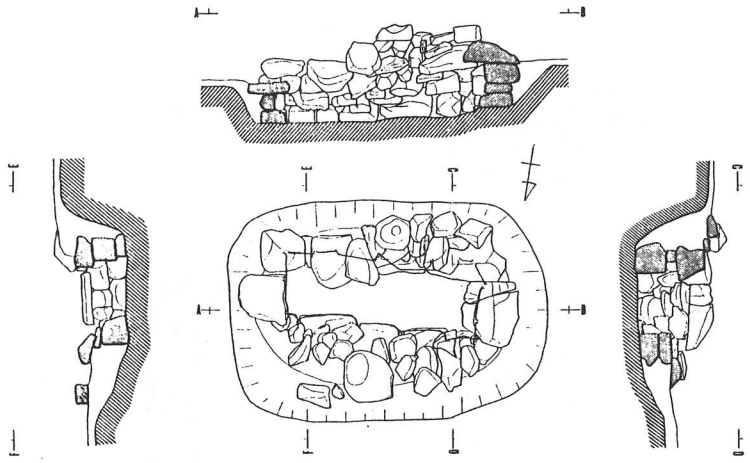
図76-1～3

1　吉福遺跡石室1





2　吉福遺跡石室3



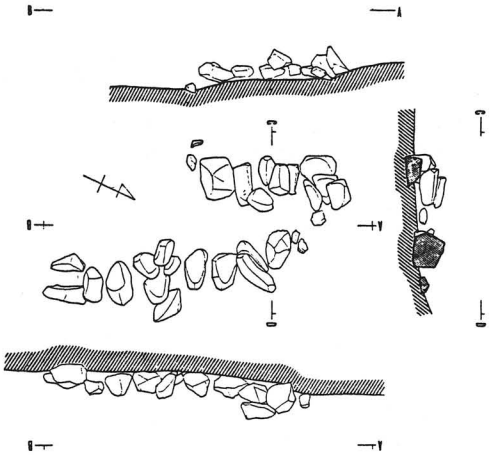
3　吉福遺跡石室4

0　2m

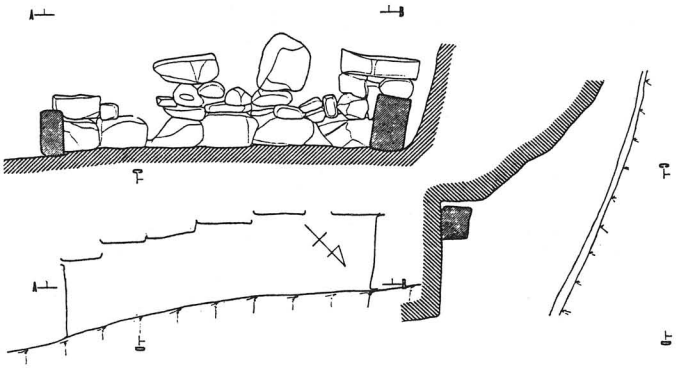
古墳時代前期(一部中期前半を含む)の小石室のうち図が公表されているものを集成した。出典は〈文献一覧〉にあげたが、一部改変あるいは再トレースしたものもある。縮尺は40分の1に統一した。

図76　近畿地方の小竪穴式石室集成図

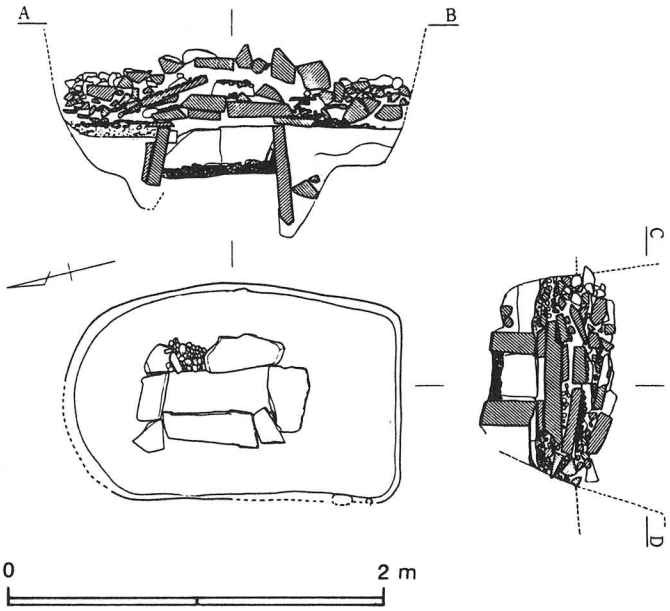
図76-４～６



４　吉福遺跡石室５

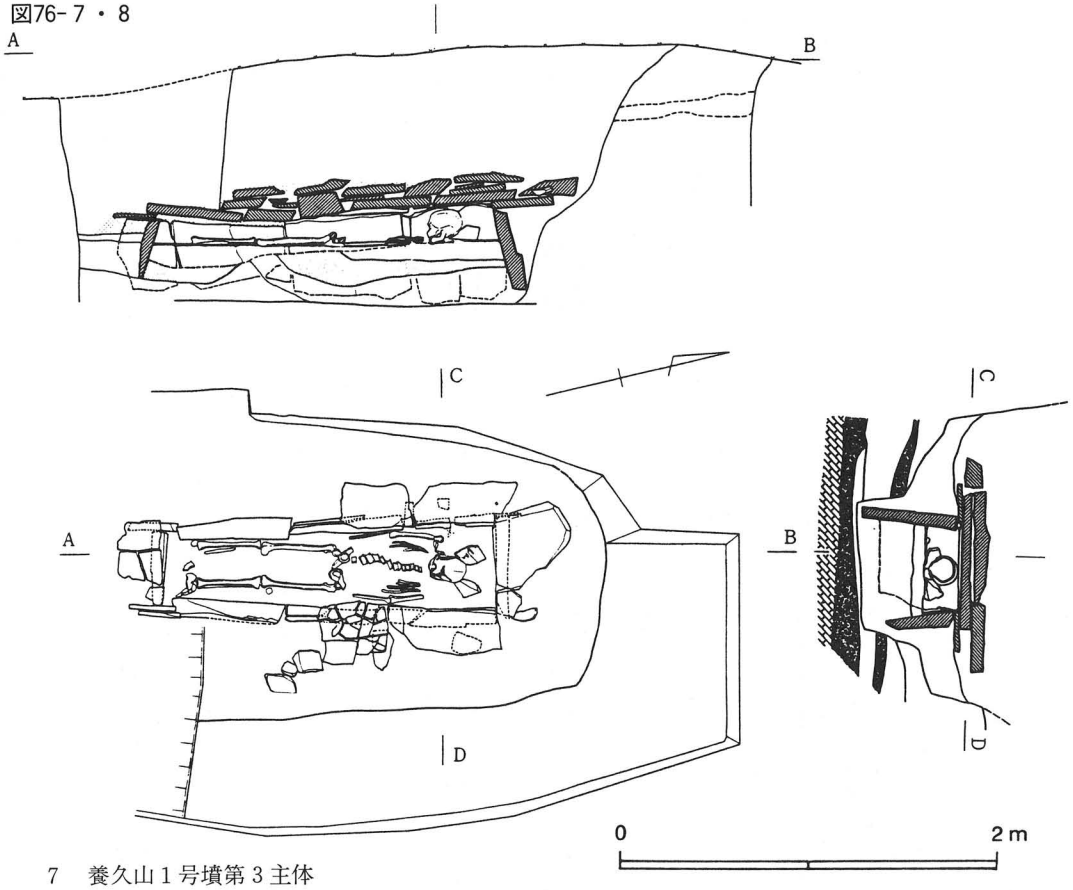


５　吉福遺跡石室８

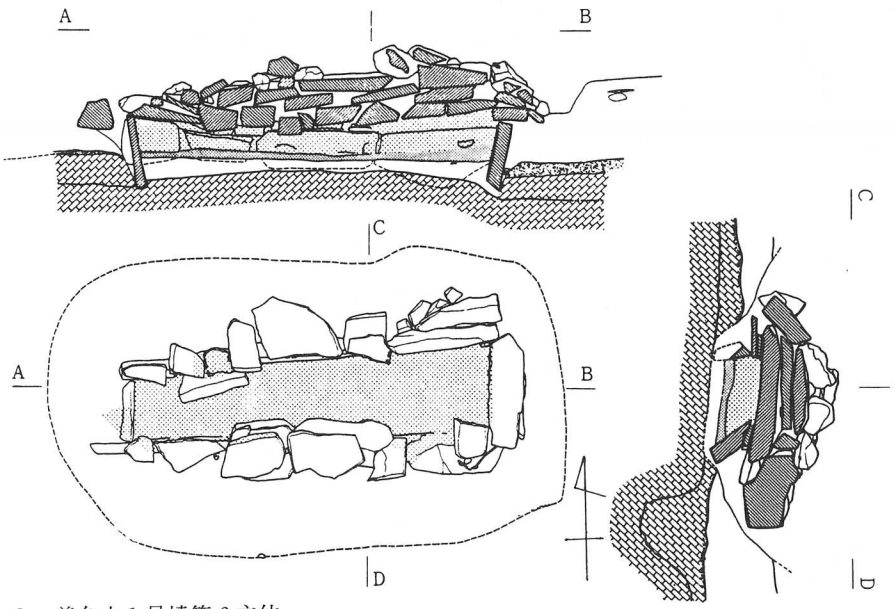


６　養久山１号墳第２主体

図76-7・8

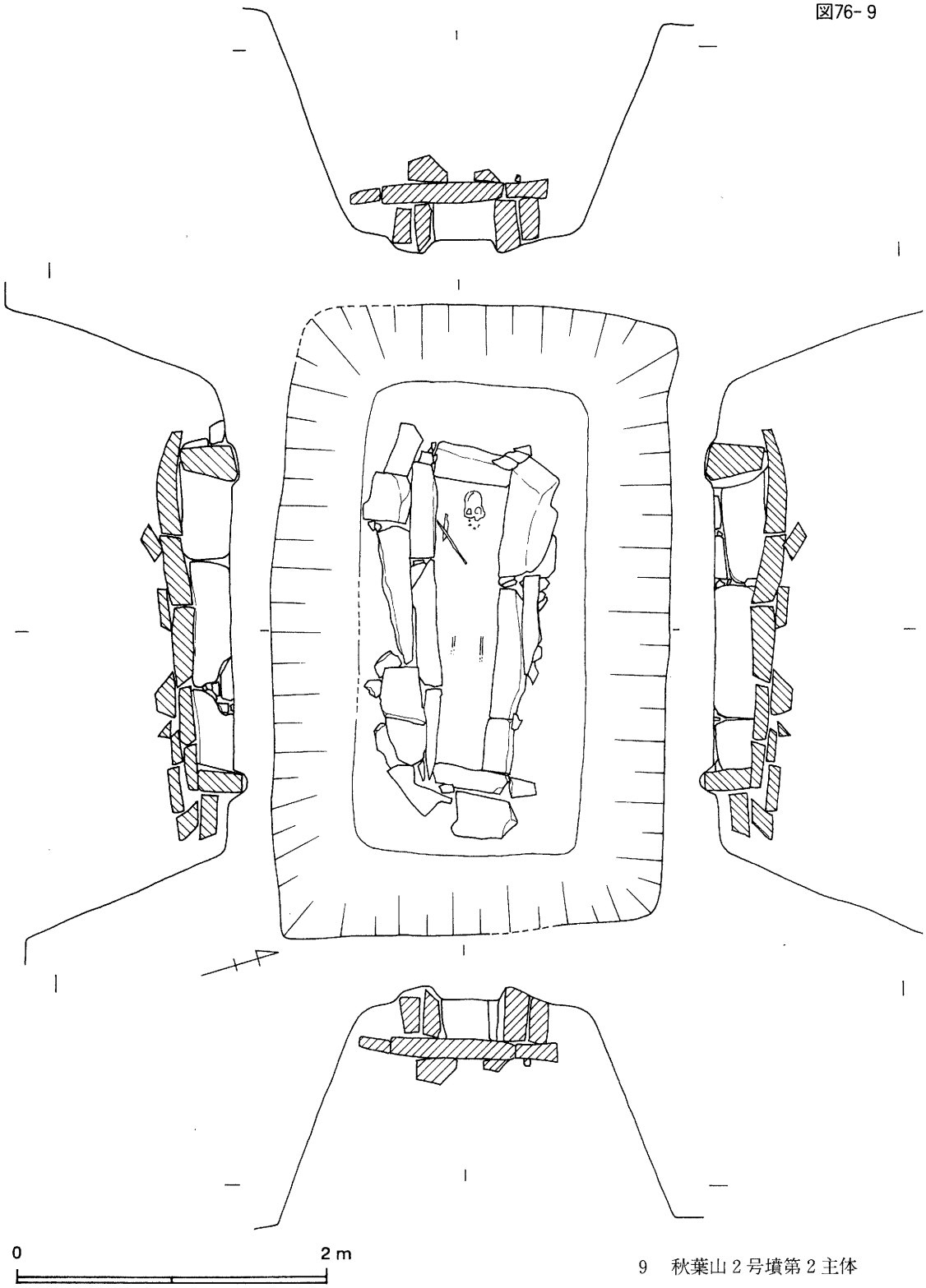


7　養久山1号墳第3主体



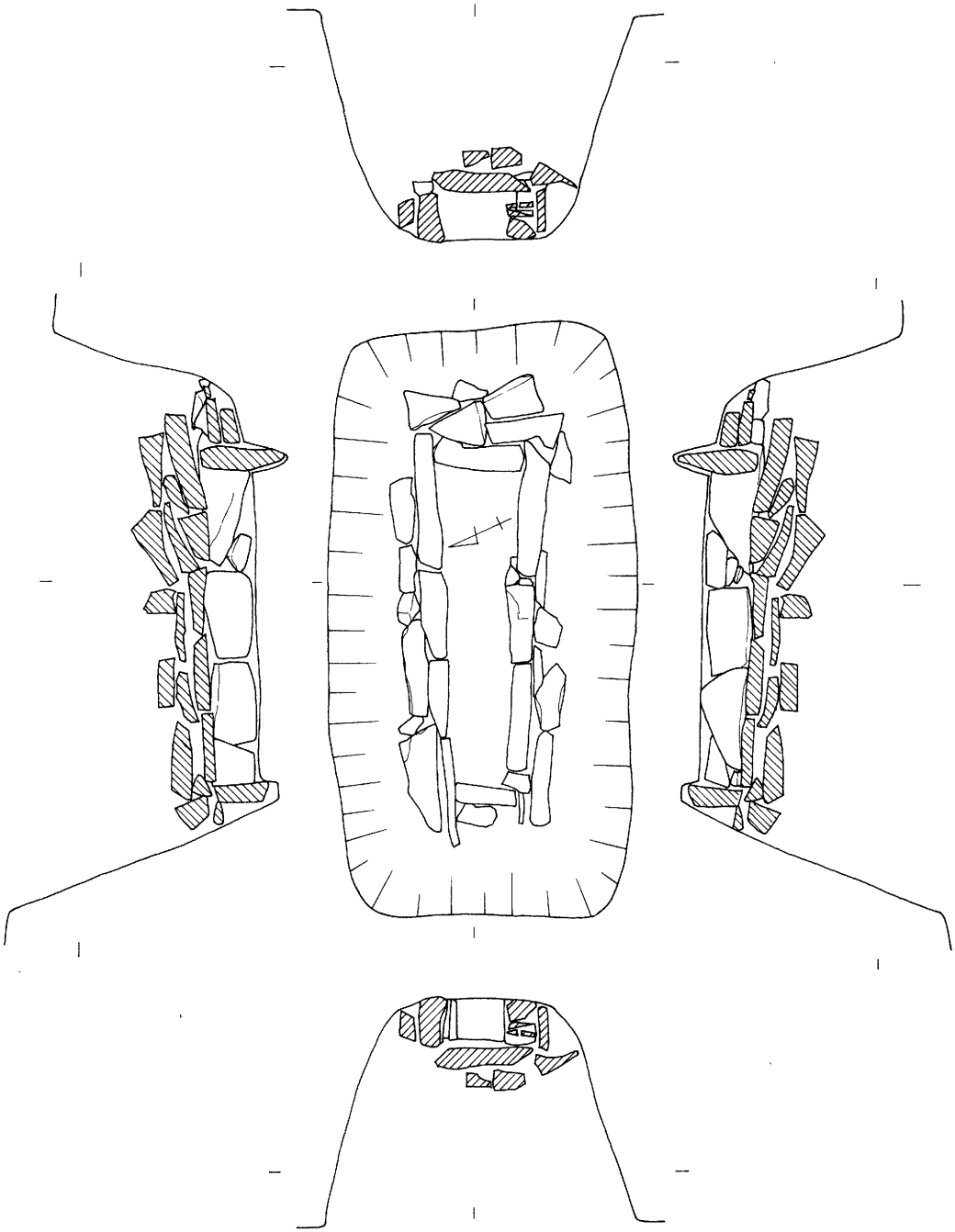
8　養久山1号墳第6主体

図76-9



9　秋葉山２号墳第２主体

図76-10



10　秋葉山2号墳第4主体

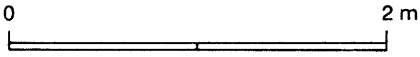
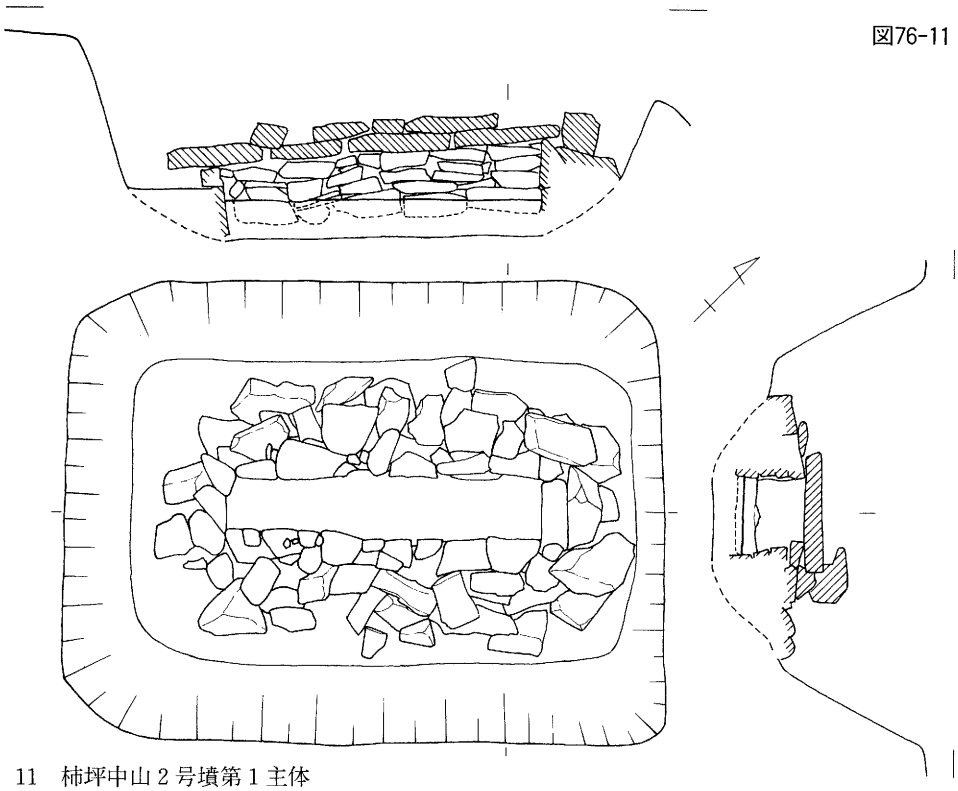
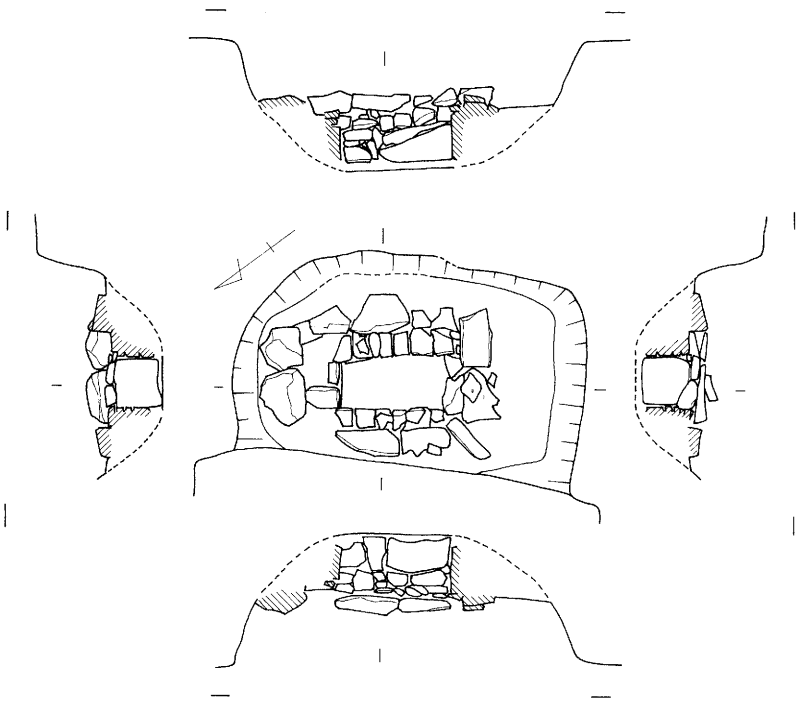


図76-11・12



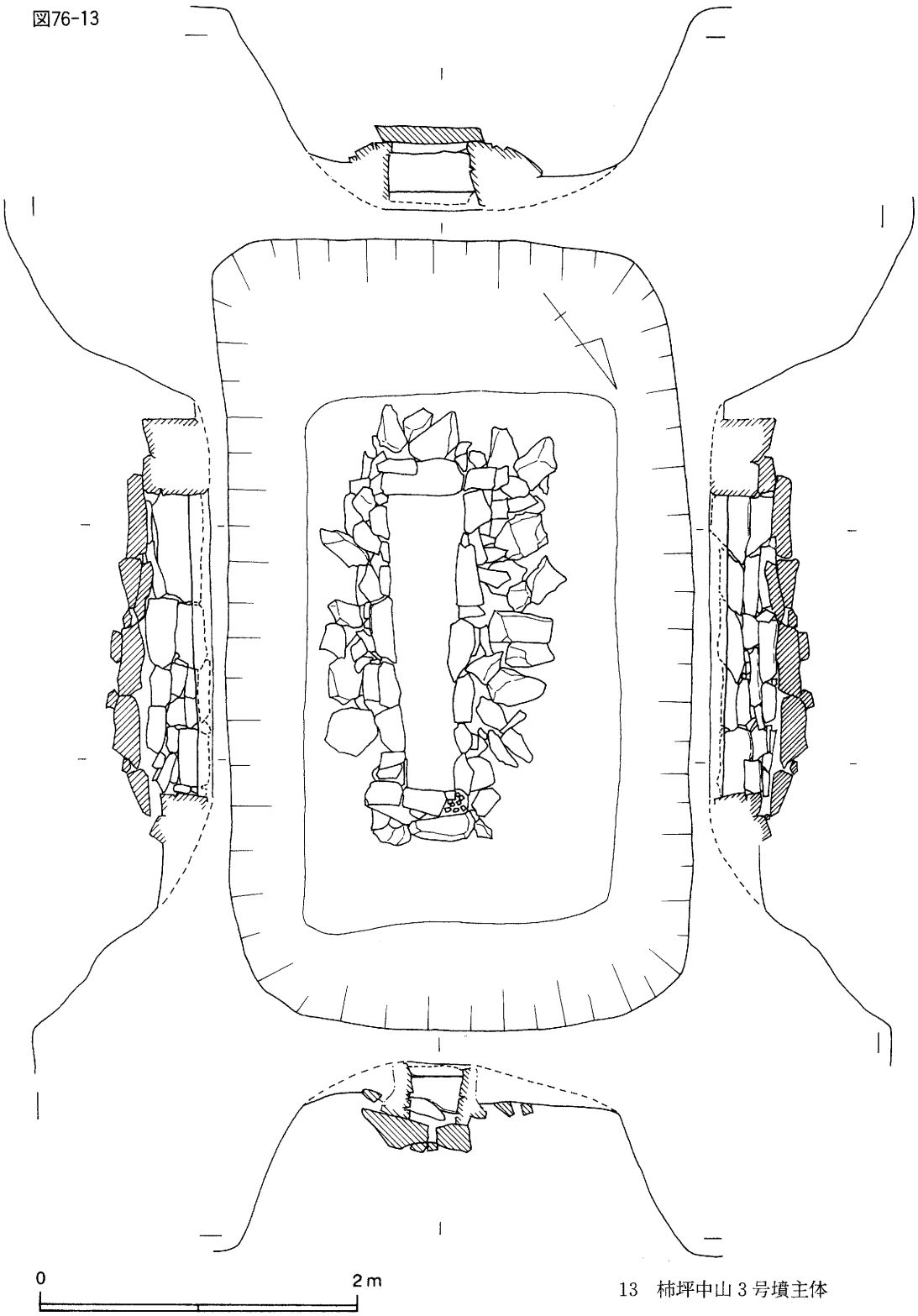
11　柿坪中山２号墳第１主体



0　2 m

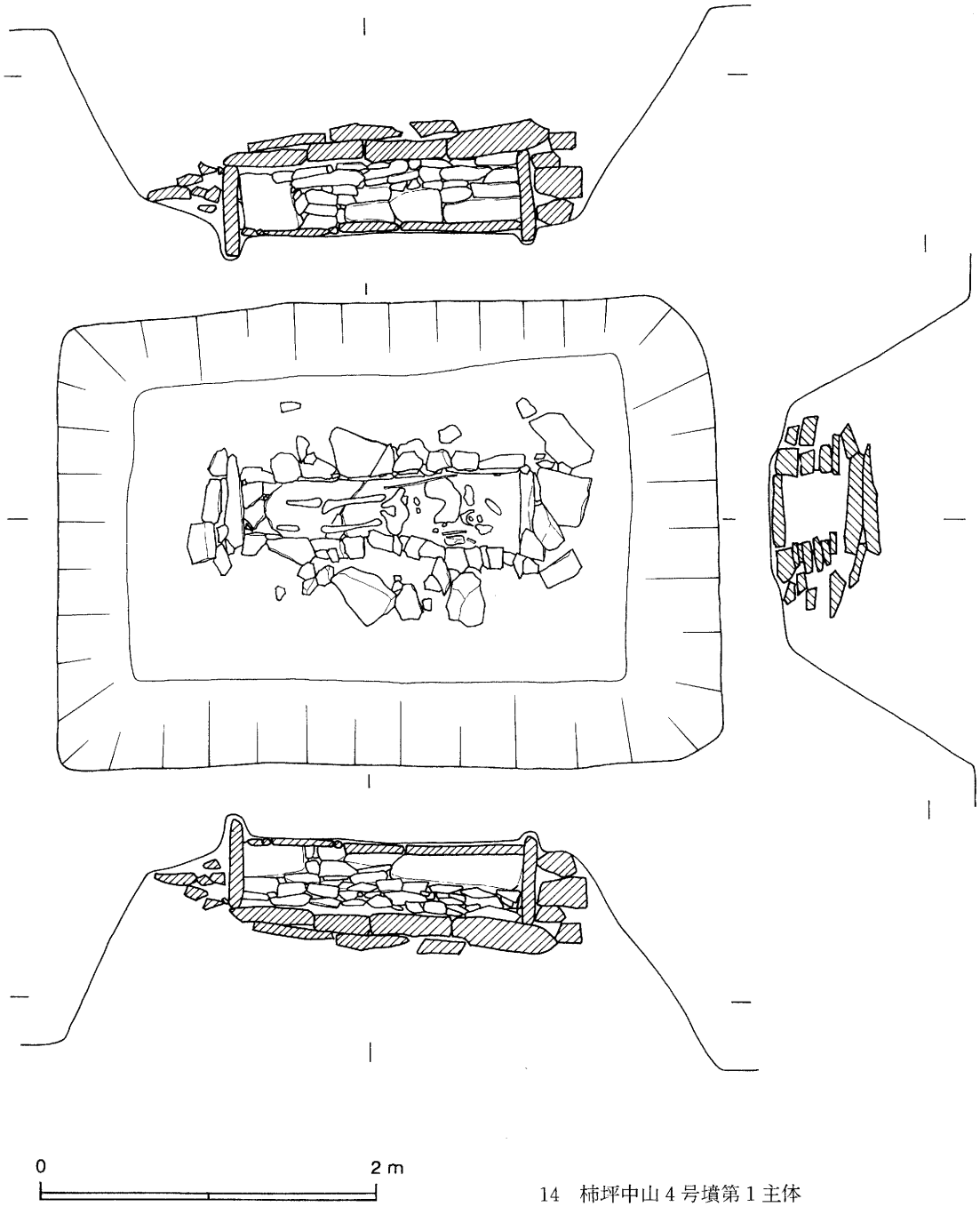
12　柿坪中山１Ａ号墳第１主体

図76-13



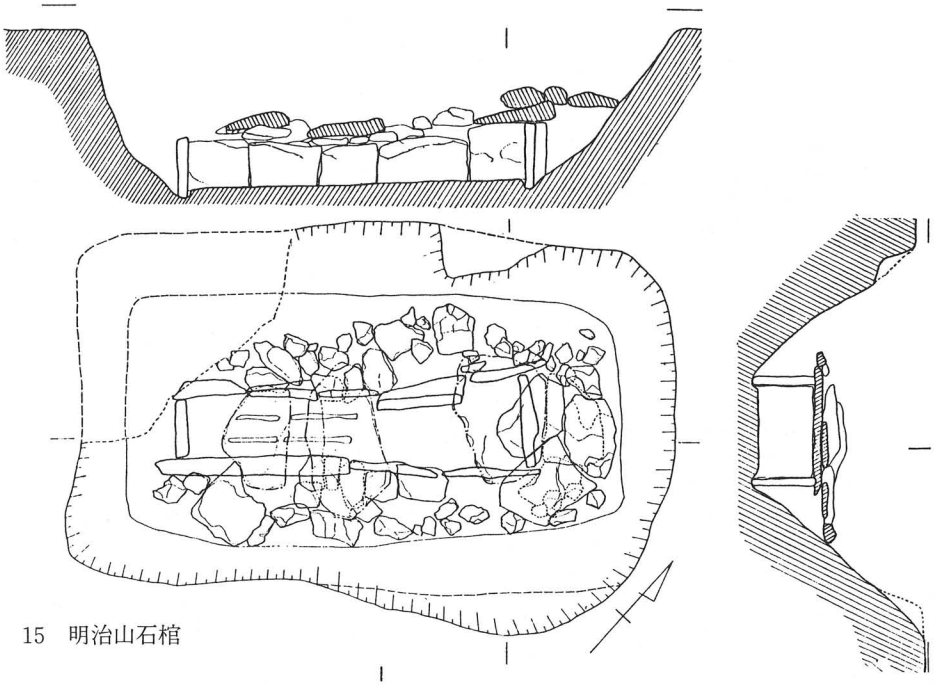
13　柿坪中山3号墳主体

図76-14

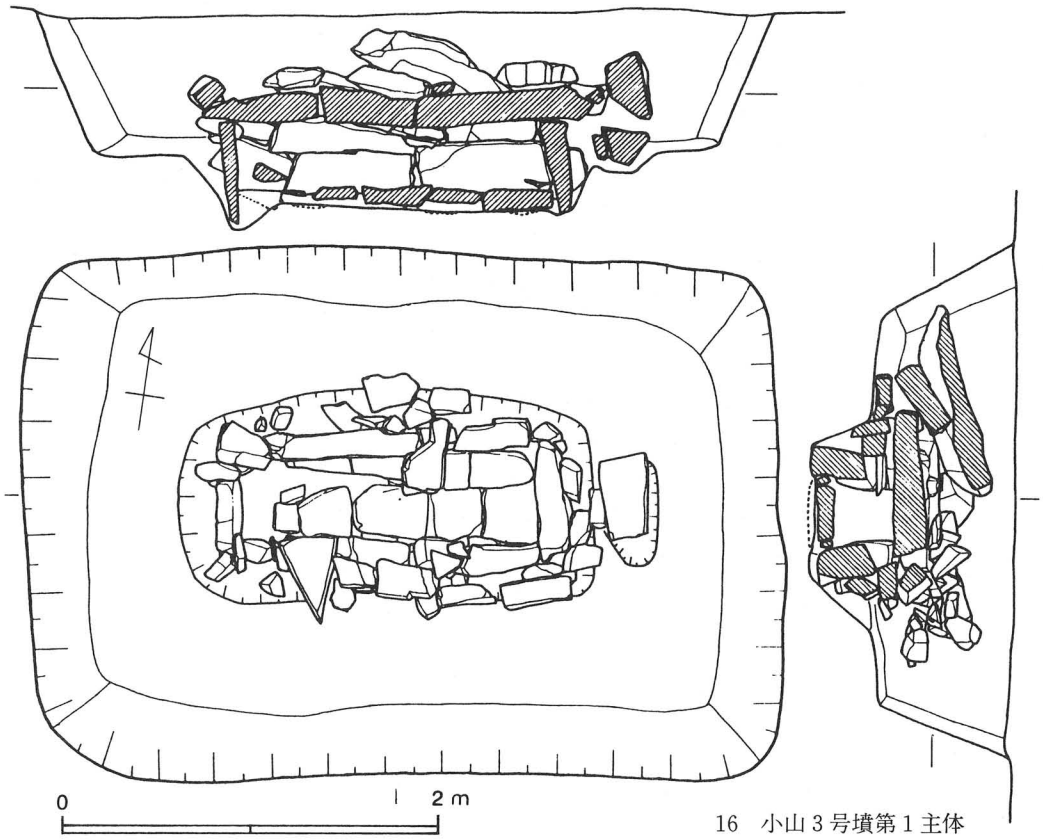


14　柿坪中山４号墳第１主体

図76-15・16

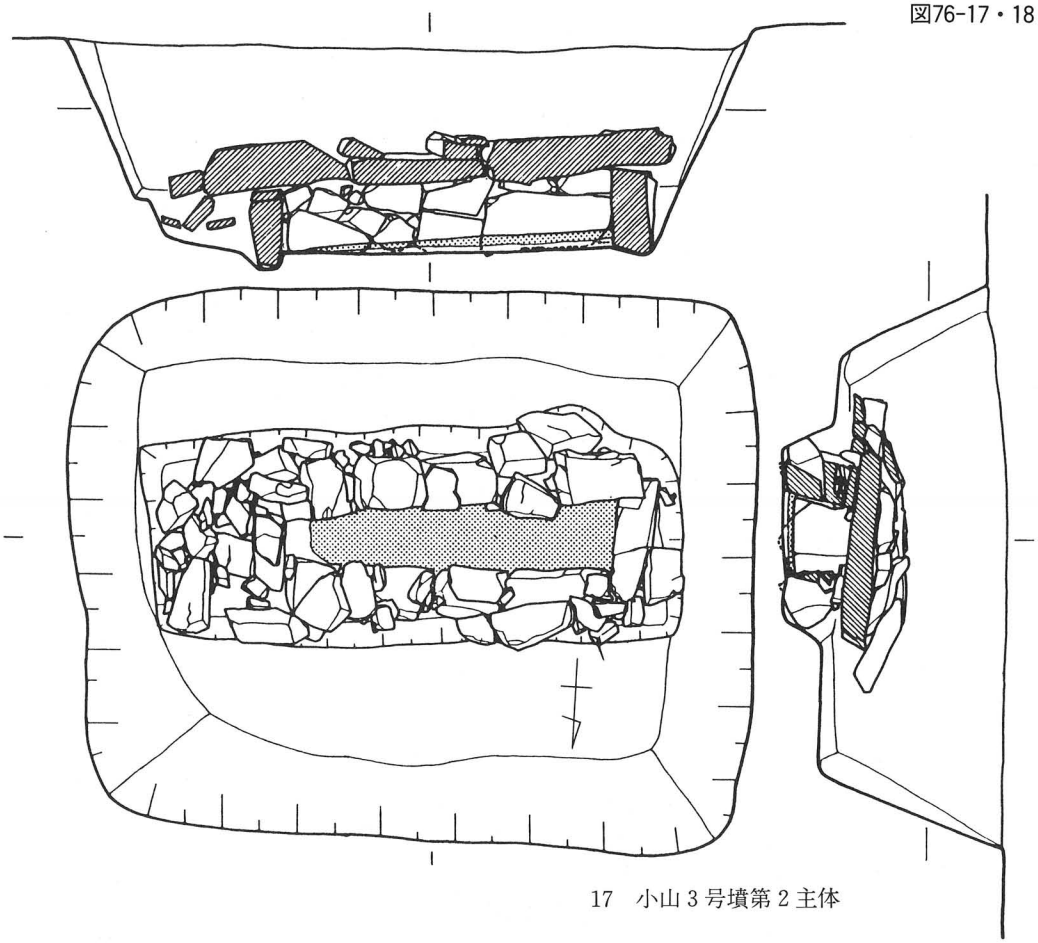


15　明治山石棺

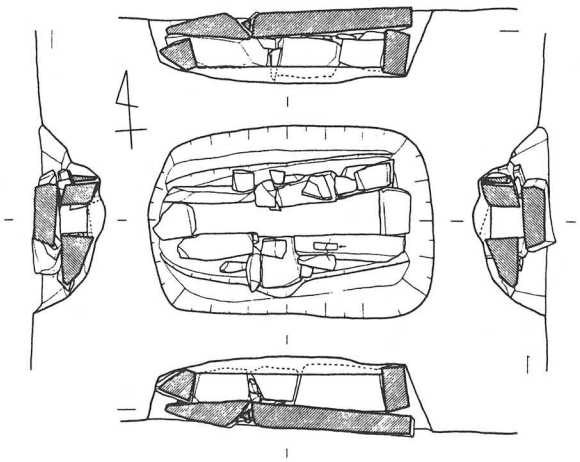


16　小山3号墳第1主体

図76-17・18



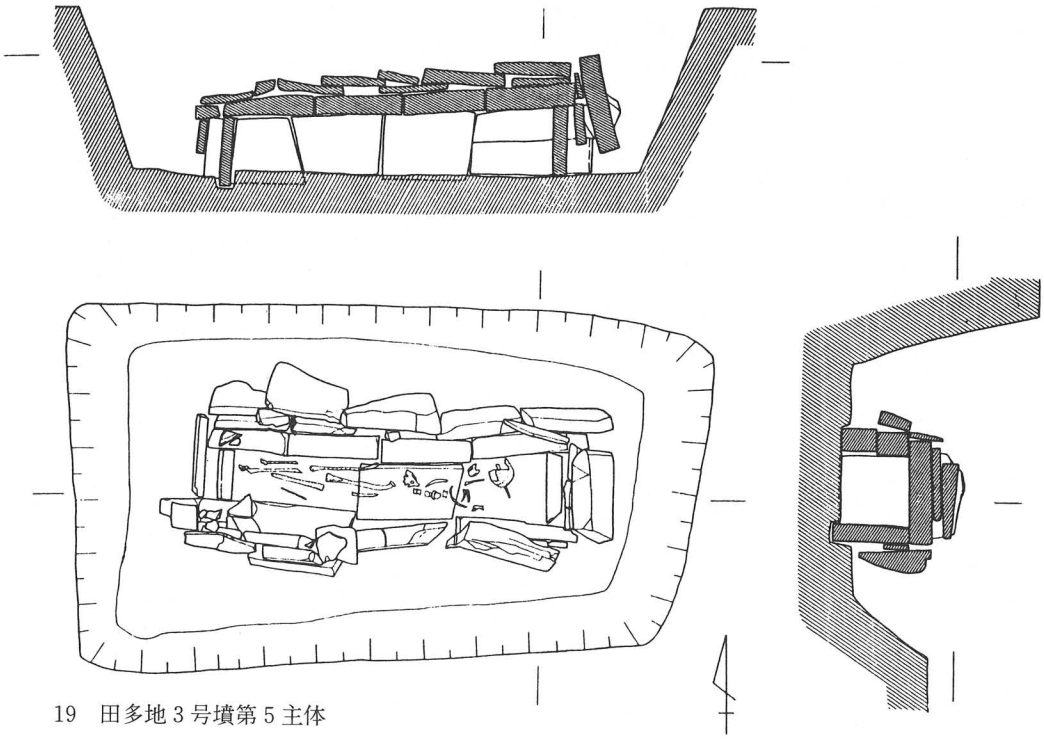
17　小山3号墳第2主体



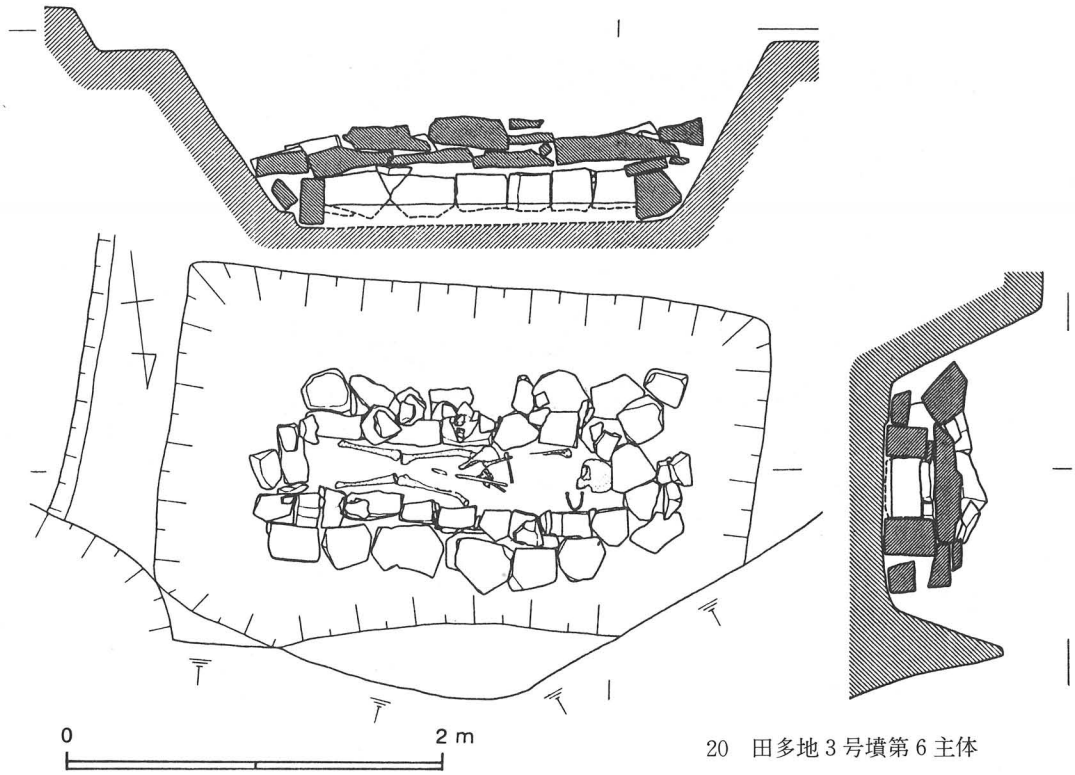
18　小山3号墳第7主体

0　2m

図76-19・20

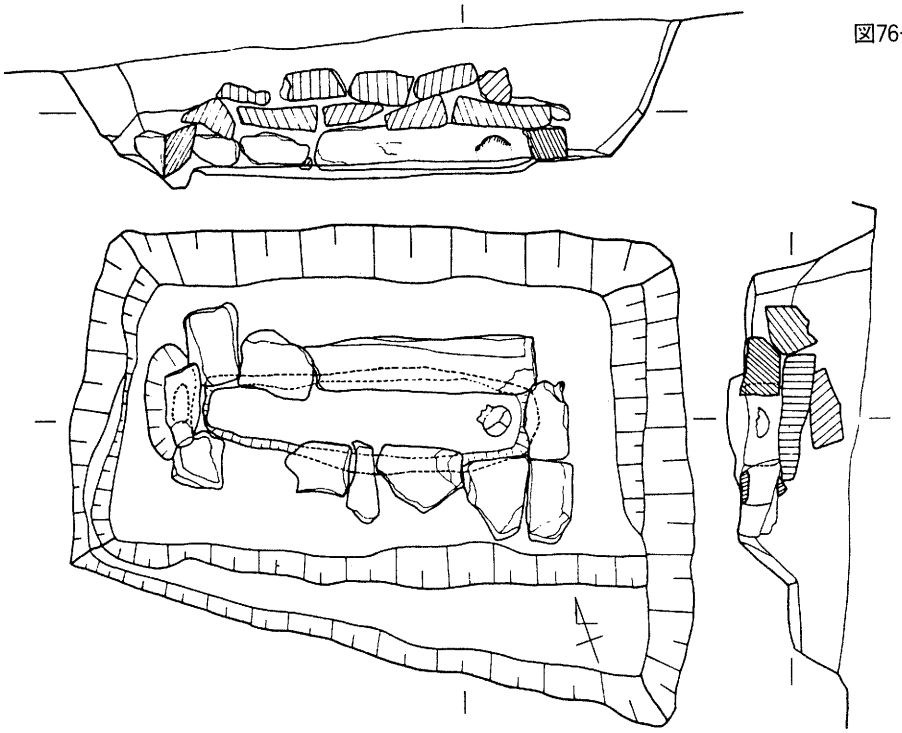


19　田多地3号墳第5主体

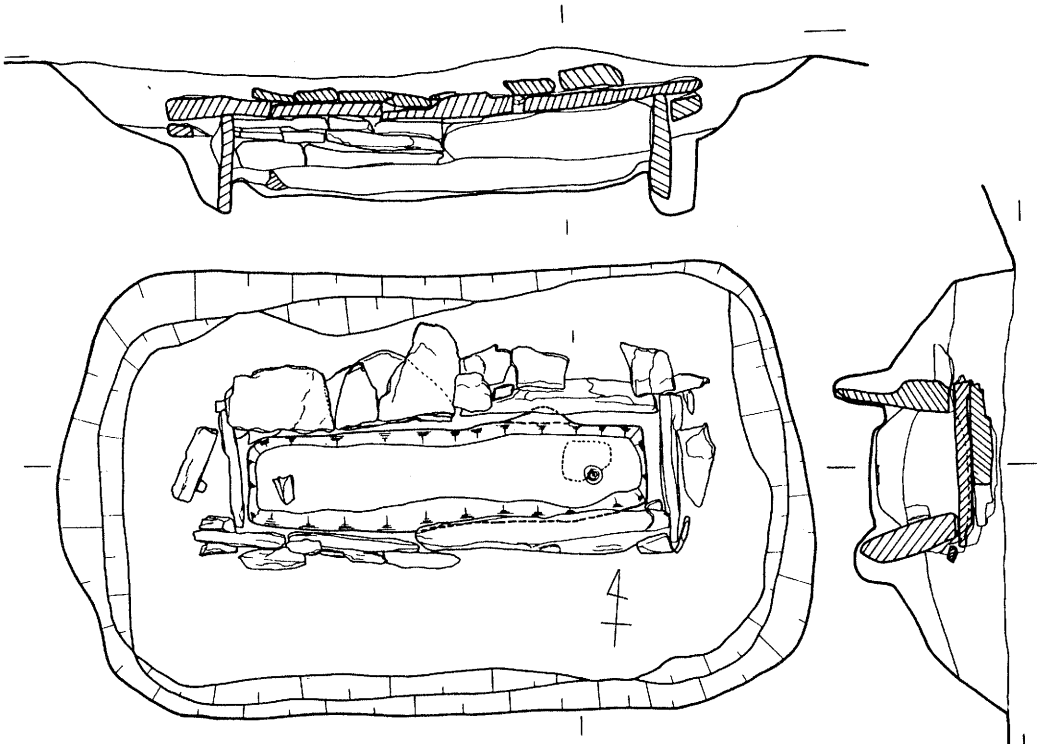


20　田多地3号墳第6主体

図76-21・22



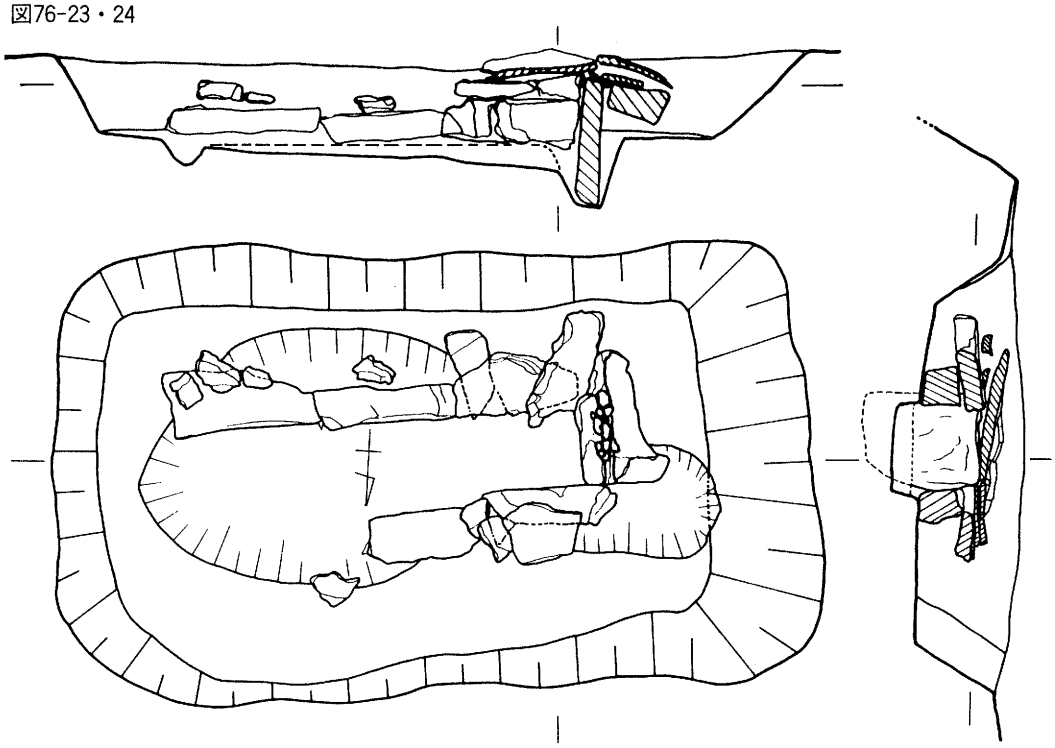
21　長谷ハナ５号墳第１主体



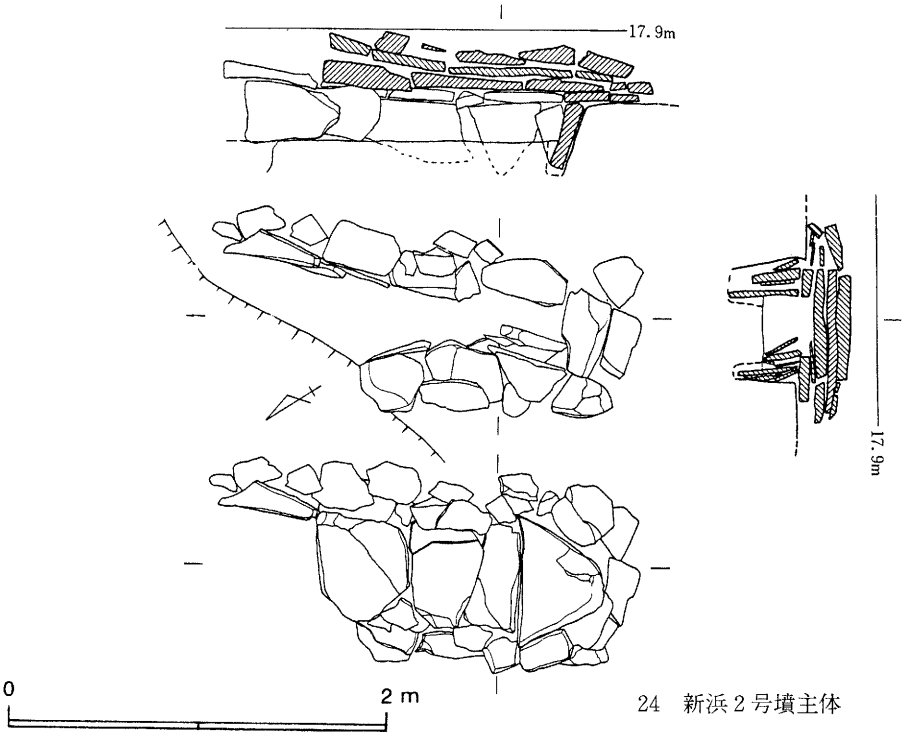
0　2 m

22　中ノ郷深谷１号墳第４主体

図76-23・24

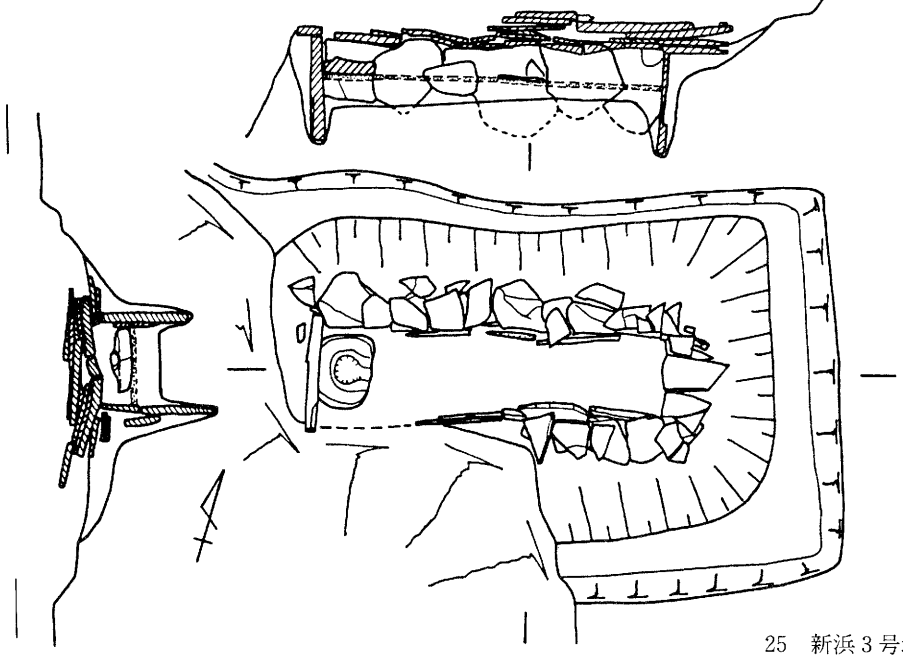


23　中ノ郷深谷1号墳第5主体

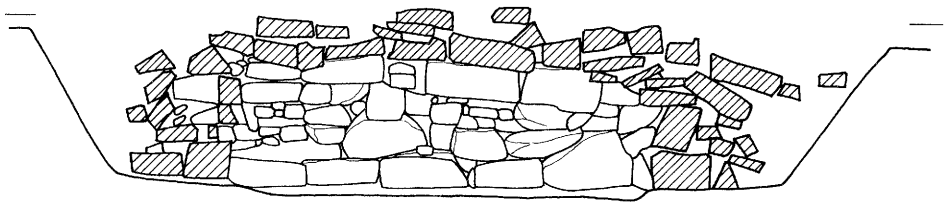


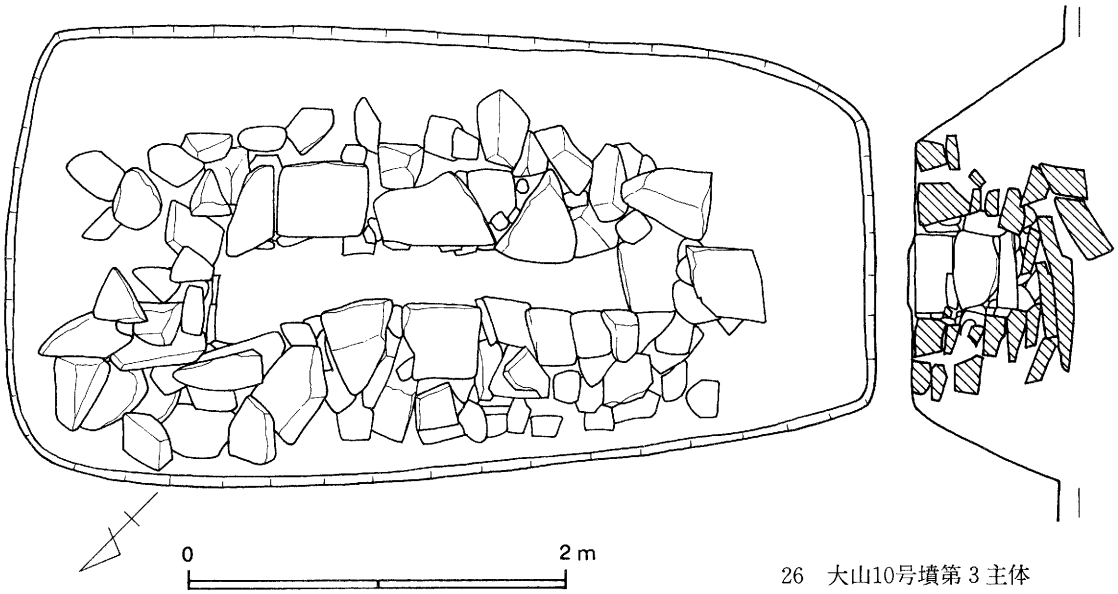
24　新浜2号墳主体

図76-25・26



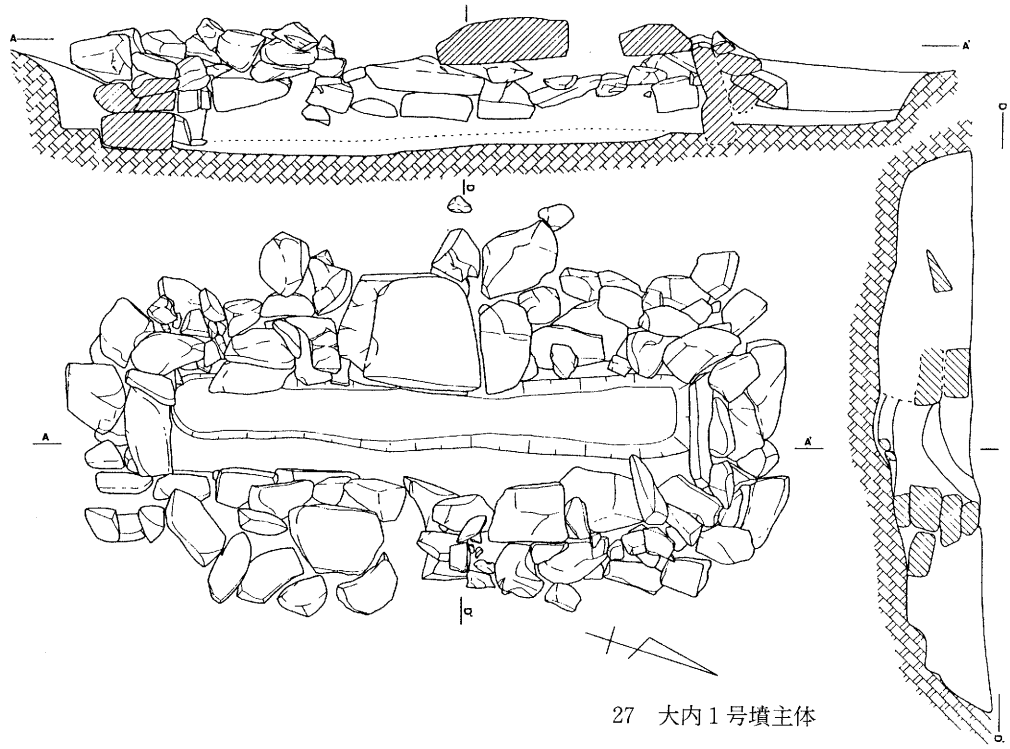
25　新浜３号墳主体



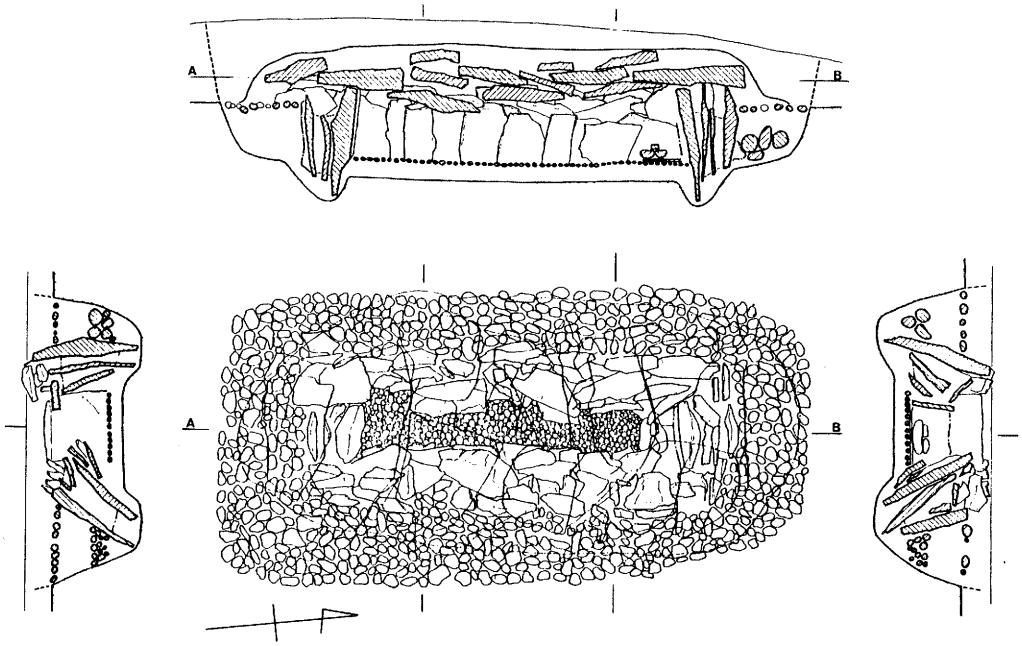


26　大山10号墳第３主体

図76-27・28



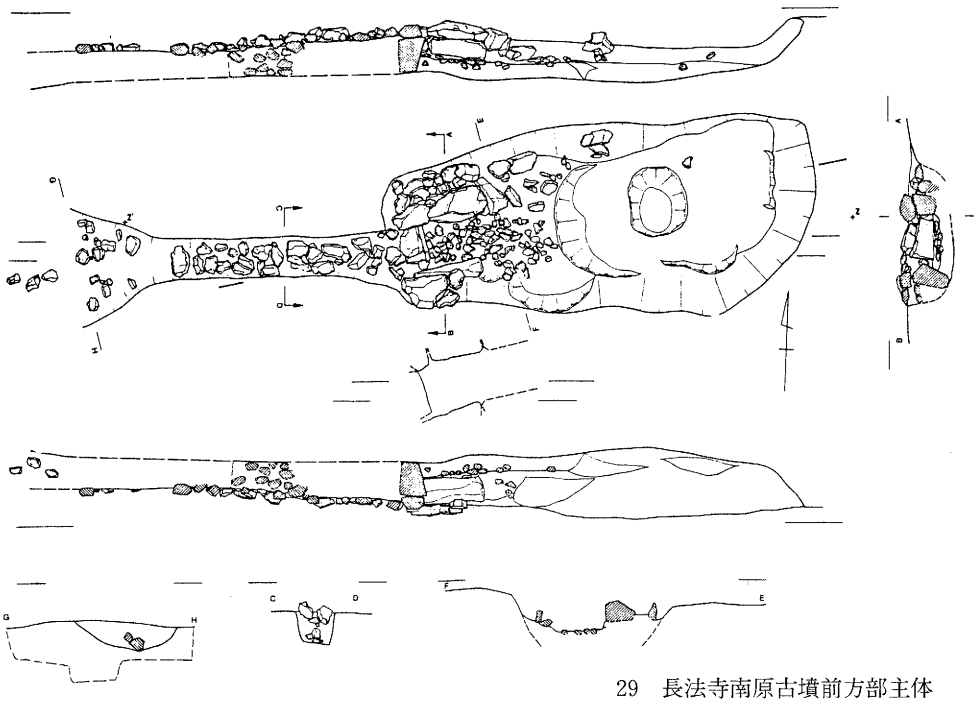
27　大内1号墳主体



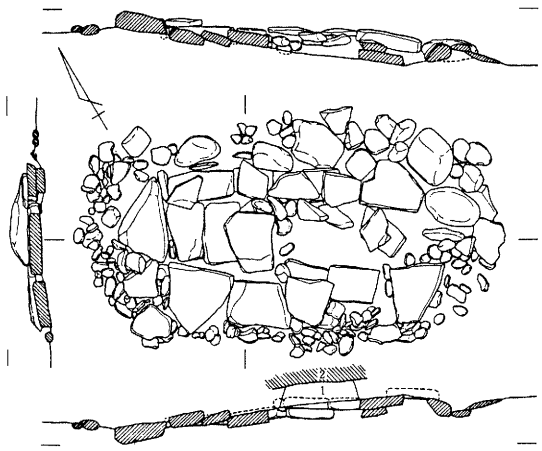
28　八ケ谷古墳第3主体

0　　2 m

図76-29・30



29　長法寺南原古墳前方部主体



30　松岳山古墳クビレ部埋葬

0　2 m

第７章　調査研究の総括
――長法寺南原古墳の意義――

都 出 比 呂 志

1　調査による新知見

(1)　総括のねらい

1934年の第１次調査を基礎に、1981年から1989年までの５回にわたる調査によって明らかになった知見は多い。本書では、過去の６次にわたる調査のうち重要な事項を総括的に叙述している。したがって、遺構や遺物について、本書で言及できなかった詳細については、過去６次の調査概要を参照されたい。以下の叙述では、個々の事項を詳しく述べた概要報告の調査次数を「(第○次)」と記して参照の便をはかり、また本書の他の章節で触れたことを基礎とする場合には、その箇所を「(第○章第○節)」と注記する。

(2)　調査成果の要点

最初に、６次にわたる調査の成果を列挙しよう。

まず第１に、この古墳の墳形と規模が確認できた。すなわち墳形は前方後方墳で、全長62ｍ、後方部は一辺44ｍ、推定高さ約6.4ｍ（溝底から)、前方部は長さ18ｍ、幅28ｍ、推定高さ４ｍとなる（第３次～第６次)。

第２に、墳丘の構造の詳細が判明した。後方部３段、前方部２段で、斜面に葺石はない。裾に低いテラスがあり、その外周に溝をめぐらせる。後方部の東南隅で溝を掘り残して陸橋を設ける（第３次、第４次)。

第３に後方部石室の構造を解明した。第１次調査によって石室内部は、すでに明らかとなっていた。すなわち南北に長い石室で、長さ5.3ｍ、幅1.0ｍ、高さは北で1.35ｍ、南で1.2ｍ、11枚の天井石で覆うという構造である。

さらに、第２次以降の調査によって、石室の壁体の石材が緑色岩類と砂岩であることが明らかとなった。また墓壙東南隅に取りつけられた排水溝は西南西方向に長さ18ｍにわたって延び、西側くびれ部に達している（第２次、第３次)。

第４に、前方部に別の石室のあることが判明した。石室は墳丘主軸と直交して設けられており、内法で長さ1.7ｍ、幅0.3ｍで、これに長さ1.7ｍの排水溝を取りつける。後世の攪乱のため、副葬品は遺存しなかった（第６次)。

第５に、出土遺物の詳細が明らかとなった。第１次調査によって、石室内の副葬品は判明していた。すなわち、三角縁神獣鏡４・盤龍鏡１・内行花文鏡１からなる鏡６面、硬玉製勾玉６・

碧玉製管玉19・ガラス製小玉287などの玉類、刀１・剣７・刀子７・鏃123・斧12・鑿１・鉇片などの鉄器、漆付麻布、石臼と石杵各１などである（第１次）。

このうち、第２次以降の調査によって、石室内副葬品と推定される銅鏃が土地所有者の手もとに保管されていることがわかった。柳葉型式の大型銅鏃である。また墳丘各所に埴輪が樹立されていたことが明らかとなった。埴輪は普通円筒埴輪と朝顔形円筒埴輪とからなり、外面の２次調整はヨコハケ技法である。ヒレ付円筒埴輪も存在する（第３次）。

また「漆付麻布」とされたものは、滋賀県雪野山古墳出土品に照らして、鞆の一部になる可能性が高い（第３章第２節）。

さらに、盤龍鏡の鏡面を精査したところ、毛が銹着していることが分かった。直毛であり、頭髪の可能性が高い。この鏡は、石室東北隅の棺外で出土しており、棺内出土でない点は注目される。後に述べるようにモガリ儀礼から埋葬にいたる儀礼過程を復元する上に重要な示唆を与える。

本古墳の東側斜面に別の古墳を確認したことも成果の一つである（第５次）。本古墳のあとに築造された小古墳および埴輪棺がそれである。首長墓の周囲に小古墳がとりまく現象は各地で明らかとなりつつあるが、本例は、首長に連なる集団の造墓活動を解明する上で重要である。

第１次調査は、本古墳が前期古墳のなかでも注目すべき存在であることを明らかにしたが、その後判明した以上の新知見を加味することよって、本古墳の今日的意義は一層増大するとともに、今後の研究課題をも提起する。このことについて、以下、何点かにわたって述べることとしたい。

2　古墳編年論

(1)　前期新相の古墳

長法寺南原古墳は、かつては最古相の古墳の一つと考えられた。すなわち小林行雄は、この古墳の副葬品が中国鏡のみで構成されること、碧玉製腕飾類を含まないことを基準として、前期古墳を二相に大別した場合の古相に属するものとした。(1)

しかしながら、我々の調査の結果、この年代観の再検討が必要になった。すなわち本古墳の埴輪は、外面の２次調整がヨコハケ技法でヒレ付円筒埴輪を含み、前期古墳でも新しい段階の特徴をもつ。また、本古墳出土の銅鏃は大型の柳葉型式であり、大阪府松岳山古墳出土品と同笵であり（第３次）、前期古墳の新相段階のものである。さらに硬玉製の勾玉の中には片面穿孔の技法をとるものが含まれ、これも前期の新相段階に多用される技法である。以上の点については、すでに論じたことがあるが、(2) さらに松木武彦は古墳時代銅鏃の型式学的研究をもとに本古墳の銅鏃が前期古墳のものとしては新しい型式に属することを具体的に明らかにした（第６章第２節）。

なお、この時期の埴輪編年にかんして、外面の２次調整の特徴に注意すると、向日系譜の寺戸大塚古墳ではタテハケが主体となり、これに続く妙見山古墳も同様である。また樫原系譜の天皇ノ杜古墳でもヨコハケはごく少数でタテハケが主体である。妙見山古墳は組合式石棺を有し、銅鏃の型式や筒形銅器の特徴からいっても長法寺南原古墳と似た時期にある。また天皇ノ杜古墳は埋葬施設や副葬品は不明だが、墳形は奈良県伝日葉酢媛陵古墳や兵庫県五色塚古墳などと類似する型式で前期新相ないし中期初頭の古墳である。このような新しい時期まで古いタテハケ技法を保持する乙訓北部の首長系譜と比較すると、長法寺南原古墳の系譜は２次調整ヨコハケ技法をいち早く採用したと考えられる。

埴輪の技法を古墳編年に適用するにあたって、形態・技法を基準に設定した埴輪の様式をいきなり第○期と言い換えて様式と時期とを混同する誤った傾向が学界の一部にあり、古墳編年に混乱をもたらす場合もある。その克服のためにも、過渡期におけるこのような地域差を慎重に考慮して時期決定の基準とする必要があろう。

(2)　鏡群の構成と古墳築造期

以上のことから、本古墳は古墳時代前期の新相に属し、４世紀後葉のものと考えてよいが、そうした場合、本古墳の鏡群の構成の特徴との間に矛盾が生じないであろうか。この問題を考えるについては、本古墳と同じように古い鏡群をもちながら、新しい相に属する古墳を検討するとよい。たとえば、奈良県富雄丸山古墳もまた、小林のいう古い鏡群のみで構成されるが滑石製の祭器を含み、前期新相ないし中期初頭と考えうる。また大阪府万年山古墳もまた古い鏡群のみだが、埋葬施設は石室とは考えられず、粘土槨あるいは木棺直葬と推測され、やはり新相のものと考えうる。

古い相の鏡群のみで構成されつつ、他の遺物や遺構の特徴から新しい時期に属すると考えうる複数の古墳が存在することは、古相のみからなる鏡群構成が古相の古墳と決めるための十分条件ではないことを示す。すなわち古墳時代における鏡の取得が首長どうしの同盟関係の確認など政治的活動に伴うものとすれば、古墳副葬鏡の構成、すなわち、被葬者がその葬儀の時点までに獲得しえた鏡の構成は、被葬者の生前の政治活動歴と密接な関係を有するものと考えられる。

つまり、被葬者が若い時期に古相の鏡群を獲得する機会があり、その後新たに鏡を獲得する機会がなく長生きした場合には、古相の鏡群のみからなる古墳時代前期新相の古墳が成り立ちうる。

したがって、小林が明らかにした前期古墳の副葬品の二相は基本的には有効であるが、これを古墳の年代決定に適用するときには、他の遺物や遺構の諸特徴とともに総合的に判断すべきことをあらためて示しているのである。

なお、本古墳の被葬者が何故新しい相の鏡群を獲得しえなかったかについては、本古墳の他

の特徴を基礎に本章第4節で再論したい。

3　前期古墳の葬送習俗

(1)　埋葬施設の型式と出自規制

前期古墳の葬送習俗の一端を解明する上でもいくつかの成果があった。

その1は、埋葬施設にかんすることである。この古墳の後方部の竪穴式石室は長大な型式で、長軸を南北とするのにたいし、前方部の埋葬施設は小規模な石棺系石室であり、頭位を東に向ける。

前者については、かつて詳しく述べたように、畿内・吉備・出雲など諸地方の前期古墳の首長墓において優位な習俗である。[(3)] 一般に石室の長軸を南北とするものは頭位を北とする。また石室床面や粘土床の高い側あるいは石室幅の広い側を頭位推定の基準とした場合、北を広くかつ高く造るものがほとんどである。しかし、なかには兵庫県竜山5号墳のように南が広くなるものが稀に存在する。本石室は北が広くかつ高いので、北枕と判断してよい。しかし第1次調査の際に梅原は、玉類が石室南端から約2m付近すなわち石室の南半部で出土したことを理由に南枕と推定している点は検討を要する。石室内部の再調査が必要であろう。

南北方位をとる後方部石室が畿内に多い型式であるのにたいし、前方部石室は、福永伸哉が論じているように（第6章第4節）、畿内周辺では但馬地方などに多く見られる型式であり、かつこの地域では東西頭位が卓越する。

同一墳丘に、このように型式を異にする埋葬施設が共存することの意味は重要である。このことは、古墳時代において個々の地域、個々の集団が伝統的な埋葬様式の規制を忠実に守っていたことを示すだけでなく、埋葬様式の伝統を異にする人が同一墳丘に葬られるような親しい関係にあったことをも示す。そのような関係が婚姻の結びつきなのか、首長と臣下の関係なのか、これだけでは決められない。しかし、この古墳以外でも類似する現象は認められるから、人骨の遺存が良好な場合には血液型や歯冠型式の類似度の比較などの方法[(4)]によって、この問題を究明することが可能となろう。

(2)　棺内と棺外の副葬品

その2は、この古墳出土の盤龍鏡の鏡面に人間の頭髪と思われる毛が付着していたことである。この鏡は石室東北隅の棺外に置かれていた。第1次調査では梅原が調査を開始する以前に鏡など遺物の一部が取り出されていたから、石室内の副葬品配置の詳細について厳密な議論のできない部分もある。しかし、この盤龍鏡は、梅原による調査開始以後に検出されたものであり、原位置をとどめていたと考えてよい。

さて、この鏡が棺内出土でないことは新たな問題を提起する。鏡付着の毛髪が被葬者のものであれば、その毛髪が鏡に付着するような状況が存在したこと、にもかかわらず、遺体を石室

内に収納する際に、この鏡を遺体から離して棺外に置くような行為があったことを意味する。

このことは、被葬者の死に始まりモガリ儀礼を経て埋葬にいたるまでの儀礼過程を復元する上に重要な示唆を与える。すなわち、副葬品の埋納に際し棺内と棺外との区別がなされたことはすでに指摘されているが[5]、我々が一般に識別しうる区別は、埋葬の最終局面の状態である。用田政晴は、前期古墳の木棺が長大であり被葬者一人分以上の収納空間を有することから、遺体の収納分以外の空間を副葬品の一時的収納スペースの場と考えた。すなわち、ある種の器物を「一時的にしろ旧首長とともに木棺に収容していたのであろう。そして古墳に木棺を埋納する葬送儀礼の中で、棺外に取り出すべきものは取り出して棺外副葬した」と説明する[6]。先に述べた本古墳の毛髪付着の鏡は、用田のこの推測を裏づけるだけでなく、さらに埋葬儀礼以前において、すでに鏡は遺体の頭辺に添えられて一定の時間が経過していたことを示唆する。それが埋葬に使用された木棺内のことなのか、あるいは木棺とは別の収納容器内なのかは、ただちには断定できない。もし、それが木棺内のことであったとすれば、被葬者は死後、鏡など副葬品の一部とともに木棺に収納され、一定の時間が経過したのちに木棺に入れたまま古墳に運ばれたこと、そして、埋葬儀礼のある段階で副葬品の一部が棺外に取り出されたと解釈しうるのである。

このように重要な問題を提起する鏡付着の毛髪については、脂肪酸分析や血液型の同定など自然科学的分析が必要である。

4　被葬者の性格

(1)　葺石を施さない墳丘

長法寺南原古墳は、長さ62ｍの前方後方墳であり、３段築成ではあるが葺石をもたない。畿内地方では、この程度の規模をもつ古墳では一般に葺石が施される。とくに乙訓地域の前期古墳では、向日市の元稲荷古墳、寺戸大塚古墳、妙見山古墳、大山崎町の鳥居前古墳など、すべての古墳が葺石をもつことと比較すると、ますますその違いの意味は重要と思われる。

まず、葺石の石材についていえば、本古墳の立地点そのものが緑色岩類の岩盤およびその風化した土の上にあるから用材は手近にふんだんにある。現に石室や排水溝に、この種の石を多く使用していることからも、それはうなずけるところである。したがって葺石のないことが用材入手困難のせいでないことは明瞭である。

また、元稲荷古墳が前方後方墳でかつ葺石を有することから、葺石をもたないことが前方後方墳という墳形のせいでないことも明らかである。さらに鳥居前古墳は長さ51ｍの帆立貝式の前方後円墳でありながら、葺石を有している。長法寺南原古墳の墳丘規模は全長62ｍであり鳥居前古墳よりも大きいことから墳丘が小規模であることが葺石のない直接的理由とは考えにくい。

畿内地方の前期古墳では葺石は一般的に認められる。葺石の有無と古墳規模との相関を近畿地方全域について調査した一瀬和夫の研究によれば、全長50m以下の古墳でも前期古墳の場合には葺石をもつものは多い。[7] これにたいし東日本では葺石をもたない古墳が多く、古墳時代前期においては全長100m以下の前方後円墳や前方後方墳のほとんどは葺石がなく、山梨県銚子塚古墳と丸山塚古墳のように、全長100mを越える大型前方後円墳とそれに連なる首長系譜の円墳にときおり葺石をもつものをみる程度である。また畿内地方でも低墳丘古墳には葺石がない。

このことから前期の大型古墳が葺石を有するということは一般に言えても、葺石の有無と古墳の規模とに厳密な相関があるわけではなく、むしろ地域性の差異あるいは被葬者あるいは首長系譜の格付けの差と関係があるというべきであろう。

この問題を考えるうえで、本古墳の北1kmの粟生の地区にあるカラネガ岳2号墳もまた葺石をもたない点は重要である。カラネガ岳2号墳は全長36mの帆立貝式古墳とされているが、[8] 一辺あるいは直径が35mの方墳あるいは円墳に短い造り出しがついた古墳と解釈する余地もある。粘土槨の構造や埴輪や土師器の型式から判断して5世紀前葉と考えられる。長法寺南原古墳もカラネガ岳2号墳も、ともに長岡京市北部の丘陵上に近接して存在すること、前者が4世紀後葉、後者が5世紀前葉という年代からいってカラネガ岳2号墳は長法寺南原古墳のあとに続く首長墓と考えてよい。となれば、葺石をもたないことは、この首長系譜の特徴といえる。

葺石をもたない古墳では周溝が発達し、さらに周溝の内側の墳丘裾部に幅狭く低いテラスをめぐらせることが多い。とくに前方後円墳出現直前の弥生時代終末期の千葉県神門墳墓群や古墳時代前期の和歌山県秋月古墳や滋賀県富波古墳などで、テラスが明瞭に認められる。[9] 本墳はこの周溝とテラスを共にもつ点でこれらの古墳との共通性をもつ。

ところで、本古墳の東約2kmにある今里車塚古墳は葺石をもつ古墳であるが、後円部では墳丘裾の葺石下端部のさらに外側に「木製の埴輪」が立ち、さらにその外側に低いテラスがとりつく構造である。[10] 北條芳隆は、葺石を有する古墳では、一般にこのようなテラスは設けないことを重視し、本古墳におけるテラス設置技法の伝統が隣接する今里車塚古墳の段階まで継承された可能性を考えている。

長法寺南原古墳からカラネガ岳2号墳に続く首長系譜は、同じ乙訓地域の他の系譜とは違って葺石を施さなかったか、あるいは施すことを許されなかった首長系譜であり、畿内地方にありながら畿内の典型とは様相を異にする首長系譜と解釈できる。このことの意味をさらに深めるために、本古墳の使用石材や前方部埋葬施設の性格について以下に考察したい。

(2)　使用石材と勢力圏

本古墳の竪穴式石室の壁体には緑色岩類と砂岩が多く、天井石には石灰岩、砂岩、頁岩～粘板岩、チャート、半花崗岩、脈石英を使用する。排水溝の石材も緑色岩類、砂岩、チャートである。石材を調査した橋本清一は、これらは古墳のすぐ近くの石材あるいは遠くても古墳の南

500mの小泉川上流域から運ばれたと推定する（第3次）。

乙訓地域の前・中期の古墳の葺石は善峯川、小畑川、小泉川の河原石を使用し、それぞれの古墳に近い川の石材を運んだことが判明している[11]。本古墳の石室や排水溝の石材利用は、この点では乙訓地域一般のありかたと共通する。

ところが向日市寺戸大塚古墳では、後円部石室の天井石11個の大部分は乙訓地域に産するチャートと砂岩であるが、3個は花崗岩を使用する。近くで花崗岩産出地を捜せば亀岡市、京都市北白川、高槻市などが候補地となり、いずれも遠隔地である。一般に古墳の石室や石棺の石材には古墳築造地の地元のものを使用しつつも、ときに遠隔地の石材を部分的に使用することがある。このことに関して筆者は、被葬者の勢力圏あるいは元の出身地あるいは縁者の地方の石材を意識的に使用して、用材貢納あるいは用材提供による同盟確認の儀礼があったものと推定した[12]。使用石材に限っていえば、本古墳が地元の石材のみを使用しているのにたいし、寺戸大塚古墳の被葬者は遠隔地の石材をも用い、より広い勢力圏を有するものといえよう。

さらに、寺戸大塚古墳の石室壁体は偏平な板石を小口積みにする畿内に典型的な壁体構造であるのにたいし、本古墳のそれは不整形な塊石を用いる。それは使用石材の割れ方の特徴に規制されたことではあるが、偏平板石を基本とする畿内的な構築法と異なる点は注意しておきたい。

本古墳の被葬者の性格を知るもう一つのてがかりとして前方部埋葬がある。福永伸哉は、前方部の石棺系石室は但馬地方に多い埋葬施設と考える（第6章第4節）。前方部埋葬被葬者の出自が近畿北部地方にあるとすれば、後方部被葬者は近畿北部地方と親密な関係を結んでいたことを物語る。この点は、葺石のない点で本古墳が畿内の前期古墳の典型的な姿とは異なると先に評価したこととも関係する。

さらに、弥生時代後期新相から終末期の土器の地域性をみると、本古墳の成立母体である長岡京市北部には、たとえば今里遺跡のように乙訓地域の一般的ありかたと若干の差異を示す集落遺跡がある。すなわち、ここでは近江系の土器の比重が高く、この地域に住んだ集団と近江地方との密接な交流を示す。ここで想起されるのは、滋賀県野洲町富波古墳である。この古墳は全長42mの前方後方墳であるが、これまた葺石をもたない[13]。滋賀県野洲地域の前期古墳としては他に古富波山古墳があるが、これまた葺石がなく、同じく滋賀県における前期古墳の八日市市雪野山古墳が葺石をもつことと対照的である[14]。

長岡京市北部地域の首長は古墳時代後期の墓制でも独特の性格を示す。本古墳のすぐ東には7基の円墳、方墳、帆立貝式古墳などから構成される長法寺七ツ塚古墳群がある。この古墳群は6世紀のものでありながら横穴式石室をもたず、木棺を直葬する点で乙訓地域の他の後期古墳と性格を異にする。この地域性が古墳成立期から連続する事象なのかどうかは別として、注目すべきことである。

(3)　長法寺南原古墳被葬者の性格

以上に述べたことをもとに本古墳被葬者の性格を以下のようにまとめたい。すなわち、前方後方墳であることから、前方後円墳とは弥生時代以来の系譜を異にする首長であり、前方後円墳よりは相対的に劣位に格付けされた首長といえよう。さらに全長62ｍの規模は同じ乙訓地域の前方後方墳である元稲荷古墳の全長94ｍと比べても小さく、実力において劣位にある。さらに葺石をもたないことは、この被葬者の個性を物語るものであり、同じ乙訓地域にありながら、畿内以外の地方との親密な関係を結び、独自性をもっていたことを示す。

しかしながら、本古墳には山城町椿井大塚山古墳や八幡市西車塚古墳と同笵関係を有する三角縁神獣鏡を副葬する。このことは、この首長が、その独自性にもかかわらず、淀川水系の有力首長として定型化した前方後円墳の出現前後の早い段階から政治的地位を保証されていたことを示すものである。副葬鏡中に中国製の内行花文鏡と盤龍鏡を含むが、前者は磨滅が著しく長期の保管を示す点もこの可能性を強く示唆する。

本古墳被葬者の乙訓地域における独自性は古墳築造時の埴輪にもあらわれている。乙訓地域北部の向日系譜の妙見山古墳や樫原系譜の天皇ノ杜古墳の円筒埴輪[15]が外面調整の２次タテハケ技法を古墳時代前期の新相段階まで残したのにたいし、乙訓南部に属する本古墳では、同じ前期新相段階で２次調整にヨコハケメをもつヒレ付円筒埴輪をいちはやく採用した。乙訓北部の２系譜と異なる、この独自の動きは西暦400年前後の政治変動のさきがけをなすことかもしれない。すなわち、４世紀代の乙訓地域の盟主的首長は向日系譜から輩出したが、５世紀の前葉と中葉には向日系譜は衰退し、代わって盟主権は今里車塚古墳や恵解山古墳などの前方後円墳を生み出した乙訓南部に移動する[16]。その前の段階において本古墳被葬者は決して盟主的な位置を有したわけではないけれども、向日系譜とは別の動きを示していたと考えられる。

向日系譜は４世紀において中央政権の盟主である大和東南部の大首長と緊密な関係にあり、乙訓地域の盟主的首長であったことは既に指摘したことである[17]が、この関係を基礎として向日系譜の首長のもとには三角縁神獣鏡はじめ古相の鏡群のみならず各種仿製鏡を含む新相の鏡群が配布されている。これにたいし本古墳の被葬者ないしその先代は、３世紀末の前方後円墳成立期前後の段階においては中央政権から古相の鏡群を獲得しうる関係にあったにもかかわらず、４世紀代において向日系譜という盟主のもとに劣位にあったか、あるいは向日系譜とは独自な動きをしたが故に、４世紀前葉・中葉になって新しく配布された仿製の三角縁神獣鏡を含む各種の新相の鏡群を獲得する機会に恵まれなかったのかもしれない。

しかしながら、４世紀後葉には、この関係に変化が起こりつつあったのではないか。本古墳は２次調整ヨコハケ技法をもつヒレ付円筒埴輪をいちはやく採用しているが、この技法をもつヒレ付円筒埴輪の古い例は奈良県佐紀古墳群中の伝日葉酢媛陵古墳に認められる。本古墳は、佐紀古墳群に墳墓を築いた大首長と緊密な関係にあった可能性があろう。そのように考えると、

本古墳の大型銅鏃が大阪府松岳山古墳と同笵であることが偶然の事象ではなくなる。松岳山古墳と伝日葉酢媛陵古墳とは築造時期が近く、かつ竪穴式石室に付随して有孔立石をもつ点で共通するなど、緊密な関係をもつ。長法寺南原古墳は、これら４世紀後葉になって畿内の新しい覇者として台頭した大首長と関係を結び、向日系譜にたいして独自な位置を示し始めていたのであろう。それが、後の今里車塚古墳の段階で乙訓南部の系譜が北部にたいして優位にたつ素地をつくっていったのではなかろうか。

以上に述べたことの中には憶測を重ねた部分が含まれているが、本古墳が畿内地方の一般的な前期古墳と比べて複雑かつ多面的な性格をもつことを改めて強調して、総括の筆をおくことにしたい。

注

(1)　小林行雄『古墳時代の研究』青木書店、1961年、第５章。

(2)　都出比呂志「埴輪編年と前期古墳の新古」(小野山節編『王陵の比較研究』京都大学文学部考古学研究室、1981年）pp.44～45。

(3)　都出比呂志『竪穴式石室の地域性の研究』大阪大学文学部　1986年、pp.17～21。

(4)　田中良之・土井直美「人骨と血縁」(都出比呂志編『古代史復元』６　古墳時代の王と民衆　講談社、1989年)。

(5)　小林行雄『古墳の話』岩波書店、1959年、pp.140～146。

(6)　用田政晴「前期古墳の副葬品配置」(『考古学研究』27巻３号、1980年）p.47。

(7)　一瀬和夫「葺石を有する前方後円墳」(森浩一編『韓国の前方後円墳―松鶴洞１号墳問題について』社会思想社、1984年)。

(8)　岡内三眞・和田晴吾・宇野隆夫「京都府カラネガ岳１・２号古墳の発掘調査」(『史林』64巻３号　史学研究会、1981年)。

(9)　都出比呂志「前方後円墳起源論と秋月遺跡」(『和歌山地方史研究』12号、1987年)。

(10)　高橋美久二・久保哲正・奥村清一郎ほか「長岡京跡右京第26次発掘調査概報」(『埋蔵文化財発掘調査概報』1982―２　京都府教育委員会、1980年)。

(11)　橋本清一「京都府乙訓地方における古墳の葺石の石材」(中山修一先生古稀記念事業会編『長岡京古文化論叢』1986年)。

(12)　都出比呂志『竪穴式石室の地域性の研究』(注３文献）p.20。

(13)　野洲町教育委員会『富波遺跡発掘調査概報―野洲郡野洲町富波字亀塚所在』1983年。なお、この報告書では、この古墳の年代決定に際し南側クビレ部西南の土坑（ＳＫ―Ｅ）を古墳築成後のものとし、土坑検出の布留式並行期の土器を古墳年代の下限を示すとする。これを基礎としてこの古墳を庄内式期の墳墓とする見解が生じる。しかし筆者は、この土坑を古墳築造以前の集落跡に伴う井戸と考え、この土器を古墳年代の上限を示すと考える。したがって、この古墳は布留式あ

るいはそれ以降に属する古墳時代前期のものであり、長法寺南原古墳とは近い時期の古墳と考えている。

(14) 都出比呂志編『雪野山古墳II―雪野山古墳第2次・第3次調査概要』八日市市教育委員会、1992年。

(15) 丸川義広編『史跡天皇ノ杜古墳発掘調査概報』京都市文化観光局・財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1989年。

(16) 都出比呂志「古墳時代首長系譜の継続と断絶」(『待兼山論叢』22号　大阪大学文学会、1988年)。

(17) 都出比呂志「古墳時代首長系譜の継続と断絶」(注16文献)。

Osaka University Studies in Archaeology, No.2

CHŌHŌJI-MINAMIBARA TUMULUS:

A Fourth Century Burial Mound in Southwestern Kyoto

TSUDE Hiroshi and FUKUNAGA Shin'ya, Editors

With contributions by:
FUKUNAGA Shin'ya
HŌJŌ Yoshitaka
KIMURA Yasuhiko
MATSUGI Takehiko
ŌBA Shigenobu
SASAKI Ken'ichi
SEIKE Akira
SUGII Takeshi
TSUDE Hiroshi

March, 1992

Osaka University Team for
Investigations into Minamibara Tumulus
Faculty of Letters, Osaka University, Japan

Publication data can be found at the end of this book.

Table of Contents

Frontispiece
Preface
Explanatory Notes

Chapter One: Investigations ····· 1
1 Tumuli in the vicinity of the site ····· 1
2 History of investigations ····· 4
3 Acknowledgements ····· 10

Chapter Two: Burial Mound ····· 13
1 Current condition of the burial mound ····· 13
2 Assignment of excavation units ····· 14
3 Excavation results ····· 14
(1) At the joint of the front and rear mounds and on the front mound ····· 14
(2) In the northeastern corner of the mound ····· 21
(3) Cliff walls where the mound cross-sections are exposed ····· 21
4 Reconstruction of the burial mound ····· 24
(1) Interpretation of the remaining portion of the mound ····· 25
(2) Hypothetical reconstruction of the original mound ····· 26

Chapter Three: Burial Chambers and Related Discoveries ····· 35
1 Pit-style burial chamber in the rear mound ····· 35
2 Context of artifact discoveries ····· 38
(1) Spatial context of funerary offerings in the burial chamber ····· 38
(2) Characteristic arrangement of funerary offerings; mortuary treatment ····· 41
3 Drainage ditch ····· 42
4 Minor pit-style burial chamber in the front mound ····· 43

Chapter Four: Discovered Artifacts ····· 51
1 Artifacts discovered in the rear mound burial chamber ····· 51
(1) Bronze mirrors ····· 51
(2) Beads ····· 56
(3) Weapons ····· 57
(4) Tools ····· 59
(5) Stone mortars and a pestle ····· 63
2 *Haniwa* clay objects and pottery discovered on the mound surface ····· 64
(1) *Haniwa* clay cylinders ····· 64
(2) *Haniwa* clay figurine ····· 72
(3) Pottery ····· 72
3 Other artifacts ····· 73

Chapter Five: Investigation into the Minamibara-Higashi No. 3 Tumulus ……77
1 Discovery of a *haniwa* clay coffin……77
2 Coffin: observations……80
3 Date of the Minamibara-Higashi No. 3 Tumulus ……85

Chapter Six: Discussions ……89
1 Production techniques of *haniwa* clay cylinders with "fins" at the Chōhōji-Minamibara Tumulus ……89
2 End in the custom of burying bronze arrowheads in tumuli —with special reference to the Chōhōji-Minamibara arrowheads— ……101
3 Cinnabar and stone mortars in mortuary rituals……117
4 Minor pit-style burial chambers in the Kinki district: —Significance of the minor burial chamber in the Chōhōji-Minamibara Tumulus— ……129

Chapter Seven: Significance of the Chōhōji-Minamibara Investigations 161

English Summary: Chōhōji-Minamibara Investigations in the Framework of the Kofun Period Archaeology ……171

Plates

Frontispiece (Color Plates)

1 Bronze mirror No.1 (back)
2 Bronze mirror No.3 (back)
3 Bronze mirror No.6 (front side) and human hair
Bronze arrowheads
4 Stone mortar No.1
Stone mortar No.2
5 Beads
Haniwa clay objects: differences in clay
6 *Haniwa* clay cylinder

Plates

1 1 Site and its vicinity in 1934
2 Site and its vicinity in 1991
3 Current condition of the burial mound
2 1 Northeastern portion of the rear mound (from southwest; third season)
2 Northeastern corner of the foot of the rear mound (from east; third season)
3 Eastern joint of the front and rear mounds; southeastern corner of the rear mound (from west; fourth season)
4 1 Foot of the rear mound in the southeastern corner; bridge crossing a shallow moat (from east; fourth season)
2 Foot of the rear mound in the southeastern corner; bridge crossing a shallow moat (from southeast; fourth season)
5 1 Foot of the rear mound in the southeastern corner (from south; fourth season)
2 Post holes near the eastern joint of the front and rear mounds (from southeast; fourth season)
6 1 Eastern slope of the front mound (from north; fifth season)
2 Earth accumulated over the eastern slope of the front mound (from north; fifth season)
7 1 Top of the currently remaining front mound (from north; sixth season)
2 Top of the currently remaining front mound (close-up from north; sixth season)
8 1 Eastern end of Section D, cutting the front mound (from south; third season)
2 Western end of Section D, cutting the front mound (from south; third season)
3 Stratigraphy of the front mound observed in a trench cut into the mound (from east; sixth season)
9 1 Cover stones of the burial chamber in the rear mound (from south; first season)
2 Burial chamber in the rear mound (from northeast; first season)
10 1 Burial chamber in the rear mound (from north; first season)
2 Context of artifact discoveries in the southern half of the burial chamber in the rear mound (first season)
11 1 Funerary offerings in the northeastern corner of the burial chamber in the rear mound (first season)
2 Northern wall of the burial chamber in the rear mound (first season)
12 1 Currently remaining portion of the rear mound (from west; second season)
2 Cover stones of the burial chamber in the rear mound (second season)
13 1 Exterior portion of the burial chamber and the drainage ditch in the rear mound (second season)
2 Drainage ditch originating from the burial chamber in the rear mound (second season)
14 1 Drainage ditch (from northeast; third season)
2 Drainage ditch (from southwest; third season)
15 1 Trench dug to install the drainage ditch; earth filling the trench (second season)
2 Pebbles filling the drainage ditch (second season)

16 1 Drainage ditch close to its south end (from southwest; third season)
2 Cross-section of the drainage ditch at its north end (third season)
3 Cross-section of the drainage ditch at its center (third season)
17 1 Minor burial chamber and the drainage ditch in the front mound (from west; sixth season)
2 Minor burial chamber and the drainage ditch in the front mound (close-up from north; sixth season)
18 1 Minor burial chamber in the front mound, after the removal of earth moved into the chamber resulting from disturbance (from east; sixth season)
2 Western end of the minor burial chamber in the front mound (sixth season)
19 1 Western half of the minor burial chamber in the front mound (from north; sixth season)
2 Trench cut into the floor of the minor burial chamber (sixth season)
20 1 Mirror No.1
2 Hole in the knob of Mirror No.1
21 1 Mirror No.2
2 Hole in the knob of Mirror No.2
22 1 Mirror No.3
2 Hole in the knob of Mirror No.3
23 1 Mirror No.4
2 Hole in the knob of Mirror No.4
24 1 Mirror No.5
2 Hole in the knob of Mirror No.5
25 1 Mirror No.6
2 Hole in the knob of Mirror No.6
26 1 Human hair attached to the front side of Mirror No.6
2 Jade beads
27 1 Stone mortar No.1 (front)
2 Stone mortar No.1 (back)
28 1 Stone mortar No.2 (front)
2 Stone mortar No.2 (back)
29 1 Stone mortar No.1
2 Stone mortar No.2
3 Pestle
30 Iron arrowheads
31 1 Iron daggers
2 Bronze arrowheads (1: Chōhōji-Minamibara; 2: attributed to Chōhōji-Minamibara; 3 and 4: Matsuokayama, Osaka Prefecture)
32 Iron axes
33 1 Tools
2 Knives
34 1 *Haniwa* clay cylinder
2 Basal portion of a *haniwa* clay cylinder
3 Basal portion of a *haniwa* clay cylinder
35 1 Rim of a *haniwa* clay cylinder
2 "Windows" of *haniwa* clay cylinders
36 Body and basal portion of *haniwa* clay cylinders
37 1 Body of *haniwa* clay cylinders
2 Body of *haniwa* clay cylinders
38 "Fins" of *haniwa* clay cylinders
39 1 Funnelform *haniwa* clay cylinders

2 Jar-shaped pottery
40 "Brush-mark" surface finish treatment of *haniwa* clay cylinders

Figures

Location of the Chōhōji-Minamibara Tumulus
1 Distribution of tumuli (Kofun Period burial mounds) in southwestern Kyoto ···2
2 Location of the Chōhōji-Minamibara Tumulus in southwestern Kyoto ·····3
3 Map of the Chōhōji-Minamibara Tumulus site ·····5
4 Discovery of cover stones of a burial chamber at the top of the mound ···7
5 Mr.YABUUCHI Jisaku, the owner of the site ·····7
6 Fourth field season (1983) in progress (snap photo) ·····7
7 Snap photo taken at the end of the sixth field season (1989) ·····7
8 Archaeologists and local people involved in the first field season (1934) ·····12
9 Mound at the time of the first field season ·····13
10 Arrangement of the excavation units and trenches ·····15
11 Spatial relationships among the excavation units and trenches of the fourth, fifth, and sixth field seasons ·····16
12 Stratigraphy at the eastern joint of the front and rear mounds (from east) ···17
13 Discovery of a *haniwa* clay cylinder at the eastern joint of the front and rear mounds (Trench F) ·····18
14 Discovery of a *haniwa* clay cylinder at the eastern joint of the front and rear mounds (western end of Unit 1) ·····18
15 Stratigraphic cross-section of the front mound (Unit 3) ·····20
16 Plan of the Unit Northeast ·····21
17 Section D (cliff wall), cutting the front mound ·····23
18 Stratigraphy of Section J South (cliff wall) ·····23
19 Stratigraphy of Section D East (cliff wall) ·····23
20 Stratigraphy of Section K (cliff wall) ·····23
21 Contour of the currently remaining front mound ·····25
22 Hypothetical reconstruction of the mound of the Chōhōji-Minamibara Tumulus in the original stage ·····27
23 Model of the original mound of the Chōhōji-Minamibara Tumulus ·····29
24 Plan and contour in the excavation unit at the eastern joint of the front and rear mounds ·····31·32
25 Cross-sections of the mound ·····33·34
26 Pit-style burial chamber in the rear mound ·····36
27 Spatial relationship between the burial chamber and the drainage ditch in the rear mound ·····37
28 Spatial arrangement of funerary offerings ·····39
29 Top of the minor pit-style burial chamber in the front mound: plan and stratigraphic cross-section ·····43
30 Cobbles and pebbles used in the minor burial chamber ·····45
31 Drainage ditch originating from the rear mound burial chamber: plan and cross-section ·····47·48
32 Minor pit-style burial chamber in the front mound: plan and cross-section ·····49·50
33 Cross-sections of bronze mirrors ·····53
34 Detail of Mirror No.3 (1) ·····54

35 Detail of Mirror No.3 (2) ····· 54
36 Beads: measured drawings ····· 57
37 Iron sword, spears, and daggers: measured drawings ····· 58
38 Iron and bronze arrowheads: measured drawings ····· 59
39 Iron axes: measured drawings ····· 60
40 Iron knives, long-bladed planes, chisel, and sticks: measured drawings ····· 61
41 Stone mortars and a pestle: measured drawings ····· 62
42 *Haniwa* clay cylinders: measured drawings (1) ····· 66
43 *Haniwa* clay cylinders: measured drawings (2) ····· 67
44 "Brush-mark" surface finish treatment of *haniwa* clay cylinders: rubbings ····· 68
45 "Fins" of haniwa clay cylinders: measured drawings ····· 69
46 Funnelform *haniwa* clay cylinders and a concrete *haniwa* clay object: measured drawings ····· 70
47 Hypothetical reconstruction of a *haniwa* clay cylinder ····· 71
48 Pottery: measured drawings ····· 71
49 Roof tile, Haji pottery, and Ga ware: measured drawings ····· 72
50 Flake: measured drawing ····· 73
51 Roof tile, Haji pottery, and a flake ····· 73
52 Correlations of the artifact numbers between measured drawings and plates ····· 75・76
53 Discovery of a *haniwa* clay coffin: measured drawing ····· 77
54 Physical setting of a *haniwa* clay coffin: model ····· 78
55 Specially made *haniwa* clay coffin: measured drawing ····· 79
56 *Haniwa* clay cylinders diverted for the use of a coffin: measured drawing ····· 81・82
57 Shield-shaped *haniwa* clay figurine discovered in the Minamibara-Higashi No. 3 Tumulus: hypothetical reconstruction and similar examples ····· 83
58 Context of the discovery of a *haniwa* clay coffin ····· 87
59 *Haniwa* clay cylinders diverted for the use of a coffin ····· 88
60 Method of attaching a belt to a *haniwa* clay cylinder ····· 91
61 Ratio of the presence of different methods of attaching a belt to a *haniwa* clay cylinder ····· 92
62 Method of attaching a "fin" to the rim of a *haniwa* clay cylinder ····· 93
63 Method of attaching a "fin" to the body of a *haniwa* clay cylinder ····· 93
64 Width of "fins" of a *haniwa* clay cylinder ····· 94
65 Joint of different sections of a *haniwa* clay cylinder ····· 96
66 Classification of the Kofun Period bronze arrowheads ····· 102
67 Standards of the Kofun Period bronze arrowheads ····· 102
68 Examples of bronze arrowheads in the late period of their use ····· 103
69 Change in bronze arrowheads toward the end of the period of their use ····· 105
70 Iron arrowheads and bronze arrowheads made after the former ····· 107
71 Relative chronology of bronze arrowheads in relation to other Kofun Period artifacts ····· 108
72 Representative examples of stone mortars and pestles ····· 119
73 Inner dimension of minor pit-style burial chambers ····· 132
74 Distribution of minor pit-style burial chambers ····· 133
75 Vertical (long) axis of burial chambers in Tajima and its surrounding ····· 138
76 Illustrated corpus of minor pit-style burial chambers in the Kinki District ····· 145～160
77 Sites mentioned in the English summary ····· 186

78 Sites that have yielded bronze mirrors identical to the Chōhōji-Minamibara mirrors ····· 187
79 Tumuli in the Katsura river region ····· 188
80 Chronological succession of tumuli in three tumulus clusters of the Katsura river region ····· 189

Tables

1 Correspondence of the old and new numbers for measured drawings of *haniwa* clay cylinders and figurine ····· 64
2 Observations of "fins" of the Chōhōji-Minamibara *haniwa* clay cylinders ····· 95
3 Corpus of the fourth and fifth century minor pit-style burial chambers in the Kinki District ····· 142·143

Chōhōji-Minamibara Investigations in the Framework of the Kofun Period Archaeology: an English Summary

SASAKI Ken'ichi

This comprehensive report summarizes the results of archaeological investigations carried out at the Chōhōji-Minamibara Tumulus site, a fourth century keyhole-shaped burial mound in southwestern Kyoto (see the figure in Explanatory Notes for location). Six seasons of excavations took place in 1934, 1981, 1982, 1983, 1984, and 1989. The first season yielded bronze mirrors, beads, weapons, and tools in a pit-style burial chamber in the rear mound[1]. The five post-World War II excavations resulted in determination of the morphology and date of this entire burial mound and the discovery of a minor pit-style burial chamber in the front mound[2]. These fieldworks provided us with invaluable data concerning mortuary customs of the chiefly class in fourth-century Japan as well as insight into the political organization at that time.

Background[3]

Investigations into tumuli or *kofun* play an important role in the studies of social and political organization during the Kofun Period (A.D. fourth to sixth centuries) of protohistoric Japan because the highly uniform and standardized forms—keyhole-shaped with circular rear mound, keyhole-shaped with square rear mound, circular, and square—appear to indicate that Japanese society in the fourth century was organized under a shared ideology which might have been political in nature, and the size and form of a mound determined the rank and social status of the person buried in that mound[4].

It is a well accepted theory that huge keyhole-shaped tumuli were the tombs of the ruling class or local chiefs. For this reason, our discussion concerning the hypothetical "social organization" of the Kofun Period is, strictly speaking, on the social organization of the chiefly class. In addition, it is assumed that low class local chiefs and/or high class farmers built small circular or square tumuli, many of which formed clusters in the late fifth and sixth centuries. Among the four forms of tumuli, keyhole-shaped tumuli with circular rear mounds are assumed to be the tombs for highest ranking chiefs, and the second highest ranking chief was probably buried in a keyhole-shaped tumulus with a square rear mound. We believe that simple circular and square tumuli were for lower class chiefs. This widely-held assumption is supported by the average size of these different forms of mounds, which also indicates the amount of labor put into the construction of one mound; the more labor a chief could control, the higher his or her social status would be[5].

Keyhole-shaped tumuli first appeared in the Kinai region (southeastern Hyogo, Osaka, southern Kyoto, and northern Nara Prefectures) toward the end of the third century and quickly spread over most of Japan. Archaeologists interpret the situation as follows: the central political authority first rose in

Kinai and allowed the local chiefs to build keyhole-shaped mounds as a demonstration of alliance with the highest ranking chief in Kinai, who also built a keyhole-shaped mound for himself or herself[6]. The present study has played an important role in testing and supporting these hypothetical frameworks.

History of Investigations(Chapter One)

Because of such importance attached to the tumulus studies, Chōhōji-Minamibara Tumulus has attracted scholars' attention for a long time. The site was accidentally discovered by a local farmer in January, 1934. Under the direction of the late Umehara Sueji (then Professor of Archaeology at the Kyoto Imperial University), the burial chamber in the rear mound was opened, and bronze mirrors, beads, weapons, and tools were unearthed. Kobayashi noticed the assemblage of these discovered artifacts, which lacked Japanese mirrors modelled after Chinese ones and jade bracelets, and he argued that this assemblage would indicate a very early date (such as the early fourth century) for the Chōhōji-Minamibara Tumulus[7].

While investigations into artifacts discovered in the burial chamber made considerable progress, the burial mound continued to be destroyed by agricultural activities. In order to record the current condition of the mound so as to gain insight into the original form of the mound and to obtain detailed data about any other aspects of this site, such as the date, mound structure, other burial facilities, etc., Tsude launched excavations in 1981, directing members of the Department of Japanese History at Osaka University. Since 1982, excavations were cooperatively carried out by the Department of Archaeology (a part of the Department of Japanese History until 1988) at the Osaka University and the Nagaokakyō Municipal Board of Education.

Results of these post-World War II excavations denied Umehara's interpretations that the Chōhōji-Minamibara Tumulus had a circular rear mound and that the Tumulus lacked *haniwa* clay cylinders. Moreover, the surface finish technique of the *haniwa* clay cylinders show features of those typically made in the middle to late fourth century, which is later than Kobayashi argued. Along with the excavations of the Chōhōji-Minamibara Tumulus, we also conducted a survey of the vicinity and discovered the Minamibara-Higashi No. 3 Tumulus, on the foot of which was a *haniwa* clay coffin. This small tumulus is dated slightly later than the Chōhōji-Minamibara Tumulus (Chapter Five). These recent findings have added greatly to the significance of this site which was originally recognized in 1934.

Archaeological Features

1. Burial Mound (Chapter Two): The form of the mound is keyhole-shaped with a square rear mound (Figures 22 and 23). It is 62 meters in length, with the square rear mound having a width of 44 meters, and the front mound (at the south end) a width of 27 meters. The speculated height of the rear mound is 6.4 meters with three terraces, while the front mound being only four meters with two terraces. *Haniwa* clay cylinders were probably placed in line on the terraces. The mound is surrounded by a shallow moat (ditch) of roughly one meter

in width, but there was a bridge in the southeastern corner of the rear mound which was a portion of the moat left unexcavated (Plates 4-1 and 4-2).

2. Burial Chamber and Drainage Ditch in the Rear Mound (Chapter Three, 1-3): A pit-style burial chamber was discovered in a very good condition, and all the mirrors, weapons, beads, tools, and stone mortars were recovered from this chamber. The interior dimension of the burial chamber is: 5.3 meters in length, 1.0 meter in width, 1.35 meters in height at the northern end, and 1.2 meters in height at the southern end (Figure 26 and Plates 9 through 11). This chamber was situated in a large pit with a north-south length of 7.5 meters and an east-west length of 4.8 meters. The chamber was covered by eleven slabs at the top (Plates 9-2 and 12-1). For the chamber walls, green rocks and sandstone were used. From the discovery of some wooden materials, a wooden coffin was probably placed inside.

The burial chamber is situated along the north-south axis of the burial mound. The larger size of this chamber and the situation in the rear mound suggest that the Chōhōji-Minamibara Tumulus was dedicated to the dead housed in this chamber. It is generally the case that if there is only one burial chamber in a fourth century tumulus, the burial chamber is situated in the rear mound.

From the southeastern corner of this burial chamber, a drainage ditch originates (Plate 13). Although a portion was destroyed, the remaining portion was discovered near the western side of the joint of the front and rear mounds (Figure 27 and Plate 14). The gradient of the ditch was 4%. The drainage ditch was installed by excavating a trench of 0.4 meters in width and 1.2 meters in depth. Then, the trench was filled in with pebbles to a height of 0.6 meters, and the top of the trench was covered with earth (Plate 15).

3. Minor Burial Chamber and Drainage Ditch in the Front Mound (Chapter Three, 4): A small burial chamber was discovered at the top of the currently remaining portion of the front mound (Figure 32, Plates 17 and 18). It is situated perpendicular to the north-south axis of the mound. Since the eastern half was completely disturbed, we could recover no artifacts in this chamber, and we could only speculate on the interior dimensions. The length of this chamber was roughly 1.7 meters, and the width at the still-intact western end was 0.3 meters. The remaining height of the chamber was only 0.2 meters, with two layers of angular stones piled, but the actual height was probably 0.4 meters or so to accommodate a human body. This chamber was placed in a pit, whose size at the level of recovery (after the erosion of the top portion of the front mound) was 2.3 meters in length, one meter in width, and 0.3 meters in depth.

A drainage ditch originated from the western end of the chamber. Like in the rear mound, the ditch is filled with pebbles and cobbles, and ends only 1.7 meters from the chamber. Probably it opens on the western slope of the front mound. The kinds of rocks used for this ditch and the minor burial chamber are the same as those for the drainage ditch and burial chamber in the rear mound, which tends to suggest a very close tie between the people buried in these two chambers.

Discovered Artifacts

1. Bronze Mirrors (Chapter Four, 1-1): A total of six bronze mirrors——four mirrors with god and beast design and characterized by a protruding rim with a triangular cross-section (Mirrors No. 1 through 4; Color Plates 1 and 2 and Plates 20 through 23)[8], one with an interconnected-arc design (Mirror No. 5; Plate 24), and one with a curved dragon motif (Mirror No. 6; Color Plate 3 and Plate 25)——were discovered in the burial chamber of the rear mound. Among these, Mirror No. 2 was alone placed in the presumed coffin area.

2. Beads (Chapter Four, 1-2; Plate 26): More than five comma-shaped beads (Figure 36, Nos. 1-5) and 19 cylindrical beads (Figure 36, Nos. 6-24) were discovered in the presumed coffin of the rear mound burial chamber in 1934. The comma-shaped beads were of jade, and the cylindrical beads were of jasper. In the holes of some beads, cinnabar still remains, which suggests ground cinnabar was applied to or placed on the interior surface of a coffin, as is the case in other tumuli.

3. Weapons (Chapter Four, 1-3): In the rear mound burial chamber, an iron sword (Figure 37, No. 1), iron spears (Figure 37, Nos. 2 and 3), iron daggers (Figure 37, Nos. 4 and 5), and iron arrowheads (Figure 38, Nos. 1-11) were discovered in 1934. Among these, only the iron arrowheads were placed in the coffin, and the rest were outside of it. Bronze arrowheads (Figure 38, Nos. 12 and 13) were also discovered in an unidentified context. These two are so identical that they were probably cast with the same pair of molds. Moreover, it is quite likely that bronze arrowheads discovered at the Matsuokayama Tumulus in Osaka Prefecture (Plate 31, Nos. 3 and 4; See Figure 77 for the location of this site)[9] were also cast from the same molds (at the same factory).

4. Tools (Chapter Four, 4): More than 12 iron axes (Figure 39 and Plate 32), about ten knives, about 12 long-bladed planes [*yari-ganna*], and a chisel (Figure 40 and Plate 33) were discovered outside of the presumed coffin in the rear mound burial chamber.

5. Stone Mortars and a Pestle (Figure 41 and Plates 27 through 29): Among the two stone mortars and a pestle, Stone Mortar No. 1 and the pestle (No.3) were discovered in the rear mound burial chamber, which suggests the possibility that they were used in a pair. No.2 was placed on one of the cover stones of the rear mound burial chamber. The shaded areas in Figure 41 indicate where cinnabar still remained. Probably these mortars and the pestle were used for grinding cinnabar to be applied to the interior surface of the coffin.

6. *Haniwa*: None of *haniwa* clay cylinders were discovered *in situ* in complete pieces. These clay cylinders are characterized by a series of parallel protruding "belts." Many types of clay cylinders existed at this burial mound: e.g. two types with a larger diameter and a smaller one, several types of rims attached to the cylinders, different surface finishing treatment, characterized by the different directions applied and different tools used (Figure 44 and Plate 40), presence and absence of a "fin" (Figure 45 and Plate 38), and different kinds of clay used (Color Plate 5 [bottom]). In addition to the clay cylinders, we discovered some ten fragments of funnelform *haniwa* clay cylinders and a

possible fragment of a concrete *haniwa* clay object.

Discussion

The excavations of the Chōhōji-Minamibara Tumulus resulted in numerous important discoveries which give us insights into the social and political organization of fourth-century Japan. In this section, issues of the social hierarchy and of ties among chiefs of the same social status are discussed separately, although these two are closely related, as to be shown in this section.

1. Social hierarchy: As mentioned earlier, it is widely believed that tumuli were the tombs of the chiefly class of people. Besides the presence or absence of a mound, another mortuary custom which distinguished the class of chiefs was delayed interment, which is known of historically[10]. At the Chōhōji-Minamibara Tumulus, Mirror No.6 is found with some human hair attached to the front side (Color Plate 3 and Plate 26-1). This mirror was reportedly discovered outside of the presumed coffin in the chamber. One likely hypothesis is that this mirror (and probably others) was placed together with the dead body for a while before interment, during which hair was attached to it. Another example comes from Higashi-Terayama Ishigami No.2 Tumulus in Chiba City (see Figure 77 for the locations of sites mentioned in this section) in which a talc pillow presumably in a wooden coffin of the tumulus shows the evidence of having been bitten by mice. Since it is extremely unlikely that mice got into a wooden log coffin sealed by clay, researchers believe that mice bit the talc pillow while the body was placed outside the tomb for some time before the interment[11].

As to the internal social hierarchy of the chiefly class, the four basic forms of the mound—keyhole-shaped with a circular rear mound, keyhole-shaped with a square rear mound, circular, and square—probably indicated the rank of a chief buried in that mound and maybe the relationships with the central authority. Within each category of the four types of tumuli, there was a great variation in size, again possibly indicating a hierarchical order[12]. A question still remains as to what would be the relationship between a chief buried in a 50 meter keyhole-shaped tumulus with a circular rear mound and a chief buried in a 100 meter one with a square rear mound. A possible interpretation would be that the former tumulus is smaller and therefore the chief was less influential in his or her region (controlled less labor), but he or she maintained a closer or more special tie with the central and highest ranking chief who was buried in a keyhole-shaped tumulus with a circular rear mound.

Further, the presence and absence of some aspects of the burial treatment may indicate the rank of a buried chief. For example, the Chōhōji-Minamibara Tumulus mound is not covered with cobbles, which is rather rare in the Kinai region. Although large fourth century tumuli are generally covered with cobbles, there is not strict correlation between the size and form of a mound and the presence and absence of cobbles on the surface. Probably the absence of cobbles indicates a special position given by the highest ranking chief or a regional characteristic. The issues of regional characteristics and their meaning will be discussed later.

Another indication of social hierarchy within the chiefly class is the locations

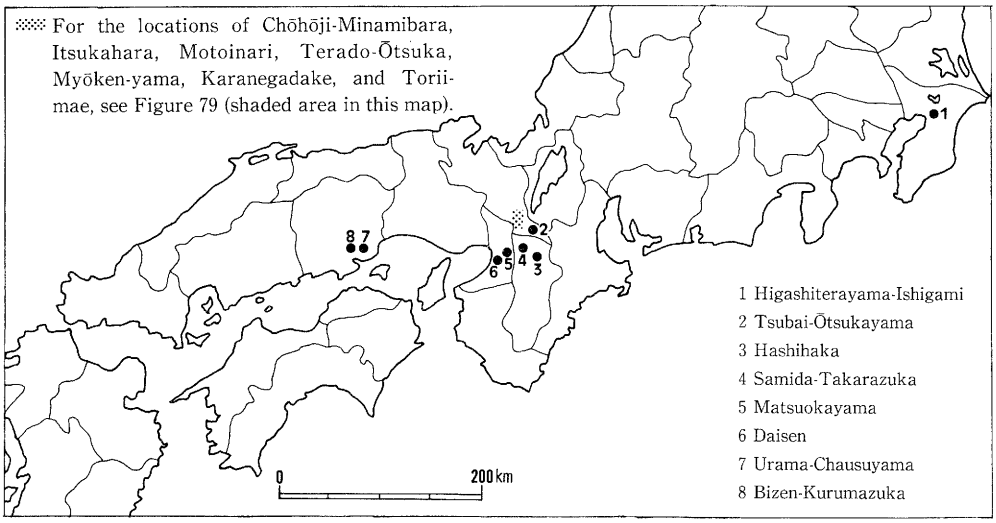


Figure 77. Sites mentioned in English summary

of the dead within one tumulus. It has been stressed that the Chōhōji-Minamibara Tumulus is dedicated to the person buried in the rear mound burial chamber. Generally speaking, less elaborate burial facilities in the secondary position, such as the minor burial chamber in the front mound of the Chōhōji-Minamibara Tumulus, were for close kin of the chief to whom that tumulus was dedicated[13], because they were still buried in the same tumulus. At the same time, people buried in less elaborate facilities could not have been chiefs because in that case there would have been independent tumuli dedicated to them.

In sum, many aspects of the Chōhōji-Minamibara Tumulus—keyhole-shaped with a square rear mound, the absence of cobbles on the mound surface, and the existence of a minor burial chamber in the front mound—all indicate the complex nature of the social hierarchical system in the fourth century.

2. Relationships between Local Chiefs and Highest Ranking Chief: While local tumuli show many regional characteristics, they are also characterized by the highly standardized forms. Some researchers hypothesize that the appearance of standardized keyhole-shaped tumuli would symbolize some sort of unification under a higher ranking chief in Kinai and a few other regions, which a few archaeologists further interpret as the rise of a state-level society. This hypothesis relies upon two lines of archaeological evidence: 1) the distribution of Wei mirrors[14], four of which were discovered in the Chōhōji-Minamibara Tumulus; and 2) the existence of some keyhole-shaped tumuli built according to the same plan[15].

The distribution of Wei mirrors is skewed toward the Kinai region. More importantly, several Wei mirrors cast from the same or identical molds were buried in different tumuli. Among more than three hundred mirrors known thus far, thirty-two Wei mirrors were discovered in the Tsubai-Ōtsukayama Tumulus in southern Kyoto Prefecture, and thirty of them are reconstructed (i.e. mold types are identified)[16]. The thirty were cast from twenty-five types of molds, and

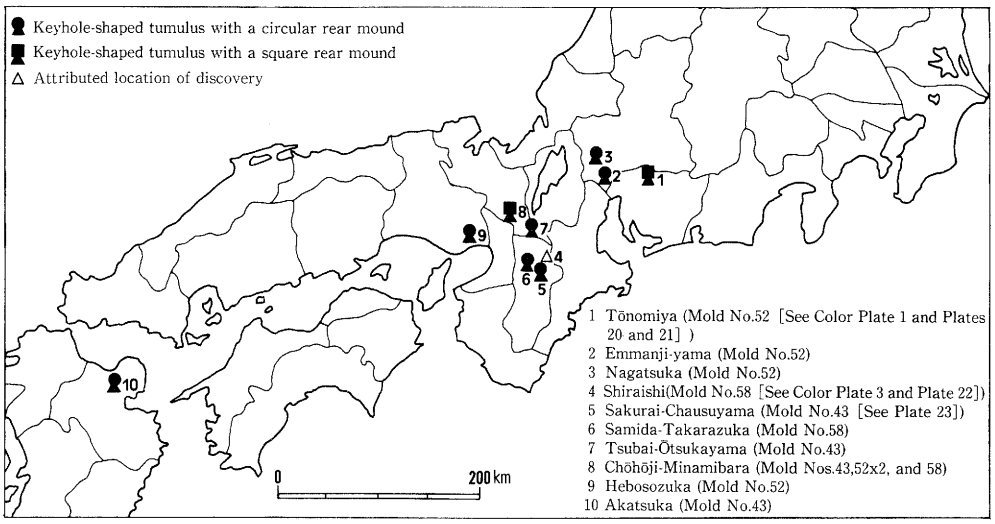


Figure 78. Sites that have yielded bronze mirrors identical to the Chōhōji-Minamibara mirrors (Parentheses indicate the type of mirrors discovered)

fifty-one mirrors excavated in forty-two other tumuli and other localities are found to be cast from the same or identical molds[17] as those twenty-five types originally identified at Tsubai-Ōtsukayama. For example, Tsubai-Ōtsukayama and Bizen-Kurumazuka in Okayama Prefecture share three mirrors cast from molds Nos. 6, 9, and 30[18]. Tsubai-Ōtsukayama and Samida-Takarazuka in Nara Prefecture share two mirrors cast from molds Nos. 20 and 25. This evidence strongly suggests that the discovery of mirrors cast from the same molds at different sites is not mere coincidence. Kobayashi interpreted that the chief buried in the Tsubai-Ōtsukayama disbursed or "gave out" extra mirrors cast from the same and/or identical molds to local chiefs[19]. As to the Chōhōji-Minamibara Tumulus under our investigation, Tsubai-Ōtsukayama Tumulus yielded a mirror cast from the same mold as Mirror No.4. Since Wei mirrors which are the same as the Chōhōji-Minamibara ones have been discovered from Kyushu to Chubu (see Figure 78), it is likely that the one buried in the Chōhōji-Minamibara Kofun was a part of this network symbolized by sharing of the Wei mirrors.

The recent results of detailed research into the plan of keyhole-shaped mounds tend to support Kobayashi's hypothesis. For example, Itsukahara Tumulus (Figure 79, No.16), Motoinari Tumulus (No.14), and Terado-Ōtsuka Tumulus (No.18) in Muko City, Kyoto Prefecture all share the same length for the entire mound and the diameter or width of the rear mound, although the Motoinari Tumulus has a square rear mound. This suggests that people tried to build these three tumuli according to the same plan. Furthermore, these three are one third the size of Hashihaka Tumulus in Nara Prefecture, which is considered to be the earliest type of keyhole-shaped tumulus. Similarly, the aforementioned Tsubai-Ōtsukayama Tumulus is two-thirds the size of Hashihaka, and Bizen-Kurumazuka and Urama-Chausuyama Tumuli (both in Okayama Prefecture; Figure 77) one-sixth and one-half the size respectively. Based on

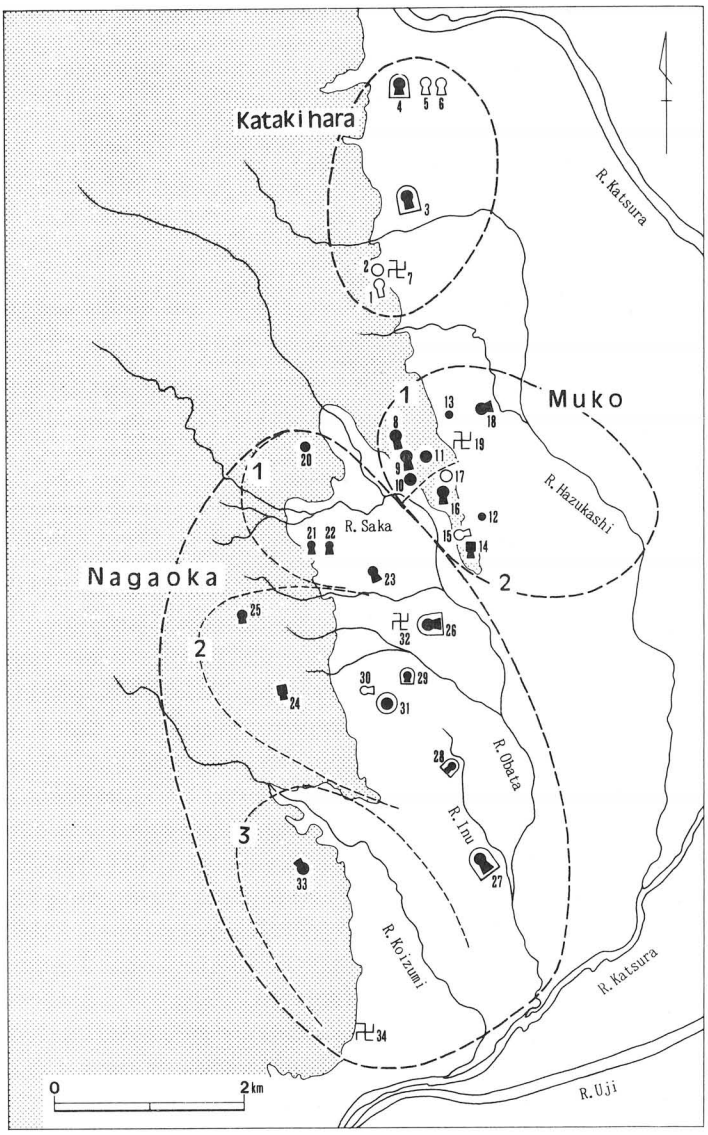


Figure 79. The distribution of tumuli and tumulus clusters in the Katsura river region (after Tsude 1990)

1 *Ipponmatsu.*
2 *Dodoike.*
3 *Tenno-no-mori.*
4 *Kokuzuka.*
5 *Shimizuzuka.*
6 *Tenko-no-mori.*
7 *Katakihara temple.*
8 *Terado Otsuka.*
9 *Myokenyama.*
10 *Ushimawashi.*
11 *Den-Takabatakeryo.*
12 *Yamabiraki.*
13 *Nanjo.*
14 *Motoinari.*
15 *Kitayama.*
16 *Itsukahara.*
17 *Shibayama.*
18 *Mozume Kurumazuka.*
19 *Hobodaiin temple.*
20 *Kagamiyama.*
21 *Shiba.*
22 *Inouchi Kurumazuka.*
23 *Inarizuka.*
24 *Minamibara.*
25 *Karanegadake.*
26 *Imazato Kurumazuka.*
27 *Igenoyama.*
28 *Tsukamoto.*
29 *Maizuka.*
30 *Hosozuka.*
31 *Imazato Otsuka.*
32 *Otokuni-dera*
33 *Toriimae.*
34 *Yamazaki temple.*

these facts, Wada and Hōjō speculate that the basic plan of keyhole-shaped tumuli was according to that of Hashihaka, and smaller scale copies of it were "distributed" to local chiefs, like the case of the Wei mirrors[20]. In addition to Hashihaka, there were a few other major tumuli whose construction plans were probably distributed to local chiefs. Results of these studies make it extremely important to grasp the precise size and plan of the Chōhōji-Minamibara Tumulus.

Another study concerning the relationships between the highest ranking chief and local chiefs is Tsude's on-going research into continuities and discontinuities in the construction of keyhole-shaped tumuli within three neighboring tumulus clusters in the southern part of Kyoto Prefecture—from north to south, the Katakihara Cluster, Muko Cluster, and Nagaoka Cluster (see Figures 79 and

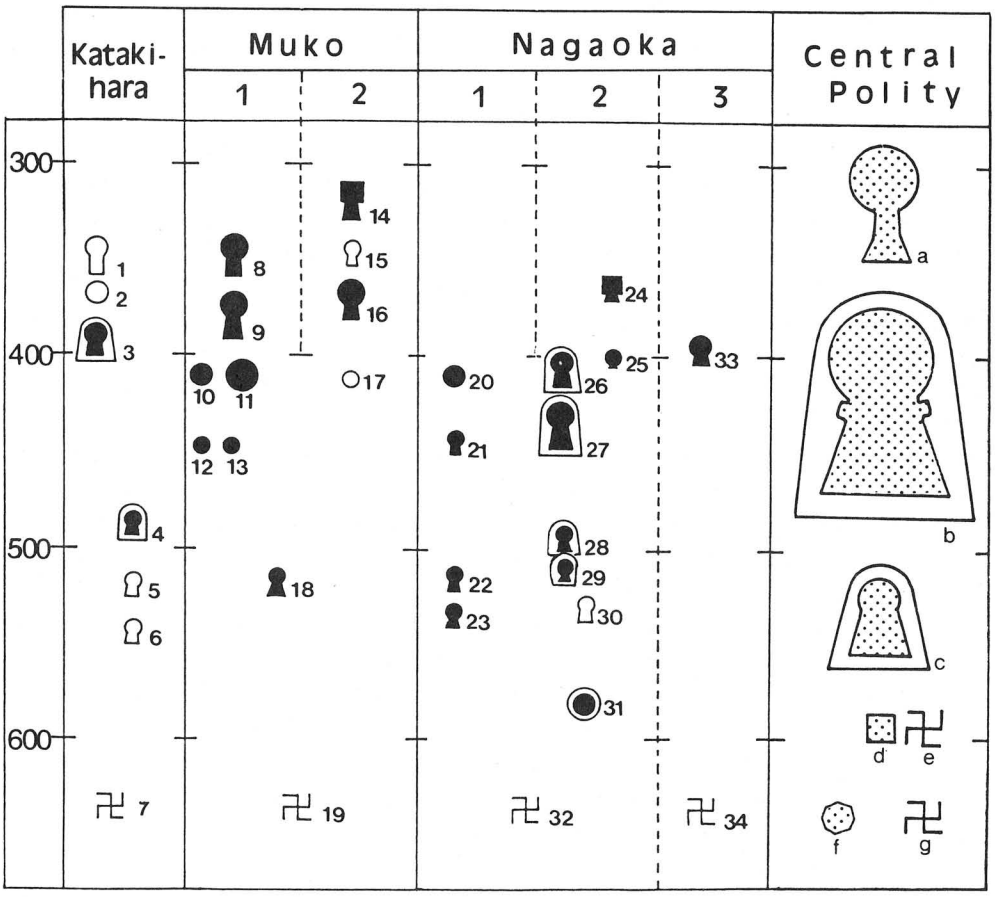


Figure 80. The chronological succession of tumuli and temples in the three main tumulus clusters of Katsura, compared with the same for the central court
a Hashihaka. **b** Ojin Mausoleum, **c** Imashirozuka. **d** Yomei Mausoleum. **e** Asuka temple. **f** Tenmu Mausoleum. **g** Kawahara temple. Solid symbols indicate full information available; white symbols indicate insufficient data due to quality of past investigations. Site names 1-34 are as in Figure 79. (after Tsude 1990)

80)[21]. The results of this study tend to indicate that the highest ranking chief had some influence over regional matters, and our investigations into the Chōhōji-Minamibara Tumulus have contributed to this study.

It is a widely accepted assumption that each tumulus cluster represents a different descent group of local chiefs because we find a chronologically continuous group of tumuli in a mountain ridge separated by a stream or a river. Keyhole-shaped tumuli with circular rear mounds dated to the fourth century were only found in the Muko Cluster, which means that generations of chiefs represented by the Muko Cluster had superiority over other descent groups in the southwestern part of Kyoto Prefecture. Moreover, the Motoinari, Itsukahara and Terado-Ōtsuka Tumuli are one third of Hashihaka in size but have identical proportions, and the Motoinari Tumulus has yielded the same type of *haniwa* as were discovered in Hashihaka, which strongly suggests a very close

tie with the highest ranking chief buried in Hashihaka. In the fifth century, generations of chiefs represented in the Nagaoka Cluster took over supremacy in the region because keyhole-shaped tumuli with circular rear mounds could only be found in the Nagaoka Cluster. In the Nagaoka Cluster, Igenoyama Tumulus (Figure 79, No.27) happens to be one quarter in size but of the same plan as the Daisen Tumulus of Osaka Prefecture (attributed to Emperor Nintoku's Mausoleum; the largest burial mound in Japan), again suggesting a strong tie with the highest ranking chief buried there. Similarly, chiefs who maintained supremacy over the region moved to the Katakihara Cluster in the late fifth century, then to the Muko Cluster in the early sixth century, and finally to the Nagaoka Cluster in the late sixth century. This timing exactly corresponds to the time when the location of the largest keyhole-shaped tumulus shifted in Kinai (e.g. there was a shift at the end of the fourth century from the southern Nara Basin where Hashihaka was, to the Osaka Plain where the Daisen Tumulus was). This suggests to Tsude that the choice of a local chief was influenced by the central authority, first located in Yamato (present Nara) and then in Kawachi (present central Osaka).

Tsude's idea developed out of his fieldwork at tumuli in southwestern Kyoto, such as Myōken-yama (Figure 79, No.9), Terado-Ōtsuka, and Motoinari[22], and Karanegadake[23] (No.25), and Toriimae[24] (No.33). Results of the five excavations at the Chōhōji-Minamibara Tumulus show that the mound form was keyhole-shaped with a square mound and that the date was the middle to late fourth century. This conclusion tends to support Tsude's belief that the Muko Cluster which consisted of keyhole-shaped tumuli with circular rear mounds was superior to the Nagaoka Cluster, of which Chōhōji-Minamibara was a part, and did not contain any other fourth century keyhole-shaped tumuli.

Tsude's idea is in some sense supported by Matsugi's study on the fourth century bronze arrowheads (Chapter Six, Section 2). In the early fourth century, bronze arrowheads were highly standardized and of high quality. He interpreted this evidence to mean that bronze arrowheads were also distributed by the highest ranking chief to local chiefs as prestige goods[25]. Toward the end of the fourth century, however, bronze arrowheads buried in tumuli became less standardized and of low quality. This was also the case in the burying of bronze mirrors and bracelet-shaped jade objects. At the same time, new types of iron armor and iron arrowheads gradually took over the position of the major funerary offerings at the beginning of the fifth century. He considers this as a change in political organization from the ritualistic and ceremonial type based on sharing bronze mirrors, bracelet-shaped jade objects, and bronze arrowheads, to the military type based on distribution of new types of iron weapons. He concludes that this major shift in political organization was reflected in the move of the largest keyhole-shaped tumulus from Yamato in the fourth century to Kawachi in the fifth century and also in the move of local areas where keyhole-shaped tumuli with circular rear mounds were built, such as from Muko to Nagaoka.

3. Regional Mortuary Traditions and their Meanings: Investigations into the Chōhōji-Minamibara Tumulus also give some insight into understanding

relationships among local chiefs in fourth-century Japan. The tumulus appears to be related to tumuli of other regions because of the existence of rather unique minor burial chamber and to some extent because of the absence of cobbles on the mound surface.

The Chōhōji-Minamibara Tumulus has two distinctive types of burial chambers in one burial mound. This distinction in types of burial chambers does not represent differences in time, region, and social class. Referring to other similar cases, this distinction does not probably represent a sex difference. Consequently, Fukunaga proposes that the use of a different type of burial facility symbolizes one's "descent group."[26] A descent group is a concept by which one maintains identity in one's group at birth even after marrying into a different lineage group.

With particular reference to the Chōhōji-Minamibara Tumulus, the minor burial chamber in the front mound is oriented east-west, while the major burial chamber in the rear mound is oriented north-south. The latter was very common in the Kinai region, but minor burial chambers (like a coffin) oriented east-west were prevalent in the northern Kinki region facing the Sea of Japan. Consequently, Fukunaga suggests the possible marriage alliance between the person buried in the rear mound burial chamber to whom the Chōhōji-Minamibara Tumulus is dedicated, and someone from the northern Kinki region, who is buried in the front mound burial chamber.

In addition, the rather unusual absence of cobbles on the mound surface of the Chōhōji-Minamibara Tumulus might suggest a tie with another region. First of all, the neighboring Karanegadake No. 2 Tumulus (early fifth century) also lacks cobbles on the mound surface[27]. Probably it was a tradition of this particular lineage building tumuli in the Nagaoka Cluster not to cover the mound surface with cobbles. Secondly, the pottery assemblage in the third century in this region is characterized by a relatively high percentage of pottery from the Ōmi (present Shiga Prefecture) area, and it is quite suggestive that a few fourth century tumuli in Ōmi similarly lack cobbles on the mound surface. Issues of ties with other regions still remain to be tested by more data.

Summary and Conclusion

The results of the six seasons of fieldwork at the Chōhōji-Minamibara Tumulus are invaluable. We discovered two distinctive burial chambers in this mound and determined the form and size of the mound, which turned out to be keyhole-shaped with a square rear mound. Many artifacts, such as bronze mirrors, were recovered, which are important in interpreting the social and political organization of fourth-century Japan. Detailed investigations into various aspects of this site, including the form of the mound, the lack of cobbles covering the mound surface, and the existence of the east-west oriented minor burial chamber in the front mound, all contribute to hypotheses concerning the social and political position of the chief buried in this mound. The Chōhōji-Minamibara chief was probably not the highest ranking chief in southwestern Kyoto while he or she was active, but was a part of an ideological and maybe political network symbolized by sharing of the same or identical mirrors. His or

her spouse or very close kin was buried in the minor chamber in the front mound, and might have had a tie with other regions, such as the northern Kinki. The chief him- or herself had a tie with other regions, as well. After the chief's death, his or her descendant became powerful in the southwestern Kyoto, being associated with the highest ranking chief in Kawachi who probably controlled Kinai and its surroundings by military power. This shift in political organization is reflected in the changes in location of the largest tumulus, the location of keyhole-shaped tumuli with circular rear mounds in a local area, and the assemblage of funerary offerings. Further investigations into this site will certainly generate more powerful hypotheses concerning the position of the chief buried in the Chōhōji-Minamibara Tumulus.

---

[1] Umehara Sueji. 1937. Otokuni-mura Chōhōji-Minamibara Kofun no Chōsa [Excavation of the Chōhōji-Minamibara Tumulus in Otokuni Village]. *Kyoto-fu Shiseki Meishō Tennen Kinenbutsu Chōsa Hōkoku* [Reports of Investigations into Historic Sites and Natural Monuments in Kyoto Prefecture], No. 17. pp. 1-22 and plates 1-18.

[2] Preliminary reports of these excavations are the following:

Tsude Hiroshi and Hashimoto Seiichi. 1983. Chōhōji-Minamibara Kofun Dai 3-ji Chosa Gaiyō [Preliminary Report of the Third Excavation of the Chōhōji-Minamibara Tumulus]. *Nagaokakyō-shi Bunkazai Chōsa Hōkoku-sho* [Reports of Investigations into Cultural Properties in Nagaokakyō City], No. 11, edited by Nakao Hidemasa. Nagaokakyō Municipal Board of Education. pp. 1-32.

Tsude Hiroshi and Fukunaga Shin'ya. 1984. Chōhōji-Minamibara Kofun Dai 4-ji Chōsa Gaiyō. *Nagaokakyō-shi Bunkazai Chōsa Hokoku-sho,* No. 13, edited by Nakao Hidemasa. Nagaokakyō Municipal Board of Education. pp. 45-54.

Tsude Hiroshi. 1985. Chōhōji-Minamibara Kofun Dai 5-ji Chōsa Gaiyō. *Nagaokakyō-shi Bunkazai Chōsa Hōkoku-sho*, No. 15, edited by Nakao Hidemasa. Nagaokakyō Municipal Board of Education. pp. 1-16.

Fukunaga Shin'ya, Matsugi Takehiko, and Sugii Takeshi. 1990. Chōhōji-Minamibara Kofun Dai 6-ji Chōsa Gaiyō. *Nagaokakyō-shi Bunkazai Chōsa Hōkoku-sho*, No. 24, edited by Nakao Hidemasa. Nagaokakyō Municipal Board of Education. pp. 1-30.

[3] The following English sources are recommended as an introduction to the Kofun Period archaeology:

Aikens, C. Melvin and Higuchi Takayasu. 1982. *Prehistory of Japan*. Academic Press, New York. See Chapter 5.

Tsude Hiroshi. 1987. The Kofun Period. *Recent Archaeological Discoveries in Japan*, edited by Tsuboi Kiyotari. The Centre for East Asian Cultural Studies, Tokyo and UNESCO, Paris. pp. 55-71.

[4] Tsude Hiroshi. 1989. Kofun ga Tsukurareta Jidai [Period during Which Tumuli were Built]. *Kofun Jidai no Ō to Minshū* [King and Commoners in the Kofun Period], Vol. 6 of *Kodaishi Fukugen* [Reconstruction of Ancient History], edited by Tsude Hiroshi. Kodansha, Tokyo, pp. 25-52.

[5] Tainter, Joseph A. 1977. Woodland Social Change in West-Central Illinois. *Mid-Continental Journal of Archaeology*, Vol. 2, pp. 67-98.

[6] Kobayashi Yukio. 1961. *Kofun Jidai no Kenkyū* [Studies on the Kofun Period]. Aoki Shoten, Tokyo. See especially Chapters 3, 4, and 5.

[7] Kobayashi Yukio. 1956. Zenki Kofun no Fukusōhin ni Arawareta Bunka no Nisō [Two Different Cultural Phases as Evidenced in Mortuary Offerings of the Early Type of Tumuli]. Reprinted in Kobayashi, 1961 as Chapter 5.

[8] We hereafter tentatively refer to this type of mirrors as "Wei mirrors" because it is recorded in the *Wei Zhi* [History of Wei China (220-265)] that these mirrors were presented by the Emperor of Wei to a Japanese chief. We also make a clear distinction between the

original Wei mirrors and Japanese copies made after them. By Wei mirrors, we only mean the Chinese originals.

[9] Kobayashi Yukio. 1957. *Matsuokayama Kofun no Chōsa* [Investigations into the Matsuokayama Tumulus]. Reports of Investigations into Cultural Properties in Osaka Prefecture, No. 5. Osaka Prefectural Board of Education.

[10] See Wada Atsumu. 1969. Mogari no Kisoteki Kenkyū [Basic Studies of Delayed Interment]. *Shirin*, Vol. 52, pp. 646-704. for synthesis.

[11] Numasawa Yutaka. 1977. Ishigami 2-gō Fun no Sho-Mondai [Various Issues concerning the Ishigami No. 2 Tumulus]. *Higashiterayama-Ishigami Iseki*, Chiba Prefectural Center for Archaeological Operations. pp. 118-154.

[12] Kondō Yoshirō. 1986. Zempō-Kōen-Fun no Tanjō [Appearance of Keyhole-Shaped Tumuli]. *Iwanami Kōza Nihon Kōkogaku* [Iwanami Introduction to Japanese Archaeology], Vol. 6, edited by Kondō Yoshirō. Iwanami Shoten, Tokyo. pp. 171-226. See p. 216.

Tsude Hiroshi. 1986. Fumbo [Burials]. *Iwanami Kōza Nihon Kōkogaku* [Iwanami Introduction to Japanese Archaeology], Vol. 4, edited by Sahara Makoto. Iwanami Shoten, Tokyo. pp. 215-267. See p. 259.

[13] Kondō Yoshirō. 1983. *Zempō-Kōen-Fun no Jidai* [Age of Keyhole Shaped Tumuli]. Iwanami Shoten, Tokyo. See pp. 242-244.

[14] Kobayashi, 1961, Chapter 3. See also Amakasu Ken. 1977. The Significance of the Formation and Distribution of *Kofun*. *Acta Asiatica*, Vol. 31, pp. 24-50 for a brief discussion in English.

[15] Wada Seigo. 1981. Mukō-shi Itsukahara Kofun no Sokuryō Chōsa yori [Mapping the Mound of Itsukahara Kofun in Mukō City]. *Ōryō no Hikaku Kenkyū* [Comparative Studies of Royal Tombs], edited by Onoyama Setsu. Department of Archaeology, Kyoto University, Kyoto, pp. 49-63.

Hōjō Yoshitaka. 1986. Funkyū ni Hyōji sareta Zempō-Kōen-Fun no Teishiki to sono Hyōka [The Standard as Expressed in the Forms of Mounds of Keyhole-Shaped Tumuli and its Interpretation]. *Kōkogaku Kenkyū*, Vol. 32, No. 4, pp. 42-66.

——. 1989. The Study of Keyhole-Shaped Tombs and Japanese Archaeology. *Archaeological Review from Cambridge*, Vol. 8, No. 1, pp. 81-90.

[16] Department of Archaeology members at Kyoto University. 1989. *Tsubai-Ōtsukayama Kofun to Sankakubuchi-Shinjū-kyō* [Tsubai-Ōtsukayama Tumulus and Wei Mirrors]. Department of Archaeology, Kyoto University, Kyoto.

[17] We make a clear distinction between the "same" molds and "identical" molds in this summary. By the former, we mean that more than one mirror or bronze arrowhead are cast from one pair of the same molds. This is detected by the observation that mirrors cast from the same molds often share fissures of the molds. An example of arrowheads discovered at the Chōhōji-Minamibara and Matsuokayama belongs to this category. By the latter, we mean that mirrors were cast from different pairs of molds which were prepared from the same prototype. Even though mirrors cast from identical molds appear the same, one may show a fissure of the mold while another does not have such a fissure.

[18] These mold numbers were originally assigned by Kobayashi, 1961. The mold numbers have been slightly changed as new mirrors are discovered. For this summary, we have updated the mold numbers, based on the Department of Archaeolology members at Kyoto University, 1989.

[19] Kobayashi, 1961, pp. 104, 109-110.

[20] Wada, 1981, p. 60; Hōjō, 1986, pp. 58-9; 1989, p. 87.

[21] Tsude Hiroshi. 1988. Kofun Jidai Shuchō Keifu no Keizoku to Danzetsu [Continuities and Discontinuities of the Lineages of Chiefs during the Kofun Period]. *Machikaneyama Ronsō* (History Section), Vol. 22, pp. 1-16.

——. 1990. Chiefly Lineages in Kofun-Period Japan: Political Relations between Centre and Region. *Antiquity*, Vol. 64, pp. 923-929.

[22] Kondō Takaichi and Tsude Hiroshi. 1971. Kyoto Mukō Kyūryō no Zenki Kofun no Chōsa [Excavations of the Early Kofun Period Tumuli on the Mukō Hill, Kyoto]. *Shirin*, Vol. 54, pp. 910-933.

[23] Okauchi Mitsuzane, Wada Seigo, and Uno Takao. 1981. Nagaokakyō-shi Karanegadake 1,

2-gō Fun no Hakkutsu Chōsa [Excavations of the Karanegadake Nos. 1 and 2 Tumuli in Nagaokakyō City]. *Shirin,* Vol. 64, pp. 388-431.

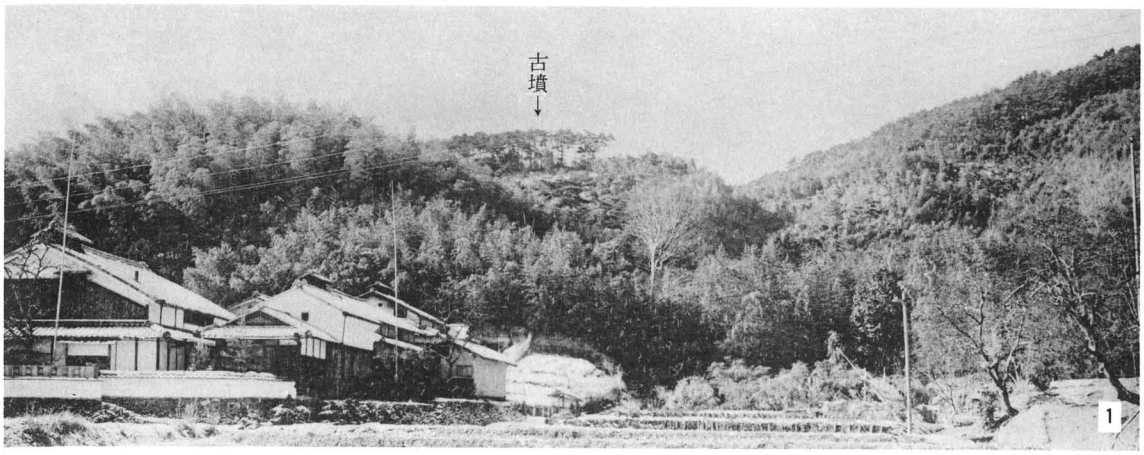
[24] Fukunaga Shin'ya, Editor. 1990. *Toriimae Kofun.* Osaka University Studies in Archaeology, No. 1. Department of Archaeology, Osaka University, Toyonaka. See especially Tsude's contribution: "Toriimae Tumulus and Other Chiefly Burials along the Katsura River" pp. 121-128.

[25] Matsugi Takehiko. 1991. Zenki Kofun Fukusō Zoku no Seiritsu to Tenkai [Origins and Development of Burying Arrowheads in the Fourth Century Tumuli]. *Kōkogaku Kenkyū*, Vol. 37, No. 4, pp. 29-58. See p. 52.

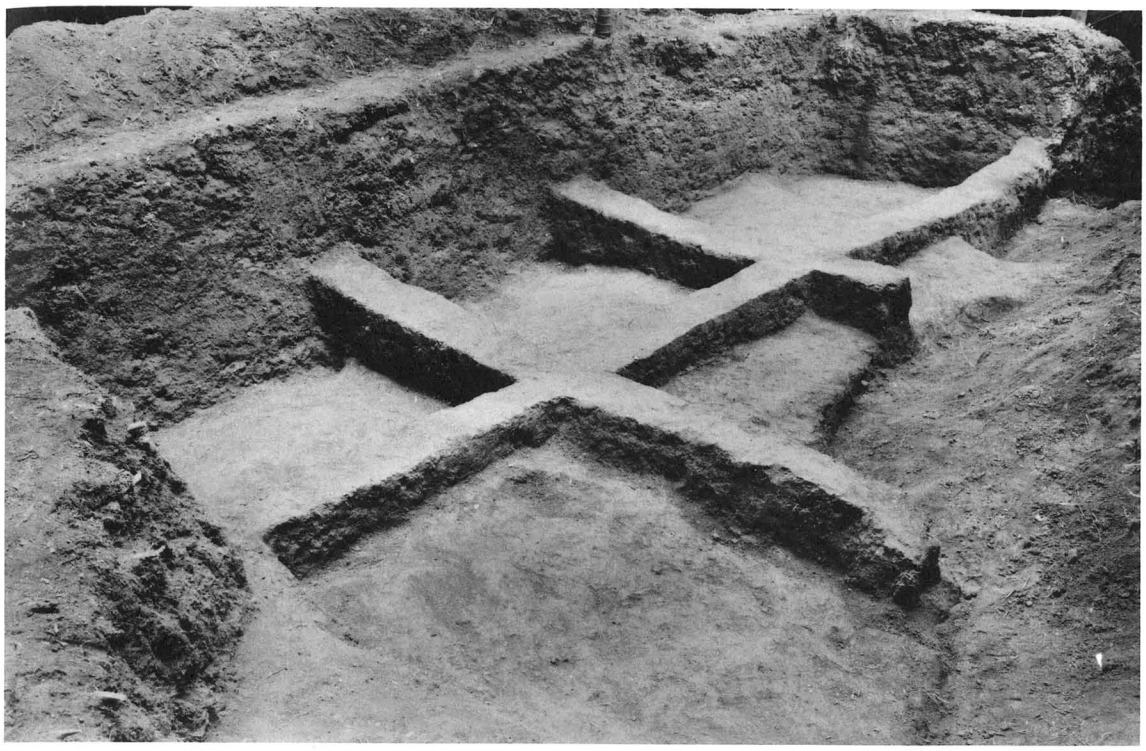
[26] Fukunaga Shin'ya. 1985. Yayoi Jidai no Mokkan-Bo to Shakai [Wooden Coffin Burials of the Yayoi Period and the Society]. *Kōkogaku Kenkyū*, Vol. 32, No. 1, pp. 81-106. See also his contribution in this volume (Chapter Six, Section 4) for particular reference to the Chōhōji-Minamibara Tumulus.

[27] Okauchi, Wada, and Uno, 1981.

図　版



1　古墳の立地（1934年），2　古墳の立地（1991年），3　墳丘の現状

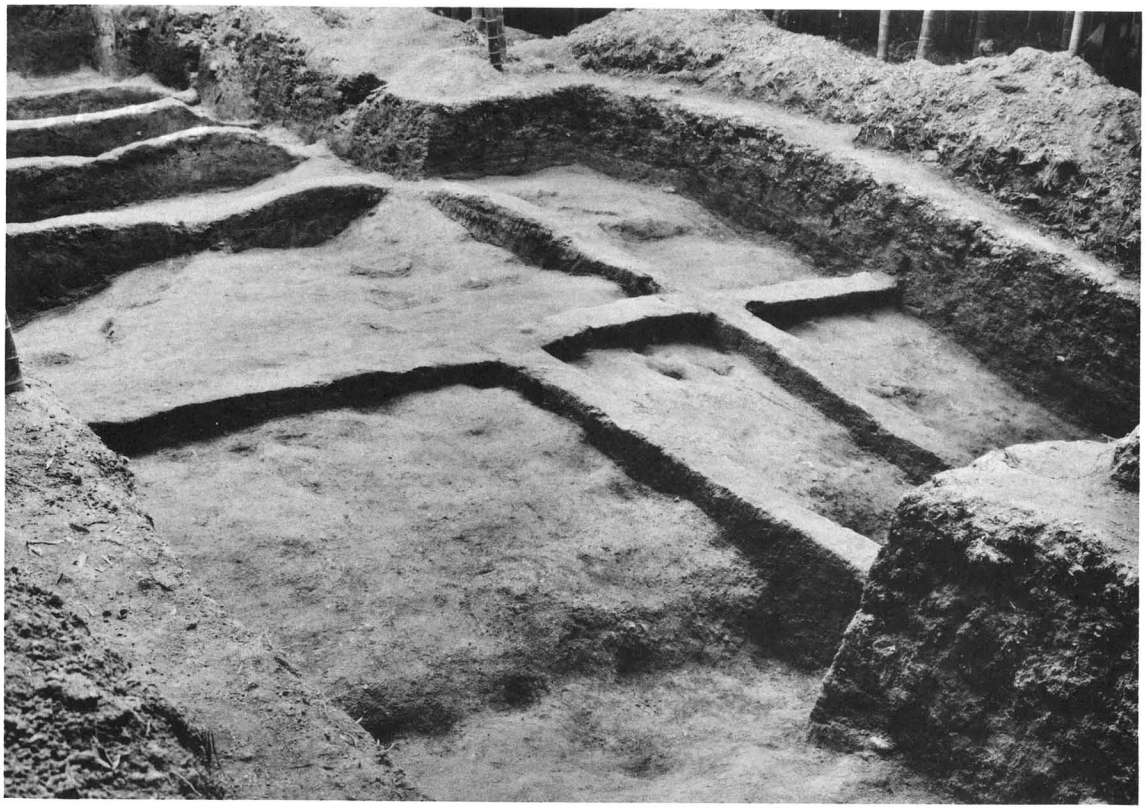


1　後方部東北隅（南西から）**第3次**

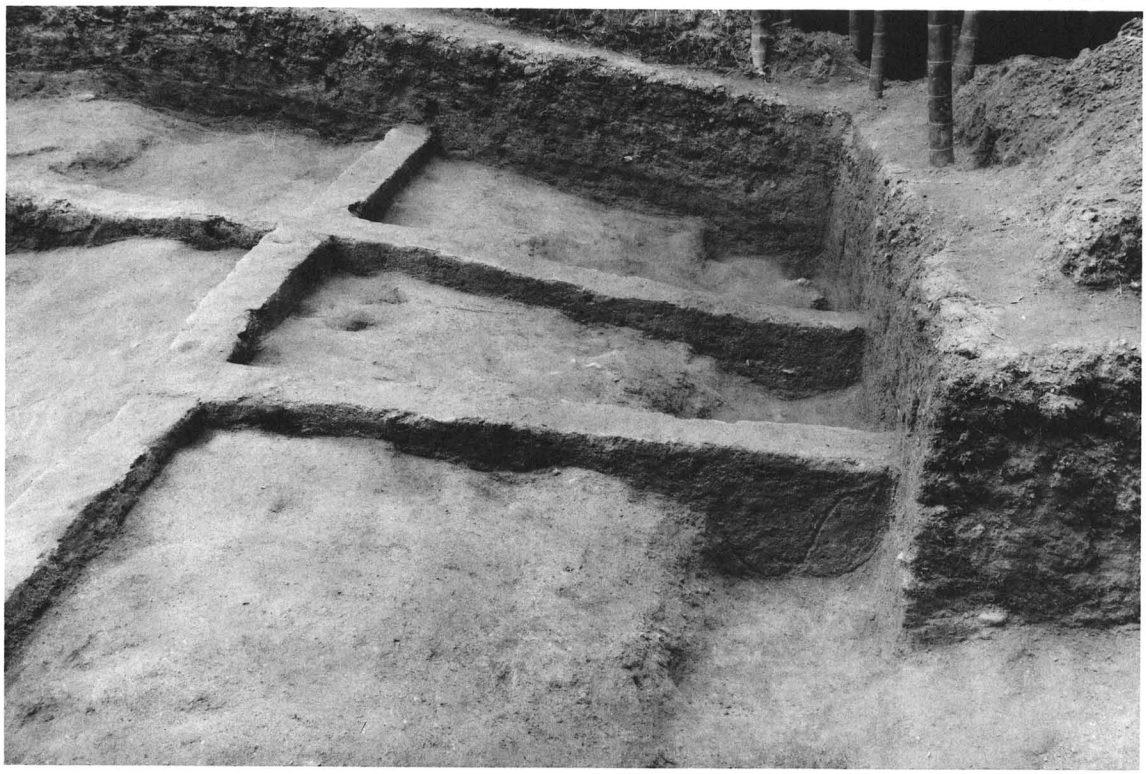
2　後方部東北隅の墳丘裾部（東から）
第3次

東クビレ部、後方部南東隅（西から）**第4次**

1　後方部南東隅の墳丘裾部、陸橋部（東から）第 4 次



2　後方部南東隅の墳丘裾部、陸橋部（南東から）第 4 次



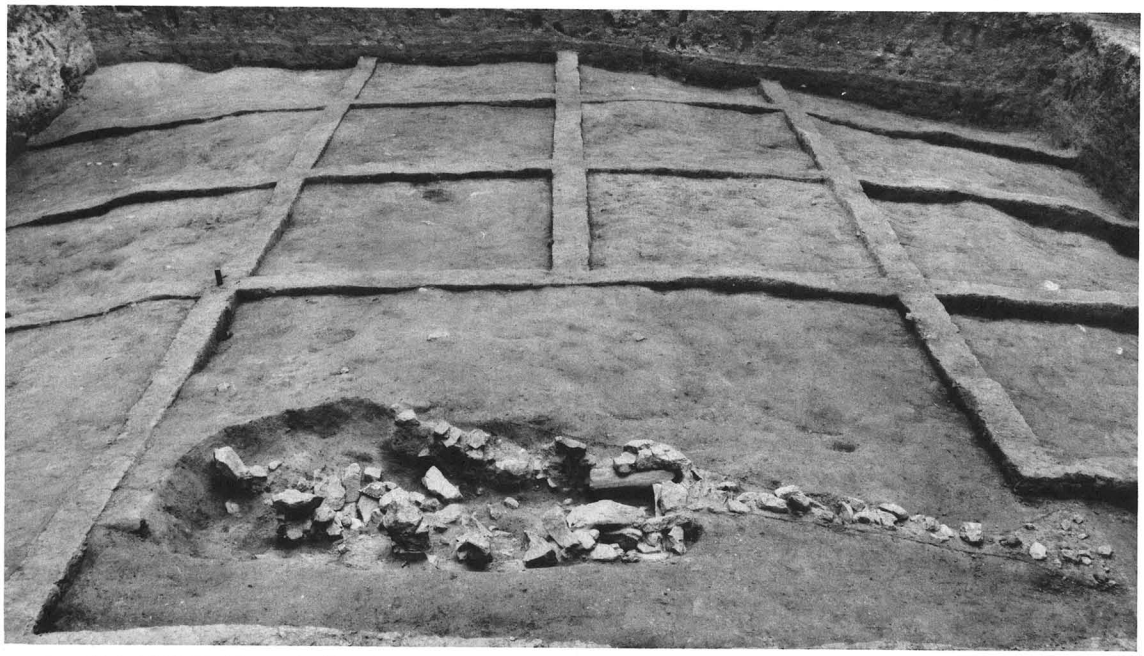
1　後方部南東隅の墳丘裾部（南から）**第4次**

2　東クビレ谷部の柱穴群（南東から）**第4次**

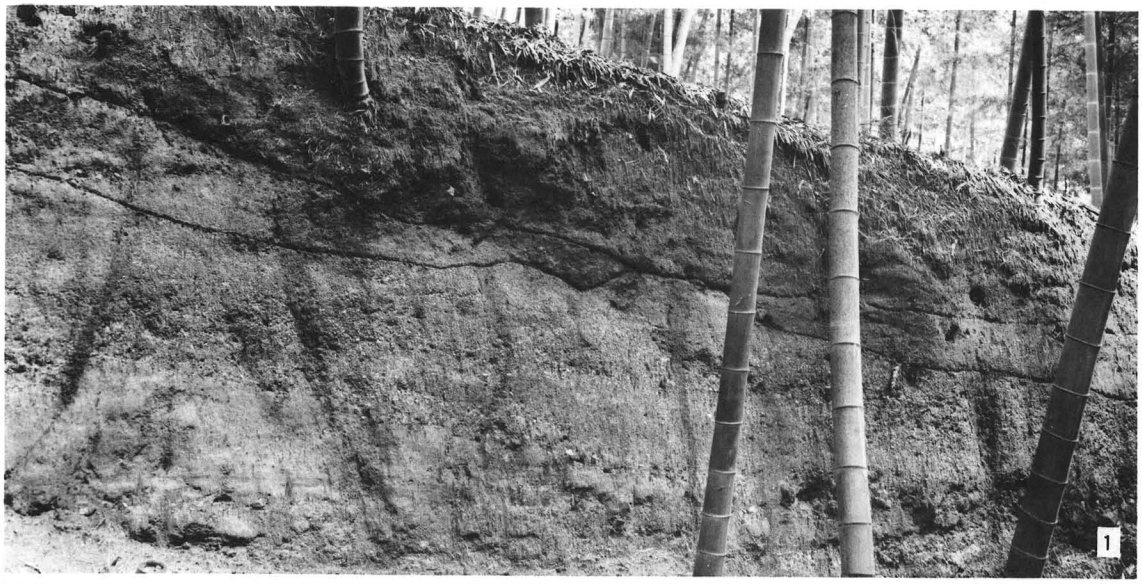
1　前方部東斜面（北から）**第5次**

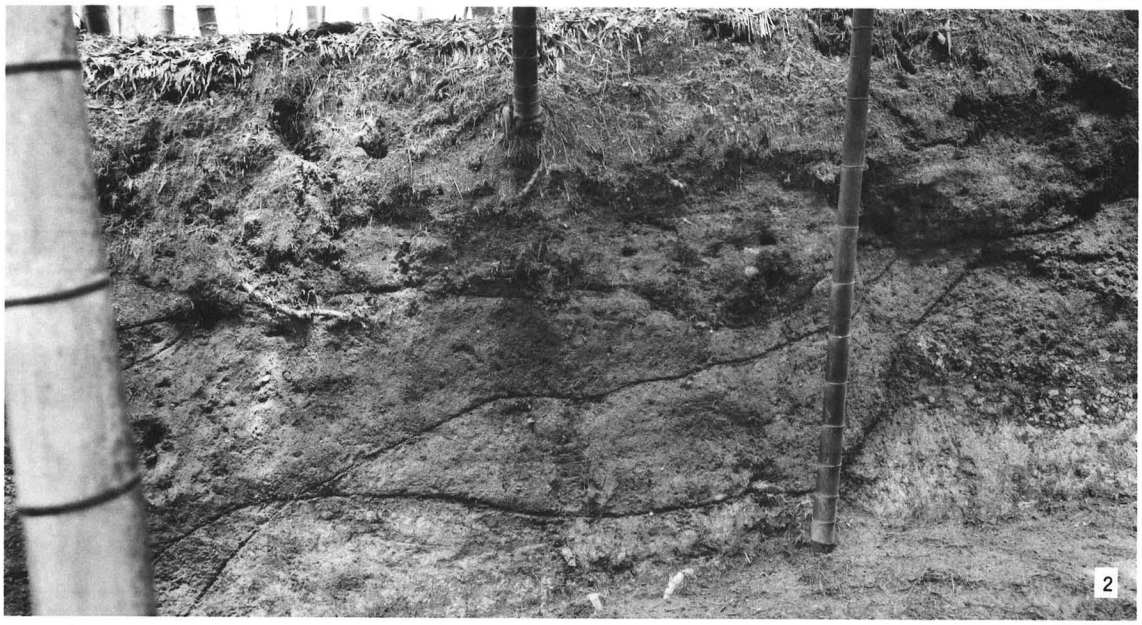
2　前方部東斜面の堆積（北から）**第5次**

1　前方部項部（北から）**第6次**



2　前方部項部（北から）**第6次**



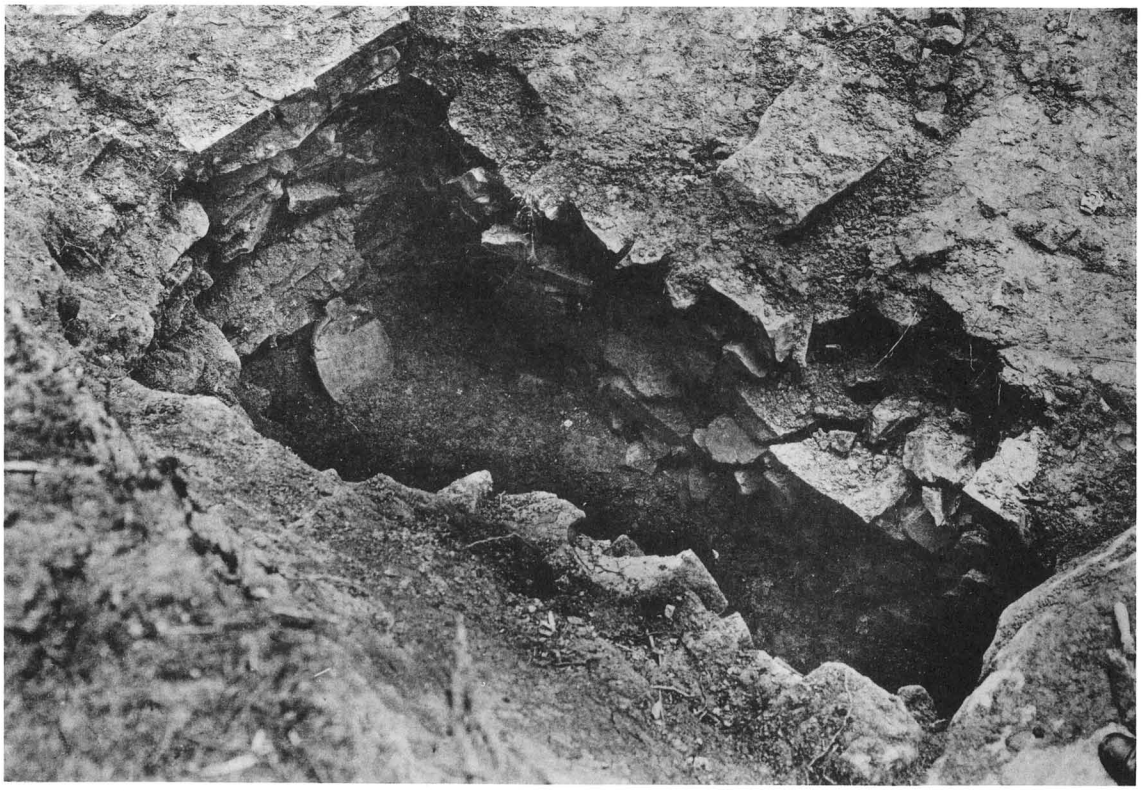


1　前方部横断Dセクション東端部（南から）第3次，　2　同セクション西端部（南から）第3次，
3　前方部縦断断ち割りセクションの盛土状況（東から）第6次

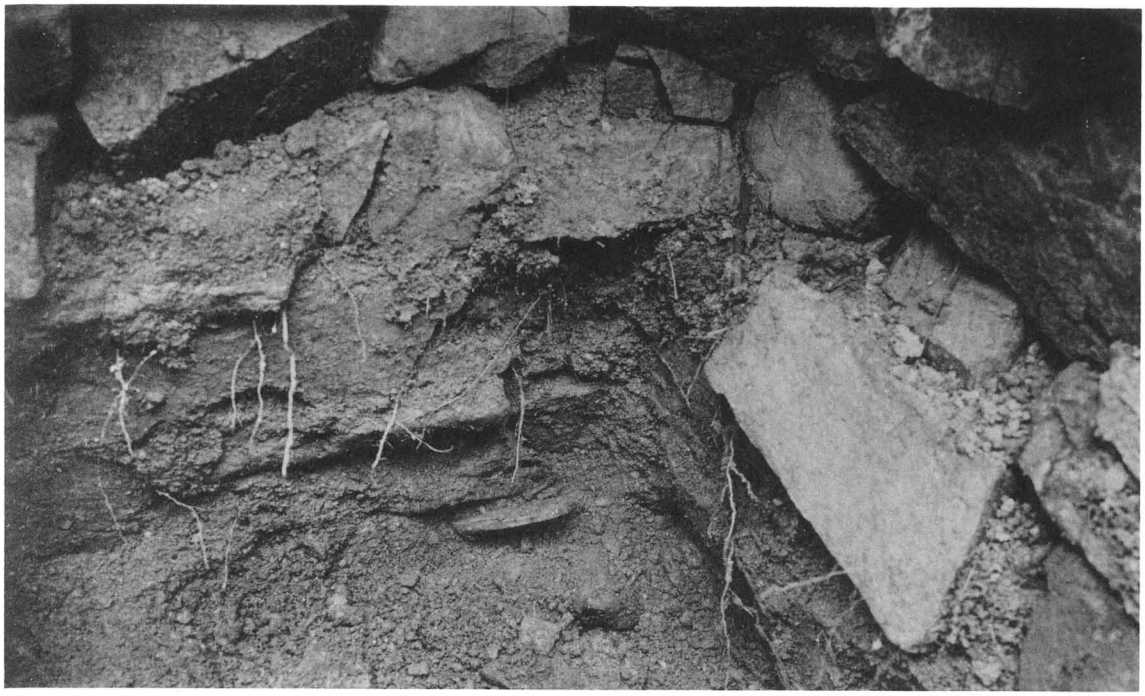
1　後方部石室天井石列（南から）**第１次**

2　後方部石室全景（北東から）**第１次**

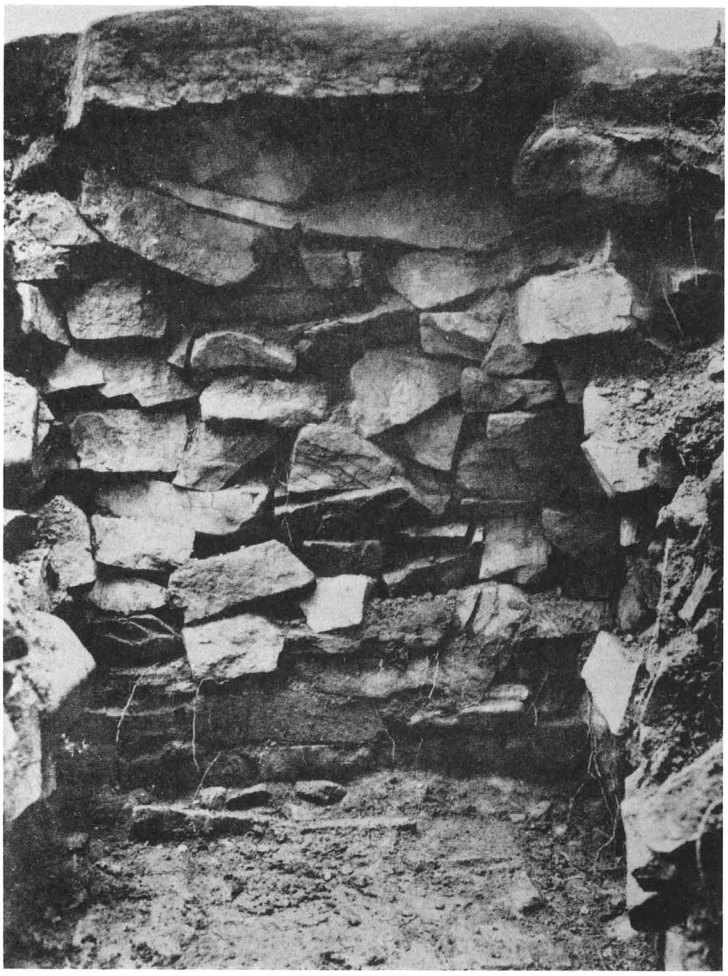
1　後方部石室全景（北から）
第1次



2　石室南半部の副葬品遺存状況 **第1次**

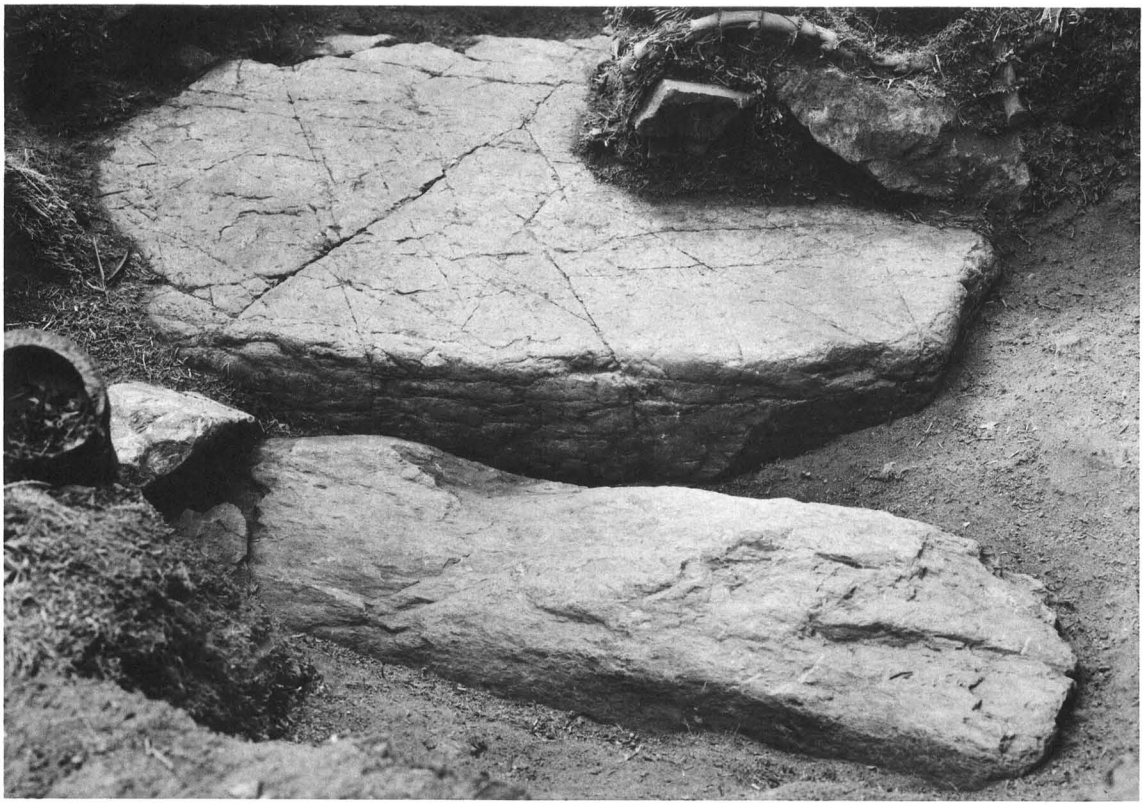


1　石室北東隅の副葬品
遺存状況 **第1次**



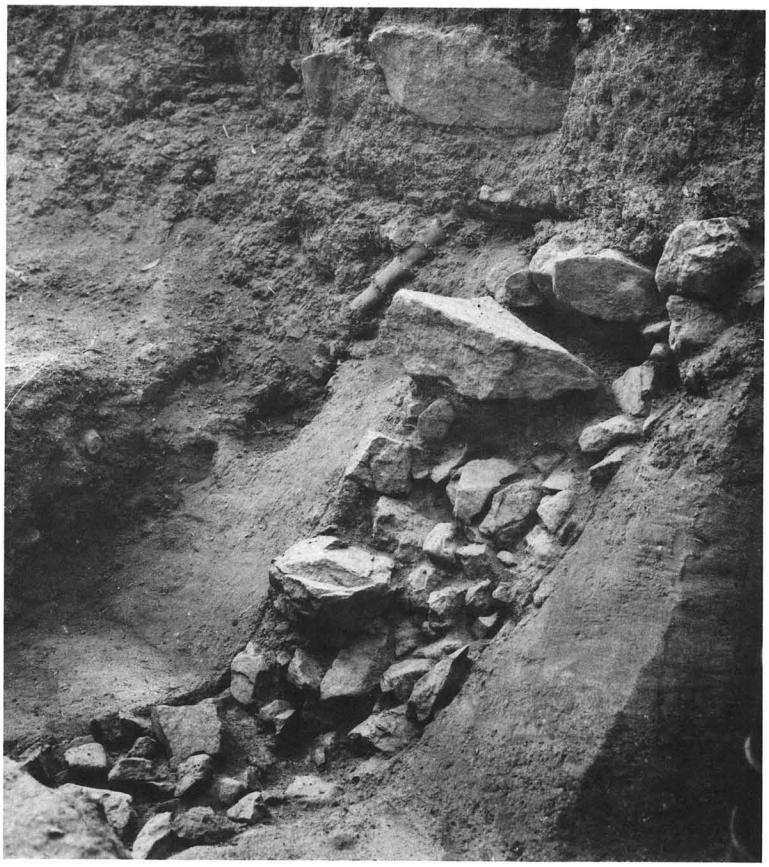
2　石室北小口壁の構造 **第1次**

1　後方部石室残存部分の状況（西から）第２次

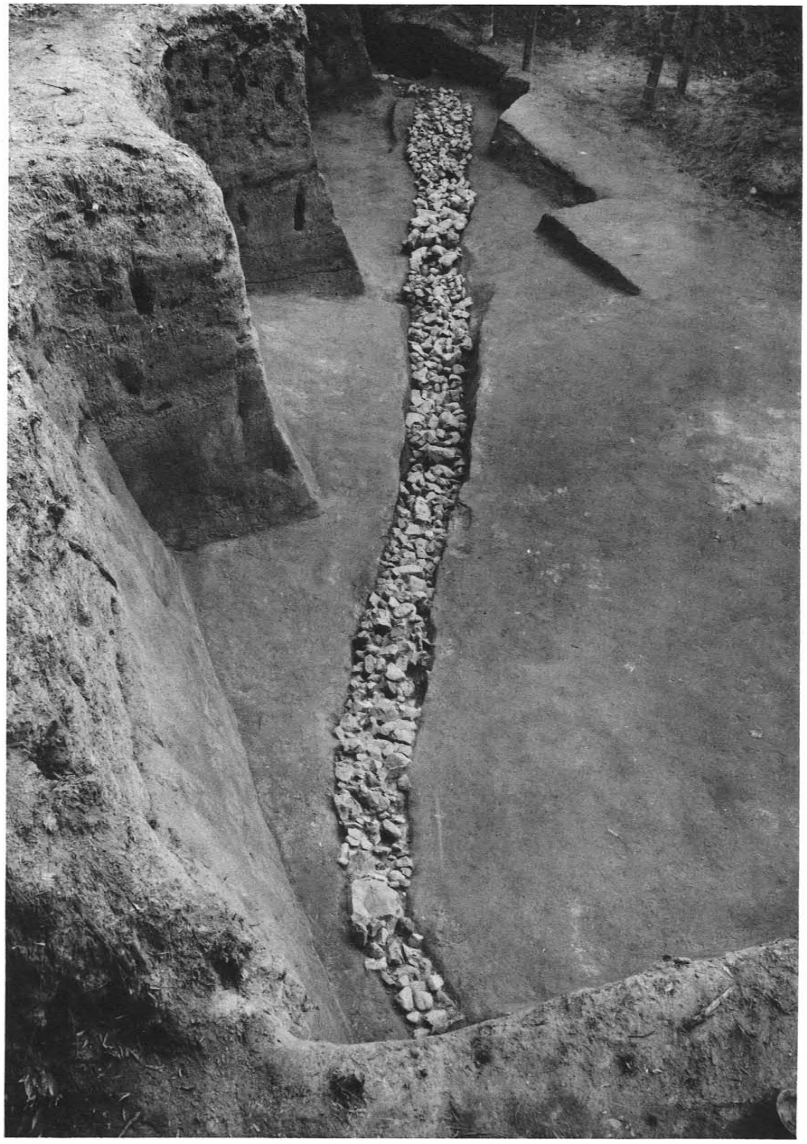


2　石室天井部の状況 第２次

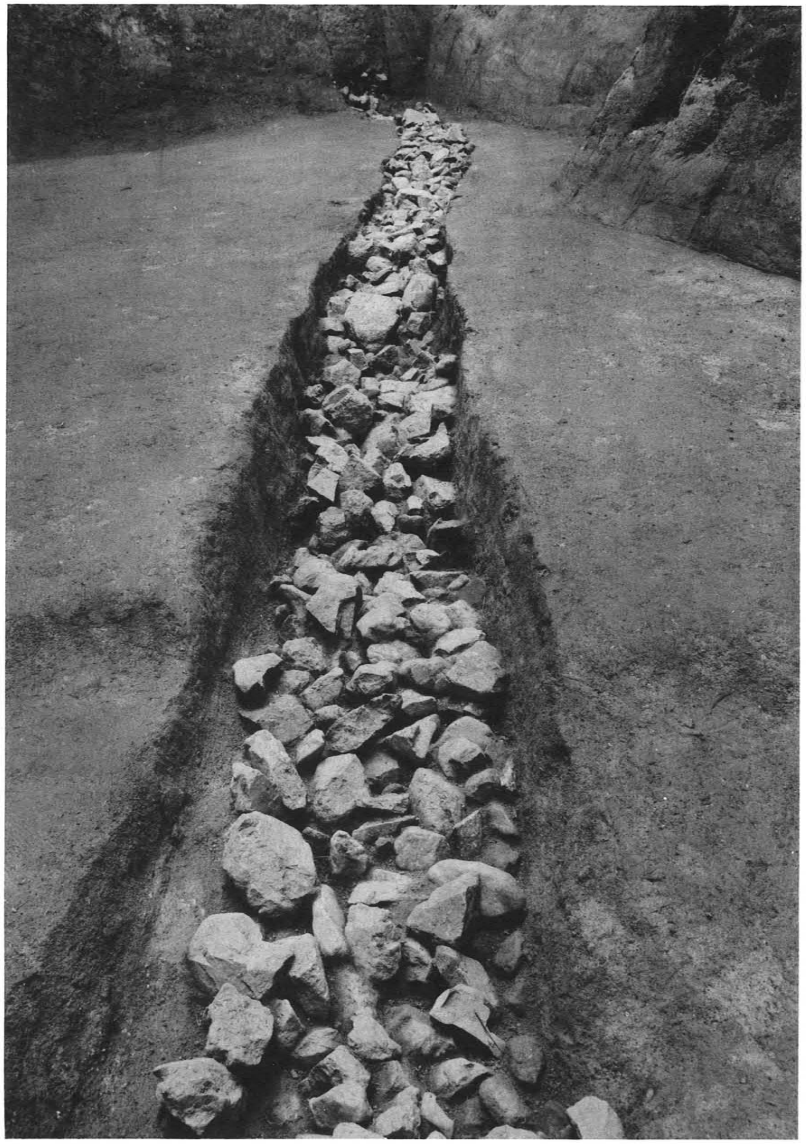
1　石室の控え積みと排水溝
第２次



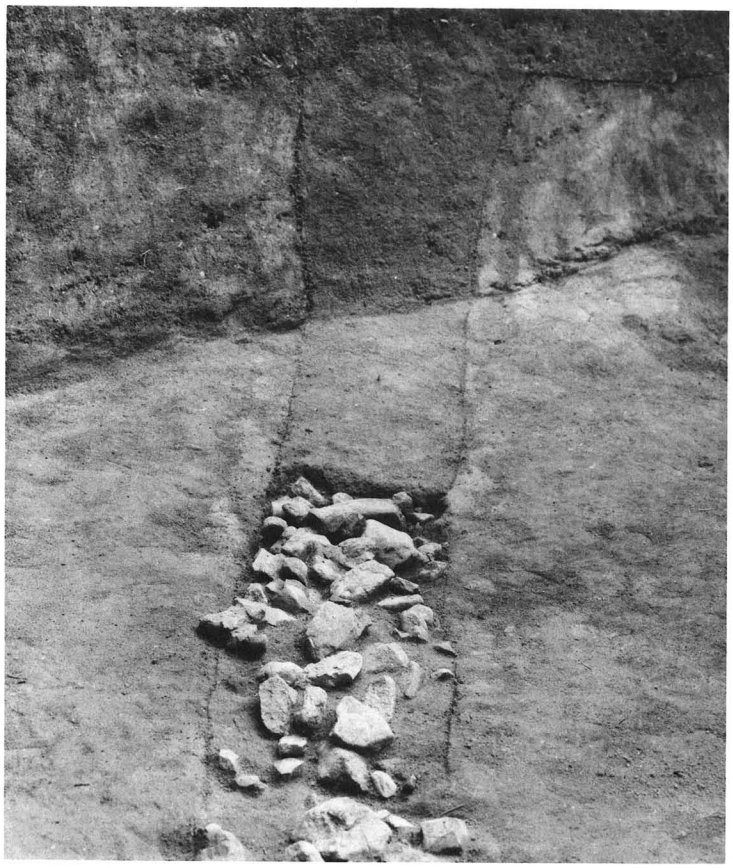
2　排水溝の取り付き状況
第２次



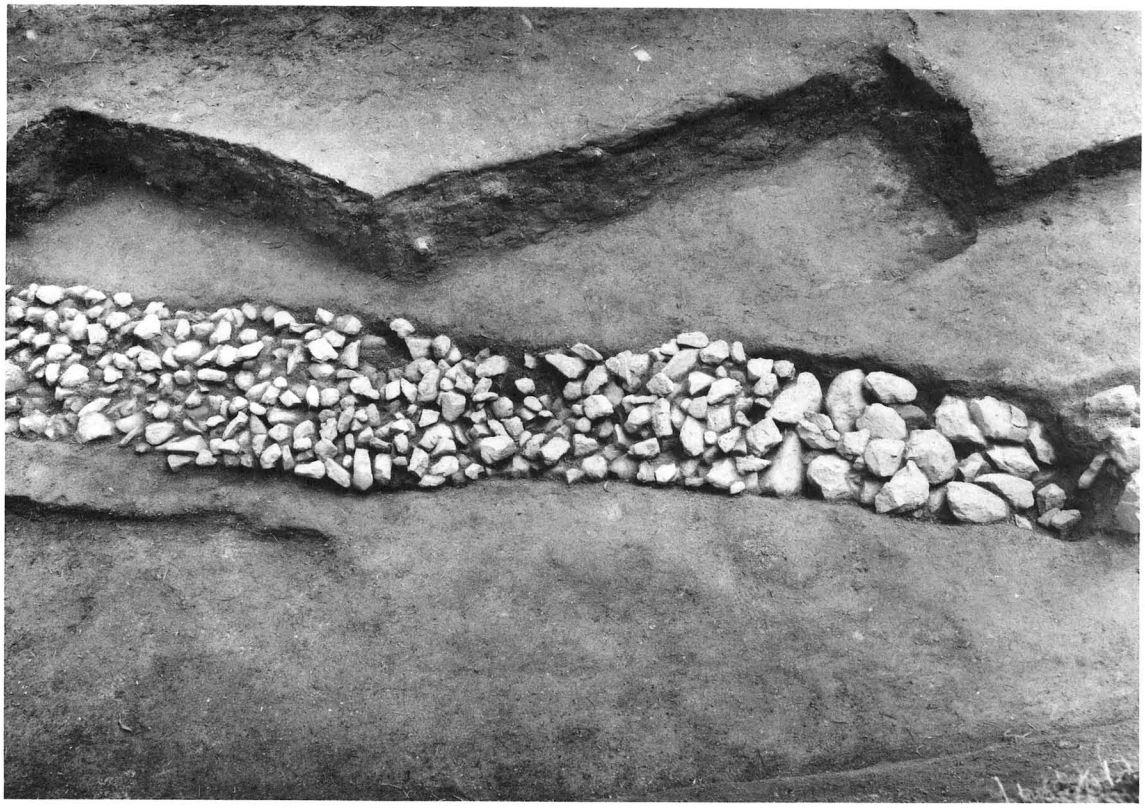
1　排水溝全景（北東から）第3次



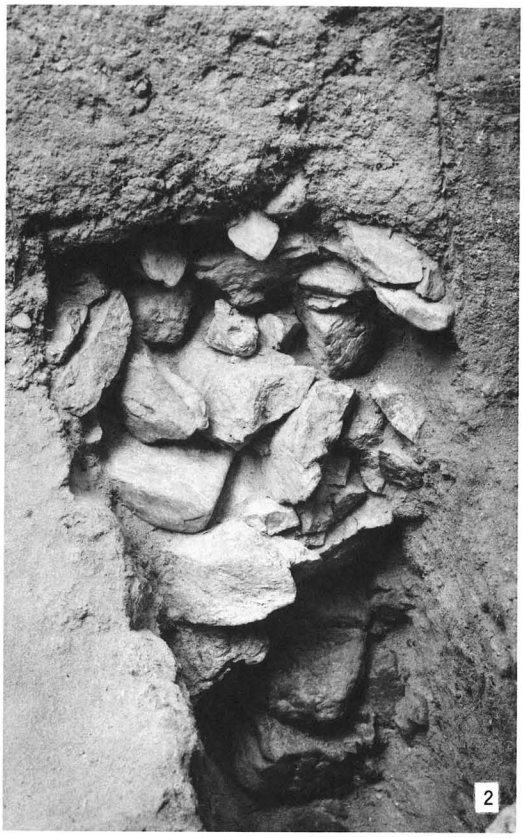
2　排水溝全景（南西から）第3次



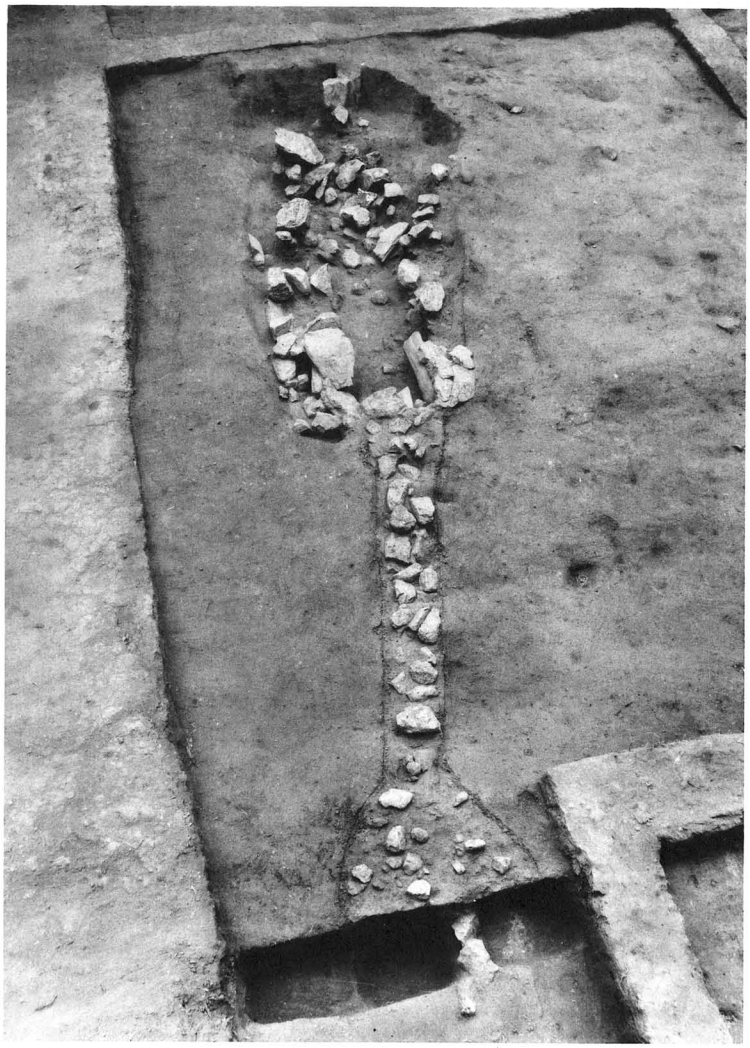
1　排水溝の掘方と埋土 **第2次**



2　排水溝内の礫の状況 **第3次**

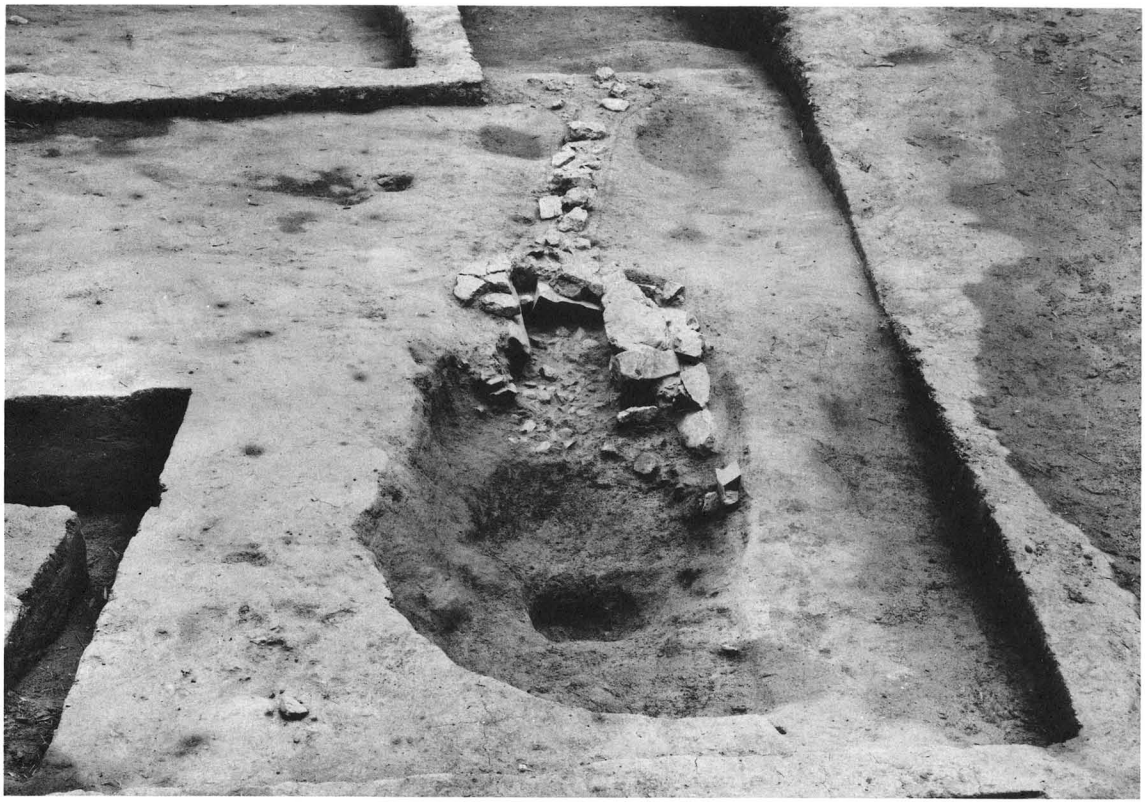


1　排水溝南端付近（南西から）**第3次**，2　排水溝北端断面 **第3次**，3　排水溝中央部断面 **第3次**



1　前方部小石室全景（西から）**第6次**

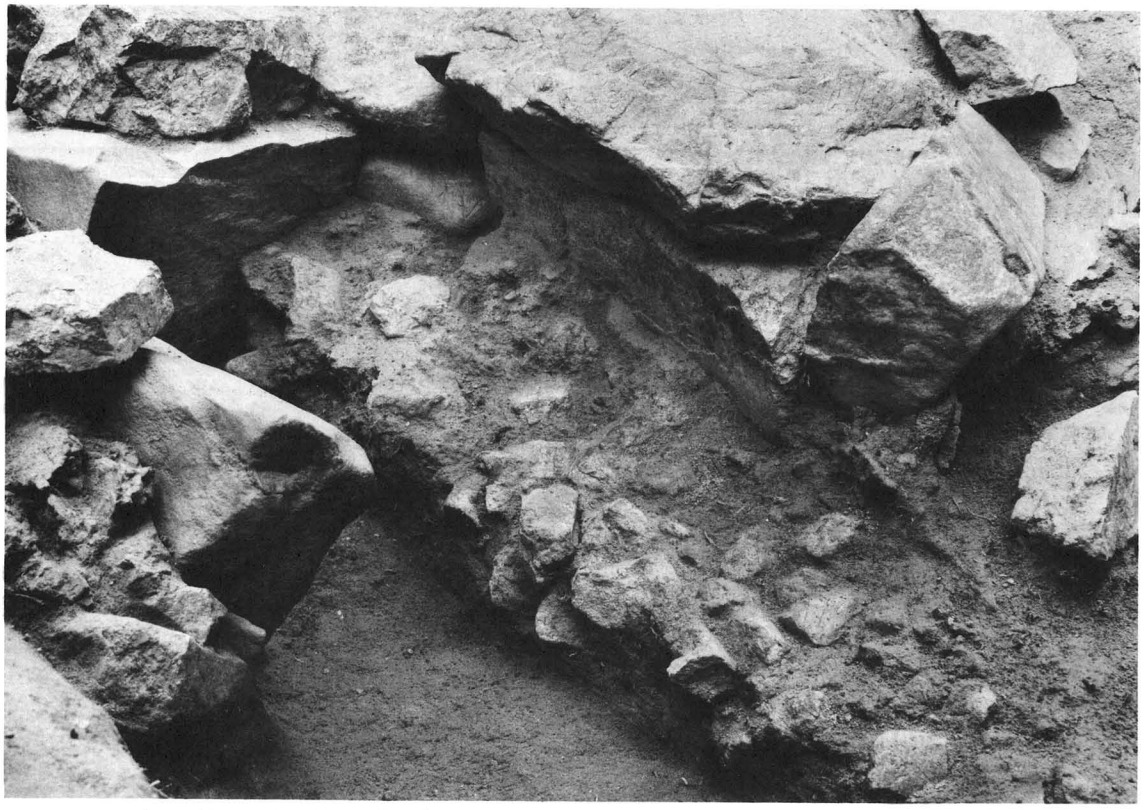
2　前方部小石室全景（北から）**第6次**



1　小石室攪乱土除去後の状況（東から）**第6次**

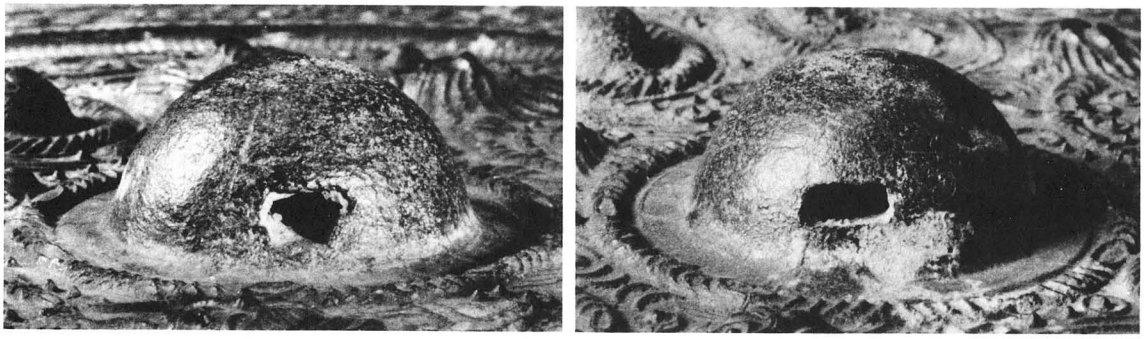
2　小石室西小口部 **第6次**

1　小石室西小口部（北から）**第6次**



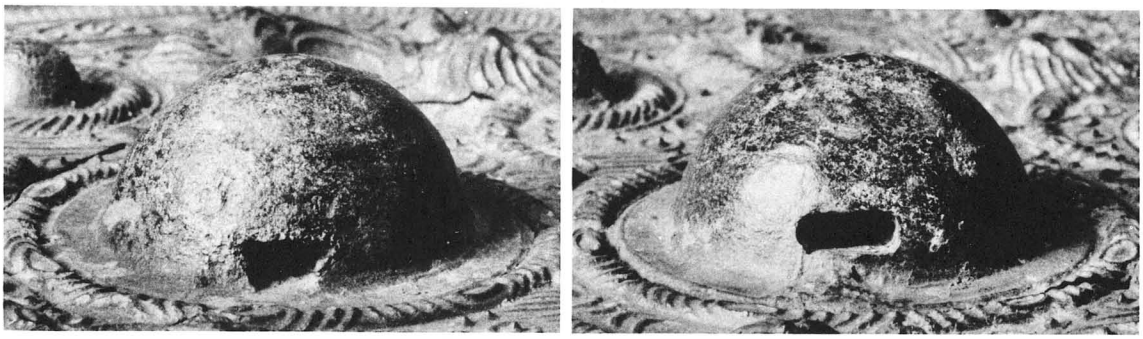
2　小石室床面断ち割り状況 **第6次**

1　1号鏡（三角縁天・王・日・月・唐草文帯二神二獣鏡）



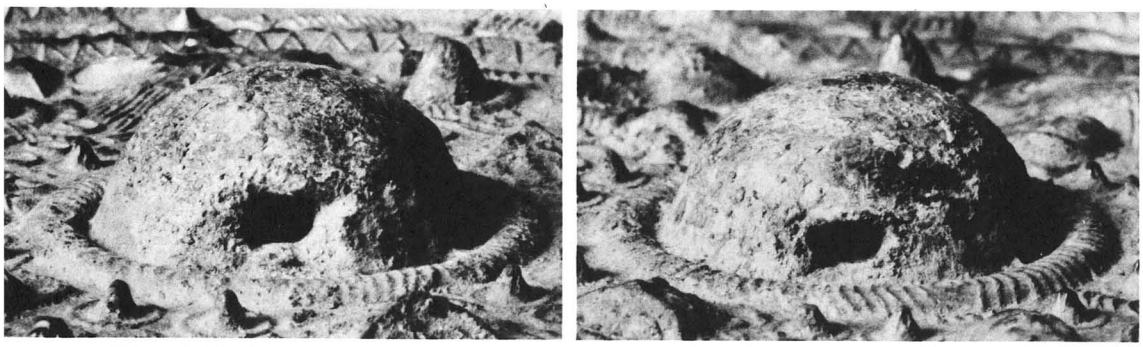
2　1号鏡の鈕孔

1　2号鏡（三角縁天・王・日・月・唐草文帯二神二獣鏡）



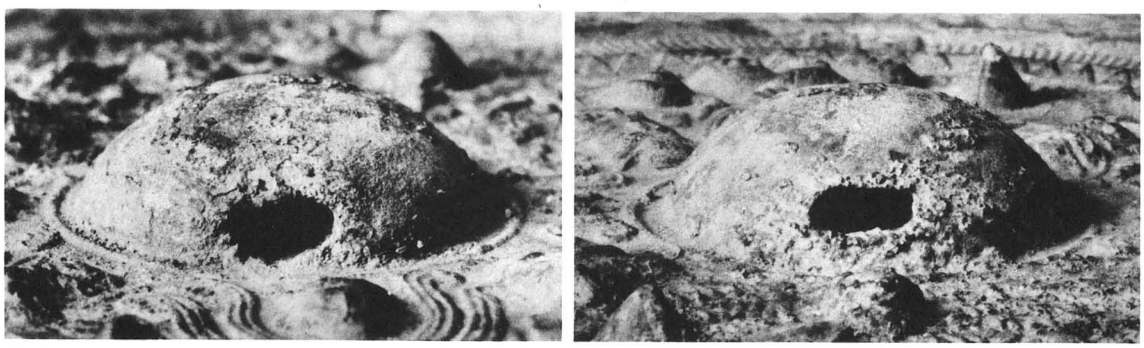
2　2号鏡の鈕孔

1　3号鏡（三角縁君・宜・高・官・獣文帯三神三獣鏡）



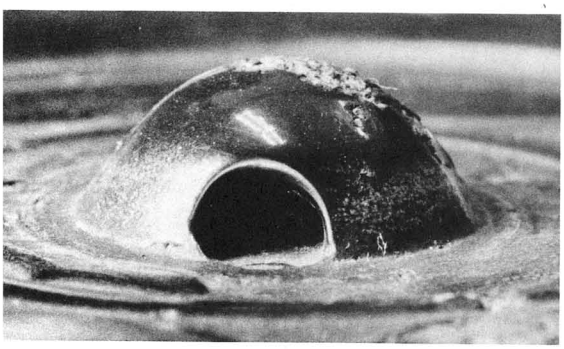
2　3号鏡の鈕孔

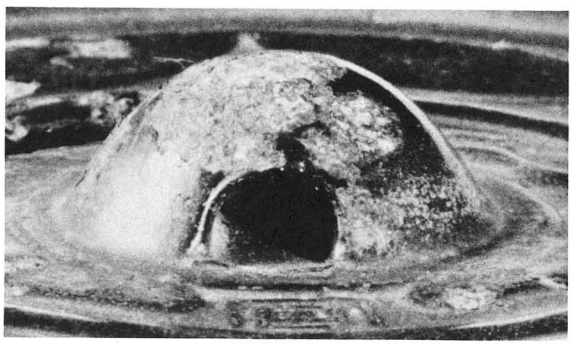
1　4号鏡（三角縁天王日月・鋸歯文帯四神四獣鏡）



2　4号鏡の鈕孔

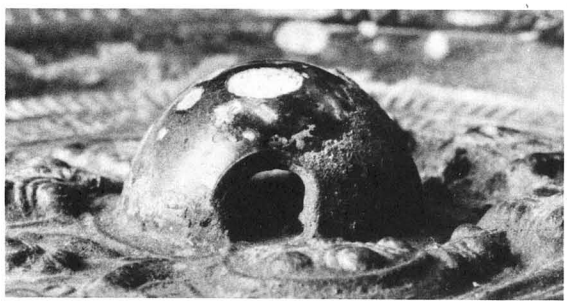
1　5号鏡（長宜子孫内行花文鏡）

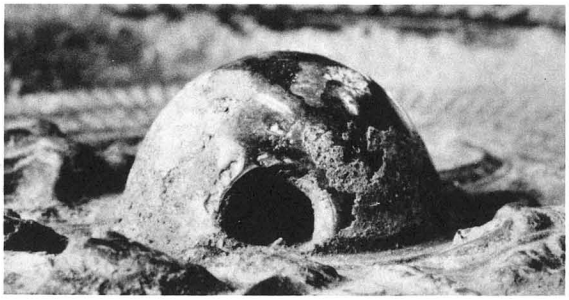




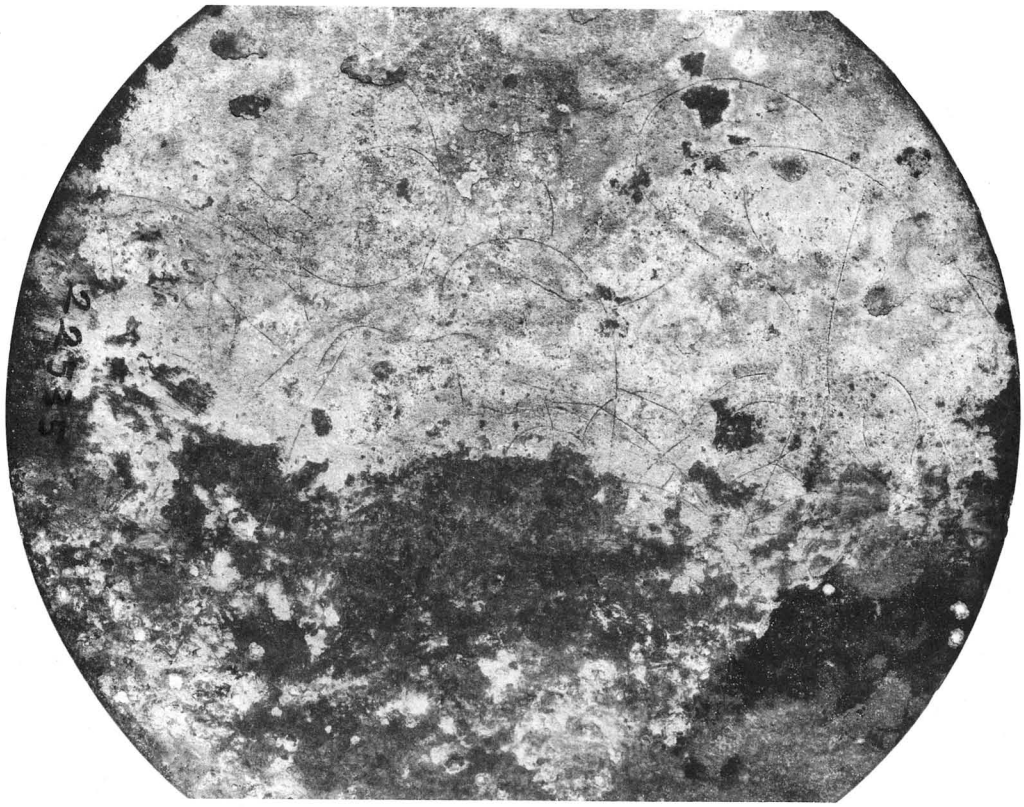
2　5号鏡の鈕孔

1　6号鏡（青蓋作盤龍鏡）

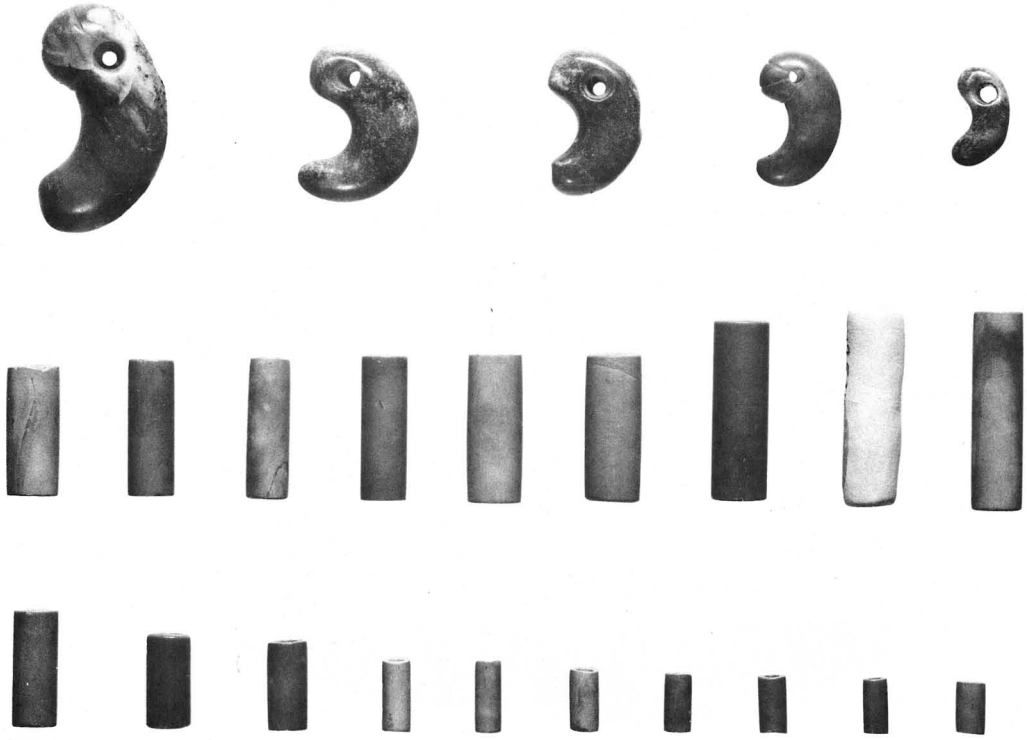




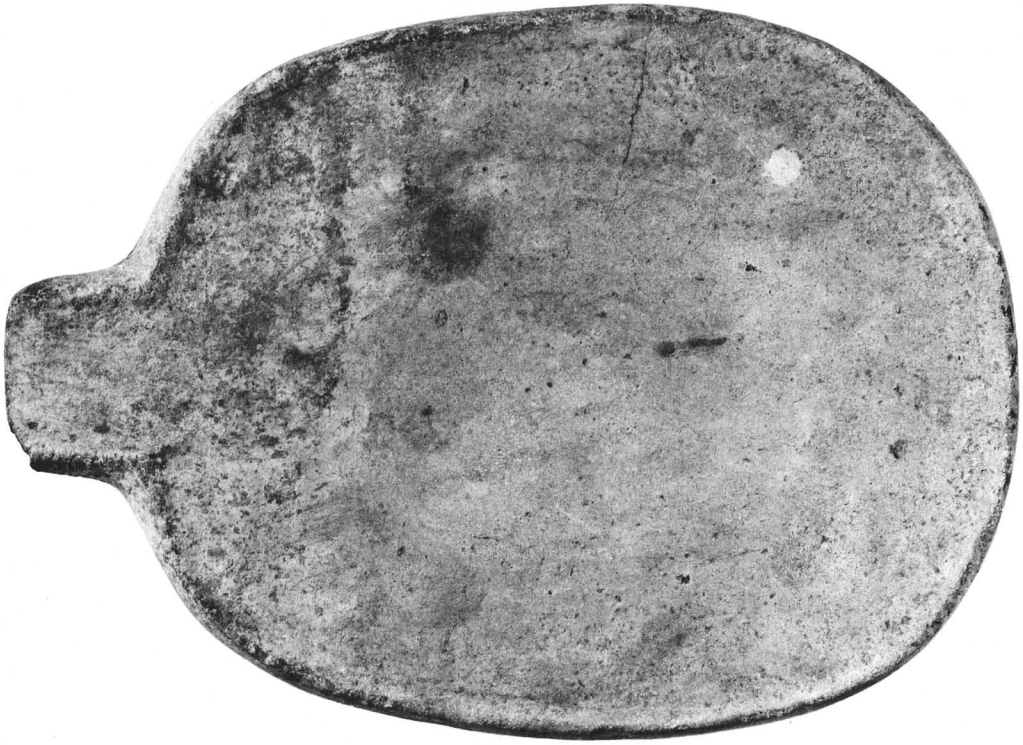
2　6号鏡の鈕孔



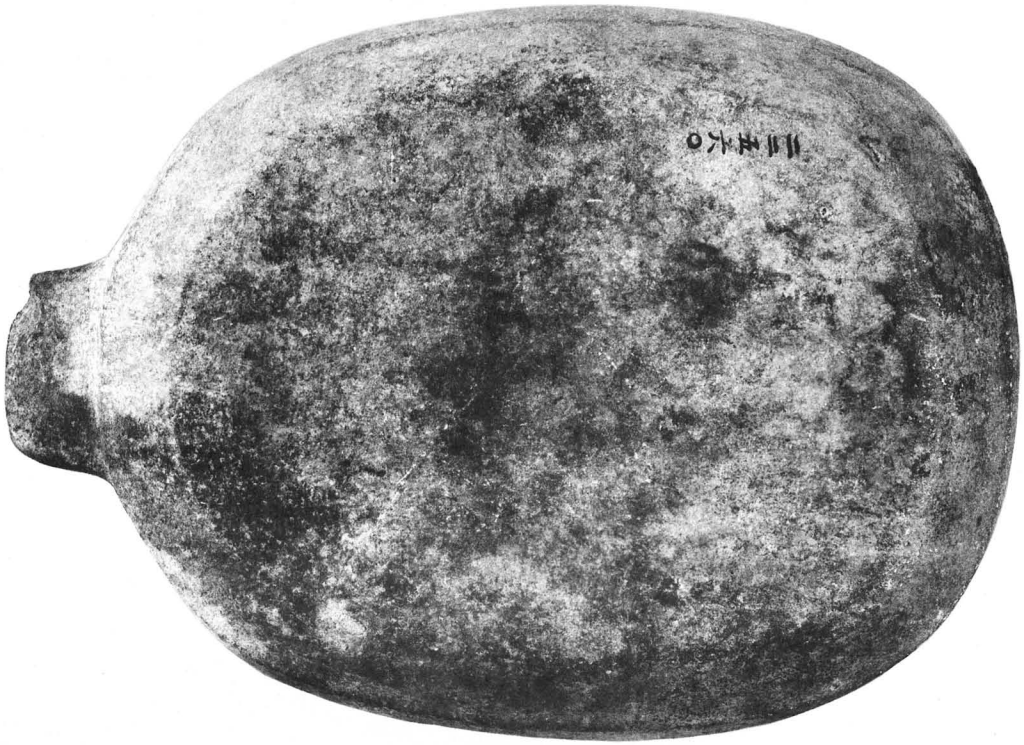
1　6号鏡鏡面に付着した毛髪



2　硬玉製勾玉、碧玉製管玉

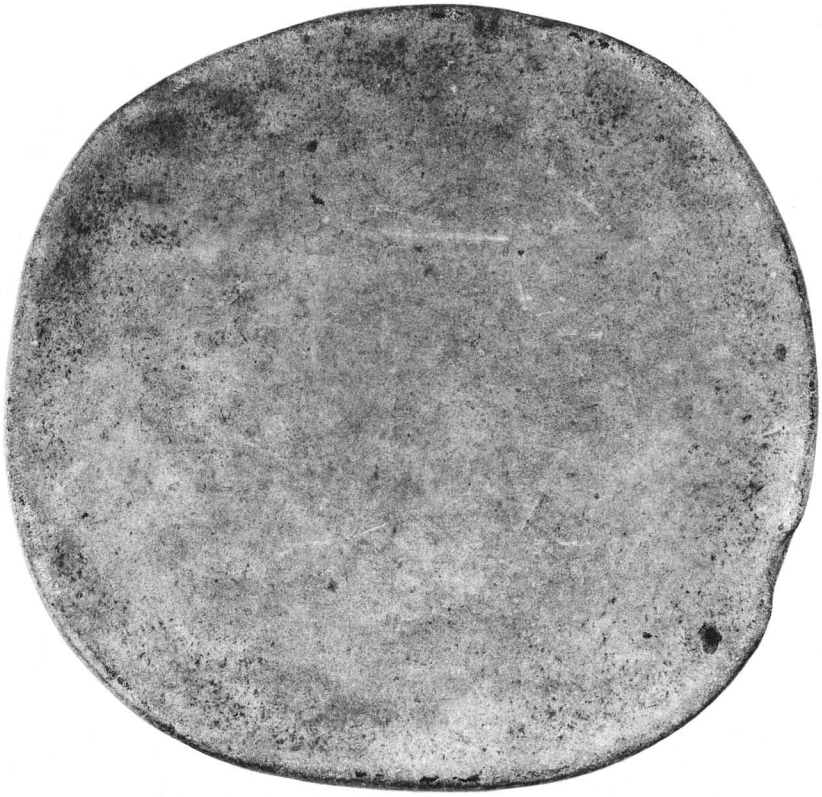


1



2

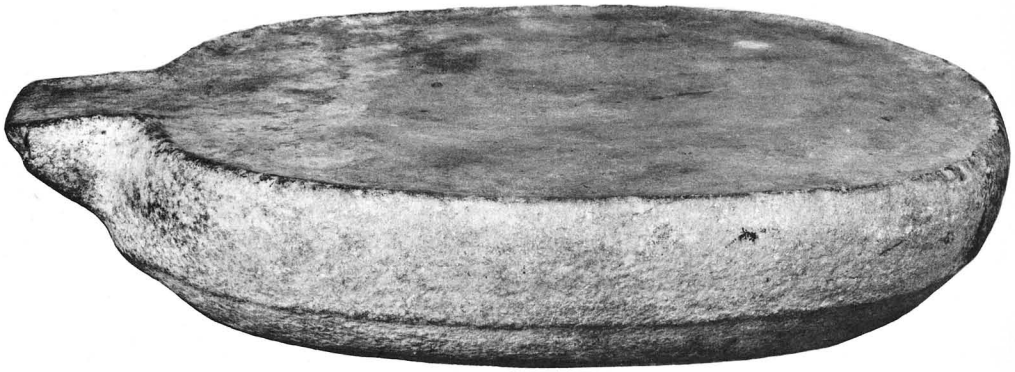
1　石臼1（表面），2　同（裏面）



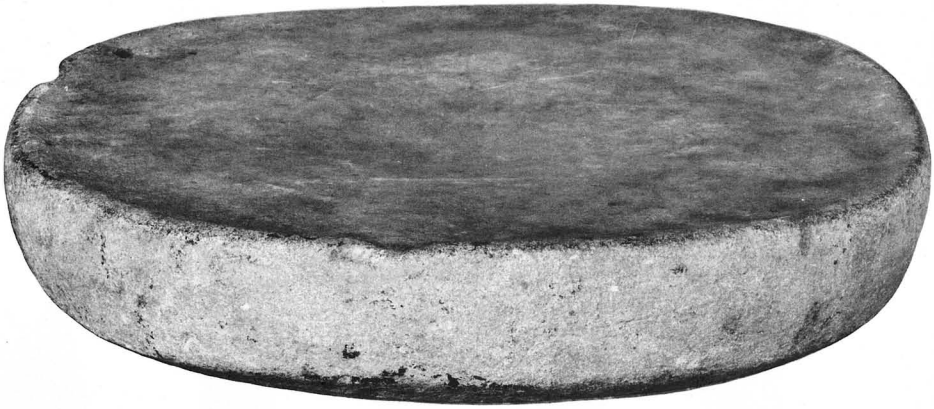
1

2

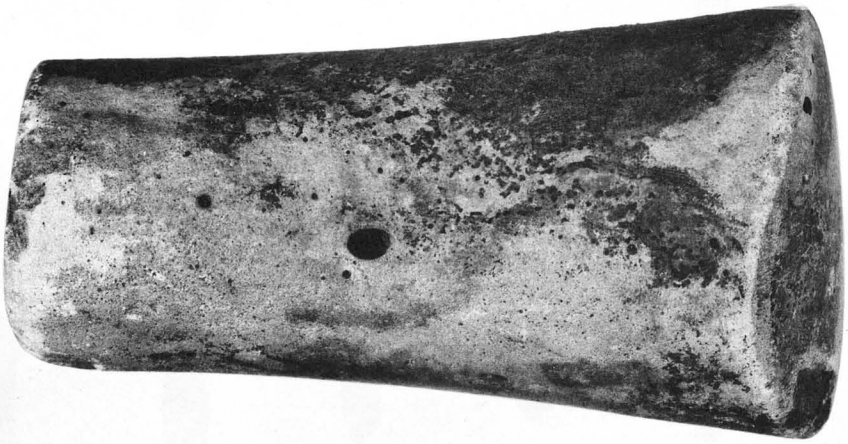
1　石臼２（表面），２　同（裏面）



1

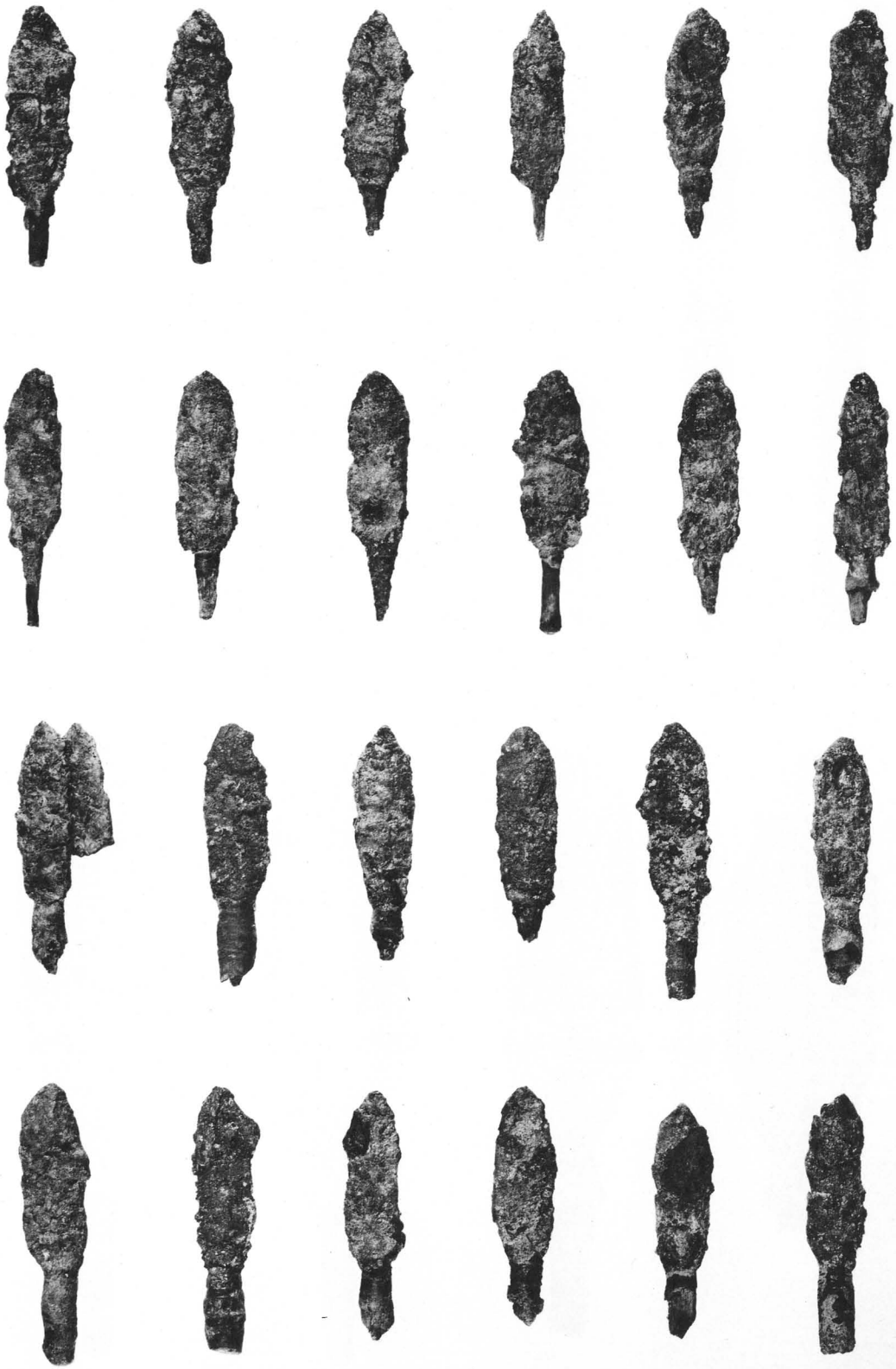


2

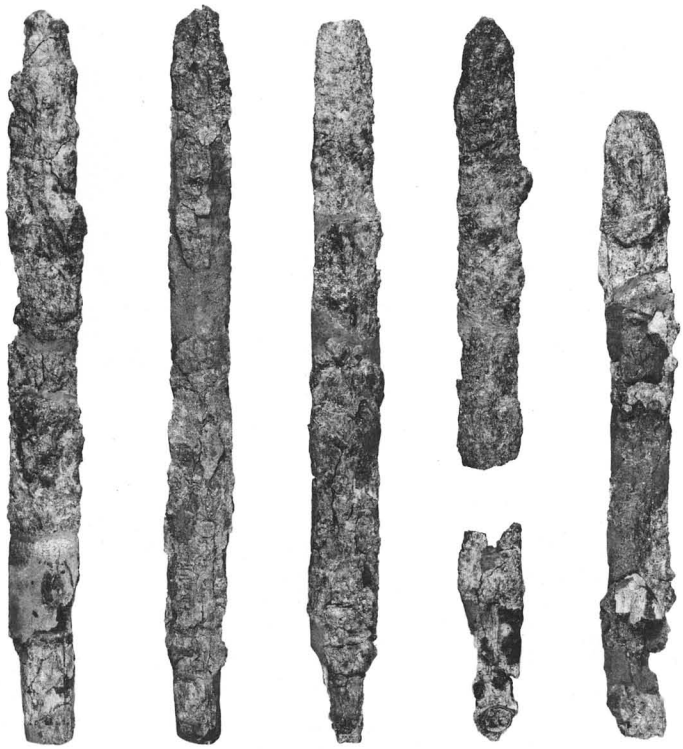


3

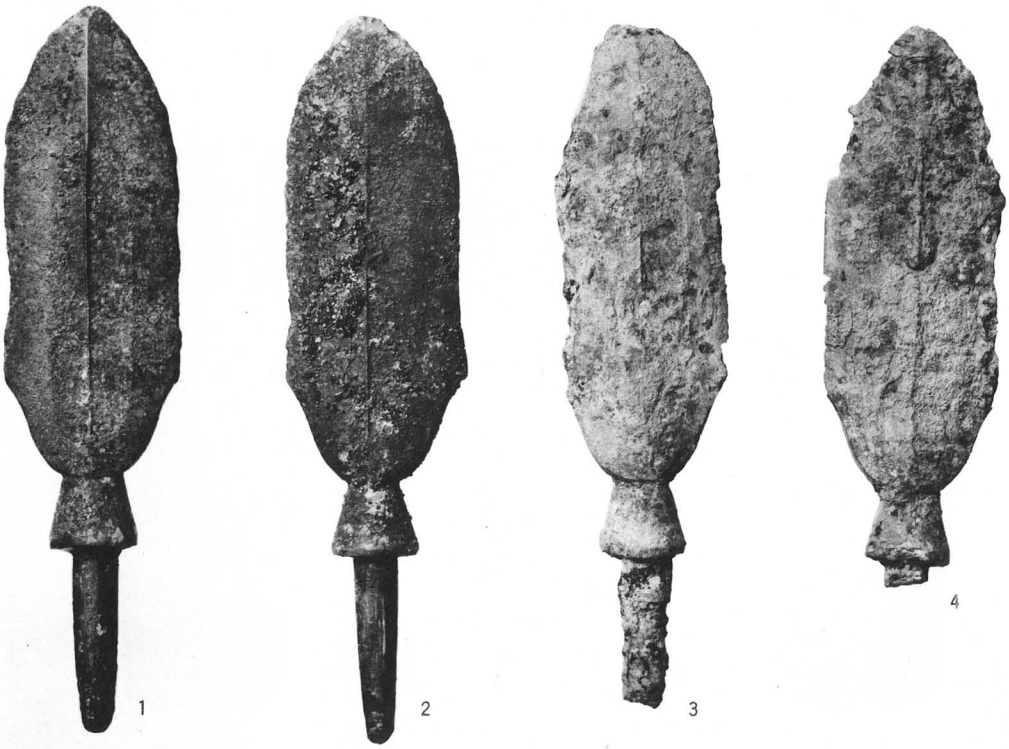
1　石臼1，2　石臼2，3　石杵



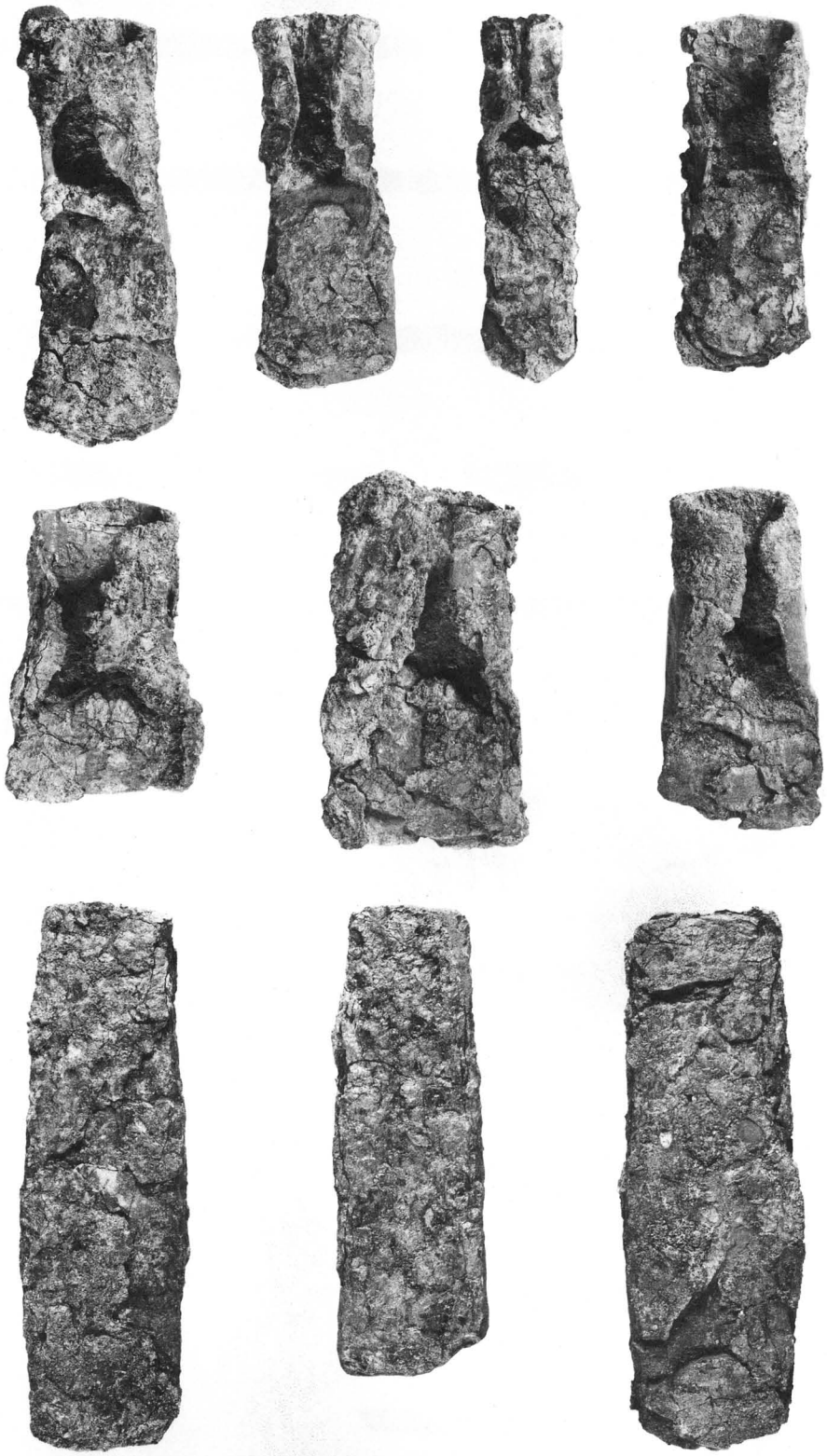
鉄　鏃



1　鉄　　剣



2　銅鏃（1　長法寺南原古墳，2　伝長法寺南原古墳，3・4　松岳山古墳）



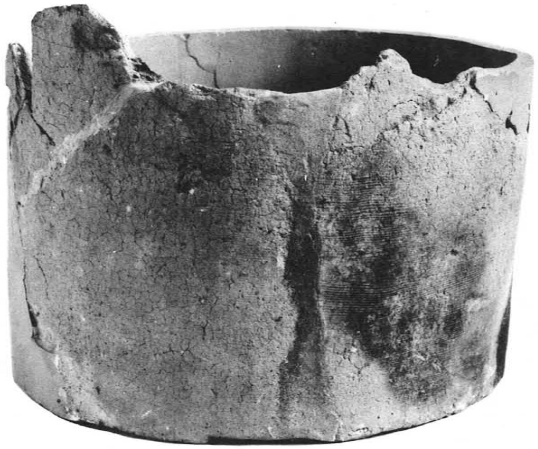
鉄　斧

1　工具類

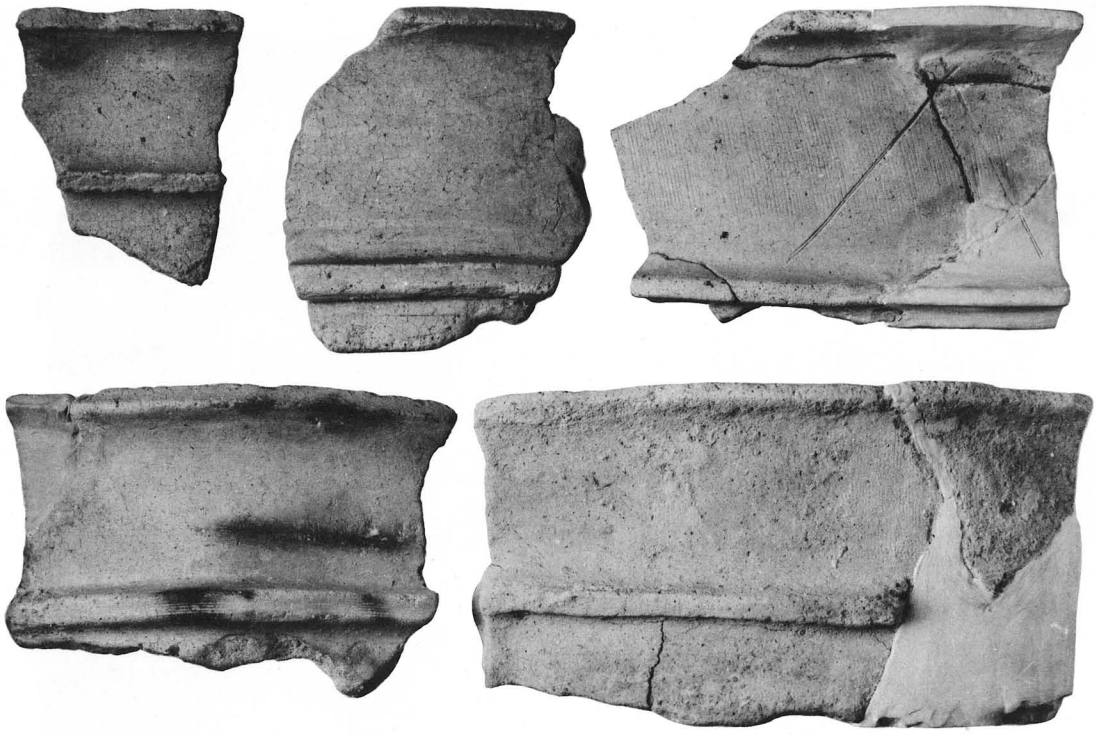
2　刀　子

1 円筒埴輪

2 円筒埴輪底部

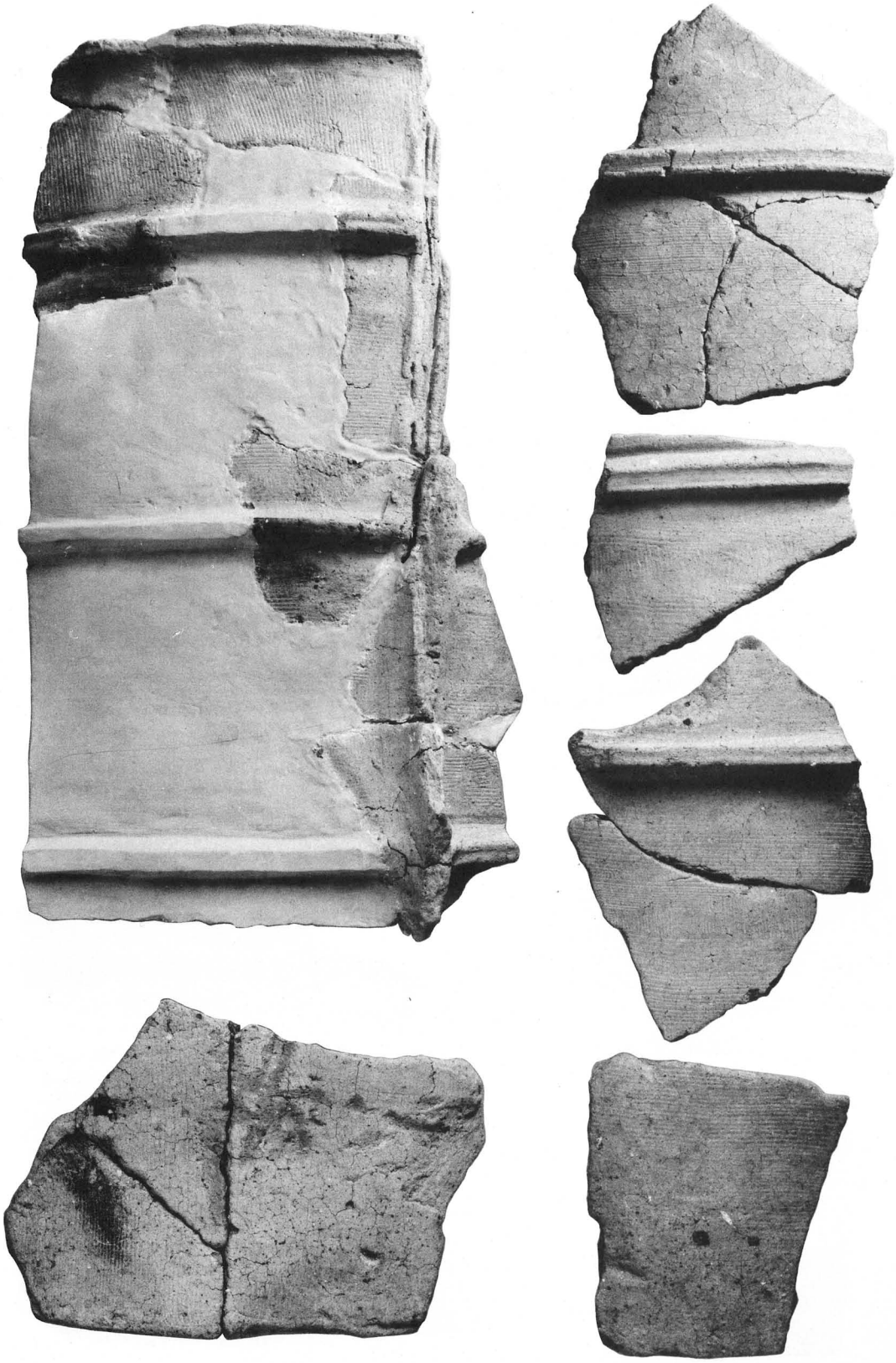


3 円筒埴輪底部

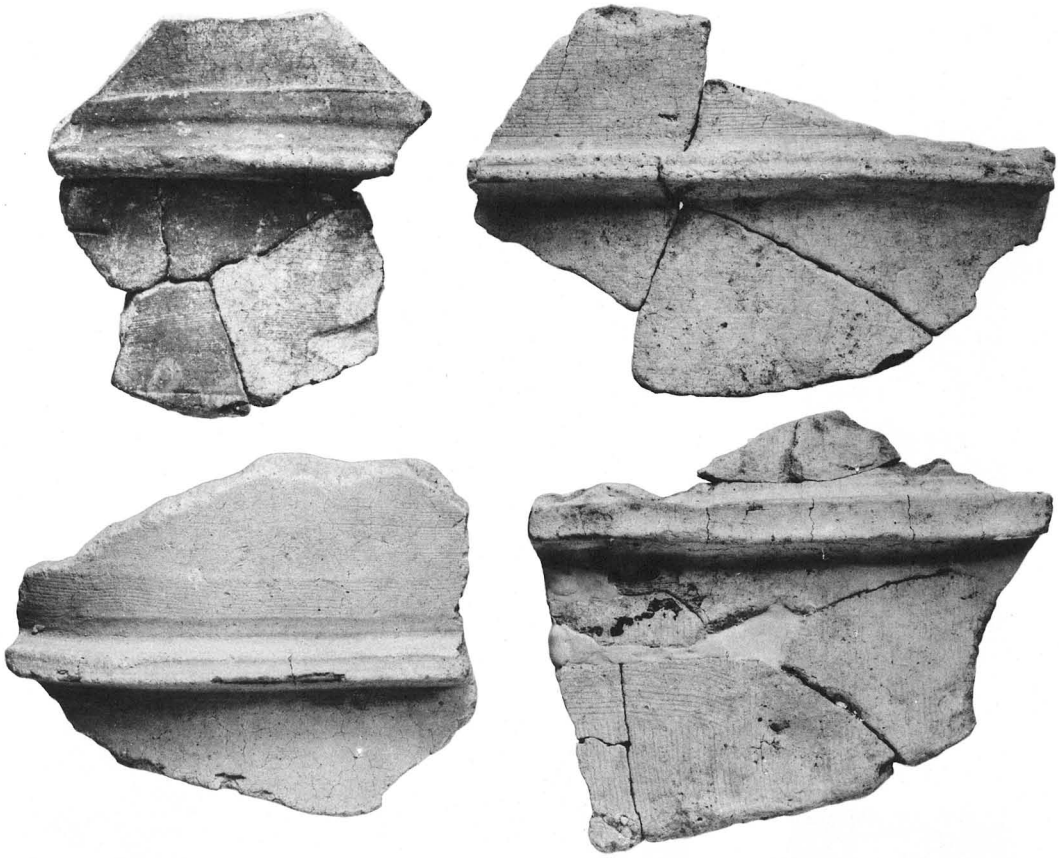


1　円筒埴輪口縁部

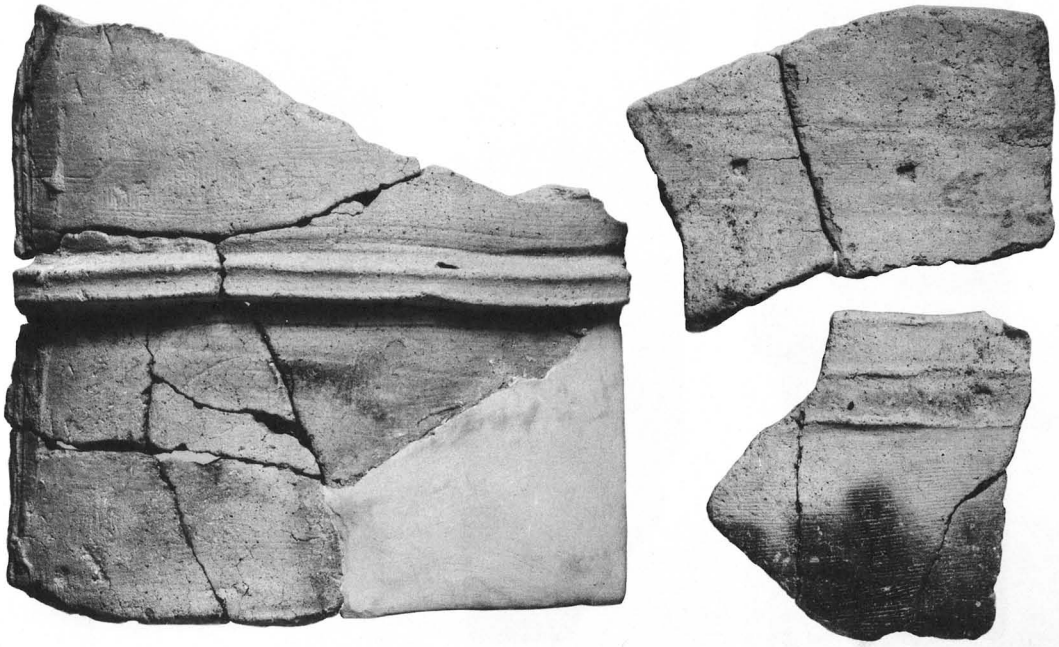
2　円筒埴輪透孔



円筒埴輪胴部、底部



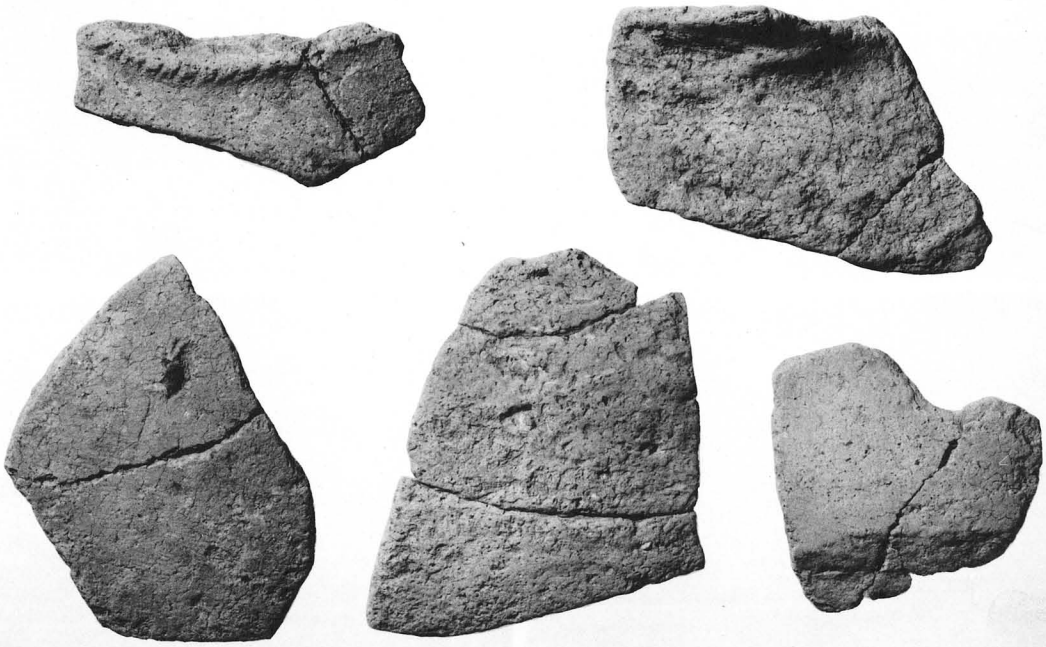
1　円筒埴輪胴部



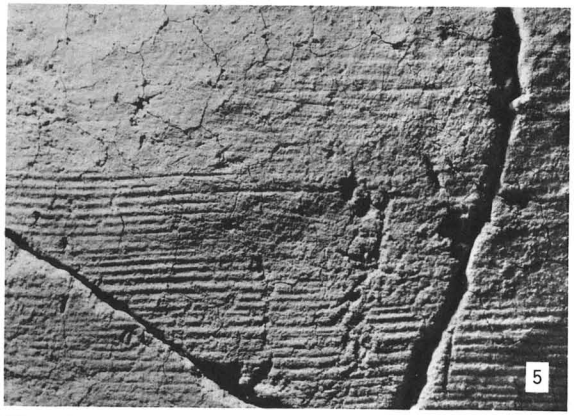
2　円筒埴輪胴部

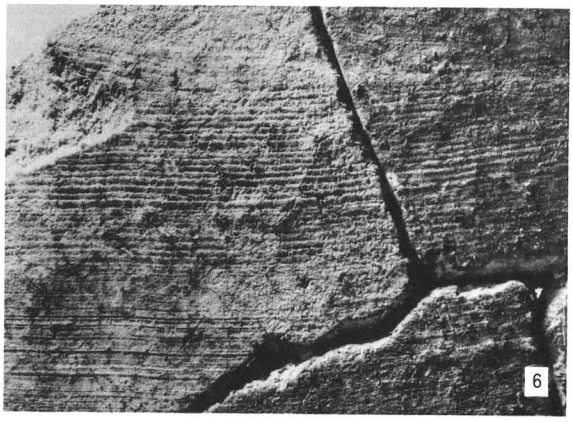
円筒埴輪ヒレ部

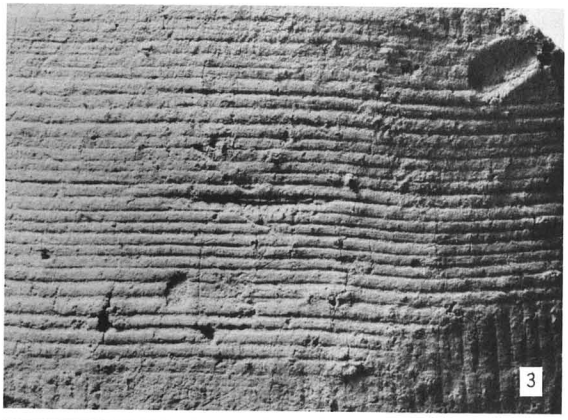
1　朝顔形円筒埴輪

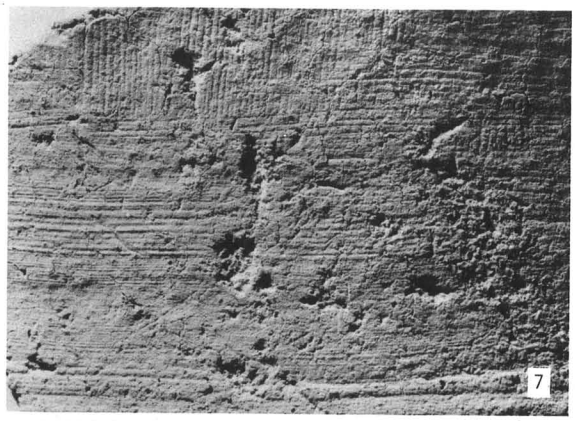


2　壺形土器









円筒埴輪のハケメ調整

Chōhōji-Minamibara Tumulus
Osaka University Studies in Archaeology, No.2
© by the Nagaokakyō Municipal Board of Education, Kyoto, 1992
Edited by TSUDE Hiroshi and FUKUNAGA Shin'ya
Published by the Osaka University Team for Investigations into the Minamibara Tumulus, Osaka, Japan

No parts of this publication can be reproduced or copied by any means without prior permission of the copyright owner.

大阪大学文学部考古学研究報告第２冊
長法寺南原古墳の研究
（長岡京市文化財調査報告書第30冊別刷）

1992年３月発行

編　集　大阪大学南原古墳調査団
発　行　代表　都出比呂志
大阪府豊中市待兼山町１－１
大阪大学文学部内
印　刷　有限会社　真陽社
京都市下京区油小路仏光寺上ル

Printed in Japan